

茨城県教育財団文化財調査報告第79集

一般国道6号東水戸道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

中ノ割遺跡	小山遺跡
諏訪前遺跡	高原古墳群
沢幡遺跡	高原遺跡
北屋敷遺跡	

平成5年3月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第79集

一般国道6号東水戸道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

なか	の	わり	遺跡	こ	やま	遺跡
中	ノ	割	遺跡	小	山	遺跡
す	わ	まえ	遺跡	たか	はら	古墳群
諏	訪	前	遺跡	高	原	古墳群
さわ	はた	遺跡	たか	はら	遺跡	
沢	幡	遺跡	高	原	遺跡	
きた	や	しき	遺跡			
北	屋敷	遺跡				

平成5年3月

財団法人 茨城県教育財団



(上) 遺跡遠景

(下) 北屋敷遺跡第1号墳（東から）



北屋敷遺跡

第 22 号土坑出土印籠

沢橋遺跡

第 10 号住居跡出土

灰釉陶器

沢橋遺跡

第 7 号住居跡出土

灰釉陶器

沢橋遺跡

第 7 号住居跡出土

灰釉陶器

沢橋遺跡

第 7 号住居跡出土

灰釉陶器

序

茨城県は、次の時代の到来を見越して長期的な展望のもとに、県土の基盤整備を行っておりますが、その一環として、後背地の開発と一体となった国際的港湾、自然との調和に心がける公園港湾をつくることを目的に、常陸那珂港の整備を進めております。

北関東自動車道は、この常陸那珂港と北関東の主要都市を結ぶ、首都圏第三の環状軸となる国土開発幹線自動車道です。この北関東自動車道の茨城県側の起点である常陸那珂港と国道6号を結ぶ一般国道6号東水戸道路改良工事地内には、多くの埋蔵文化財が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、建設省と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び、平成2年度と平成3年度に、調査を実施してまいりました。

本書は、中ノ割遺跡他6遺跡の調査成果を収録したものであります。この調査により、多くの遺構・遺物が検出され、水戸市及び旧常澄村の古代史を解明するうえで多大な成果をあげることができました。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、教育、文化向上の一助として活用されますことを希望致します。

なお、発掘調査及び整理にあたり、委託者である建設省はもとより、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会並びに旧常澄村教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成5年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 磯田 勇

例 言

- 1 本書は、建設省の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成2年度及び平成3年度に発掘調査を実施した茨城県水戸市・中東茨城郡日常澄村（常澄村は平成4年3月3日に水戸市に合併）に所在する中ノ割遺跡他6遺跡の発掘調査報告書である。

なお、7遺跡の所在地は次のとおりである。

中ノ割遺跡 水戸市元石川町中ノ割942番地のイほか 小山遺跡 水戸市大場町133番地の2ほか
 諏訪前遺跡 水戸市大場町455番地ほか 高原古墳群 水戸市大場町939番地
 沢幡遺跡 水戸市大場町936番地ほか 高原遺跡 水戸市大串町1,007番地ほか
 北屋敷遺跡 水戸市大串町765番地ほか

- 2 中ノ割遺跡他6遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

（平成4年度初めの組織改正により、従来の企画管理課は、企画管理課と経理課の二課に分かれることになった。）

理事	長	磯田 勇	昭和63年6月～
副理事	長	小林 元	昭和63年4月～平成3年7月
		角田 芳夫	平成3年7月～
常務理事		小林 洋	平成元年4月～平成3年3月
		本出 二郎	平成3年4月～
事務局	長	木 邦彦	平成元年4月～平成4年3月
		藤枝 宣一	平成4年4月～
埋蔵文化財部長		石井 毅	平成2年4月～
企画管理課	課長	北沢 勝行	平成2年4月～平成4年3月
	主任調査員	水岡 敏夫	平成4年4月～、(平成2年4月～平成4年3月企画管理課長代理)
	主任調査員	小山 映一	平成2年4月～平成3年3月
	主任調査員	根本 康弘	平成3年4月～
	係長	岡部 昌俊	昭和63年4月～平成3年3月
	主事	吉井 正明	平成元年4月～平成4年3月
	主事	杉山 秀一	平成4年4月～
経理課	課長	藤田 和行	平成4年4月～
	主任	飯島 康司	平成4年4月～、(平成3年4月～平成4年3月企画管理課)
	主事	大貫 吉成	平成4年4月～、(平成2年4月～平成4年3月企画管理課)
調査課	課長(部長兼務)	石井 毅	平成元年4月～
	調査第一班長	久野 俊彦	平成2年度
	調査第二班長	阿久津 久	平成3年度
	主任調査員	榊 孝雄	平成3年4月～12月調査
	調査員	後藤 義明	平成2年4月～10月調査
整理課	課長	沼田 文夫	平成2年4月～
	調査員	観山 雅彦	平成4年度整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、第3章遺構・遺物の記載方法及び表の見方の項を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、墨吉土器について平川南氏（国立歴史民俗博物館教授）から、鉄製品について赤沼英男氏（岩手県立博物館保存科学担当）から、陶磁器について柴垣勇夫氏（愛知県陶磁資料館学芸課長）から、御指導をいただいた。
- 5 発掘調査及び整理に際して御指導、御協力を賜った関係機関並び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

6 遺跡の概要

遺跡名	中ノ割 小山 諏訪前 高原古墳群 沢橋 高原 北屋敷				
フリガナ	ナカノワリ コヤマ スワマエ タカハラコブングン サワハタ タカハラ キタヤシキ				
副題	一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書1				
シリーズ	茨城県教育財団文化財調査報告 第79集				
著者	梶山 雅彦				
編集機関	財団法人茨城県教育財団				
発行機関	財団法人茨城県教育財団				
住所	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番2号				
発行日	1993(平成5)年 3月31日				
所収遺跡	市町村	コード	北緯(X)	東経(Y)	標高(Z)
中ノ割遺跡	水戸市	08201-0220	36°19'45"	140°30'45"	29.7m
小山遺跡	水戸市(旧常盤村)	08301-0040	36°19'40"	140°31'05"	28.6m
諏訪前遺跡	水戸市(旧常盤村)	08301-0041	36°19'40"	140°31'35"	28.0m
高原古墳群	水戸市(旧常盤村)	08301-0039	36°19'40"	140°31'55"	28.0m
沢橋遺跡	水戸市(旧常盤村)	08301-0042	36°19'45"	140°31'55"	27.8m
高原遺跡	水戸市(旧常盤村)	08301-0044	36°19'45"	140°32'05"	28.5m
北屋敷遺跡	水戸市(旧常盤村)	08301-0045	36°19'55"	140°32'35"	16.6m
所収遺跡	主な時代	主な遺構	主な遺物		
中ノ割遺跡	縄文早期～後期		土器・石器		
	縄文後期	土坑5	土器		
	古代(奈良・平安)		土器		
小山遺跡	縄文中期	住居1	土器・石器		
	縄文後期	土坑1	土器		
諏訪前遺跡	古代(奈良)	住居1	土器・石製品		
	古代(平安)	住居4・竪穴遺構2	土器		
高原古墳群	近代(昭和)	防空壕1	磁器		
沢橋遺跡	古代(平安)	住居14	土器・石製品・土製品・鉄製品・灰輪陶器		
高原遺跡	古代(奈良)	住居2	土器		
	古代(平安)	住居4	土器		
	近世(江戸)	土坑3	土器・古銭		
北屋敷遺跡	古墳(前期)	住居2	土器		
	古墳(後期)	円墳1・住居1	鉄製品・土器		
	古代(奈良)	住居2	土器		
	古代(平安)	住居3・溝2	土器・土製品(瓦)		
	近世(江戸)	土坑4	陶磁器・印籠		

目 次

序

例 言

第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	1
第3節 調査経過	3
第2章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 遺構・遺物の記載方法及び表の見方	11
第1節 遺構・遺物の記載方法	11
第2節 表の見方	14
第4章 中ノ割遺跡	18
第1節 遺跡の概要	18
第2節 基本層序	18
第3節 遺構と遺物	19
第4節 考察	46
第5章 小山遺跡	51
第1節 遺跡の概要	51
第2節 遺構と遺物	52
第3節 考察	60
第6章 諏訪前遺跡	62
第1節 遺跡の概要	62
第2節 基本層序	62
第3節 遺構と遺物	63
第4節 考察	84
第7章 高原古墳群（2号墳）	89
第1節 遺跡の概要	89
第2節 遺構と遺物	89

第3節 考察	93
第8章 沢幡遺跡	95
第1節 遺跡の概要	95
第2節 遺構と遺物	96
第3節 考察	167
第9章 高原遺跡	174
第1節 遺跡の概要	174
第2節 基本層序	174
第3節 遺構と遺物	175
第4節 考察	202
第10章 北屋敷遺跡	207
第1節 遺跡の概要	207
第2節 基本層序	207
第3節 遺構と遺物	208
第4節 考察	270
附 章 高原遺跡出土鉄器・鉄滓の金属学的解析	277
北屋敷遺跡出土鉄器・鉄滓の金属学的解析	281
結 語	286
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 調査区呼称方法概全図	2	第9図 第27・29号土坑出土遺物実測・拓影図	26
第2図 周辺遺跡位置図	9	第10図 第29・32・33・38号土坑出土遺物実測・拓影図	27
第3図 中ノ割遺跡他6遺跡位置図 中ノ割遺跡	17	第11図 第38・39号土坑出土遺物実測・拓影図	28
第4図 基本土層図	18	第12図 第1号円形周溝状遺構実測図	31
第5図 中ノ割遺跡全体図	19	第13図 遺構外出土遺物実測・拓景図	33
第6図 第12・27・29・38・39号土坑実測 ・遺物出土位置図	22	第14図 遺構外出土遺物実測図	34
第7図 第12・13・27号土坑出土遺物実測 ・拓影図	24	第15図 遺構外出土遺物実測・拓影図	37
第8図 第27号土坑出土遺物実測図	25	第16図 遺構外出土遺物実測・拓影図	38

第17图	遺構外出土遺物実測・拓影図	39	第44图	第4号住居跡・竈実測・遺物出土位置図	72
第18图	遺構外出土遺物実測・拓影図	40	第45图	第4号住居跡出土遺物実測図	73
第19图	遺構外出土遺物実測・拓影図	41	第46图	第5号住居跡・竈実測・遺物出土位置図	75
第20图	遺構外出土遺物実測・拓影図	42	第47图	第5号住居跡出土遺物実測図	76
第21图	遺構外出土遺物実測・拓影図	43	第48图	第1・2号竈穴遺構実測・遺物出土位置図	78
第22图	遺構外出土遺物実測・拓影図	44	第49图	第1・2号竈穴遺構出土遺物実測図	79
第23图	遺構外出土遺物実測・拓影図	45	第50图	第1号土坑出土遺物実測図	80
第24图	縄文時代土坑分布図	49	第51图	第1・2号溝実測図	82
小山遺跡			第52图	遺構外出土遺物実測図	83
第25图	小山遺跡全体図	51	第53图	I期出土土器	84
第26图	第1号住居跡実測・遺物出土位置図	53	第54图	II期出土土器	85
第27图	第1号住居跡出土遺物実測・拓影図	54	第55图	III期出土土器	85
第28图	第1号住居跡出土遺物実測・拓影図	55	第56图	住居跡規模・主軸方向I期	86
第29图	第1号住居跡出土遺物実測・拓影図	56	第57图	住居跡規模・主軸方向II期	86
第30图	第9号土坑実測図	56	第58图	住居跡規模・主軸方向III期	87
第31图	第9号土坑出土遺物実測・拓影図	57	第59图	集落変遷図(I~III期)	88
第32图	第1・2号溝実測図	58	高原古墳群(2号墳)		
第33图	遺構外出土遺物実測・拓影図	59	第60图	防空壕跡・溝実測図	90・91
第34图	縄文時代住居跡・土坑分布図	61	第61图	遺構外出土遺物実測・拓影図	92
諏訪前遺跡			沢橋遺跡		
第35图	基本土層図	62	第62图	沢橋遺跡全体図	95
第36图	諏訪前遺跡全体図	63	第63图	第1号住居跡実測図	96
第37图	第1号住居跡・竈実測・遺物出土位置図	64	第64图	第1号住居跡出土遺物実測図	96
第38图	第1号住居跡出土遺物実測図	66	第65图	第2号住居跡・竈実測図	97
第39图	第2号住居跡・竈実測・遺物出土位置図	68	第66图	第2号住居跡出土遺物実測図	98
第40图	第2号住居跡出土遺物実測図	69	第67图	第3号住居跡・竈実測・遺物出土位置図	99
第41图	第3号住居跡実測・遺物出土位置図	70	第68图	第3号住居跡出土遺物実測図	99
第42图	第3号住居跡竈実測図	71	第69图	第4号住居跡・竈実測・遺物出土位置図	100
第43图	第3号住居跡出土遺物実測図	71	第70图	第4号住居跡出土遺物実測図	101
			第71图	第5号住居跡・竈実測図	102

第72图	第6号住居跡・竈穴測・遺物出土位置図	104	第97图	第12号住居跡・竈穴測・遺物出土位置図	146
第73图	第6号住居跡出土遺物実測図	105	第98图	第12号住居跡出土遺物実測図	147
第74图	第7号住居跡実測図	107	第99图	第13号住居跡・竈穴測・遺物出土位置図	148
第75图	第7号住居跡遺物出土位置図	108	第100图	第13号住居跡竈穴測図	149
第76图	第7号住居跡竈穴測図	109	第101图	第13号住居跡出土遺物実測図	149
第77图	第7号住居跡出土遺物実測図	110	第102图	第14号住居跡・竈穴測・遺物出土位置図	151
第78图	第7号住居跡出土遺物実測図	111	第103图	第14号住居跡出土遺物実測図	151
第79图	第7号住居跡出土遺物実測・拓影図	112	第104图	第16号土坑実測・遺物出土位置図	153
第80图	第7号住居跡出土遺物実測図	113	第105图	第16・23・33号土坑出土遺物実測図	154
第81图	第7号住居跡出土遺物実測・拓影図	114	第106图	第1・2号溝実測図	158
第82图	第7号住居跡出土遺物実測・拓影図	115	第107图	第3・4号溝実測図	159
第83图	第7号住居跡出土遺物実測図	116	第108图	第1・2・3号溝出土遺物実測図	160
第84图	第7号住居跡出土遺物実測図	117	第109图	遺構外出土遺物実測・拓影図	161
第85图	第8号住居跡実測・遺物出土位置図	129	第110图	遺構外出土遺物実測・拓影図	162
第86图	第8号住居跡竈穴測図	130	第111图	遺構外出土遺物実測・拓影図	163
第87图	第8号住居跡出土遺物実測図	131	第112图	遺構外出土遺物実測図	164
第88图	第9号住居跡・竈穴測・遺物出土位置図	133	第113图	I期出土土器	168
第89图	第9号住居跡出土遺物実測図	134	第114图	II期出土土器	168
第90图	第10号住居跡実測・遺物出土位置図	136	第115图	III期出土土器	169
第91图	第10号住居跡竈穴測図	137	第116图	IV期出土土器	170
第92图	第10号住居跡出土遺物実測・拓影図	138	第117图	住居跡規模・主軸方向I期	171
第93图	第10号住居跡出土遺物実測・拓影図	139	第118图	住居跡規模・主軸方向II期	171
第94图	第10号住居跡出土遺物実測図	140	第119图	住居跡規模・主軸方向III期	172
第95图	第11号住居跡・竈穴測・遺物出土位置図	143	第120图	住居跡規模・主軸方向IV期	172
第96图	第11号住居跡出土遺物実測・拓影図	144	第121图	集落変遷図 (I~IV期)	173
			高原遺跡		
			第122图	基本土層図	174
			第123图	高原遺跡全体図	175
			第124图	第1号住居跡実測図	176
			第125图	第2号住居跡実測・遺物出土位置図	177
			第126图	第2号住居跡出土遺物実測図	177

第127图 第3号住居跡実測図	178	第156图 第1号住居跡出土遺物実測図	210
第128图 第3号住居跡出土遺物実測・拓影 図	179	第157图 第2号住居跡・竈実測・遺物出土 位置図	211
第129图 第4号住居跡実測・遺物出土位置 図	180	第158图 第2号住居跡出土遺物実測図	212
第130图 第4号住居跡竈実測図	181	第159图 第3号住居跡・竈実測・遺物出土 位置図	214
第131图 第4号住居跡出土遺物実測図	182	第160图 第3号住居跡出土遺物実測図	215
第132图 第5号住居跡・竈実測・遺物出土 位置図	183	第161图 第4号住居跡実測・遺物出土位置 図	216
第133图 第5号住居跡出土遺物実測・拓影 図	184	第162图 第4号住居跡出土遺物実測図	217
第134图 第6号住居跡・竈実測図	185	第163图 第6・7号住居跡・竈実測・遺物 出土位置図	218
第135图 第1号獨立柱建物跡実測図	187	第164图 第6号住居跡山土遺物実測・拓影 図	219
第136图 第1・2・9号土坑実測図	189	第165图 第7号住居跡出土遺物実測図	220
第137图 第1・2・9号土坑出土遺物実測 ・拓影図	189	第166图 第8号住居跡実測・遺物出土位置 図	220
第138图 第1・2号溝実測図	193	第167图 第8号住居跡山土遺物実測図	221
第139图 第3・4号溝実測図	194	第168图 第9号住居跡実測・遺物山土位置 図	222
第140图 第5・6号溝実測図	195	第169图 第9号住居跡出土遺物実測図	222
第141图 第1・2・3号溝出土遺物実測図	196	第170图 第1号墳実測図	224・225
第142图 第1号井戸実測図	197	第171图 第1号墳実測図	226・227
第143图 遺構外出土遺物実測・拓影図	199	第172图 第1号墳出土遺物実測図	231
第144图 遺構外出土遺物実測・拓影図	200	第173图 第1号墳出土遺物実測図	232
第145图 遺構外出土遺物実測・拓影図	201	第174图 第1号獨立柱建物跡実測図	234
第146图 I期出土土器	203	第175图 第20・21・22・23号土坑実測・遺 物山土位置図	236
第147图 II期山土土器	203	第176图 第2・3・9・21・22・23号土坑 出土遺物実測・拓影図	237
第148图 III期山土土器	203	第177图 第1・2・4号溝実測図	241
第149图 住居跡規模・主軸方向I期	204	第178图 第3・5号溝実測図	243
第150图 住居跡規模・主軸方向II期	205	第179图 第6・7・8・13号溝実測図	245
第151图 住居跡規模・主軸方向III期	205	第180图 第9・10号溝実測図	247
第152图 集落変遷図(I~III期)	206	第181图 第11・12号溝実測・遺物出土位置 図	248
北屋敷遺跡			
第153图 基本土器図	207		
第154图 北屋敷遺跡全体図	208		
第155图 第1号住居跡・竈実測・遺物出土 位置図	209		

第182图 第3号清出土遺物実測・拓影図 ……	250	第192图 第1号并戸出土遺物実測・拓影図 ……	265
第183图 第3・4・6・10・11号清出土 遺物実測・拓影図 ……	251	第193图 遺構外出土遺物実測・拓影図 ……	267
第184图 第11号清出土遺物実測図 ……	253	第194图 遺構外出土遺物実測・拓影図 ……	268
第185图 第11号清出土遺物実測・拓影図 ……	254	第195图 I期出土土器 ……	270
第186图 第11号清出土遺物実測・拓影図 ……	255	第196图 II期出土土器 ……	270
第187图 第11・12・13号清出土遺物実測・ 拓影図 ……	256	第197图 III期出土土器 ……	271
第188图 第1号并戸実測・遺物出土位置図 ……	260	第198图 IV期出土土器 ……	271
第189图 第2号并戸実測図 ……	261	第199图 V期出土土器 ……	271
第190图 第1号并戸出土遺物実測図 ……	263	第200图 VI期出土土器 ……	272
第191图 第1号并戸出土遺物実測・拓影図 ……	264	第201图 住居跡規模・主軸方向III期 ……	273
		第202图 住居跡規模・主軸方向IV期 ……	273
		第203图 集落変遷図 (I~VI期) ……	274

表 目 次

表1 周辺遺跡一覧表 ……	10	表7 沢幡遺跡土坑一覧表 ……	155
表2 中ノ割遺跡土坑一覧表 ……	29・30	表8 高原遺跡竪穴住居跡一覧表 ……	186
表3 小山遺跡土坑一覧表 ……	57	表9 高原遺跡土坑一覧表 ……	190・191
表4 諏訪前遺跡竪穴住居跡一覧表 ……	76	表10 北原教遺跡竪穴住居跡一覧表 ……	223
表5 諏訪前遺跡土坑一覧表 ……	80・81	表11 北原教遺跡土坑一覧表 ……	239
表6 沢幡遺跡竪穴住居跡一覧表 ……	152		

写真図版目次

中ノ割遺跡	PL 8 遺構外出土遺物
PL 1 調査前全景・遺構確認状況・調査終了 全景	PL 9 遺構外出土遺物
PL 2 第12号土坑・出土遺物, 第27号土坑・ 遺物出土状況・出土遺物	PL 10 遺構外出土遺物
PL 3 第27号土坑出土遺物, 第29号土坑・出 土遺物	PL 11 遺構外出土遺物
PL 4 第38号土坑・出土遺物, 第39号土坑遺 物出土状況・出土遺物	PL 12 遺構外出土遺物
PL 5 遺構外出土遺物	小山遺跡
PL 6 遺構外出土遺物	PL 13 調査前全景・遺構確認状況・調査終了 全景
PL 7 遺構外出土遺物	PL 14 第1号住居跡・遺物出土状況・炉
	PL 15 第1号住居跡炉・出土遺物
	PL 16 第1号住居跡遺物出土状況・出土遺物 第9号土坑, 遺構外出土遺物

諏訪前遺跡

- PL17 調査前全景・調査終了全景・遺構確認状況
- PL18 第1号住居跡・竈・遺物出土状況・出土遺物
- PL19 第2・3号住居跡、第2号住居跡・竈遺物出土状況・出土遺物
- PL20 第2号住居跡竈・出土遺物、第3号住居跡竈・出土遺物
- PL21 第4号住居跡・遺物出土状況・竈・出土遺物
- PL22 第5号住居跡・遺物出土状況・竈・出土遺物
- PL23 第1・2号竪穴遺構、第1号竪穴遺構遺物出土状況・出土遺物

高原古墳群（2号墳）

- PL24 調査前全景・調査終了全景・防空壕跡
- PL25 遺構外出土遺物

沢庵遺跡

- PL26 遺構確認状況・調査終了全景
- PL27 第1号住居跡・出土遺物、第2・3号住居跡・竈・出土遺物
- PL28 第4号住居跡・竈・遺物出土状況・出土遺物
- PL29 第6号住居跡・出土遺物、第7号住居跡・遺物出土状況
- PL30 第7号住居跡竈・出土遺物
- PL31 第7号住居跡出土遺物
- PL32 第7号住居跡出土遺物
- PL33 第7号住居跡出土遺物
- PL34 第7号住居跡出土遺物
- PL35 第7号住居跡出土遺物
- PL36 第7号住居跡出土遺物
- PL37 第8号住居跡・竈・遺物出土状況・出土遺物
- PL38 第9号住居跡・竈・竈遺物出土状況・

山土遺物

- PL39 第10号住居跡・竈・遺物出土状況・出土遺物
- PL40 第10号住居跡遺物出土状況・出土遺物
- PL41 第10号住居跡出土遺物、第11号住居跡・竈・竈遺物出土状況・出土遺物
- PL42 第11号住居跡出土遺物、第12号住居跡・出土遺物、第13号住居跡・出土遺物
- PL43 第13号住居跡遺物出土状況・竈・出土遺物
- PL44 第14号竈・遺物出土状況・出土遺物、第16号土坑・出土遺物
- PL45 遺構外出土遺物

高原遺跡

- PL46 調査前全景・調査終了全景
- PL47 第2号住居跡竈・遺物出土状況・出土遺物、第3号住居跡・出土遺物
- PL48 第4号住居跡遺物出土状況・竈・出土遺物、第5号住居跡竈・出土遺物
- PL49 第1号掘立柱建物跡、第1・9号土坑人骨出土状況・出土遺物
- PL50 第1・2号溝・出土遺物、遺構外遺物出土状況・出土遺物

北屋敷遺跡

- PL51 遺構確認状況・調査終了全景
- PL52 第1号住居跡・竈・遺物出土状況・出土遺物、第2号住居跡・出土遺物
- PL53 第2号住居跡竈・遺物出土状況・出土遺物、第3号住居跡・出土遺物
- PL54 第3号住居跡・竈・遺物出土状況・出土遺物
- PL55 第6号住居跡遺物出土状況・出土遺物、第8号住居跡遺物出土状況・出土遺物
- PL56 第9号住居跡・遺物出土状況・出土遺物、第21・22・23号土坑、第22号土坑人骨出土状況・出土遺物

- PL57 第1号墳・遺物出土状況
- PL58 第1号墳山土遺物・作業風景
- PL59 第1号墳出土遺物 X線
- PL60 第3・4号溝, 第3号溝遺物出土状況・
第3号溝出土遺物
- PL61 第11号溝・遺物出土状況・出土遺物
- PL62 第11号溝出土遺物
- PL63 第1・2号井戸, 第1号井戸遺物出土
状況・出土遺物
- 附章
- PL64 分析資料の外観。鉄器から採取した試料片
のマクロ組織。鉄鎌(25)に観察される非金
属介在物の2次電子像と反射電子像・
EPMAによる定性分析
- PL65 鉄滓のマクロおよびミクロ組織。鉄滓の2
次電子像と反射電子像・EPMAによる定性
分析, 推定される鋼製造法
- PL66 分析資料の外観。鉄器から採取した試料片
のマクロ組織
- PL67 直刀(27・29)刃部から採取した試料片の
ミクロ組織。直刀(27)刃部に観察される非
金属介在物の2次電子像と反射電子像・
EPMAによる定性分析, 鉄滓のマクロおよ
びミクロ組織
- PL68 鉄滓の2次電子像と反射電子像・EPMAに
よる定性分析, 推定される鋼製造法

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

北関東自動車道は、北関東3県及びその周辺地域を勢力圏とする経済活動の拠点としての流通港湾及び首都圏における電力供給用のエネルギー港湾としての常陸那珂港と、北関東の主要都市等を結ぶ道路である。この道路は、水戸市、常陸那珂（勝田・那珂湊市、東海村）などの自立都市圏の形成、広域流通機能の充実等を図る道路として計画された自動車専用道路であり、茨城県那珂湊市から群馬県高崎市間約150kmの関十開発幹線自動車道である。昭和58年度に都市計画決定がなされた常陸那珂港から国道6号間約18kmのうち、(仮)国道245号ICから(仮)元石川ICの東水戸道路とよばれる約11kmについて、旧常澄村、常陸那珂地区を含めた水戸市周辺の交通渋滞を緩和するために昭和60年度から事業に着手した。

1事に先立ち、平成元年5月2日、建設省（関東地方建設局常陸工事事務所）は、一般国道6号東水戸道路改良工事地区内における埋蔵文化財の有無について茨城県教育委員会に照会した。茨城県教育委員会は、一般国道6号東水戸道路改良工事地区内に所在する遺跡の試掘調査を実施した。その結果、道路改良工事地区内には多くの埋蔵文化財が所在することを建設省に平成元年10月31日回答した。茨城県教育委員会は、文化財保護の立場から、中ノ割遺跡他6遺跡の取り扱いについて、建設省と協議を重ねた結果、平成2年1月25日、現状保存が困難であるとし、記録保存の処置を講ずることとなり、調査機関として茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、建設省と協議し、埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を結び調査を実施することになった。平成2年度には中ノ割遺跡他3遺跡に関する発掘調査委託契約を結び、平成3年度には小山遺跡他3遺跡に関する発掘調査委託契約を結び、発掘調査を実施した。

第2節 調査方法

1 調査区設定

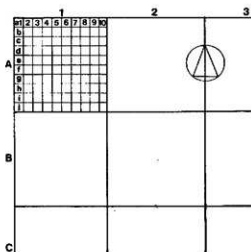
中ノ割遺跡他6遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系に基づき、各遺跡内に以下の基準点を設けて行った。

中ノ割遺跡	X = 36,760 m	Y = 60,920 m	小山遺跡	X = 36,680 m	Y = 61,360 m
諏訪前遺跡	X = 36,600 m	Y = 62,080 m	高原占墳群	X = 36,640 m	Y = 62,680 m
沢幡遺跡	X = 36,680 m	Y = 62,680 m	高原遺跡	X = 36,720 m	Y = 62,840 m
北屋敷遺跡	X = 37,200 m	Y = 63,600 m			

上記の基準点を中心に 40 m 方眼を設定し、この 40 m 四方の区域を大調査区（大グリッド）とした。さらに大調査区を東西・南北に各々 10 等分して 4 m 四方の小調査区（小グリッド）を設定した。すなわち、40 m 四方の大調査区内に、4 m 四方の小調査区を 100 個設定したわけである。

大調査区は、北から南へ「A」、「B」、「C」……、西から東へ「1」、「2」、「3」……とし、その組合わせて「A1区」、「B2区」……とした。小調査区は、北から南へ「a」、「b」、「c」……「i」、「j」とし、西から東へ「1」、「2」、「3」……

「4」、「5」と表した。各調査区は、大調査区と合わせて「A1a1区」、「B2b2区」のように表記した。



第1図 調査区呼称方法概念図

2 遺構確認

中ノ割・小山・諏訪前・高原遺跡は、基準点を基準とするグリッドを設定して試掘を行い、沢幡・北原敷遺跡は、南北方向に 8 m 間隔で幅 2 m のトレンチを入れ試掘を行った。中ノ割・沢幡・北原敷遺跡は、いずれも遺構と思われる落ち込みが確認されたため、調査区全面の表土除去を実施することにしたが、かなりの遺構数が予想されることや、表土の厚さが 40～50 cm であることから、表土除去は重機で行うことにした。小山遺跡は、遺構と思われる落ち込みがあまりなかったため、遺構を確認できた全体のおよそ 2 分の 1 を重機による表土除去を行った。諏訪前遺跡は、遺構と思われる落ち込みが確認され、遺構確認面までの深さが浅かったことから、人力による表土除去を実施した。高原遺跡は、遺構と思われる落ち込みが確認されたため、調査区全面の表土除去を実施することにした。かなりの遺構数が予想されることや、表土の厚さが 30～40 cm であることから、重機による表土除去を実施した。さらに、遺構が調査区の外へ延びていることから、委託者である建設省と、茨城県教育委員会、茨城県教育財団の三者で協議した結果、調査範囲を拡張し、人力による表土除去を実施した。

3 遺構調査

住居跡の調査は、平面プラン確認後、遺構の中央部で直交するように上層観察用のベルト 2 本

を設定して四分分割し、それぞれを掘り込む四分分割法で実施した。それぞれの地区の名称は、北から時計回りに1～4区とした。土坑、井戸の調査は、規模に応じて適宜二分分割法、四分分割法を使い分けた。溝、古墳の調査は、必要に応じて数か所の土層観察用ベルトを設けた。

土層については、色調、含有物や混入物の種類や量、粘性や締まり具合等を観察して土層分類の基準とした。色調の判定は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社）を使用した。

遺物の取り上げは、住居跡や土坑等の名称と出土地区の名称、取り上げ番号、レベル等を記録して収納した。

遺構や遺物の平面実測は、座標北をもとに水系方眼地盤測量で行うことを原則としたが、小山遺跡、高原古墳群、高原遺跡では平板測量、北屋敷遺跡では平板測量と道り方測量を併用した。土層断面実測は、標高をもとに水平にセットした水系を基準にして実測した。

調査の記録は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土位置図作成→遺構平面写真撮影→遺構平面図作成→遺構断面図作成の順で行うことを基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては、そのつど野帳に記録し、これを調査記録カードに整理した。

第3節 調査経過

発掘調査は、平成2年度に中ノ割・小山・諏訪前・沢幡遺跡、平成3年度に小山・高原古墳群・高原・北屋敷遺跡において実施された。以下、調査の経過を追って略述する。

<平成2年度>

- 4 月 10日から事務所を設置し、発掘器材の搬入など発掘調査の諸準備を行った。13日から中ノ割・諏訪前・沢幡遺跡の伐間を行い、23日には沢幡遺跡において罫入れ式を奉行した。23日から沢幡遺跡、25日から諏訪前遺跡、27日から小山遺跡の工事用道路部分の試掘を行った。
- 5 月 1日から中ノ割遺跡の工事用道路部分の試掘を行い、7日からは、諏訪前遺跡で工事用道路部分の人力による表土除去を実施し、並行して遺構確認作業を進めた。18日には遺構確認状況の写真を撮影し、遺構の掘り込みに着手した。並行して22日から沢幡遺跡の工事用道路部分の重機による表土除去を実施し、遺構確認作業を開始した。24日には遺構確認状況の写真を撮影し、遺構の掘り込みに着手する一方、25日から中ノ割遺跡でも工事用道路部分の重機による表土除去を実施し、並行して遺構確認作業を開始した。29日には遺構確認状況の写真を撮影した。沢幡遺跡の遺構調査と並行して、

30 日からは小山遺跡の工事用道路部分の重機による表土除去、遺構確認作業を開始し、31 日には遺構確認状況の写真を撮影した。

- 6 月 沢幡遺跡の遺構調査を進める一方、11 日からは諏訪前遺跡の工事用道路部分の遺構調査に着手した。13 日には沢幡遺跡の工事用道路部分の遺構調査を終了し、18 日から諏訪前遺跡の遺構調査と並行して、中ノ割・小山遺跡の工事用道路部分の遺構調査を開始した。28 日には中ノ割遺跡、29 日には小山・諏訪前遺跡の工事用道路部分の調査を終了した。
- 7 月 2 日に中ノ割・小山・諏訪前・沢幡遺跡の航空写真を撮影した。引き続き諏訪前遺跡の二次区試掘を開始し、5 日には終了した。続いて中ノ割遺跡の二次区試掘に取りかかり、17 日には終了した。18 日からは、諏訪前遺跡の人力による表土除去を実施し、並行して遺構確認作業を開始し、住居跡 5 件、土坑 12 基、溝 2 条を確認した。
- 8 月 1 日に諏訪前遺跡の遺構確認状況の写真を撮影し、遺構の掘り込みに着手した。6 日には遺構調査を一時中断し、中ノ割遺跡の重機による表土除去を実施し、並行して遺構確認作業を行い、土坑 42 基、円形周溝状遺構 1 基を確認して、18 日に遺構確認状況の写真を撮影した。20 日から諏訪前遺跡の遺構調査を再開し、月末までに住居跡 5 軒、土坑 12 基、溝 2 条の調査をすべて終了し、深い掘り込み等の安全対策を講じた。
- 9 月 3 日から中ノ割遺跡の遺構調査を開始し、並行して17 日からは沢幡遺跡の二次区試掘に取りかかった。25 日に中ノ割遺跡の土坑 42 基、円形周溝状遺構 1 基の調査をすべて終了し、深い掘り込み等の安全対策を講じた。27 日・28 日には沢幡遺跡の重機による表土除去を実施し、住居跡 14 軒、土坑 32 基、溝 4 条を確認して、28 日には遺構確認状況の写真を撮影した。
- 10 月 1 日から沢幡遺跡の遺構調査に取りかかり、11 日には中ノ割・諏訪前遺跡の航空写真を撮影した。31 日に沢幡遺跡の住居跡 14 軒、土坑 32 基、溝 4 条の調査を終了し、平成 2 年度の調査を終了した。

<平成 3 年度>

- 4 月 7 日から発掘調査の諸準備を行った。10 日から北屋敷遺跡の試掘を開始し、11 日には建設省、茨城県教育委員会立ち合いで調査範囲の確認を行った。12 日からは北屋敷遺跡の試掘と並行して高原遺跡の試掘を、15 日には小山遺跡の試掘を始めた。24 日には北屋敷遺跡の試掘を、26 日には高原遺跡の試掘を終了した。引き続き、高原古墳群の遺構調査に着手した。
- 5 月 高原古墳群の遺構調査を続けながら、22 日には高原遺跡の重機による表土除去を実

施し、並行して遺構確認作業を開始した。30日には高原古墳群の防空壕1基、溝1条の調査をすべて終了するとともに、高原遺跡の遺構確認状況の写真を撮影した。その結果、高原遺跡は遺構が調査区外へ延びていることから、建設省、茨城県教育委員会と協議のうえ、調査範囲を拡張することになった。

- 6 月 11日から北屋敷遺跡の伐開作業を開始し、17日から重機による表土除去を実施し、並行して遺構確認作業を実施した。
- 7 月 3日に北屋敷遺跡の表土除去を終了して、古墳1基、住居跡8軒、掘立柱建物跡1棟、溝13条、土坑38基、井戸2基を確認し、遺構確認状況の写真を撮影した。4日から高原遺跡の拡張部分の表土除去を人力により開始した。12日には表土除去を終了して、住居跡6軒、掘立柱建物跡1棟、土坑47基、溝6条、井戸1基を確認し、遺構確認状況の写真を撮影して、遺構の掘り込みに着手した。
- 8 月 1日には高原遺跡の遺構調査が終わりに近付いたので、北屋敷遺跡の遺構調査を開始し、9日には高原遺跡の住居跡6軒、掘立柱建物跡1棟、土坑47基、溝6条、井戸1基の遺構調査をすべて終了した。
- 9 月 北屋敷遺跡の遺構調査を進めた。
- 10 月 北屋敷遺跡の遺構調査を進めながら、7日には班内研修を実施した。
- 11 月 北屋敷遺跡の遺構調査を進めながら、16日に北屋敷遺跡において現地説明会を実施した。
- 12 月 2日に小山遺跡の調査区のうち、遺構を確認できた南西側およそ2分の1を表土除去することとし、3日から重機による表土除去を実施し、並行して遺構確認作業を開始し、5日に終了して、住居跡1軒、溝2条、土坑12基を確認した。また、5日には、北屋敷遺跡の古墳1基、住居跡8軒、掘立柱建物跡1棟、溝13条、土坑38基、井戸2基の調査を終了した。6日から小山遺跡の遺構の掘り込みに着手し、13日に住居跡1軒、溝2条、土坑12基の調査を終了した。18日、19日には小山・北屋敷遺跡の補足調査を行い、調査をすべて終了した。24日に発掘器材を引き揚げるとともに事務所を引き払い、現場でのすべての作業を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

中ノ割遺跡他6遺跡は茨城県水戸市に所在する。うち小山遺跡他5遺跡は旧東茨城郡常澄村に所在していた。

中ノ割遺跡他6遺跡の所在する水戸市は、県のほぼ中央部に位置し、平成4年3月3日、東茨城郡常澄村を合併することにより、市域は東西24.51 km、南北21.0 kmで総面積175.90 km²となった。東は東茨城郡大洗町、西は笠間市、南は東茨城郡内原町・同郡茨城町、北は勝田市、那珂郡那珂町と接している。水戸市の人口は、246,921人（平成4年3月3日現在）である。当市は、江戸時代水戸徳川家の城下町として栄え、明治時代以後は県庁所在地として、本県の政治、経済、文化の中心地として発展している。また、同市には常磐自動車道及び国道6号が南西から北東に走っている。また、JR東日本常磐線の「水戸駅」は水戸線、水郡線の起点ともなっており、交通の要衝であり県内一の商業都市で市街地が広がっている。一方、台地は畑作農業も盛んに行われ、那珂川流域の低地は水田地帯となっている。

水戸市の地形は、北西から南東に流れる那珂川とその支流である桜川や瀬沼川によって形成された沖積低地（標高10 m以下）と南西部の東茨城台地（洪積層台地、標高20～30 m）、北西部は鶏足山塊からのびる丘陵地（標高60～200 m）、那珂川左岸の那珂台地からなっている。

地質は、台地上で鶏足層を基盤とし、泥岩によって形成されている第二紀層の水戸層がその上に堆積しており、さらにその上に粘土・砂によって形成されている第四紀層の見和層、礫からなる上市層、灰白色粘土の常総粘土層、そして、関東ローム層の順で水平に堆積している。また、低地では沖積谷を河川堆積物である砂礫が埋め、場所によっては有機質の黒色泥や草炭類似のものも堆積が見られる。

中ノ割遺跡他6遺跡は、水戸市の南東部にあり、東茨城台地の南東端、那珂川と瀬沼川の合流地点に向かって張り出した舌状台地縁辺部に位置している。台地は、標高16～30 m程で、北東及び北西側は那珂川、瀬沼川によって形成された沖積低地で、県内有数の水田地帯となっている。台地と水田との比高は15～25 mである。

第2節 歴史的環境

那珂川流域及び沼川流域の水戸市及び旧常澄村には各時代にわたって人々が居住し、数多くの遺跡が所在することで知られている。

先土器時代の遺跡では、水戸市に赤塚遺跡、昭和38年に石器が発見された十万原遺跡がある。縄文時代には、各期にわたり多くの遺跡が見られ、特に沖積低地に沿った台地縁辺部に集中する。早期では、水戸市の柳崎遺跡、馬場尻遺跡、先述の十万原遺跡、旧常澄村の森戸遺跡<50>があり、前期では、水戸市の谷田貝塚<3>、先述の柳崎遺跡、旧常澄村の『常陸国風土記』にも登場する国指定史跡の大車貝塚<33>がある。中期では、水戸市の吉田貝塚、塙東遺跡、砂川遺跡、旧常澄村の向山遺跡<25>があり、後期になると、水戸市の谷田貝塚<3>、先述の砂川遺跡、旧常澄村の六地藏寺遺跡<9>、東前遺跡<19>があり、晩期には、水戸市のアラヤ遺跡がある。しかし、旧常澄村の縄文時代の遺跡は発掘調査されたものがわずかに人車貝塚にすぎず、他の遺跡は遺物の表面採集によって知られたものである。

弥生時代においても、縄文時代と同じように丘陵沿いの台地上や沖積地に沿った台地縁辺部に遺跡が多く所在し、水戸市の中～後期の向井原遺跡、後期のお下屋敷遺跡、塙東新地遺跡、松原遺跡、五領式土器が「干台要素を備えている大蔵町遺跡、旧常澄村の中期の遠内遺跡、後期の大道端遺跡、栗崎遺跡、人六天遺跡などがあるが、いずれも表面採集や他の時代の発掘調査の際わかったもので調査例はない。

古墳時代になると、随所に大小の集落が営まれ、多くの古墳が築造された。水戸市では、安戸屋古墳、愛宕山古墳、権現山横穴古墳、線彫刻の壁画をもつ国指定史跡の吉田古墳、東大野遺跡<5>、東町遺跡があり、旧常澄村では、大六天古墳、金山塚古墳群<23>、森戸古墳群<51>、六反田広町遺跡<11>、殿山遺跡などがある。

奈良・平安時代になると、水戸市及び旧常澄村の地域は那賀郡に属していた。この那賀郡の郡衙は、『常陸国風土記』によれば「河内駅家」や「曝井」の近くにあったことから、水戸市の台渡庵寺が所在する渡里の地にあったとされている。この那賀郡には、奈良時代の平津駅家（旧常澄村）、河内駅家（水戸市）が置かれていた。また、今回調査した諏訪前遺跡、沢幡遺跡、高原遺跡、北原敷遺跡は那賀郡芳賀郷内に位置する。この奈良・平安時代の遺跡には、水戸市では台渡庵寺跡、田谷遺跡、大蔵町遺跡、薬王院東遺跡、大塚新地遺跡、須恵器の生産をしていた木葉下遺跡などがあり、旧常澄村では、人面墨書土器の出土している大車殿山遺跡、墨書土器の出土している道西遺跡、墨書土器や須恵器の蔵骨器の出土している塩崎原遺跡、布目瓦が出土している長福寺遺跡などがある。

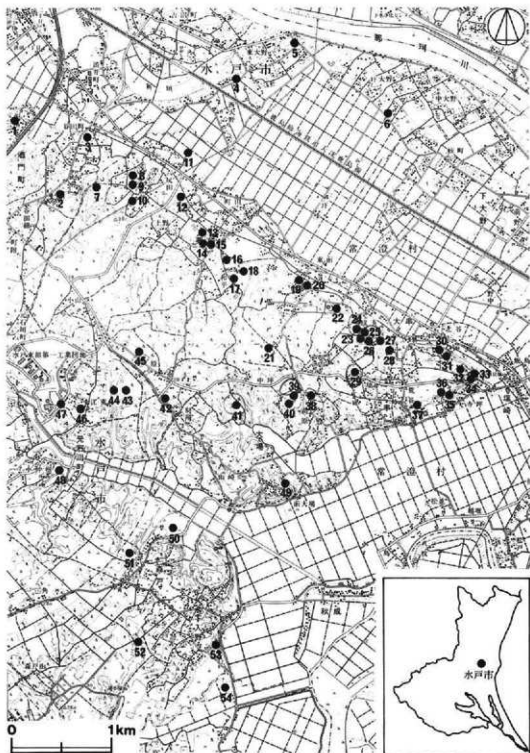
中世になると、領主は何度か変わったが、この地は、吉田郡内の石川（水戸市元吉田町一帯）

に住んでいた常陸平氏の一族、大塚氏に分かれてある吉田太郎盛幹の男次郎家幹（石川氏）及びその子孫たちによって治められていた。そして、江戸時代には、水戸徳川家の藩領になっていた。

本文中の<>の番号は、表1、第1図中の該当遺跡番号と同じである。

参考文献

- (1) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1990年
- (2) 茨城県 『茨城県史』 原始古代編 1985年
- (3) 茨城県 『先土器・縄文時代』 『茨城県資料』 考古資料編 1979年
- (4) 茨城県 『弥生時代』 『茨城県資料』 考古資料編 1991年
- (5) 茨城県 『古墳時代』 『茨城県資料』 考古資料編 1974年
- (6) 茨城県教育財団 『砂川遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第16集』 1982年
- (7) 茨城県教育財団 『松原遺跡・人塚新地遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第11集』 1980年
- (8) 茨城県教育財団 『木葉下遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告第21・26集』 1983年・1984年
- (9) 水戸市 『水戸市史』 上巻 1963年
- (10) 常澄村 『常澄村史』 通史編 1989年
- (11) 水戸市人認町遺跡発掘調査会 『水戸市大館町遺跡』 1988年



第2図 周辺遺跡位置図

表1 周辺遺跡一覧表

国中 番号	遺跡名	遺跡の時代					国中 番号	遺跡名	遺跡の時代				
		縄文	弥生	古墳	奈-平	中世以降			縄文	弥生	古墳	奈-平	中世以降
1	瑠坪遺跡	○					28	北屋敷遺跡			○	○	○
2	谷田古墳群			○			29	鞆内遺跡				○	○
3	谷田貝塚	○					30	大串古墳			○		
4	西大野遺跡			○			31	大串2号墳			○		
5	東大野遺跡			○			32	大串遺跡			○		
6	中大野遺跡		○	○			33	大串貝塚	○				
7	六反田遺跡	○					34	大串遺跡	○				
8	六反田古墳群			○			35	長福寺1号墳			○		
9	六地藏寺遺跡	○					36	長福寺2号墳			○		
10	六地藏寺遺跡			○			37	善徳寺古墳			○		
11	六反田広町遺跡				○		38	高原遺跡				○	○
12	栗崎北古墳			○			39	沢橋遺跡				○	
13	芳賀遺跡			○			40	高原古墳群			○		○
14	芳賀遺跡			○			41	源訪前遺跡				○	
15	栗崎遺跡	○					42	小山遺跡	○				
16	栗崎遺跡			○			43	中ノ割遺跡	○			○	
17	栗崎古墳群			○			44	江東古墳群			○		
18	和平館跡					○	45	大場原古墳			○		
19	東前遺跡	○					46	乗越沢遺跡	○		○		
20	東前遺跡			○			47	雁沢遺跡	○				
21	小原遺跡			○			48	下畑遺跡	○				
22	椿山館跡					○	49	洲沼台古墳群			○		
23	金塚山古墳群			○			50	森戸遺跡	○				
24	原遺跡	○					51	森戸古墳群			○		
25	向山遺跡	○					52	下入野西古墳群			○		
26	向山遺跡			○			53	下入野古墳群			○		
27	向山遺跡			○			54	淡井古墳群			○		

※ 9と10、13と14、15と16、19と20、25～27、32と34は、遺跡名は同じであるが、別個の遺跡である。

第3章 遺構・遺物の記載方法及び表の見方

第1節 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、下記の要領で統一した。

1 使用記号

名称	古墳	竪穴住居跡	竪立柱建物跡	土坑・墓坑	溝	井戸	ピット	その他	土器	土製品	石器・石製品	金属製品	木製品
記号	TM	SI	SB	SK	SD	SE	P ₁	SX	P	DP	Q	M	W

2 遺構・遺物の表示方法



●土器 ○土製品 □石器・石製品 ☆金属製品 ★木製品 △瓦片

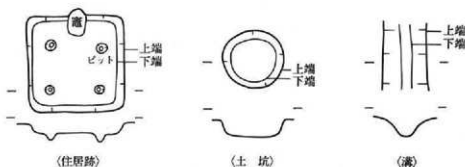
3 遺構番号

遺構番号については、調査の過程において遺構の種別ごと、調査順に付したが、整理の段階で遺構でないと判断したものは、欠番とした。

4 土層の分類

各遺構における堆積土の土層については、調査時に、色調、含有物、粘性、締まり具合などを観点として線引きし観察記録を行った。色調については『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社発行）を使用し、図版実測図中に土層解説を記載した。なお、攪乱層については「K」と表記した。

5 遺構実測図の記載方法



- (1) 古墳は、縮尺50分の1の全体図、同20分の1の主体部の原図をトレースして版組みし、さらに全体図は3分の1に、主体部は2分の1に縮小して掲載した。
- (2) 住居跡、掘立柱建物跡は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに3分の1に縮小して掲載した。
- (3) 土坑、墓域、井戸、溝は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに3分の1に縮小して掲載した。
- (4) 竈、炉は、縮尺10分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに3分の1に縮小して掲載した。
- (5) 防空壕は、縮尺50分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに1.5分の1に縮小して掲載した。
- (6) 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。また、同一図中で同一標高の場合に限り一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示した。
- (7) 本文の住居跡の記載について
- 「位置」は、遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
 - 「重複関係」は、住居跡の切り合い関係を記した。
 - 「平面形」は、壁の上端部で判断し、方形、長方形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。なお、〔 〕を付したものは、推定を表す。
 方形（短軸：長軸＝1：1.1未満のもの）、長方形（短軸：長軸＝1：1.1以上のもの）
 - 「規模」は、壁の上端部の計測値であり、長軸、短軸の順にm単位で表記した。壁高は、残存壁高の計測値である。なお、（ ）を付したものは現存値を示す。
 - 「主軸方向」は、炉または竈を通る線を主軸とし、その長軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。なお、〔 〕を付したものは、推定を表す。
 - 「壁」は、床面からの立ち上がり角度が81°～90°を垂直、65°～80°を外傾、65°未満を緩傾、さらに90°以上を内傾とした。
 - 「壁溝」は、その形状や規模を記述した。
 - 「床」は、傾斜（「平坦」、「緩い傾斜」）や床質等を記載した。
 - 「ピット」は、その住居跡に伴うと考えられるピットをPで表示し、P₁、P₂はピット番号を表し、さらに、ピットの直径と深さを記述した。
 - 「貯蔵穴」は、その形状を記述し、数字は長径、短径及び深さを示した。
 - 「覆土」は、堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」、攪乱を受けている場合は「攪乱」と記した。
 - 「遺物」は、主な遺物の種類や出土位置、出土状態等を記述した。また、遺構の平面図中

に2で示した記号を用い、出土位置をドットで表示し、接合できたものは実線で結んだ。出土遺物に付した数字は、遺物実測図及び拓影図の番号と符合する。

○「所見」は、当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

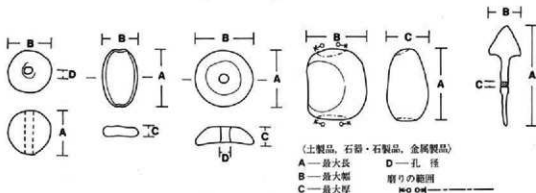
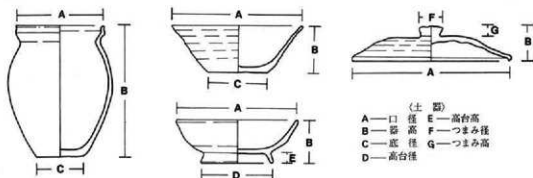
6 遺物実測図の記載方法

遺跡から出土した遺物については、実測図、拓影図、写真等により掲載した。

- (1) 土器の実測は、原則として中心線の左側に外面、右側に内面と断面を图示した。
- (2) 実測図中の表示方法



- (3) 土器の拓影図は、右側に断面を表し、表裏2面を掲載したものは、断面を挟んで左側に外面、右側に内面を掲載した。
- (4) 遺物は、原則として実測図をトレースしたものを3分の1に縮小して掲載した。しかし、種類や大きさにより異なる場合もある。
- (5) 各部位の名称と法量表現



第2節 表の見方

1 住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	ピット	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
				長軸 (m) × 短軸 (m)	壁高 (cm)						

- 位置は、遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
- 主軸方向は、座標北をN-0°とし、東(E)・西(W)に何度傾いているかを表示した。
(例 N-10°-E, N-10°-W) なお、[] を付したものは推定である。
- 平面形は、現存している形状の上端面で判断し、方形及び長方形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。
方形(短軸:長軸=1:1.1未満) 長方形(短軸:長軸=1:1.1以上)
- 規模の欄の長軸・短軸は、上端の計測値であり、壁高は残存壁高の計測値である。
- 床面は、平坦、凸凹、皿状及び緩い起伏に分類して表記した。
- 柱穴数は、平面図中に表示されたピットの中からその住居跡に伴うと思われる柱穴の本数を記した。
- 炉、竈は、その種類を記した。
- 覆土は、自然堆積のものは「自然」、人為堆積のものは「人為」と表記し、不明のものは空欄とした。
- 出土遺物は、実測個体数を除いた遺物の種類と、出土土器片の数を記した。
- 備考は、重複関係等について記した。

2 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径(m)	短径(m)	深さ(cm)					

- 土坑番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また、整理の過程で土坑でないと判断したものは欠番とした。
- 平面形は、掘り込み上面の形状を記した。
円形(短径:長径=1:1.1未満のもの) 楕円形(短径:長径=1:1.1以上のもの)
- 規模の欄の長径及び短径は、上端部の計測値(m)で表した。フラスコ状土坑については、底面部とに分けて表した。
- 壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準で分類し表示した。

81°～90°の傾き

垂直 

65°～80°の傾き

外傾 

65°未満の傾き

緩斜 

- 底面は、下記の基準で分類し表示した。

平坦 皿状 凸凹 

- その他の項目については、住居跡一覧表の記載方法に準じた。

3 出土遺物観察表

(1) 縄文式土器

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考

(2) 土師器・須恵器

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考

- 図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。
- 法量は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径 E-高台高 F-つまみ径 G-つまみ高とし、単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。
- 胎土・色調・焼成の欄は、上から胎土、色調及び焼成の順で記した。色調については、前節の十層の分類と同じ土色帖を使用した。焼成については、良好、普通及び不良に分類し焼き締まって硬いものは良好、焼成があまく手でこすると器面が剥落するものを不良とし、その中間のものを普通とした。
- 備考の欄は、土器の残存率、実測(P)番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 土製品

図版番号	器種	法量					出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)		

(4) 石器・石製品

図版番号	器種	石質	法量				出土地点	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		

(5) 金属製品

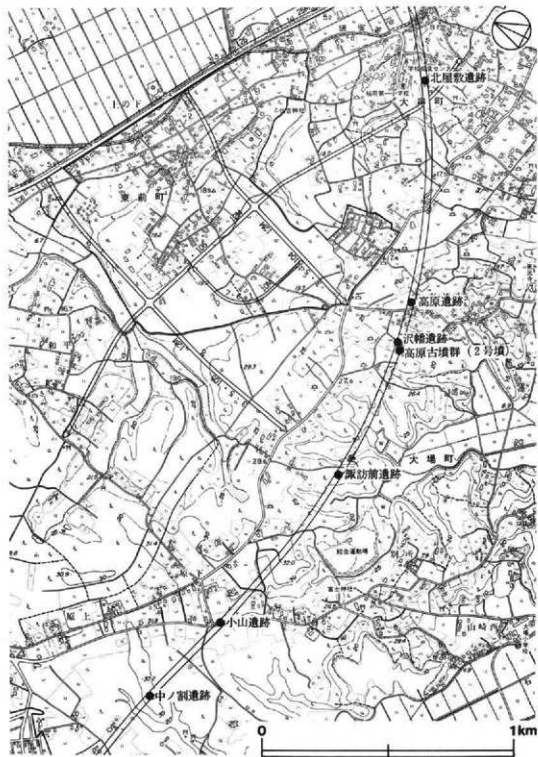
図版番号	器 種	法 量				出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		

○ 図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。

○ 重量の欄で、() を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

(6) 古銭

図版番号	銭 名	初 鑄 年		出土地点	備 考
		時 代	年 号		



第3図 中ノ割遺跡他6遺跡位置図

第4章 中ノ割遺跡

第1節 遺跡の概要

中ノ割遺跡は、水戸市の南東部、東茨城台地南東端の標高29m前後の小さな舌状台地上に立地する縄文時代早期～後期、奈良・平安時代の遺跡である。調査区は、南北に約63m、東西に約61m、面積3,621㎡で、現況は山林である。

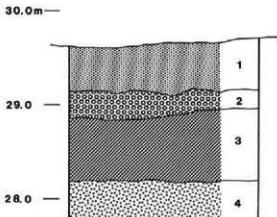
今回の調査によって検出された遺構は、土坑39基、円形周溝状遺構1基である。そのうち、時期の確定できるものは、縄文時代後期に比定される土坑5基で、調査区南部から検出されている。他の土坑及び円形周溝状遺構については、遺構に伴うと思われる出土遺物がなく、時期、性格等は不明である。また、土師器や須恵器が出土しているが、奈良・平安時代の遺構は検出されていない。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に約15箱出土している。縄文時代早期から後期の深鉢形土器片、縄文時代の石槍、石斧、磨石等の石製品、土器片鏝等の土製品が出土している。奈良・平安時代の土師器の甕、須恵器の坏、蓋、甕、壺等の破片も少量出土している。

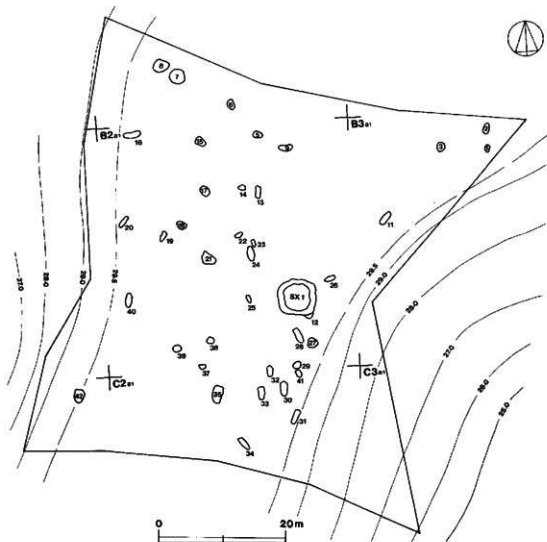
第2節 基本層序

第4図は、当調査区の基本層序を観察するために設けたテストビットの土層図である。場所は、調査区内で最も標高が高い地点とし、東よりのB2c区を選定した。

第1層は、表土で、ローム粒子・炭化粒子を含み、厚さは45～55cmである。第2層は、褐色のローム層で、20～30cmの厚さに堆積している。本層の上面が「遺構確認面」にあたる。第3層は、明褐色のハードローム層で、65～75cmの厚さに堆積している。第4層は、鹿沼パミスの層である。



第4図 基本土層図



第5図 中ノ割遺跡全体図

第3節 遺構と遺物

1 土坑

当調査区から、土坑は39基検出されている。これらの上坑は、調査区の全域に分布している。形状等に特徴のあるものや遺物が出土し、時期の確定できる土坑5基については、文章で記述し、その他のものは一覧表に記載した。

第12号土坑 (第6図)

位置 調査区の南東部、B2h₃区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第1号円形周溝状遺構に掘り込まれている。

規模と平面形 長径1.42 m、短径1.14 mの楕円形を呈し、深さは110 cmである。

長径方向 N-86°-E

壁面 底面から中位まではやや内傾して立ち上がり、中位から上はやや外傾している。

底面 平坦で硬く締まっている。規模は、長径1.22 m、短径1.17 mである。

覆土 ロームブロックが混じる暗褐色土で人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中層から上層にかけて縄文式土器片が出土している。

所見 本跡は、第1号円形周溝状遺構より古く、断面形が袋状を呈していることや、遺物の特徴等から、縄文時代後期前葉の土坑と考えられる。

1～3は、第12号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。1・2は同一個体で、無節Lの横位回転縄文を施している。3は胴部片で、無節LとRの縄文を縦位の羽状に施文している。また、炭化物が付着している。

第27号土坑（第6図）

位置 調査区の南東部、B2j₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.75 m、短径1.59 mの円形を呈し、深さは135 cmである。

長径方向 N-65°-W

壁面 東壁は垂直に立ち上がり、その他の壁は、やや内傾して立ち上がり、中位でやや外傾する。

底面 平坦で硬く締まっている。規模は、長径1.56 m、短径1.42 mである。

覆土 ローム粒子が多量に混じる褐色土及び赤褐色土で、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土下層から中層にかけて縄文式土器片が出土している。5の深鉢は覆土下層から横位で、6の深鉢、7の深鉢、15の磨石は覆土下層から、8の深鉢は覆土中層から下層にかけて、9・10の土器片は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、断面形が袋状を呈していることや、遺物の特徴等から、縄文時代後期前葉の土坑と考えられる。

11～14は、第27号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。11は口縁部片で、口唇部上面に棒状工具による刺突文があり、口縁部には無節Lの縦位回転縄文を施している。12は口縁部片で、小突起と刺突文をもち、口唇部外側に横位の沈線が走り、小突起から下へ隆帯を施し、一条の沈線を隆帯上加えている。13は胴部片で、ヘラ状工具による沈線を縦位、斜位に施している。14は胴部片で、単節LRの回転縄文を地文とし、蛇行沈線を施している。

第29号土坑（第6図）

位置 調査区の南東部、B2_{is}区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.38 m、短径1.32 mの円形を呈し、深さは106 cmである。

長径方向 N-47°-E

壁面 東壁は、中位までやや内傾して立ち上がり、中位からはやや外傾している。その他の壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。規模は、長径1.08 m、短径1.02 mである。

覆土 ローム粒子を多量に含む暗褐色及び暗赤褐色土で、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土下層から上層にかけて縄文式土器片が出土している。16の深鉢は、覆土上層から中層にかけて出土している。

所見 本跡は、断面形が袋状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代後期前葉の土坑と考えられる。

17～19は、第29号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。17は口縁部片で、ヘラ状工具による沈線を縦位、斜位に施している。18は口縁部片で、単節LRの横位回転縄文を施している。19は波状口縁部片で、口唇部に沈線と刺突文を施し、口縁部に棒状工具による沈線を施し、櫛歯状工具による沈線を充填している。

第38号土坑（第6図）

位置 調査区の南部、B2_{is}区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.20 m、短径1.12 mの円形を呈し、深さは135 cmである。

長径方向 N-53°-W

壁面 やや内傾して立ち上がっている。

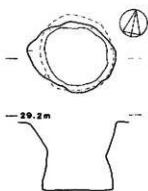
底面 平坦。規模は、長径1.30 m、短径1.25 mである。

覆土 ローム小ブロック、ローム粒子混じりの褐色及び暗赤褐色土で、人為堆積と考えられる。

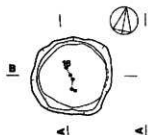
遺物 覆土下層から上層にかけて縄文式土器片が出土している。22の深鉢は覆土上層から、23・24の深鉢は覆土中層から出土している。

所見 本跡は、断面形が袋状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代後期前葉の土坑と考えられる。

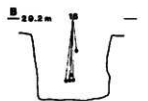
25～29は、第38号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。25・26は口縁部片で、単節LRの横位回転縄文に縦位の連続状の隆帯を貼り付けている。27は胴部片で、単節LRの横



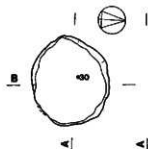
SK 12



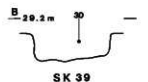
SK 27



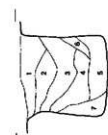
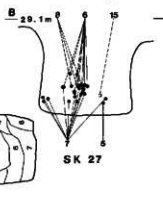
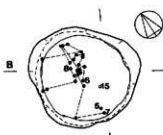
SK 29



SK 38



SK 39



第27号土坑 土層解説

- 1 褐色 U-A粒中量、炭化粒子・焼土粒少量。
- 2 灰褐色 U-A粒多量、U-A小ブロック・炭化粒子少量。
- 3 暗赤褐色 U-A粒多量、炭化粒子中量。
- 4 暗赤褐色 U-A粒多量、炭化粒子・焼土粒中量。
- 5 暗褐色 U-A粒多量、U-A小ブロック中量、炭化粒子・焼土粒少量。
- 6 灰褐色 U-A粒多量、炭化粒子少量。
- 7 褐色 U-A粒多量、炭化粒子少量。

第29号土坑 土層解説

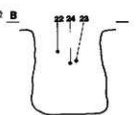
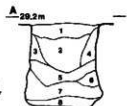
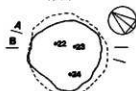
- 1 灰褐色 U-A粒中量、炭化粒子・焼土粒少量。
- 2 暗赤褐色 U-A粒少量、炭化粒子・焼土粒極少量。
- 3 暗赤褐色 U-A粒中量、焼土粒中量、炭化粒子中量。
- 4 暗褐色 U-A粒多量、炭化粒子少量。
- 5 暗褐色 U-A粒多量、炭化粒子少量。
- 6 暗赤褐色 U-A粒中量、焼土粒多量、炭化粒子少量。
- 7 暗赤褐色 U-A粒多量、炭化粒子・焼土粒少量。
- 8 灰褐色 U-A粒多量、炭化粒子中量。

第38号土坑 土層解説

- 1 暗赤褐色 U-A粒多量、炭化粒子・焼土粒中量。
- 2 暗赤褐色 炭化粒子多量、U-A粒中量、焼土粒中量。
- 3 褐色 U-A粒多量、炭化粒子少量。
- 4 褐色 U-A粒多量、炭化粒子・焼土粒少量。
- 5 暗赤褐色 U-A粒極めて多量、U-A小中ブロック多量、炭化粒子・焼土粒少量。
- 6 暗褐色 U-A粒多量、炭化粒子・焼土粒中量。
- 7 暗赤褐色 U-A小ブロック・U-A粒多量、炭化粒子・焼土粒少量。
- 8 暗赤褐色 U-A粒中量、炭化粒子多量。

第39号土坑 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒多量、U-A粒中量、炭化粒子極少量。
- 2 褐色 U-A粒多量、炭化粒子・焼土粒少量。



第6図 第12・27・29・38・39号土坑実測・遺物出土位置図

位回転縄文に棒状工具による横位、斜位の沈線を施している。28は胴部片で、単節LRの横位回転縄文に沈線による蕨手文を施している。29は胴部片で、単節LRの横位回転縄文に蛇行沈線を施している。

第39号土坑（第6図）

位置 調査区の南部，B2is区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.45m，短径1.25mの円形を呈し，深さは46cmである。

長径方向 N-84°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 円形を呈し，ほぼ平坦である。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層から上層にかけて縄文式土器片が出土している。30の深鉢は，覆土中層から横位の状態で出土している。

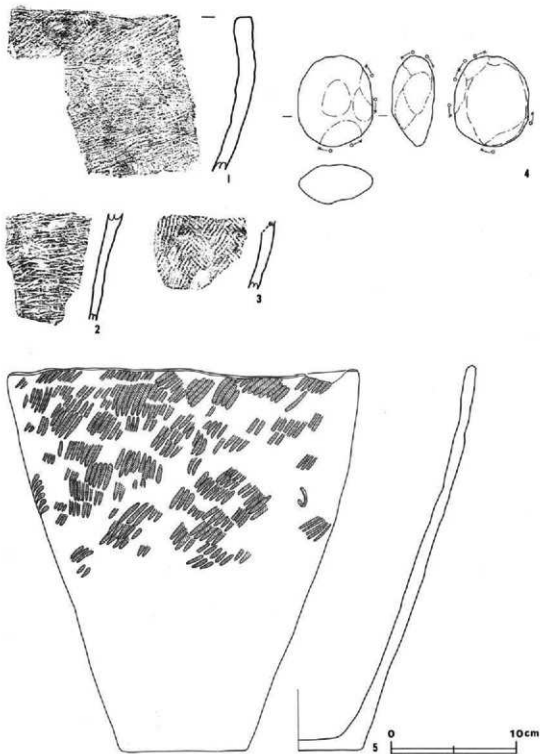
所見 本跡は，遺構の形態や遺物の特徴等から，縄文時代後期前葉の土坑と考えられる。

第13号土坑出土遺物観察表

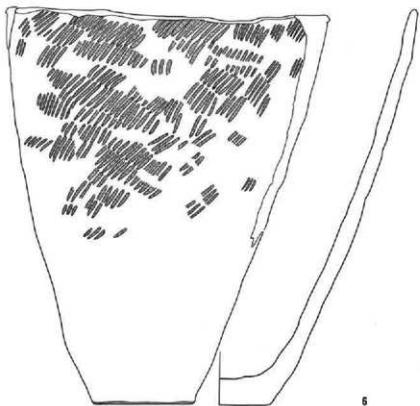
図版番号	器種	石質	法 量				出土地点	備 考
			長さ(m)	幅(cm)	直径(m)	重量(g)		
第7図 4	磨石	流紋岩	7.4	6.0	3.4	205.9	覆土中層	Q1 100%

第27号土坑出土遺物観察表

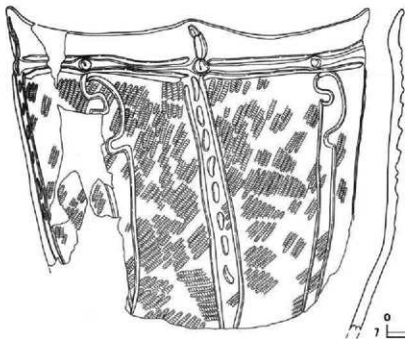
図版番号	器種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	粘土・色・紋	備 考
第7図 5	胴部片 (縦2内)	A 28.2 B 30.8 C 10.0	口縁部一部欠損。底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。口縁部から胴部上半には無節Lの横位回転縄文を施している。胴部下半には縦位のヘラ割りを施している。粗製土器である。	砂粒・長石 褐色 普通	P1 95% 覆土下層
	胴部片 (縦2内)	A [25.8] B 31.9 C 8.1	胴部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。口縁部から胴部上半には無節Lの横位回転縄文を施している。胴部下半は縦位のヘラ割りを施している。粗製土器である。	砂粒・長石 褐色 普通	P2 60% 覆土下層
		胴部片 (縦2内)	A 28.9 B (25.7)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部はやや内彎気味に立ち上がり，口縁部はやや外反する。4単位の波状口縁で，幅の狭い口縁部無文体の下に横位の2条の沈線を施している。4単位の口縁部突起の外側に刺突文と「 」の字状の太い沈線を施している。横位の2条の沈線の間に3単位の刺突文を施し，その刺突文から縦位の蕨手文及び2条の沈線に挟まれた列点文を交互に4単位ずつ施している。	砂粒・長石 褐色 普通
第9図 8	胴部片 (縦2内)	A [15.9] B (17.5)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。3単位の波状口縁で，それぞれをつなぐように2条の沈線を横位に施している。無文体の胴部には縦位の2条の沈線に挟まれた蛇行沈線を施している。	砂粒・長石 褐色 普通	P4 30% 覆土下層



第7图 第12·13·27号土坑出土遗物实测·拓影图



6

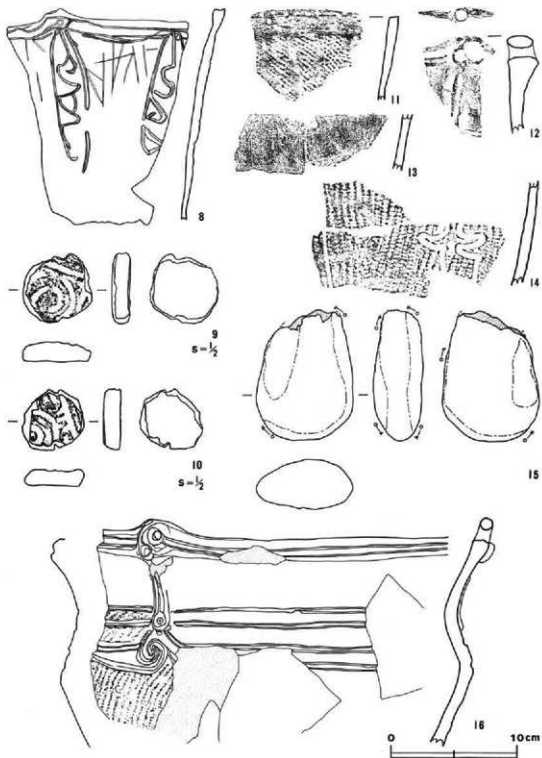


0

7

10cm

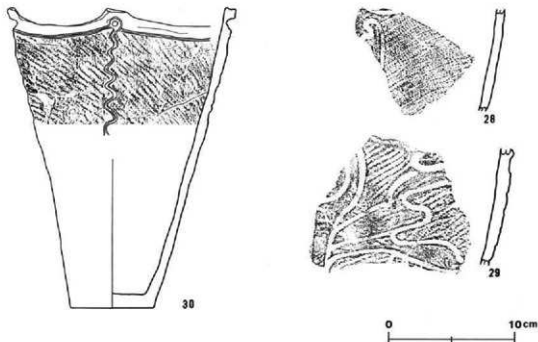
第8图 第27号土坑出土物实测图



第9图 第27·29号土坑出土物实测·拓影图



第10图 第29·32·33·38号土坑出土遗物实测·拓影图



第11図 第38・39号土坑出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法 量					出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)		
第9図	土器片鉢	3.7	3.6	1.1	14.1	—	覆土	DP4
10	土器片鉢	3.1	3.2	1.0	10.2	—	覆土	DP5

図版番号	器種	石質	法 量			出土地点	備 考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			重量(g)
第9図	卵石	石英珪岩	10.5	7.3	4.0	424.7	覆土下層	Q2

第29号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	輪土・色調・地味	備 考
第9図 16	陶器土器 (第29式)	A [34.0] B (18.2)	胴部から口縁部にかけての破片。胴上半部は内彎して頸部に至り口縁部は頸部から外反して立ち上がる。頸部以下の単筋LRの縄文を胴部上位の沈線による4条の平行沈線によって区画し、胴部から口縁部は横位のへう磨きを施し、口唇部には沈線を1条通らせている。3単位の波状口縁で、それぞれの突起から隆起線を2条垂下させ、その下に4条の沈線を施し、そのうち下2条で渦巻文をつくる。	輪土・灰石・ 縞・スコリア にぶい褐色 普通	P5 15% 覆土上・下層 SK22覆土中層

第32号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法 量					出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)		
第10図	土器片鉢	3.1	2.3	1.1	8.0	—	覆土	DP1

第 33 号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 21	環 須恵器	A 10.8	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部口縁ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	砂粒・塵 灰色 普通	P6 70% 覆土上層
		B 3.5				
		C 6.9				

第 38 号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第10図 22	深鉢形 深2.5の	B (8.7)	底部から胴部下半にかけての破片。底部は平底で、胴部は外傾して立ち上がる胴部下端ナデ、胴部中央には単筋LRの縄文を施している。	砂粒・長石 橙色 普通	P7 10% 覆土中層
		C [11.6]			
23	深鉢形 深2.5の	B (8.7)	波状口縁の口縁部把手部分。胴部内面に沈線と刺突文、口縁部外面に三つの刺突文を施している。頂部には、沈線と刺突文を施している。	砂粒・雲母・ パミス 浅黄橙色 普通	P8 5% 覆土中層
24	深鉢形 深2.5の	A [21.6]	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内傾して立ち上がり、頸部から外反する。単筋LR縄文地に胴部には2条の平行沈線を、頂部との間に1条の沈線を施している。3単位の波状口縁で、それぞれの突起から口縁部に連続状の隆起線文を垂下させている。	砂粒・長石・ 雲母・パミス におい橙色 普通	P9 10% 覆土中層
		B (12.4)			

第 39 号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第11図 30	深鉢形 深2.5の	A [18.2]	胴部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、胴部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。胴下半部は縄文地に縦位のヘラ跡が施され、胴上半部は単筋RLの縄文地に4条の蛇行沈線を口縁部小突起から縦位に施している。4単位の波状口縁でそれぞれ刺突文を持ち、それらをつなぐように1条の横位の沈線が通っている。	砂粒・雲母 橙色 普通	P10 70% 覆土中層
		B 24.2			
		C 6.6			

表 2 中ノ割遺跡土坑一覧表

番号	位置	長短方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長さ (m)	幅 (m)					
1	R2a	N-11°-W	楕円形	1.13	0.92	41	外傾	自然		
2	R2a	N-11°-E	楕円形	1.85	1.00	56	外傾	自然	須恵器7点(3点)	
3	R2b	N-34°-E	楕円形	1.56	1.28	55	外傾	自然		
5	R2a	N-79°-W	楕円形	1.55	1.00	40	外傾	自然	縄文式土器片1点	
6	A2a	N-21°-W	不規則形	1.76	1.25	36	外傾	自然	縄文式土器片2点	
7	A2a	N-59°-W	円形	2.35	2.45	35	外傾	自然		
8	A2a	N-75°-E	楕円形	2.86	2.14	30	外傾	自然	縄文式土器片2点	
9	R2b	N-54°-W	楕円長方形	2.18	0.90	41	外傾	人為	縄文式土器片9点、須恵器片5点、石製品1点	
11	R2a	N-39°-R	楕円長方形	2.32	0.90	50	外傾	人為	縄文式土器片2点	
12	R2b	N-36°-E	楕円形	1.42	1.14	110	内傾	人為	縄文式土器片4点	
13	R2c	N 4° E	楕円長方形	2.02	0.90	65	外傾	人為	縄文式土器片8点	

番号	位置	方位	平面形	取 扱			壁厚	底面	覆土	出土遺物	備 考
				長さ (m)	幅 (m)	高さ (m)					
14	B2a	N-82°E	梯形形	1.23	0.81	26	外積	平堀	人瓦		
15	B2a	N-30°W	梯形形	1.75	1.20	30	外積	凸凹	人瓦	縄文式土器片3点、石製品1点	
16	B2a	N-81°E	隅丸長方形	2.70	1.06	56	外積	平堀	人瓦		
17	B2a	N-50°W	不整形円形	1.85	1.47	22	壁積	竪状	自然		
18	B2a	N-75°W	不整形円形	1.68	1.21	24	壁積	竪状	自然	縄文式土器片1点	
19	B2a	N-24°E	隅丸長方形	3.42	1.51	64	外積	平堀	人瓦		
20	B2a	N 41° E	隅丸長方形	2.16	0.72	54	壁積	平堀	人瓦	縄文式土器片20点、石製品1点	
21	B2a	N-30°W	不整形円形	2.46	1.81	40	外積	凸凹	自然	縄文式土器片5点	
22	B2a	N-51°E	不整形円形	1.38	0.75	18	壁積	竪状	自然		
23	B2a	N 17° W	梯形形	1.30	0.90	50	壁積	凸凹	人瓦		
24	B2a	N-4°W	隅丸長方形	2.26	1.21	86	外積	平堀	人瓦	縄文式土器片21点	
25	B2a	N-20°W	隅丸長方形	1.26	0.70	35	外積	凸凹	人瓦	縄文式土器片4点	
26	B2a	N-79°E	不整形円形	1.53	0.86	29	外積	凸凹	人瓦	縄文式土器片6点	
27	B2a	N-60°W	円 形	1.75	1.59	135	内積	平堀	人瓦	縄文式土器片102点、土器破片2点	竪状、縄文時代後期前半
28	B2a	N-33°W	隅丸長方形	2.58	1.85	58	外積	平堀	人瓦	縄文式土器片37点、石製品2点	
29	B2a	N-47°E	円 形	1.38	1.32	105	内積	平堀	人瓦	縄文式土器片81点、石製品5点	竪状、縄文時代後期前半
30	C2a	N-3°W	隅丸長方形	2.44	1.23	41	外積	平堀	人瓦	縄文式土器片4点、石製品1点	
31	C2a	N-31°E	梯形形	2.45	1.84	20	壁積	竪状	自然	縄文式土器片14点	
32	C2a	N-7°W	隅丸長方形	1.95	0.94	45	外積	平堀	人瓦	縄文式土器片11点	
33	C2a	N-8°E	隅丸長方形	2.19	1.17	60	壁積	平堀	人瓦	縄文式土器片7点、石製品5点	
34	C2a	N-43°W	隅丸長方形	2.48	1.81	45	外積	平堀	人瓦		
35	C2a	N-7°W	隅丸長方形	2.85	1.85	49	外積	凸凹	人瓦	縄文式土器片23点、石製品5点	
37	B2a	N-70°W	不整形円形	1.18	1.00	91	壁積	平堀	人瓦	縄文式土器片15点	
38	B2a	N-33°W	円 形	1.20	1.12	135	内積	平堀	人瓦	縄文式土器片151点、石製品3点	竪状、縄文時代後期前半
39	B2a	N-84°W	円 形	1.45	1.25	46	壁積	平堀	自然	縄文式土器片11点、石製品1点	縄文時代後期前半
40	B2a	N-8°E	隅丸長方形	2.23	1.08	51	外積	凸凹	人瓦	縄文式土器片24点、石製品5点	
41	C2a	N-30°W	隅丸長方形	1.41	1.02	45	外積	凸凹	人瓦	石製品2点	
42	C1a	N-11°E	不整形円形	2.19	1.63	22	外積	平堀	自然	縄文式土器片5点、石製品1点	

2 円形周溝状遺構

第1号円形周溝状遺構 (第12図)

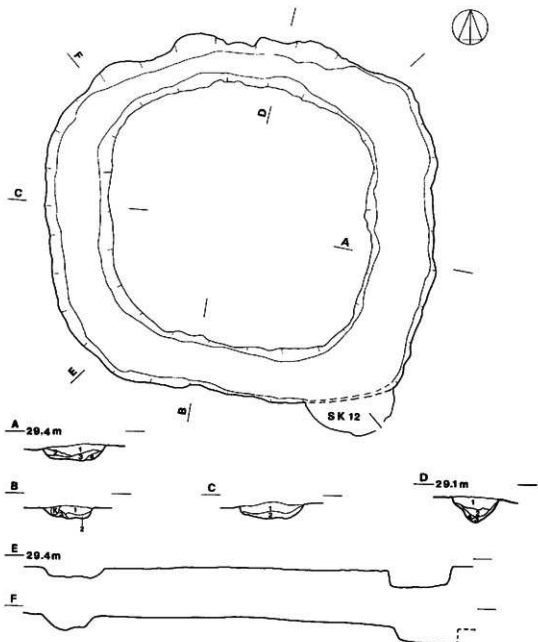
位置 調査区の南部、B2ha区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南東部は第12号十坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径6.88m、短径6.58mの不整形円形を呈している。周溝は上幅1.22～0.60m、下幅1.09～0.28m、深さ12～40cmで、底面は凸凹している。

長径方向 N-43°-W

覆土 自然堆積。



第1号円形周溝状遺構 土層解説 (A)

- 1 灰褐色 ローム粒子少量、炭化粒子極少量。
- 2 褐色 ローム粒子中量。
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、褐色土小ブロック少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量、褐色土小ブロック少量。

第1号円形周溝状遺構 土層解説 (B)

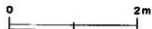
- 1 灰褐色 ローム粒子中量。
- 2 褐色 ローム粒子多量。
- 3 暗褐色 ローム粒子中量。

第1号円形周溝状遺構 土層解説 (C)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量。
- 2 褐色 ローム粒子中量。

第1号円形周溝状遺構 土層解説 (D)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量。
- 2 濃い赤褐色 ローム粒子多量。
- 3 褐色 ローム粒子多量。
- 4 褐色 ローム粒子中量。



第12図 第1号円形周溝状遺構実測図

遺物 覆土から、流れ込みと思われる縄文式土器片が出土している。

所見 本跡は、円形周溝状遺構として調査を進めてきたが、円形周溝内部及び周溝にも墓塚に関する埋葬施設等を確認できなかった。出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、本跡に伴う遺物は出土していない。縄文時代後期の第12号土坑を掘り込んでいることから、縄文時代後期以降のものと考えられる。性格は不明である。

3 遺構外出土遺物

(1) 縄文時代の遺物

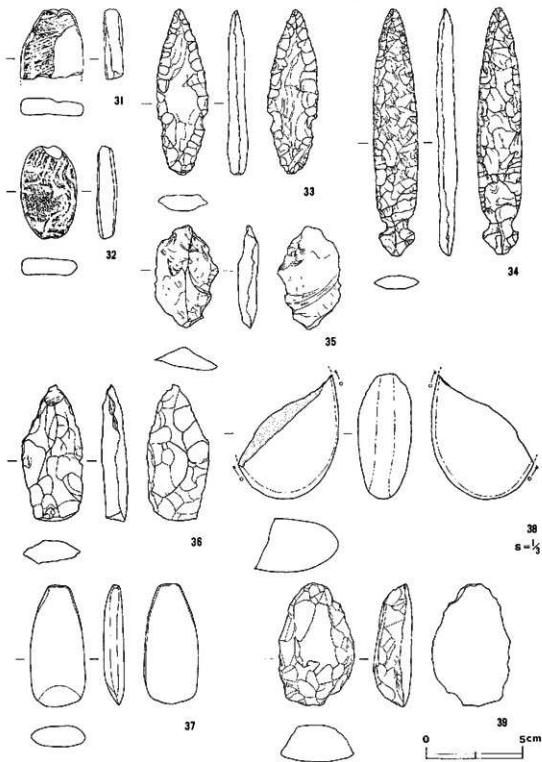
当調査区からは、遺構外からも、縄文時代早期から後期にかけての土器片や石器などが出土している。ここでは、遺構外から出土している縄文時代の遺物について一括して掲載することにする。

土器片 2点、石器 8点については実測し、土器片 200点については拓本と断面実測を行った。実測図を掲載した遺物については観察表で解説し、拓影図を掲載した遺物については分類してグループ毎に解説する。

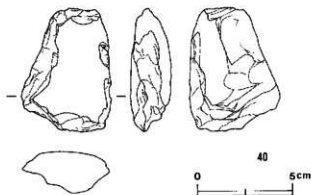
遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	法 量					出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)		
第12831	土器片地	(3.8)	3.4	0.9	(13.4)		表土	DP2
32	土器片兩	5.0	2.9	1.0	18.0	-	表土	DP3

図版番号	器種	石質	法 量				出土地点	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第12833	石 槌	流紋岩	8.9	2.6	1.1	27.0	表土	Q3
34	石 槌	チャート	13.3	2.4	1.0	34.6	表土	Q4
35	削 片	黒曜石	5.6	3.3	1.1	14.0	表土	Q5
36	石 槌	安山岩	(7.3)	3.3	1.4	(36.4)	表土	Q6 下部欠損
37	磨製石斧	砂 岩	6.5	2.0	1.2	31.5	表土	Q7
38	磨 石	砂 岩	(16.0)	(8.0)	(4.3)	(333.1)	表土	Q8
39	打製石斧	閃緑岩	6.6	4.0	2.0	82.3	表土	Q9 未定物品
第12840	打製石斧	緑泥片岩	6.7	4.8	2.2	82.9	表土	Q10



第13圖 遺構外出土遺物実測・拓影圖



第14図 遺構外出土遺物実測図

・拓影図掲載遺物（第15～21図）

第I群 縄文時代早期の土器

a 類土器

41～44は口縁部片で平口縁を呈し、細い沈線を41は斜位に、42・43は横位に施している。44は横位の沈線と半截竹管による連続刺突文を施し、口縁部に補修孔が見られる。45～53は胴部片で、細い沈線を45～47は横位に、48・49は横位及び斜位に施している。50・51は横位及び斜位の細い沈線とその間に爪形文を施している。52は下端に横位の沈線で区画された短沈線文が見られる。

b 類土器

53は胴部片で条痕文を外面は斜位に、内面は縦位に施している。

第II群 縄文時代前期の土器

54～58は口縁部片で平口縁を呈し、54・55は口唇部に棒状工具による押圧を施し、口縁部より下位に半截竹管による連続刺突文を横位に施している。56は口唇部直下に斜位の刻日文を、胴部に波状貝殻文を施している。57・58は胴部外面に輪積み痕が残り、斜位に刺突文を施している。59～62は胴部片で、59は半截竹管による刺突文を横位に、60は刺突文と横位の沈線を施している。61は大形のいわゆる三角刺突文を、62は波状貝殻文を施している。

第III群 縄文時代中期の土器

a 類土器

63～114は無文地で、63～107は口縁部片で、63～89は波状口縁を呈し、63～77は沈線による文様を施している。さらに65は口唇部内側に三叉文を施し、66は口唇部の突起上に棒状工具による押圧を施している。67～76は口唇部上面及び外端に刻み目があり、69・70は同一個体で細い竹管による列点文を沈線の間に施し、口唇部内面に細かい刻み目を施している。71～74は渦巻文を施し、さらに73・74は沈線上に小さな三角形の彫り込みを交互に施している。75・76は波状口縁の突起が三角形を呈する。77は小位の波状口縁で沈線による円圏文と三角形

彫刻文を施している。胎土に雲母と長石・石英粒が多量に含まれる。78～89は有節沈線による文様を施している。さらに83は口唇部外側に小突起が付き、内側に三角形彫刻文が見られる。84は隆帯を貼り付けている。85～88は口唇部に刻み目を施し、82・86は沈線上に小さな三角形の彫り込みを交互に施している。87・88の口唇部の突起上に棒状工具による押圧を施し、87は摩耗が激しい。89は口唇部全体に縄文を施し、突起上に刺突文を施している。

90～107は平口縁を呈し、90～96は沈線による文様を施している。91は渦巻文を施し、口縁部に隆帯が付く。92～96は口唇部全体に刻み目を施し、94～96は口縁部に隆帯が付く。特に、96は隆帯上にも刻み目が付く。97～106は有節沈線による文様を施している。さらに、101は三叉文、102は刺突文、103は細い竹管による列点文と小さな三角形の彫り込み、104は隆帯が縦横に付き、有節沈線をそのまわりに施している。105は口唇部に縄文を施し、口縁部に波状有節沈線と小突起、渦巻文、106は口唇部に刻み目が見られる。107は口縁部に外からの穿孔が三つある。

108～114は胴部片で、108は隆帯の両側に沈線を施している。109～113は有節沈線による文様を施している。109は横位の隆帯上に縄文を、口縁部に渦巻文を施し、110～112は隆帯の両側に有節沈線を施している。また、112は貼り付け隆帯が曲線を描く。113は波状有節沈線で、114は1条の縦位の隆帯の周囲に、沈線、有節沈線の両方を施している。

115～162は、ほとんどが単節RLの回転縄文を地文に施している。115～151は口縁部片で、115～132は波状口縁を呈し、115～126は沈線による文様を施している。118・119は三角形彫刻文を施し、119の胎土には雲母が多く含まれている。120～122は三角形彫刻文と口唇部の突起に刻み目を施している。123は口唇部に渦巻状の隆帯を付けていて、胎土に雲母が多く含まれている。124～126は口唇部全体に刻み目を施し、さらに124は口縁部外側に隆帯と小突起が、125は三角形彫刻文が見られる。127・128は有節沈線による文様を施している。さらに127は口唇部に粘土紐を貼り付け、双頭状の突起がある。128は口唇部に渦巻状の隆帯を貼付け、内面に三角形彫刻文を施している。129～132は沈線と有節沈線による文様を施している。129・130は口唇部に縄文を、口縁部の沈線の上に三角形彫刻文を施している。さらに129は口唇部の突起に粘土を貼り付け3条の刻み目を施している。131・132は口唇部上面及び外端に刻み目がみられ、131は隆帯と細い竹管による刺突文を、132は沈線の中に三角形彫刻文と細い竹管による刺突文を施している。

133～151は平口縁を呈し、133は口唇部外端に刻み目を、134・135は口縁部外側に縄文を施している。136～146は沈線による文様を施している。136はY字状沈線の上に三角形彫刻文が、137は口縁部に小突起と微隆起線がみられる。138～146は口唇部外端に刻み目や縄文を施し、さらに141～144は隆帯が付けられ、143・144は沈線による渦巻文を施している。145・

146 は口縁部外側に縄文を施し、さらに146 は隆帯と竹管による交互刺突文を施している。147～151 は有節沈線による文様を施している。150・151 は口唇部外端及び上面に縄文を施している。

152 は頸部片で、口縁部と胴部の境に隆起線が付けられ、沈線と有節沈線を施している。

153～161 は胴部片で、153 は沈線による文様と三角形彫刻文を施している。154～161 は有節沈線による文様を施している。154・155 は隆帯、156 はV字状の隆帯を付けている。157～159 は隆帯と棒状工具による押圧を施し、さらに158 は三角形彫刻文も施している。160・161 は縦位の隆帯を付け、さらに161 は隆帯の両側に沈線を施している。

その他、回転縄文だけのもの(162・163)、縄文地に口唇部外端及び上面に刻み目を施しているもの(164・165)、縄文地に綾線文を施しているもの(166・167)も見られる。

・b 類土器

この類は地文に縄文を施さず、168～175 は口縁部片で、168～173 は平口縁、174・175 は波状口縁を呈している。174 は二つ山の口縁部突起があり、そのうちの一つは山のまわりを粘土紐で囲んでいる。

第IV群 縄文時代後期の土器

a 類土器

176 は断面カマボコ状の隆線に細い刻み目を施し、また、横位の沈線に細い竹管による連続刺突文を施している。177 は頸部片、178 は胴部片で、縄文地に太い沈線区画による磨消縄文を施している。

b 類土器

179～199 は地文に縄文を施さず、179～190 は口縁部片で、179～185 は波状口縁を呈し、179 は口縁部上面に沈線が巡り、口縁部に沈線を施している。180 は口縁部突起で、沈線と刺突文を施しているが、摩耗が激しい。181 は口縁部上面に沈線と刺突文を施し、口縁部の突起から下へ1条の隆帯を施し、1条の沈線を隆帯上加えている。182 は口唇部の小突起に円孔を持ち、小突起から下へ2条の隆帯を、口縁部に太い隆帯を横位に貼り付けている。183 は口縁部突起に刺突文を施し、その下に波状の隆帯と隆帯両側に沈線を施している。184 は口縁部小突起に外側から押圧文を施し、雑な条線を様々な方向へ施している。185 は幅の狭い櫛歯状工具による平行沈線を横位・斜位に施している。186～190 は平口縁で、186 は幅の狭い櫛歯状工具、187～190 は幅の広い櫛歯状工具による沈線を横位、斜位に施している。

191～199 は胴部片で、191 は棒状工具による沈線を施し、櫛歯状工具による沈線を充填している。192 はへら状工具による沈線を施した上に雑な棒状工具による沈線を施している。193～199 はへら状工具による沈線を横位、斜位など様々な方向に施している。

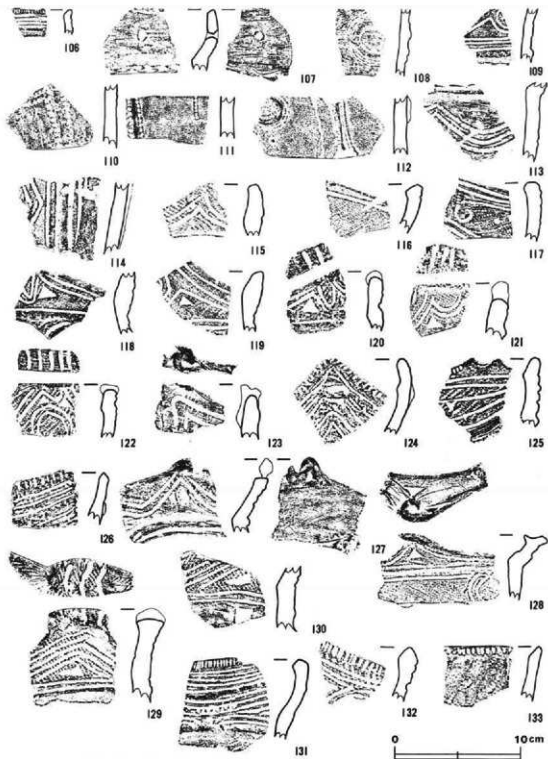
200～240 はほとんどが無節L、単節LR、単節RLの回転縄文を地文に施している。200～



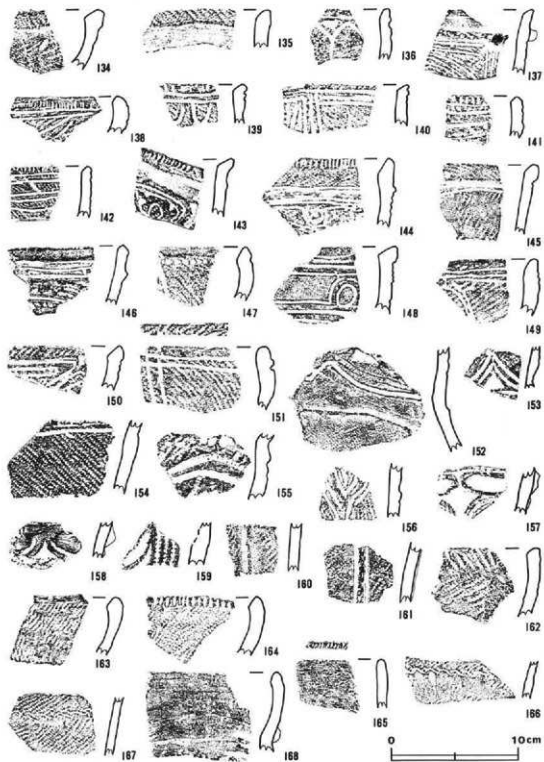
第15圖 遺構外出土遺物実測・拓影圖



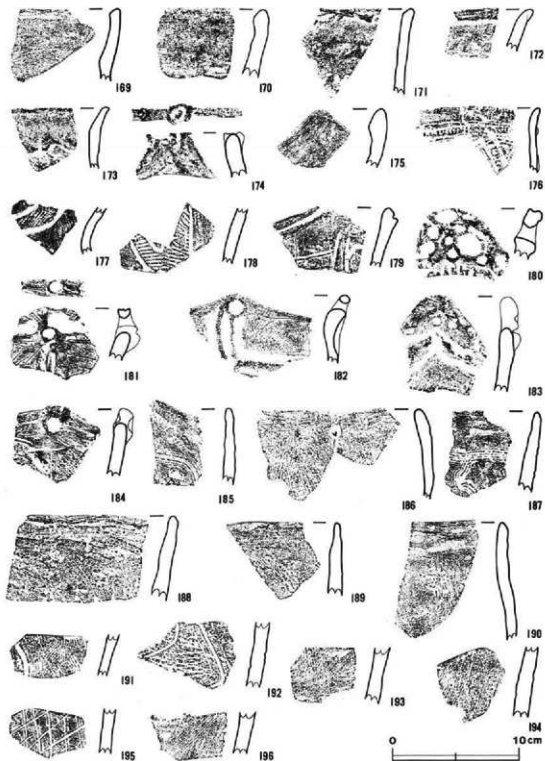
第16圖 遺構外出土遺物実測・拓影図



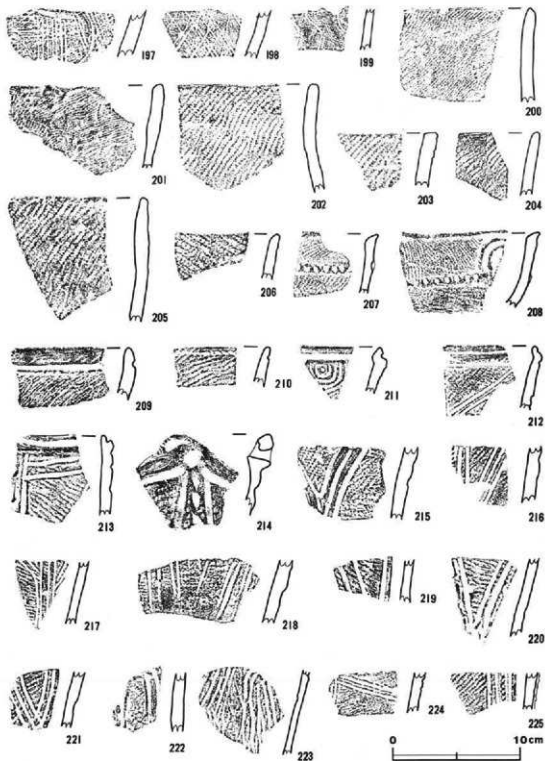
第17圖 遺構外出土遺物実測・拓影圖



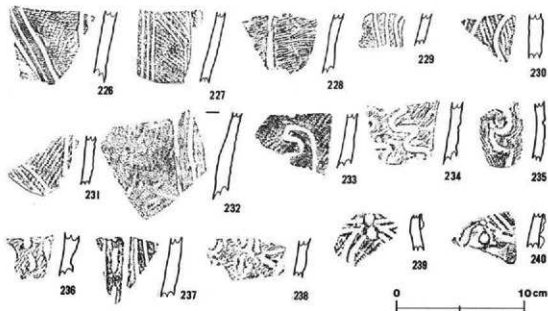
第 18 图 遺構外出土遺物実測・拓影图



第19图 遺構外出土遺物実測・拓影图



第 20 图 遺構外出土遺物実測・拓影図



第 21 図 遺構外出土遺物実測・拓影図

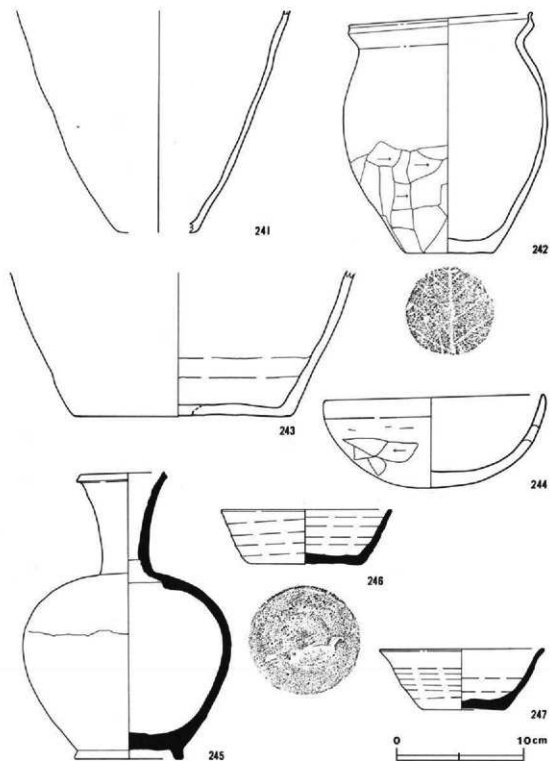
214 は口縁部片で、200～213 は平口縁を呈し、207・208 は隆帯を横位に貼り付け、その上に刺突文を施し、208 はさらに口縁部に弧状に隆帯を貼り、1 条の沈線を隆帯上加えている。209 は口縁部外側に横位に 1 条の沈線を施し、210 は口唇部外側に縄文原体圧痕文を押圧している。211～213 は口縁部外面に 1 条の沈線を施し、さらに 211 は渦巻状の沈線を、212・213 は縦位・斜位の沈線を施している。214 は波状口縁を呈し、口縁部突起に一つの穿孔と二つの刺突文を持ち、口縁部に横位、縦位の沈線の間に刺突文が縦位に並んで施されている。

215～240 は胴部片で、215～232 は棒状工具による沈線を様々な方向に施している。232 は胎土中に木葉が見られ、233 は蕨手文、234・235 は蛇行沈線文を施している。236～238 は列点状の沈線を施し、239 は沈線と押圧を加えた 8 の字状の隆帯を貼り、240 は沈線と隆帯に刺突文を施している。

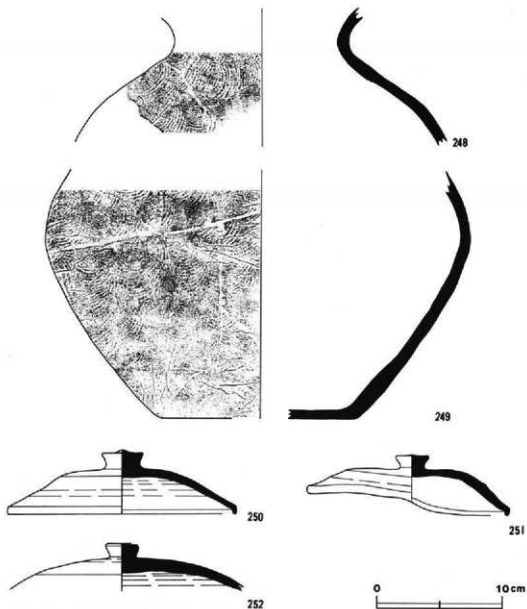
(2) 奈良・平安時代の遺物

当調査区からは、奈良・平安時代の遺構は検出されなかったが、遺構外から同時代の遺物が 11 点出土しているので、それらについて実測し、観察表で解説する。

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 22 図 241	甕 土師器	B (17.9) C [6.4]	底部及び胴部上半一部欠損。口縁部欠損。底部は平底で、胴部は内脷しながら立ち上がる。	胴部外面下位横位のヘラ削り後縦位の磨き。胴部内面ナダ。	砂粒・塵・雲母 に多い橙色 不良	P11 60% 表土



第22图 道橋外出土遺物実測・拓影図



第23図 遺構外出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地成	備考
第22図 242	甕 土師器	A 14.1 B 19.4 C 7.0	口縁部一部欠損。底部は平底で 胴部は内彎しながら立ち上がり 上位に最大径を持つ。頸部は 「く」の字状に屈曲し、口縁部 は外反する。口唇部を外上方に つまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。胴部 内・外面上位ナデ。胴部外面下 位横位の手持ちへう削り。底面 木炭痕。	砂粒・長石・ 石英・雲母 明赤褐色 不良	P14 90% 表土 蔵骨器

図版番号	器種	法線 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・内面・底	備考
第228図 243	壺 土師器	A (27.4)	底部から胴部下半にかけての破片。底部は平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部内面横ナデ。胴部外面下位横位のへう削り。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア 灰褐色 普通	P15 15% 表土
		B (11.7)				
244	鉢 土師器	A 17.2	体部一部欠損。底部は丸底で、体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は尖る。	体部内・外面横ナデ。体部外面下位手持ちへう削り。	砂粒・長石・石英・雲母 黄褐色 普通	P12 98% 表土
		B 7.5				
245	長知蓋 須恵器	A 6.9	口縁部一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。頸部は外反しながら立ち上がり口縁部は外上方に広がる。	口縁部・頸部及び胴部外面横ナデ。底部回転へう削り。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 良	P16 95% 表土 胴部外面上位 自然釉
		B 23.0				
		D 8.8				
		E 0.8				
246	坏 須恵器	A 13.4	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、手持ちへう削り。	砂粒・礫 灰黄褐色 普通	P17 90% 表土
		B 4.5				
		C 8.9				
247	坏 須恵器	A 12.8	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、手持ちへう削り。	砂粒・礫 暗黄褐色 普通	P18 70% 表土
		B 4.5				
		C 6.5				
第230図 248	壺 須恵器	B (11.1)	胴上半部から頸部にかけての破片。胴上半部は内彎し、頸部は外反する。	胴部外面叩き目。頸部・胴部内面ナデ。	砂粒・雲母 灰色 普通	P13-A 15% 表土
		249	壺 須恵器	B (19.9) C [15.5]	底部から胴部にかけての破片。底部は平底で、胴部は内彎して立ち上がり、上位に最大径をもつ。	胴部外面叩き目。胴部内面ナデ。
250	壺 須恵器	A 18.2	口縁部一部欠損。天井部は低く、緩やかに内彎して口縁部に至る。口縁端部は短く垂下する。つまみは腰高で中央部はわずかに突出する。	口縁部内・外面横ナデ。天井部回転へう削り。	砂粒・礫 灰白色 普通	P19 80% 表土 燧石器の蓋
		B 5.1				
		F 2.2				
		G 1.5				
251	蓋 須恵器	A 16.1	口縁部一部欠損。天井部は低く、内彎しながら口縁部に至る。口縁部はわずかに外反し、端部は短く垂下する。つまみは腰高で中央部はわずかに突出する。	口縁部内・外面横ナデ。天井部回転へう削り。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P20 90% 表土
		B 4.8				
		F 2.6				
		G 1.1				
252	蓋 須恵器	B (3.8)	口縁部欠損。天井部一部欠損。天井部は低く、内彎しながら口縁部に至る。つまみは腰高で中央部はわずかに突出する。	天井部回転へう削り。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P21 70% 表土
		F 2.5				
		G 1.3				

第4節 考 察

中ノ制遺跡の、今回の調査によって検出された遺構は、土坑39基、円形周溝状遺構1基である。出土遺物は、縄文式土器片をはじめ、土師器片、須恵器片が出土している。その他、石製品の石槍、石斧、磨石等、土製品の土罐、土器片錘も出土している。

ここでは、これらの遺構・遺物のうち、割合多く出土している縄文時代の縄文式土器片を取り上げ、その分類を試み、また、時期の判明した縄文時代の上坑についても簡単な論説を試みる。

1 遺物について

縄文時代の土器は7グループに分けることができる。

(1) 第Ⅰ群土器

第Ⅰ群土器は口縁部の形態や施文の特徴にもとづいて2類に分類した。a類は田戸下層式土器、b類は茅山式土器に比定される。

a類 田戸下層式に比定される土器

平口縁で、口縁部から胴部にかけて横位、斜位の細い沈線、さらに沈線と沈線の間の爪形文、半截竹管による連続刺突文などが見られる。県内では、水戸市松原遺跡、大洗町祝町遺跡等に類例がある。

b類 茅山式に比定される土器

斜位の条痕文が見られる。県内では、鹿島町伏見遺跡等に類例がある。

(2) 第Ⅱ群土器

第Ⅱ群土器は施文の特徴から1類だけである。

a類 浮島式に比定される土器

平口縁で、口唇部の押圧、口縁部直下のやや斜位の刻み目文、胴部の横位の半截竹管による連続刺突文や波状貝殻文、斜位の半截竹管による大きな刺突文、横位の大形のいわゆる三角刺突文などが見られる。県内では、桜川村貝ヶ窪遺跡、美浦村興津遺跡等に類例がある。

(3) 第Ⅲ群土器

第Ⅲ群土器は施文の特徴や整形手法にもとづいて2類に分類した。a類は五領ヶ台式土器、b類は阿玉台式土器に比定される。

a類 五領ヶ台式に比定される土器

1種 無文地の土器

平口縁、波状口縁で、無文地に平行や波状の沈線、有節沈線を主体とし、口唇部の細かい刻み目、口辺部の沈線による円圏文や渦巻文、胴部の平行沈線に交互の小さな三角形の彫り込みや上下交互に押し付けた細い竹管による列点文を加えたもの、細い半截竹管のような工具による平行沈線にさらに細い竹管を押し付けた列点文を加え複合文様の形を整えたもの、さらに、平行沈線間の列点文を施したものなどが見られる。

2種 縄文地の土器

平口縁、波状口縁で、大方RL縄文の地文に平行や波状の沈線、有節沈線を主体とし、口唇

部の刻み目文や縄文施文、口辺部の沈線による円圏文や渦巻文、その両側の大きな三叉文的彫刻文や三角的彫刻文など複合文様によって飾られたもの、また、隆起線、沈線、縄文等を主体として施文構成を行ったもの、その他、平口縁で、縄文地に横位の綾織文などが見られる。

県内では、美浦村虚空蔵貝塚、大洗町竹の下遺跡等に類例がある。

b類 阿玉台式に比定される土器

平口縁、波状口縁で、無文地に半截竹管などの有節沈線を主体とし、1列、2列の沈線、隆帯のまわりの沈線などが見られる。県内では、日立市諏訪遺跡、つくば市ト広岡遺跡等に類例がある。

(4) 第IV群土器

第IV群土器は、施文の特徴にもとづいて2類に分類した。a類は称名寺式土器、b類は堀之内式土器に比定される。

a類 称名寺式に比定される土器

太い沈線区画による磨消縄文帯がみられる。

b類 堀之内式に比定される土器

1種 無文地の土器

平口縁で、ヘラ状工具による沈線によって描かれた幾何学的構図を主体とし、さらに、棒状工具による沈線を組み合わせているものなどが見られる。

2種 縄文地の土器

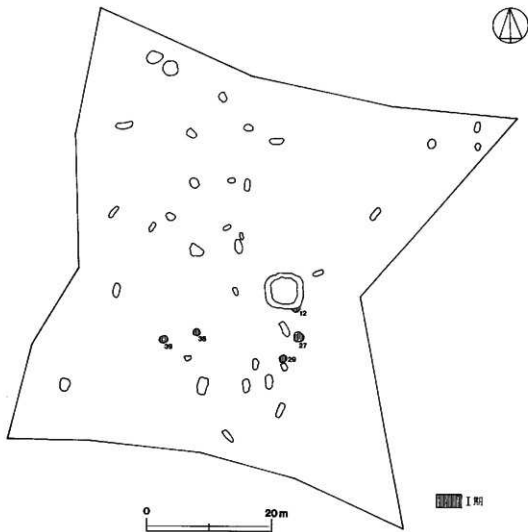
平口縁、波状口縁で、口縁部の棒状工具による横位の沈線、縦位の鋸状貼り付け文、胴部の縄文地に沈線の蕨手文、蛇行文、渦巻文、刻み目を入れた隆帯などが見られる。さらに、平口縁で、縄文だけの粗製土器も見られる。県内では、五霞村冬木A貝塚等に類例がある。

2 遺構について

当調査区から検出された縄文時代の土坑は、堀之内期に比定されるものが5基である。これらの土坑のうち、第39号土坑を除く4基は、平面形が円形で坑底規模が約1.20m、深さ約1.20mとほとんど似かよっていて、断面形がすべて袋状を呈している。

袋状土坑は、縄文時代草創期から平安時代に至るまで見られる土坑のひとつの形態で、縄文時代中期に群集化することによる特徴がある。特に、東北地方から北関東ではその傾向が強いといわれている。

袋状土坑が群集化するのには、一般に阿玉台期から加曾利EI期と考えられているが、当調査区の場合、それよりも少し新しい時期に作られている。機能としては、一般的に貯蔵穴・墓壇・粘土探掘坑等と考えられている。当調査区で検出された土坑からは、前の3つの説を立証するに足



第24図 縄文時代土坑分布図

る資料は検出されなかったが、形態から考えて貯蔵穴と考えるのが自然と思われる。現在でも、農家では、冬季の食物保存に長径1～2m、深さ1m程の穴を掘り、食物を内部に入れ、藁等をかぶせ、その上に土をのせて蓋をして貯蔵することが行われている。

また、時期を確定することのできない土坑のうち、平面形が隅丸長方形を呈するものが17基検出されている。規模は、長径が1.35mから3.40m、短径が0.79mから1.51mで、いずれも覆土がロームブロック、ローム粒子混じりの人為堆積の様相を示し、出土遺物もほとんどない。以上のことから、これらの土坑は、墓塚の可能性が十分考えられ、ある時期には、当調査区は墓域の一部として使用されていたものと考えられる。

最後に、これらの遺構・遺物から、縄文時代には、今回調査した台地上に、縄文時代早期から後期にわたってかなりの長期間、断続的ではあるが、人々の生活が営まれていたことが考えられる。

参考文献

- (1) 西村正衛『石器時代における利根川下流域の研究-貝塚を中心として』早稲田大学出版部 1984 年
- (2) 永峯光一編『縄文土器大成 2 中期』講談社 1981 年
- (3) 野口義彦編『縄文土器大成 3 後期』講談社 1981 年
- (4) 小林達雄編『縄文土器大観 2・3・4』小学館 1988 年

第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当調査区の南端部から、竪穴住居跡が1軒検出されている。

第1号住居跡（第26図）

位置 調査区の南端部，C3a区を中心に確認されている。

規模と平面形 南側が調査エリア外へ延びているため確認できないが，長径3.90m，短径3.70mの円形を呈するものと推定される。

長径方向 N-26°-W

壁 南壁は調査区外へ延びているため確認できないが，他の壁高は10～12cmで，外傾して立ち上がっている。

床 床の一部が攪乱を受けているが，遺存部は平坦で軟らかい。

ピット 5か所（P₁～P₅）検出されている。P₁～P₅は，径20～31cmの円形を呈し，深さ12～18cm，規模や配列から主柱穴と考えられる。

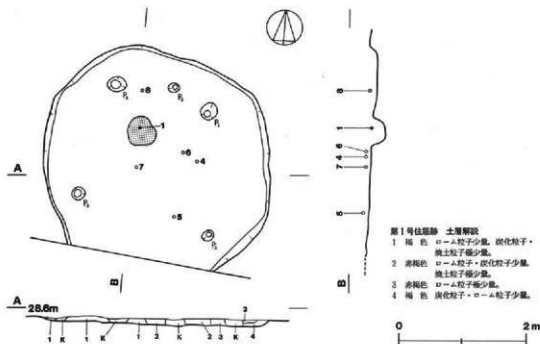
炉 北西部の中程に検出されている。平面形は，径45cmの円形を呈し，床を約26cm掘り窪め，周りに胴部下位を欠損する深鉢形土器を埋め込んだ土器囲い炉である。炉床は，熱を受けて焼土化している。また，土器の内面も熱を受けて赤変し，少し剥落している。

覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土から縄文式土器片や土製品が出土している。1の深鉢形土器片は，北西部の中程の床面に埋められ，炉に使われた状態で出土している。4～6の土器片は南部の中程の覆土下層から，2・3の土器片は覆土から出土している。

所見 本跡は，耕作や，トレンチャーによる攪乱がかなり入っている状態で確認されたが，遺構の形態や遺物等から縄文時代中期後葉の住居跡と思われる。

第28・29図は，第1号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。9～27は口縁部片で，口縁部無文帯を微隆起線で区画し，以下に縄文を施文している。9・12・19・21・23・24・25は波状口縁部片で，曲線的モチーフが認められ，9・21・23には橋伏把手が付く。28～30は胴部片で，単節LRの回転縄文を地文に，2条の微隆起線で区画し，その間を磨消している。31・32は胴部片で，回転縄文を地文に，曲線的沈線区画による磨消帯を設けている。33は胴部片で，微隆起線による舌状の区画に沿って細い沈線が施され，無節Lの縄文が施されている。



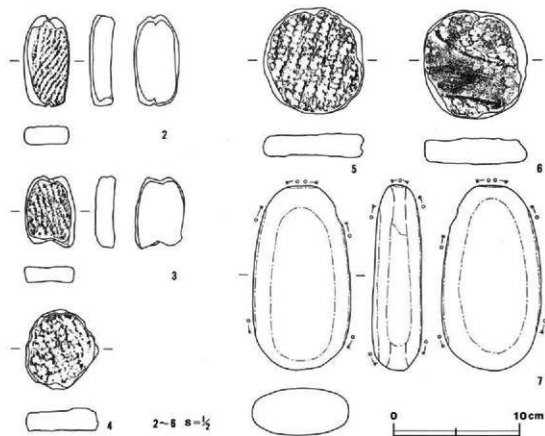
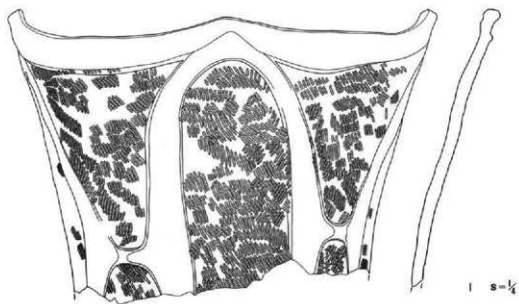
第26図 第1号住居跡実測・遺物出土位置図

第1号住居跡出土遺物観察表

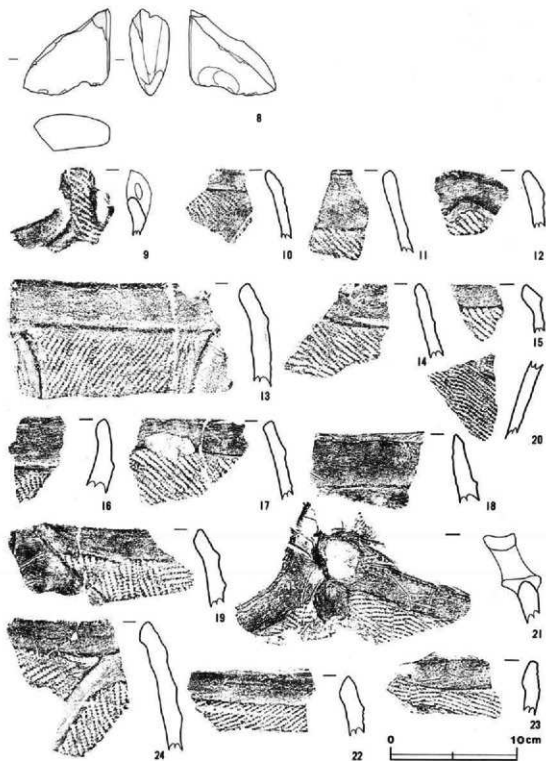
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	粘土・色調・焼成	備考
第27図 1	陶土器 蓋形土器	A 45.1 B (31.4)	底部及び胴下半部欠損。体部はやや外反して立ち上がる。口縁部は4単位の波状口縁を呈している。文様は微隆起線の区画によって4単位の「H」字文を構成し、その他の部分に単筋RLの縄文を充満している。それぞれの「H」字文の中央に小突起を有する。炭化物が付着している。	砂粒・長石 橙色 普通	P1 50% 炉に使用

図版番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第27図 2	土器片断	4.8	2.4	1.1	17.1	- 覆土	DP1
3	土器片断	(3.8)	2.7	0.9	(12.4)	- 覆土	DP2
4	土器片断	4.3	3.9	1.2	19.6	- 覆土下層	DP3
5	土器片断	5.7	5.3	1.2	38.7	- 覆土下層	DP4
6	土器片断	5.8	5.4	1.4	51.2	- 覆土下層	DP5

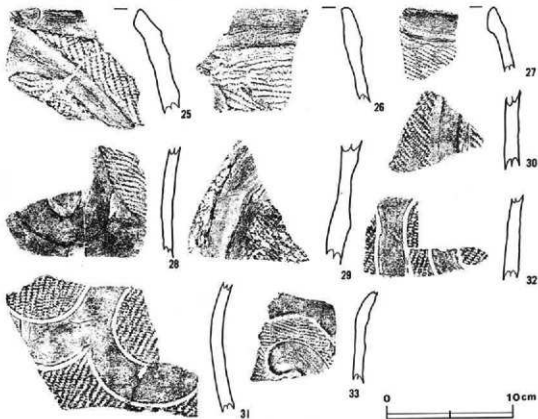
図版番号	器種	石質	法量				出土地点	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第27図 7	磨石	砂岩	14.9	8.0	4.0	668.6	中央部覆土下層	Q1
第28図 8	磨石片断	角閃～云母	(4.6)	(4.7)	(2.2)	(42.7)	北部覆土下層	Q2



第 27 图 第 1 号住居跡出土遺物実測・拓影图



第28图 第1号住居跡出土遺物実測・拓影図



第29図 第1号住居跡出土遺物実測・拓影図

2 土坑

当調査区から、土坑は11基検出されている。これらの土坑のうち、時期を判断できたものは縄文時代の土坑1基だけである。他の土坑については、ほとんど遺物がなく、陶器片が出土している土坑もあるが、流れ込みと考えられるので、表にして一括掲載し、備考欄にその旨を記入した。なお、時期を判断できた第9号土坑については、文章で解説した。

第9号土坑 (第30図)

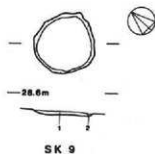
位置 調査区の北西部、A15区に確認されている。

規模と平面形 長径1.06m、短径0.99mの円形を呈している。

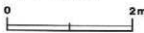
長径方向 N-74°-E

壁面 壁高は約6cmで、外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。



第9号土坑 土層解説
1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量。
2 褐色 ローム粒子極少量。



第30図 第9号土坑実測図

覆土 ロームブロック，ローム粒子を含む褐色土及び暗褐色土で、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土から縄文時代の深鉢形土器の破片が出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物等から縄文時代後期前葉の土坑であると考えられる。

第31図は、第9号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。34は胴部片で単節LRの横位回転縄文に棒状工具によるV字状の沈線を施している。35・36は胴部片で無文地に棒状工具による沈線を施している。



第31図 第9号土坑出土遺物実測・拓影図

表3 小山遺跡土坑一覽表

番号	位置	瓦葺方向	平面形	規模			地層	断面	覆土	出土遺物	備考
				長さ (m)	幅 (m)	高さ (m)					
1	A6	N-50°E	扇形	2.40	2.81	24	外版	凸凹	自然		
2	A6	N-50°E	扇形	0.68	0.53	16	凸凹	凸凹	不明		SD1と重複
3	A6	N-15°W	扇形	0.50	0.80	18	外版	平埒	自然	陶器片2点	
4	A6	N-20°W	不整形	1.67	0.85	13	外版	平埒	内版		
5	A6	N 17° E	不整形	1.78	1.05	44	外版	凹状	人為		
6	A6	N-20°W	扇形	1.04	0.84	17	内版	凹状	自然		
7	A6	N-60°E	不 明	1.43	1.11	30	外版	凹状	人為		
9	A6	N 74° E	円 形	1.06	0.59	5	外版	平埒	人為	縄文式土器片11点	縄文時代後期前葉
10	A6	N-24°W	扇形	1.32	1.09	23	外版	平埒	自然		
11	A2b	N-20°W	扇形	1.08	0.85	19	内版	凸凹	自然		
12	A1g	N 47° W	円 形	0.58	0.55	37	外版	平埒	不明		SD1と重複

3 溝

当調査区から、溝は2条検出されているが、ほとんど出土遺物がない。遺物の出土している第1号溝でも、覆土上層からの出土であり、流れ込みと考えられるので、構築時期や性格をとらえることはできない。

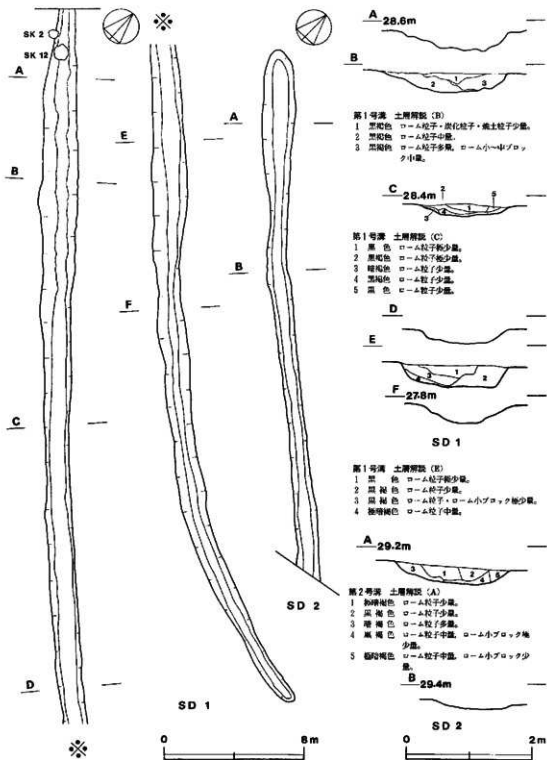
第1号溝 (第32図)

位置 調査区の中央から北西部、A1・B1・B2・B3区にかけて確認されている。本跡の北西端は調査区外へ延びている。

重複関係 本跡は、A1g区で第2号土坑に、A1g7区で第12号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 全長は約80.20mで、上幅0.72～2.24m、下幅0.27～0.80m、深さ20～36cmである。底面は凸凹しており、断面形は皿状を呈している。

方向 B3i2区から西方向 (N-85°-W) へ曲線的に延び、B2h8区で北西方向 (N-47°-W) へ向きを変え直線的に延びている。



第32図 第1・2号溝実測図

覆土 自然堆積。

遺物 覆土から、流れ込みと思われる十師器片、須恵器片、陶器片が出土している。

所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、構築時期及び性格は不明である。

第2号溝 (第32図)

位置 調査区の南東部、C3区に確認されている。本跡の南東端は調査区外へ延びている。

規模と形状 全長は30.15mで、上幅0.92～1.08m、下幅0.37～0.90m、深さ8～37cmである。底面は凸凹しており、断面形は皿状を呈している。

方向 C3b区から南東方向(N-124°-E)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

所見 本跡は、出土遺物がなく構築時期及び性格は不明である。

4 遺構外出土遺物

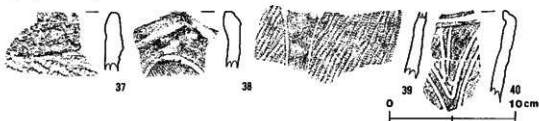
当調査区からは、遺構に伴って出土した遺物のほかに、試掘の際に縄文式土器片が出土している。これらのうち、時期等が判断できる4点の拓影図を掲載して解説する。

a 加曾利EIV式期に比定される土器

37は口縁部片で、口縁部文様帯を磨消し、胴部に回転縄文を施し、口縁部と胴部を微隆起線で区画している。38は口縁部片で、口縁部文様帯を磨消し、以下に逆U字状の区画を沈線で描き、単節LRの縄文を充填している。39は胴部片で、地文に単節RLの斜位回転縄文を施し、縦位の沈線区画による磨消手法が見られる。

b 堀之内式期に比定される土器

40は口縁部片で口唇部には沈線を1条巡らし、胴部には単節LRの縄文を地文にV字状の沈線を施している。



第33図 遺構外出土遺物実例・拓影図

第3節 考 察

当調査区からは、縄文時代の竪穴住居跡1軒、土坑11基、溝2条が検出され、出土遺物は極少量である。このように、わずかな資料で考察することには無理があるが、竪穴住居跡と縄文式土器について簡単に記述してみたい。

1 竪穴住居跡について

小山遺跡の調査区から検出された縄文時代の竪穴住居跡は1軒である。本跡は、出土遺物から加曾利EIV式期に比定される。平面形は円形を呈し、直径が約4mの規模の住居跡で、中央部から北よりに土器甕い炉を有している。利用されていた土器は人形の深鉢形土器の胴上半分を切断した土器で、床を約26cm掘り込んで埋設している。本跡は、調査区の南端部に検出されているので、集落については、さらに調査区南側に形成されていると考えられる。この時期の集落は、那珂川流域では水戸市砂川遺跡に類例がある。

2 縄文式土器について

ここでは、当調査区の遺構から出土した縄文式土器片の特徴について述べる。

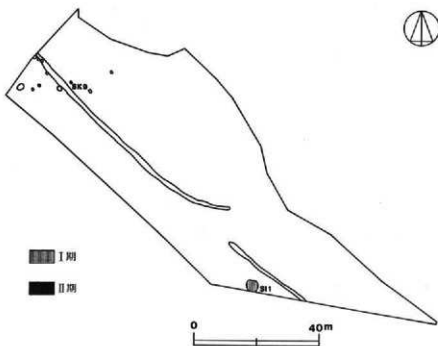
I期

第1号住居跡出土の土器は、加曾利EIV式期に比定される土器群で、口縁部文様帯を欠損し、磨消縄文帯が発達している。微隆起線文や細い沈線文によって区画された磨消手法が見られる。県内では、水戸市砂川遺跡、水戸市金洗沢遺跡等に類例がある。

II期

堀之内式期に比定される土器群で、無文又は縄文地上に沈線文を施している。この時期の土坑も検出されているが、1基しかなく、谷津を隔てた中ノ割遺跡に同時期の袋状土坑が数基検出されているので、中ノ割遺跡との関連性も考えられる。県内では、五覆村冬木A貝塚等に類例がある。

最後に、わずかな資料からではあるが、小山遺跡の所在する台地上には、縄文時代中期後葉から縄文時代後期前葉にかけて人々の生活が営まれていたものと思われる。集落の広がりには、調査区の南側に形成されているものと考えられる。



第 34 図 縄文時代住居跡・土坑分布図

参考文献

- (1) 永峯光一編『縄文土器大成 2 中期』講談社 1981 年
- (2) 野口義彦編『縄文土器大成 3 後期』講談社 1981 年
- (3) 小林達雄編『縄文土器大観 2・3』小学館 1988 年
- (4) 茨城県教育財団「砂川遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第 16 集』1982 年

第6章 諏訪前遺跡

第1節 遺跡の概要

諏訪前遺跡は、水戸市の南東部、東茨城台地南東端の標高28 m前後の小さな舌状台地上に立地する奈良・平安時代の遺跡である。調査区は南北に約45 m、東西に約103 m、面積3,467 m²で、現況は山林である。

今回の調査によって検出された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡5軒、竪穴遺構2基、土坑10基、溝2条である。

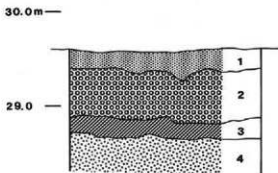
奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡5軒、竪穴遺構2基で、住居跡は調査区の中央の谷を挟んで西部に4軒、東部に1軒検出され、いずれも竈が北西壁に付設されている。土坑10基、溝2条については、時期、性格等は不明である。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20 cm)に7箱出土している。奈良・平安時代の遺物は、土師器の坏、高台付坏、甕、甗、須恵器の坏、高台付坏、盤、蓋、甕、壺、土製品の紡錘車、球状土錘、石製品の石皿、砥石、磨石、鉄製品の鎌である。

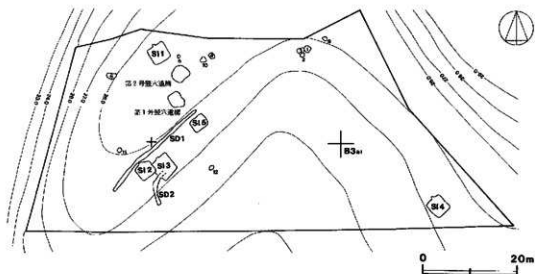
第2節 基本層序

第35図は、当調査区の基本層序を観察するために設けたテストピットの土層図である。場所は、調査区西側台地上のA1j₁区を選定した。

第1層は表土で、炭化粒子を含む褐色土で、厚さは20～30 cmである。第2層は褐色のローム層で50～55 cmの厚さに堆積している。本層の上面が「遺構確認面」にあたる。第3層は明褐色の鹿沼層で、15～20 cmの厚さに堆積している。第4層は褐色で、粘性・締まりとも強い粘土層である。



第35図 基本土層図



第36図 諏訪前遺跡全体図

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当調査区からは、竪穴住居跡が5軒検出されている。これらは、奈良・平安時代の住居跡で、調査区西部の台地上から4軒、東部の台地上から1軒検出されている。平面形は、ほぼ方形を呈し、すべて竈が付設されている。遺物は、8世紀から9世紀前半を中心とする土師器の坏、甕や須恵器の坏、高台付坏、蓋、盤が出土している。

以下、検出された住居跡の特徴や主な出土遺物について記載していくことにする。

第1号住居跡（第37図）

位置 調査区の北西部、A2f区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.08m、短軸3.77mの方形を呈している。

主軸方向 N-45°W

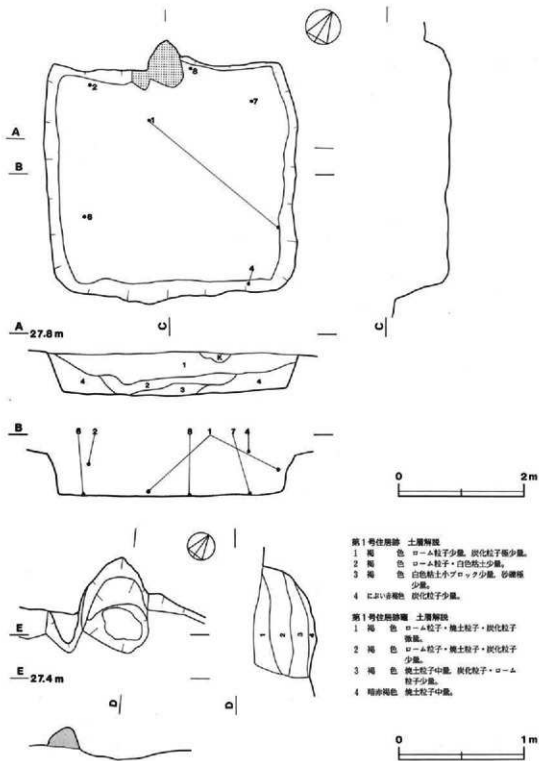
壁 壁高は40～76cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 検出されない。

竈 北西壁中央の壁を約47cm壁外へ掘り込み、小雑まじりの山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ78cm、幅106cmである。天井部は崩落し、袖部の一部がわずかに遺存している。火床は、床面が約7cm掘り窪められており、熱をうけて赤変硬化している。煙道は、火床から緩やかに外傾し、中程から急傾斜で立ち上がっている。

覆土 自然堆積。



第37図 第1号住居跡・竈実測・遺物出土位置図

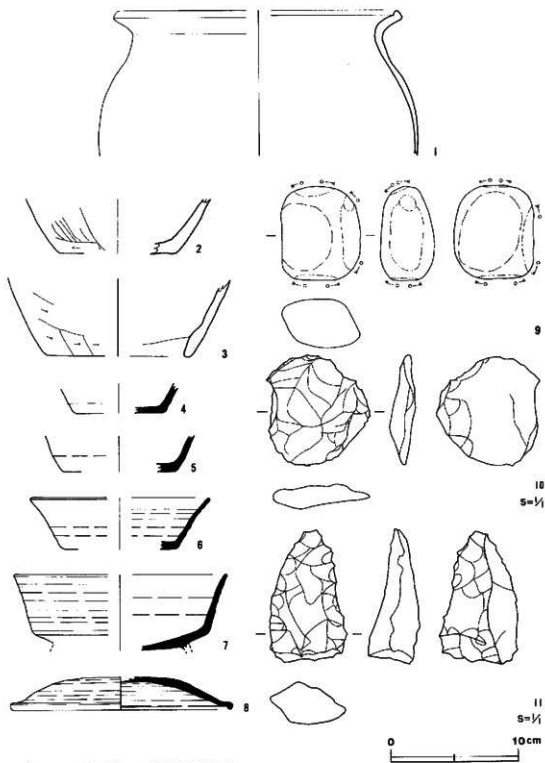
遺物 覆土の下層・中層から、土師器片(甕2, 甕1), 土師器の細片(159点), 須恵器片(坏3, 高台付坏1, 蓋1), 須恵器の細片(48点), 石(29点), 鉄滓(2点)等が出土している。1の土師器の甕は中央から北西寄りの覆土下層及び東コーナー付近覆土中層から, 5の須恵器の坏は甕内から, 6の須恵器の坏は南部中程の床面から, 7の須恵器の高台付坏は北コーナー付近の覆土下層から, 8の須恵器の蓋は甕の北東際の床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は, 遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第38図 1	甕 土師器	A [22.2]	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部を上方につまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石 にふい赤褐色普通	P1 5% 中央から北西寄り覆土下層及び東コーナー付近覆土中層
		B (11.7)				
2	甕 土師器	B (4.4)	底部から胴部下端にかけての破片。底部は平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下位横位のへら削り。縦位のへらナデ。胴部内面横ナデ。底部に木製痕。	砂粒・石英・長石 褐色普通	P2 5% 西コーナー付近覆土中層
		C [9.2]				
3	甕 土師器	B (6.2)	胴部片。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下位横位のへら削り。胴部内面下位横ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にふい赤褐色普通	P3 5% 覆土
		C [11.4]				
4	坏 須恵器	B (2.3)	底部から体部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部内面横ナデ。底部回転へら削り後ナデ。	砂粒・長石 灰色普通	P4 15% 東コーナー壁際覆土上層
		C [7.0]				
5	坏 須恵器	B (2.9)	底部から体部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底部回転へら削り。	砂粒・長石 灰色普通	P5 10% 甕内
		C [9.0]				
6	坏 須恵器	A [14.2]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へら削り。	砂粒・長石 灰色普通	P6 15% 南西部中程床面
		B (4.1)				
		C [9.2]				
7	高台付坏 須恵器	A [17.0]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に坐る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へら削り。	砂粒・長石 灰色普通	P7 40% 北コーナー付近覆土下層
		B (6.1)				
8	蓋 須恵器	A 17.3	つまみ欠損。大井部は低く平坦で、丸味をもって口縁部に至る。口縁部は器厚を越じ外反した後、端部は短く屈曲する。	口縁部内・外面横ナデ。天井部回転へら削り。	砂粒・雲母・長石 灰黄色普通	P8 90% 甕北東際床面
		B (2.6)				

図版番号	器種	石質	法量				出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第38図 9	磨石	河成岩	7.6	5.4	4.3	314.4	東部覆土	Q1
10	削片	チャート	2.6	2.7	0.7	4.7	南部覆土	Q2
11	削片	チャート	3.4	2.0	1.4	6.7	南部覆土	Q3



第38图 第1号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡（第39図）

位置 調査区の南西部、B1b区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東コーナー付近は、第3号住居跡の西コーナー付近を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.58 m、短軸3.31 mの方形を呈している。

主軸方向 N-36°-W

壁 壁高は30～51 cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 4か所（P₁～P₄）検出されている。P₁～P₄は、径16～30 cmの円形を呈し、深さ14～20 cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

竈 北西壁中央の壁を約68 cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ184 cm、幅198 cmである。天井部は崩落し、袖部の一部がわずかに遺存している。火床は、床面が約11 cm掘り窪められており、熱をうけて赤変硬化している。煙道は、火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

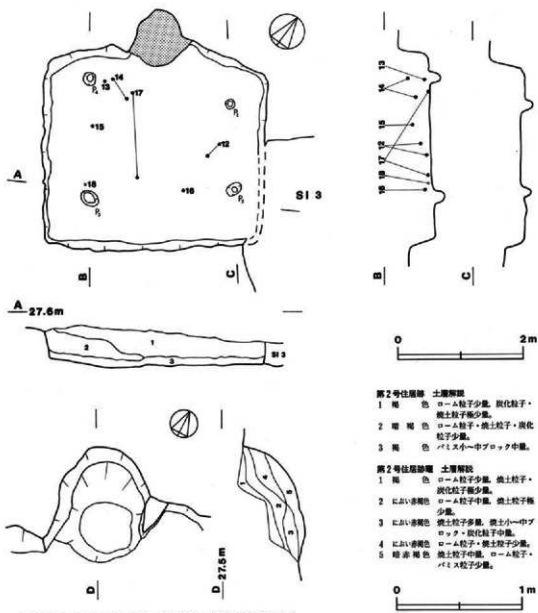
覆土 自然堆積。

遺物 覆土の下層・中層から土師器片（壺2）、土師器の細片（41点）、須恵器片（坏2、高台付坏1、盤1）、須恵器の細片（24点）、鉄製品（1点）等が出土している。12の上師器の甕は東部中程の覆土下層から、13の土師器の甕は西部中程の覆土下層から、14の須恵器の坏は西部中程の覆土中層から、15の須恵器の坏は西部中程の覆土中層から、16の須恵器の高台付坏は東部中程の覆土下層から、17の須恵器の盤は西部中程及び中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。18の鉄鏝は南部中程の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、重複関係から第3号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

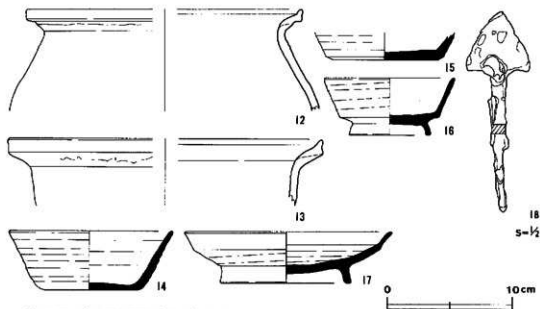
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	子法の特徴	粘土・色調・装束	備考
第40図 12	甕 土師器	A [22.0] B (5.4)	胴部から口縁部にかけての破片。 張りのある胴部で、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部・頸部及び胴部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P9 10% 東部中程覆土 下層
13	甕 土師器	A [25.0] B (5.4)	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は外反し、口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 明褐色 普通	P10 5% 西部中程覆土 下層
14	坏 須恵器	A [13.0] B 4.8 C 7.6	底部から口縁部にかけての破片。 底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 体部下端及び底部回転へう削り。	砂粒・長石 灰白色 普通	P11 30% 西部中程覆土 中層



第39図 第2号住居跡・竈実測・遺物出土位置図

- 第2号住居跡 土層解説
- 1 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子極少量。
 - 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
 - 3 褐色 パイスター中ブロック中層。
- 第2号住居跡 土層解説
- 1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子極少量。
 - 2 におい褐色 ローム粒子中層、焼土粒子極少量。
 - 3 におい褐色 焼土粒子多量、ピイスター中ブロック・炭化粒子中層。
 - 4 におい褐色 ローム粒子・焼土粒子少量。
 - 5 暗赤褐色 焼土粒子中層、ローム粒子・パイスター少量。

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 15	環	B (2.2)	底部から体部にかけての破片。 底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒 黄灰色 普通	P12 30% 西部中程覆土中層
	須恵器	C [8.4]				
16	高台付須恵器	A 10.4	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台部は畳付きが平坦で「ハ」の字状に開き。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ、底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・塵・長石 灰色 普通	P13 80% 東部中程覆土下層
		B 4.6				
		D 6.5				
		E 0.9				



第40図 第2号住居跡出土物実測図

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考	
第40図 17	壺 須恵器	A 16.5 B 4.5 D 10.2 E 1.4	体部から口縁部にかけて 部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は丸底で、体部は大きく外傾し、口縁部は体部からやや外反して立ち上がる。	11線部及び体部内・外面横ナデ。底部同様に削り。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P14 70% 西部中層及び 中央部覆土下層	
図版番号	器種	法 量				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第40図18	鉄 鏃	10.6	3.4	0.5	10.6	南部中層覆土下層	M1

第3号住居跡 (第41図)

位置 調査区の南西部、B2b1区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西コーナー付近は第2号住居跡の東コーナー付近に、南西壁は第2号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.45 m、短軸4.37 mの方形を呈している。

主軸方向 N-44°-W

壁 壁高は17~75 cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 4か所 (P1~P4) 検出されている。P1~P4は、径20~24 cmの円形を呈し、深さ24~35 cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

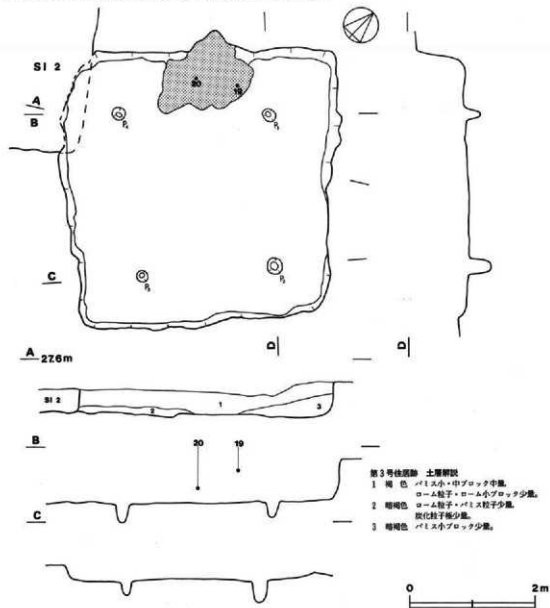
竈 北西壁中央の壁を約33 cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ129 cm、幅143 cmである。天井部は崩落しているが、袖部が一部遺存している。火床は、床面が

約2cm掘り窪められており、熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。煙道は、火床から急角度で外傾して立ち上がっている。

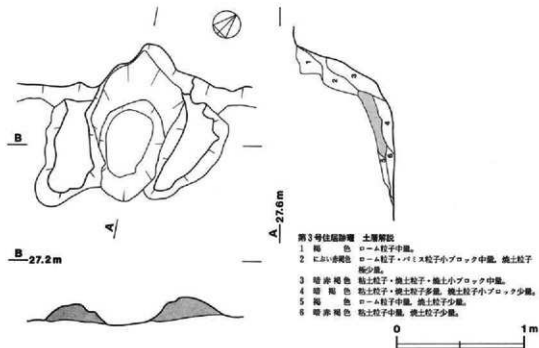
覆土 自然堆積。

遺物 覆土から土師器の細片(38点)、須恵器片(坏1, 蓋1)、須恵器の細片(4点)等が出土している。19の須恵器の坏と20の須恵器の蓋は室内から出土している。

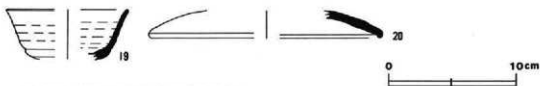
所見 本跡は、重複関係から第2号住居跡及び第2号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第41図 第3号住居跡実測・遺物出土位置図



第42図 第3号住居跡実測図



第43図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第43図 19	須恵器	A [9.8]	体部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P15 壺内
		B (4.0)	体部は外傾して立ち上がり、口			
		C [6.2]	縁部はわずかに外反する。			
20	蓋 須恵器	A [18.2]	口縁部片。口縁部はわずかに内	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P16 壺内
		B (2.2)	傾し、端部は短く垂下する。			

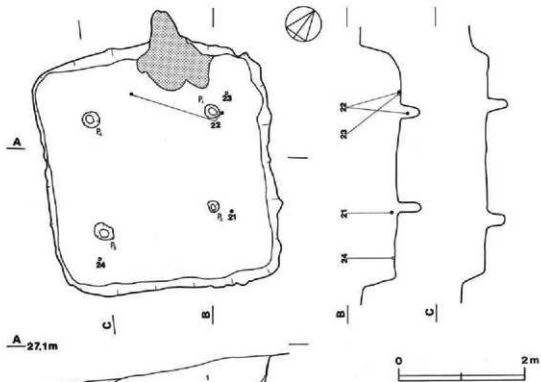
第4号住居跡 (第44図)

位置 調査区の南東部、B3d₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸 3.93 m, 短軸 3.56 m の長方形を呈している。

主軸方向 N-41°-W

壁 壁高は 19~54 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。



第4号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量。
- 2 褐色 白色粘土粒子・小ブロック中量、ローム粒子・パリス粒子少量。
- 3 褐色 白色粘土小ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子極少量。

第4号住居跡 土層解説

- 1 に濃い赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子極少量。
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・山砂・焼土小ブロック・炭化粒子少量。
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子中量、山砂・焼土小ブロック少量。
- 4 に濃い赤褐色 焼土小ブロック多量、山砂・焼土粒子中量、炭化粒子少量。
- 5 褐色 ローム粒子・山砂・炭化粒子・焼土粒子少量。
- 6 暗褐色褐色 焼土粒子多量、山砂中量、炭化粒子少量。
- 7 に濃い赤褐色 山砂・焼土粒子少量、焼土粒子極少量。



第44図 第4号住居跡・竈突測・遺物出土位置図

床 平坦で、踏み固められ硬い。

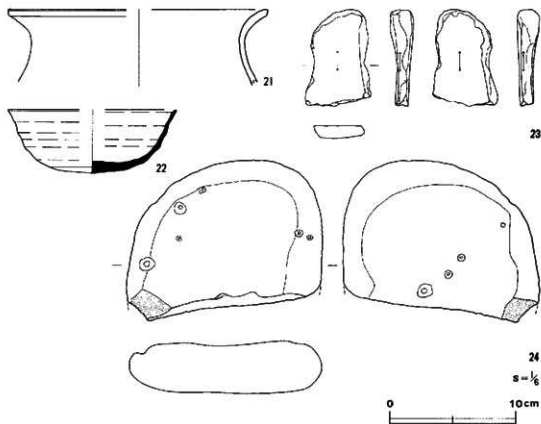
ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁~P₄は、径15~35cmの円形を呈し、深さ30~40cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。

竈 北西壁中央の壁を約48cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ128cm、幅126cmである。天井部は崩落しているが、両袖部は遺存している。火床は、床面が約6cm掘り窪められているが、あまり焼け締まっていない。煙道は、火床から緩やかに外傾し、中程から急傾斜で立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土の下層・中層から土師器片(甕1)、土師器の細片(70点)、須恵器片(坏1)、須恵器の細片(9点)、灰釉陶器の細片(1点)、瓦片(1点)、炭化材(1点)、石製品(2点)等が出土している。21の土師器の甕は東部中程の覆土中層から、22の須恵器の坏は北部中程及び西部中程の覆土上層からそれぞれ出土している。23の砥石は北コーナー付近の床面から、24の石皿は南コーナー付近の床面から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から奈良時代の住居跡と考えられる。



第45図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・地味	備考
第45図 21	甕 上縁器	A [20.6]	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口唇部を外上方にわずかにつまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・ 長石・蛭母 にふい黄棕色 普通	P17 5% 東部中程覆土 中層
		B (6.2)				
22	杯 須恵器	A [13.3]	体部から口縁部にかけて一部欠損。 底部は丸底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 体部下端及び底部回転へう割り。	砂粒 灰白色 良	P18 50% 北部中程及び 西部中程覆土 下層
		B 5.1				
		C [5.2]				

図版番号	器種	石質	法量				出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第46図23	甕石	頁岩	(7.8)	(5.2)	1.9	(85.7)	北コーナー付近床面	Q4
24	石皿	砂岩	(25.7)	(34.0)	(8.4)	(9750.0)	南コーナー付近床面	Q5

第5号住居跡 (第46図)

位置 調査区のおぼ中央部、A2is区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.52m、短軸3.00mの長方形を呈している。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高は9～34cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 検出されない。

竈 北西壁中程に位置し、壁外に掘り込まないで、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ82cm、幅69cmである。天井部は崩落し、袖部の一部がわずかに遺存している。火床は、床面が約7cm掘り窪められているが、あまり焼け締まっていない。煙道は、火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

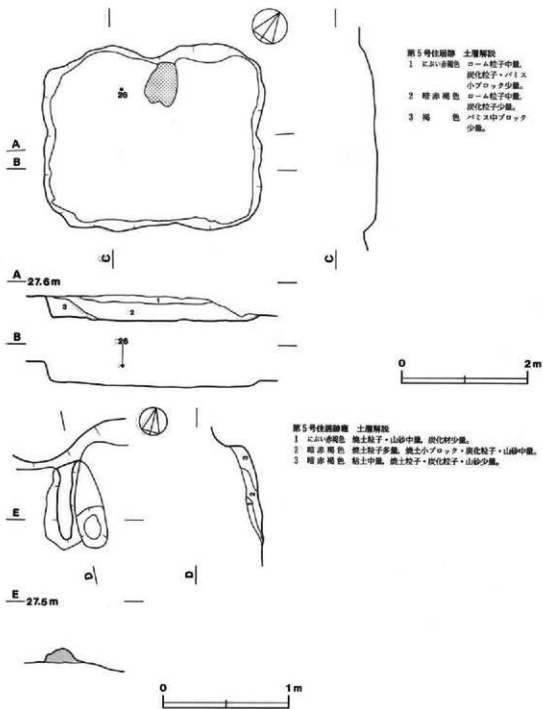
覆土 自然堆積。

遺物 覆土の下層・中層から土師器片(甕1)、土師器の細片(31点)、須恵器片(蓋1)、須恵器の細片(12点)等が出土している。25の土師器の甕は西部の覆土下層から、26の須恵器の蓋は西部中程の覆土中層からそれぞれ出土している。

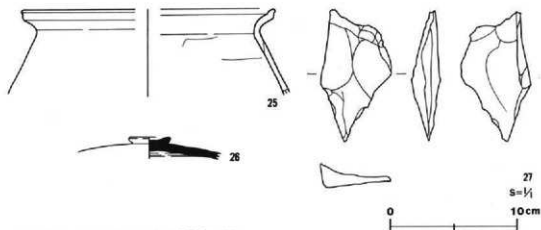
所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第5号住居跡出土物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・地味	備考
第47図 25	甕 土師器	A [19.9]	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部は外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・ 蛭母・にふい 褐色 普通	P19 5% 西部覆土
		B (7.0)				



第46図 第5号住居跡・確定測・遺物出土位置図



第47図 第5号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第47図 26	須磨器	B (1.8) F 3.2 G 0.6	つまみから天上部にかけての破片。天上部は低く平坦。つまみは環状で低く、中央部がへこむ。	天上部回転へう削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P20 10% 西部中層土 中層

図版番号	器種	石質	法量				出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第47図27	削片	チャート	1.9	3.5	0.6	2.6	南部覆土	Q5

表4 諏訪前遺跡竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		深さ	ピット	貯・埋	土質	出土遺物	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(m)						
1	A2h	N-45°-W	方形	4.62×3.77	60-75	平坦	-	埋	自然	土層部片155点(燧), 須磨器片破片(杯, 蓋, 釜, 高台付杯)	
2	B1h	N-30°-W	方形	3.58×3.21	30-51	平坦	4	埋	自然	土層部片41点(燧), 須磨器片24点(杯, 蓋, 釜)	SI-3上遺物
3	B2h	N-45°-W	方形	4.45×4.37	17-75	平坦	4	埋	自然	土層部片28点(燧), 須磨器片4点(杯)	SI-2, SD-2上遺物
4	B3h	N-41°-W	長方形	3.93×3.36	19-54	平坦	4	埋	自然	土層部片70点(燧), 須磨器片9点(杯, 釜), 灰物陶器片1点(燧), 土製品1点(CE), 炭化材1点	
5	A2h	N-32°-W	長方形	3.82×3.00	3-34	平坦	-	埋	自然	土層部片31点(燧), 須磨器片12点(杯, 蓋, 釜)	

2 竪穴遺構

当初, 土坑として調査を進めてきたもののうち, 規模は竪穴住居跡とほぼ同程度であるが, 竪やピットがなく, 竪穴住居跡とするには問題と思われるもの2基を, 竪穴遺構として取り扱った。

以下, 検出された竪穴遺構の特徴や主な出土物について記載していくことにする。

第1号竪穴遺構 (第48図)

位置 調査区の北西部, A2h区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸 3.10 m, 短軸 2.70 m の長方形を呈している。

長軸方向 N-32°-W

壁 壁高は 26 ~ 53 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層から土師器片 (甕 3, 高台付坏 1), 土師器の細片 (79 点), 須恵器片 (長頸壺 1), 須恵器の細片 (21 点) が出土している。28 の土師器の甕は中央部及び西部中程の覆土下層から, 30 の土師器の甕は中央部の覆上下層から, 31 の土師器の甕は東部中程の覆土下層から, 32 の土師器の高台付坏は東部中程の覆土下層から, 33 の須恵器の長頸壺は南コーナー付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は, 遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の堅穴遺構と考えられる。

第 2 号堅穴遺構 (第 48 図)

位置 調査区の北西部, A2g₂ 区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸 3.57 m, 短軸 3.30 m の不整形を呈している。

長軸方向 N-37°-E

壁 壁高は 55 ~ 64 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬く締まっている。

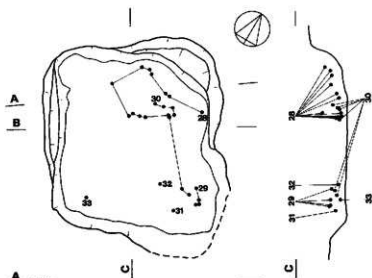
覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土下層から土師器細片 (65 点), 須恵器片 (高台付坏 1), 須恵器の細片 (35 点) が出土している。34 の須恵器の高台付坏は北西壁中央付近の覆土下層から出土している。

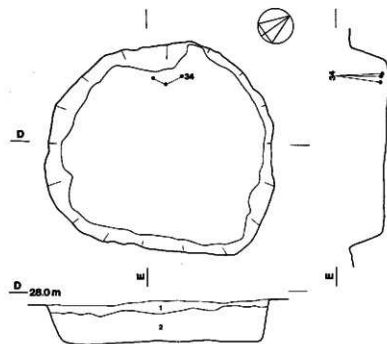
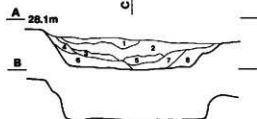
所見 本跡は, 遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の堅穴遺構と考えられる。

第 1 号堅穴遺構出土遺物観察表

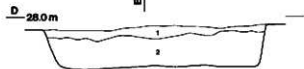
図版番号	器種	注城 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土色・色・地味	備考
第 49 図 28	甕 土師器	A 19.8	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部はくびれる。口縁部は外反し、口唇部は直立する。	胴部・頸部及び口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰黄褐色 普通	P22A 45% 中央部及び西部中程覆土下層
		B (15.9)				
29	甕 土師器	B (9.0)	底部から胴上半部にかけての破片。底部は平底で、胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 灰黄褐色 普通	P22B 25% 東部中程覆土中層
		C 8.9				
30	甕 土師器	A [22.0]	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部は「く」の字状に反曲する。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部・頸部及び胴部内・外面横ナデ。胴部下半部位のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・空母 褐色 普通	P23 30% 中央部覆土下層
		B (15.9)				



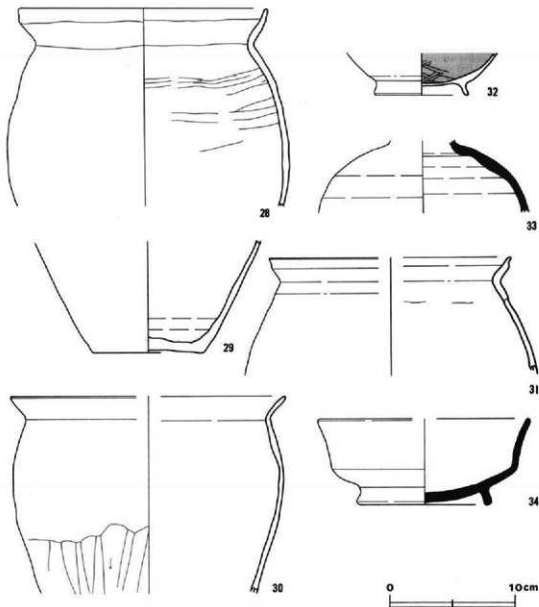
- 第1号壑穴遺構 土層解説
- 1 紺 褐色 ローム粒子中量。ローム小-中ブロック少量。焼土粒子極少量。
 - 2 黒 褐色 ローム粒子多量。ローム小ブロック中量。焼土粒子少量。
 - 3 暗 褐色 ローム粒子中量。ローム小ブロック少量。
 - 4 褐色 ローム粒子中量。焼土粒子少量。
 - 5 暗 褐色 ローム小ブロック・焼土粒子少量。
 - 6 褐色 ローム小ブロック・焼土粒子少量。
 - 7 濃い赤褐色 炭化粒子・焼土ブロック少量。
 - 8 褐色 ローム中量。



- 第2号壑穴遺構 土層解説
- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量。焼土少量。
 - 2 褐色 炭化粒子・焼土粒子極少量。



第48図 第1・2号壑穴遺構実測・出土遺物位置図



第49図 第1・2号竪穴遺構出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 31	甕 土師器	A [19.4] B (9.5)	胴上半部から口縁部にかけての破片。張りのある胴部で、頸部は「く」の字状に屈曲し口縁部は外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部・頸部及び胴部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母 橙色 普通	P24 5% 東部中程覆土 下層
32	高台付平 土師器	B (3.4) D [7.4] E (1.0)	高台部から体部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転へラ削り。体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き後、黒色処理。	砂粒・長石・ 雲母 灰白色 普通	P25 40% 東部中程覆土 下層

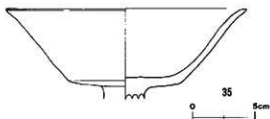
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第49図 33	反頸壺 須恵器	B (5.8)	胴上半部片。胴上半分は内彎している。	胴部上位及び内面横ナデ。胴部中位回転ヘラ削り。	砂粒・雜 灰色 普通	P26 10% 南コーナー付 近覆土下層

第2号竪穴遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第49図 54	高台付耳 須恵器	A [16.8] B (7.0) D 14.0 E 1.4	体部から口縁部にかけて 部欠損。高台部は「へ」の字状に開き。底部は丸底で、体部はやや外反して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・バミス 灰色 普通	P27 60% 北西寄中央村 近覆土下層

3 土坑

当調査区からは、北部を中心に土坑が10基検出されている。これらの土坑からは土師器片・須恵器片が極少量出土している。しかし、いずれも覆土上層からの出土であり、流れ込みと考えられる。その他、



第50図 第1号土坑出土遺物実測図

特筆すべき事柄は有していないことから、一覧表に記載した。なお、土坑番号は調査当初に付した番号である。

第1号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第50図 35	高環 土師器	A 19.4 B (7.3)	脚部欠損。環部は外上方に開き、口縁部は外反する。	環部内・外面横ナデ。環底部平持ちヘラ削り。	砂粒・バミス 褐色 普通	P21 60% 南東部覆土上層

表5 諏訪前遺跡土坑一覧表

番号	位置	長狭方向	平面形	規模			断面	土質	出土遺物	備考	
				長さ (m)	幅 (m)	高さ (m)					
1	A2b	N-12°W	不規則形	1.85	1.90	46	外傾	凸凹	自然	土師器片1点(碎)、須恵器片1点(碎)	SK-2上層
2	A2b	N-22°E	円形	1.00	0.80	28	外傾	扇状	自然		SK-3上層
3	A2b	N-34°E	不規則形	1.33	1.43	48	外傾	平坦	自然		SK-1・SK-2と重複
4	A2b	N-33°W	不定形	1.38	1.18	50	外傾	凸凹	自然	土師器片5点(破)	
5	A2b	N-4°E	不定形	0.70	0.50	10	外傾	扇状	自然		
6	A1b	N-84°E	不規則形	2.18	1.35	28	外傾	平坦	自然	土師器片1点(破)	
9	A2b	N-87°W	不定形	1.85	0.95	18	傾斜	扇状	自然	土師器片5点(破)、須恵器片5点(碎)	
10	A2b	N-84°E	不定形	1.44	1.35	21	外傾	扇状	不明	土師器片4点(碎)	

番号	位置	長短方向	平面形			断面	底面	覆土	出土遺物	備考
			長(m)	幅(m)	深(m)					
11	B1a	N-4°-E	楕円形	1.10	0.80	24	外傾	凸凹	自然	
12	B2b	N-20°-E	楕円形	1.20	0.92	28	外傾	凸凹	自然	

4 溝

当調査区からは、溝が2条検出されている。重複関係からいずれもその他の遺構より新しい時期に構築されたものと考えられるが、出土遺物がないためそれぞれの構築時期や性格をとらえることはできない。

第1号溝 (第51図)

位置 調査区の西部、A2・B1・B2区にかけて確認されている。

規模と形状 全長は約24.32mで、上幅0.58～1.03m、下幅0.47～0.50m、深さ8～16cmである。底面は凸凹しており、断面形は皿状を呈している。

方向 B1c区から北東方向(N-36°-E)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土から、流れ込みと思われる土師器細片、須恵器細片が出土している。

所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、構築時期及び性格は不明である。

第2号溝 (第51図)

位置 調査区の南西部、C1区に確認されている。

重複関係 本跡は、B2b区で第3号住居跡の南西壁を掘り込んでいる。

規模と形状 全長は約6.25mで、上幅0.54～0.86m、下幅0.45～0.73m、深さ13～19cmである。底面は凸凹しており、断面形は皿状を呈している。

方向 B2d区から北方向(N-0°)へ曲線的に延びている。

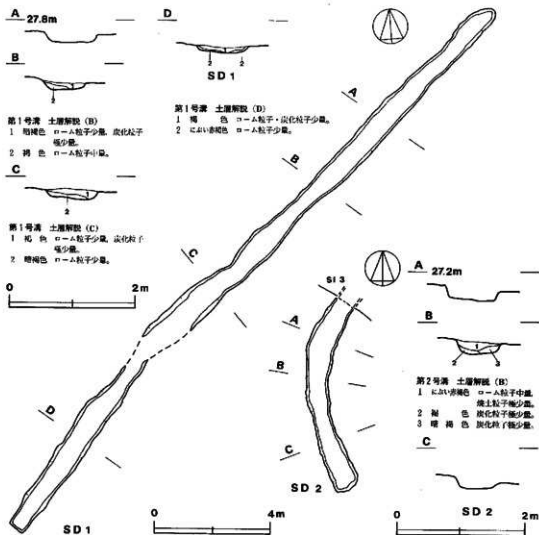
覆土 自然堆積。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、重複関係から平安時代の第3号住居跡より新しい時期に構築されているが、出土遺物はなく構築時期及び性格は不明である。

5 遺構外出土遺物

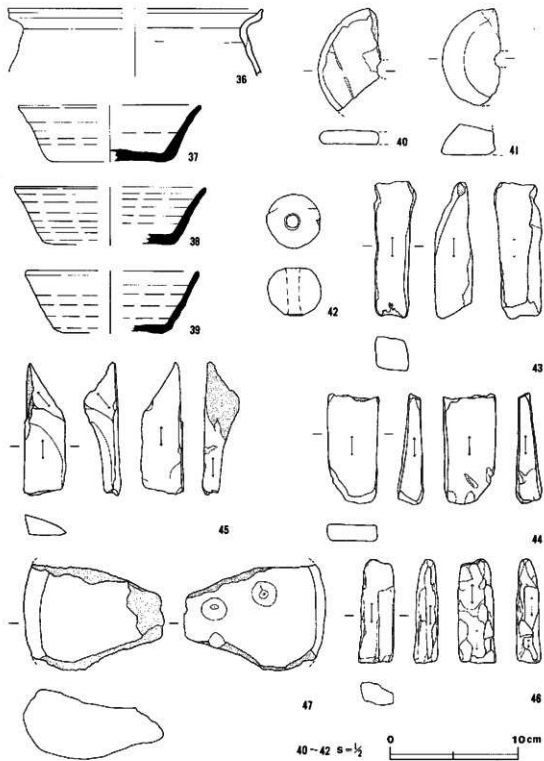
当調査区からは、試掘や表土除去の際に、遺物が少量出土しているので、ここでは、遺構外出土遺物として穴淵岡を掲載し、観察表で解説する。



第51図 第1・2号溝実測図

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・土調・焼成	備考
第52図 36	甕 土師器	A [22.0]	頸部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・産母・パミス	P28 5% 表土
		B [5.4]	頸部は「く」の字状に屈曲し、口唇部を外上方につまみ出す。		濃い褐色 普通	
37	坏 須恵器	A [14.4]	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・産	P29 40% 表土
		B 4.6	底部は平底で、体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がり、	底部回転ヘラ削り。	灰オリーブ色 普通	
		C [9.2]	口縁部はわずかに外反する。			
38	坏 須恵器	A [15.1]	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・産	P30 25% 表土
		B 4.7	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は尖る。	底部回転ヘラ削り。	灰白色 普通	
		C [8.5]				



第52图 遼北外出土遺物実測図

40~42 s=1/2 0 10cm

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第52図 39	坏 須恵器	A [13.7, B 5.0, C [8.0]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は外傾して 立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底部回転ヘラ切り。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P31 表土 30%

図版番号	器種	法量					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(mm)		
第52図 40	紡錘車	(3.4)	(5.6)	0.8	(15.3)	-	表土	DP1 須恵器坏瓦部の二次利用
41	紡錘車	(3.0)	(5.2)	-	(23.3)	-	グロッフ	DP2
42	球状土塊	-	2.5	2.9	20.0	0.9	表土	DP3

図版番号	器種	石質	法量				出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第52図 43	砥石	頁岩	(11.9)	3.4	3.0	(136.1)	表土	Q7
44	砥石	砂岩	9.9	4.2	2.1	96.2	表土	Q8
45	砥石	頁岩	(10.7)	3.5	(2.9)	(74.2)	表土	Q9
46	砥石	頁岩	(8.4)	(2.9)	(1.9)	(59.2)	表土	Q10
47	石皿	火山岩	(8.8)	(11.2)	(5.6)	(483.8)	表土	Q11

第4節 考察

当調査区から検出された壑穴住居跡は5軒で、それらは出土遺物等から奈良時代、平安時代に分けられる。ここでは、土器をⅠ～Ⅲ期に区分し、各期ごとに住居跡の特徴を述べ、集落についても若干の検討を加えていくことにする。集落については、道路幅という限定された範囲内の調査結果に基づくもので、遺物及び遺構の重複関係を重点を置き、これらの時期区分を行った。

Ⅰ 土器の様相について

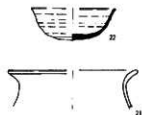
Ⅰ期 (第53図)

本期に該当する遺物は、土師器の甕と須恵器の坏等である。

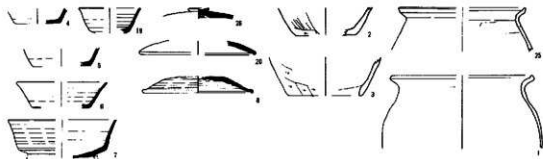
甕は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し、口唇部を外上方にわずかにつまみ出している。須恵器の坏は、丸底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部から体部下端にかけて回転ヘラ削りが施されている。本期は、奈良時代(8世紀前半)に位置付けられるものと思われる。

Ⅱ期 (第54図)

本期に該当する遺物は、土師器の甕、甕、須恵器の坏、高台付坏、蓋等である。土師器の甕は、胴部が内彎しながら立ち上がり、頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口唇部を上方、あるいは



第53図 I期出土土器

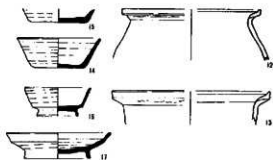


第54図 II期出土土器

は外上方につまみ出している。胴部外面下位に横位のへら削り、縦位のへらナデが施され、底部に木葉痕が見られるものもある。甕は、胴下半部片で、内燗気味に立ち上がっていて、外面に横位にへら削りが施されている。須恵器の坏は、平底で、体部は外傾して立ち上がる。口縁部が外反するものもある。底部に回転へら削りが施されている。底径は口径の二分の一よりも大きい。高台付坏は、「ハ」の字状に開く高台が付き、体部は外傾して立ち上がる。底部に回転へら削りが施されている。蓋は、天井部が低く平坦で、丸みをもって口縁部に至り、口縁部がわずかに外反し、端部が短く垂下する。天井部に回転へら削りが施されている。環状で中央部がへこむ低いつまみが付くものもある。本期は、奈良時代（8世紀後半）に位置付けられるものと思われる。

III期（第55図）

本期に該当する遺物は、土師器の甕、須恵器の坏、高台付坏、盤等がある。土師器の甕は、頸部が大きく外反し、口唇部を外上方につまみ出している。須恵器の坏は、平底で、体部が外傾して立ち上がっている。底部及び胴部外面下端に回転へら削りが施されているものと、底部に手持ちへら削りが施されているものがある。高台付坏は、「ハ」の字状に開く高台が付き、体部が外傾して立ち上がる。底部に回転へら削りが施されている。盤は、丸底で、「ハ」の字状に開く高台が付き、体部が大きく外傾し、口縁部が体部から外傾して立ち上がっている。底部に回転へら削りが施されている。本期は、平安時代前期（9世紀前半）に位置付けられるものと思われる。



第55図 III期出土土器

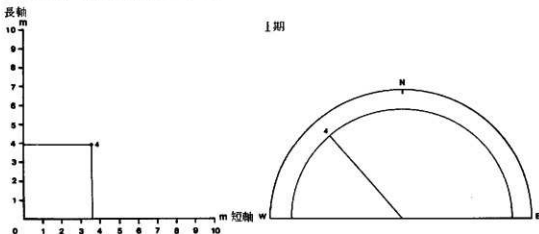
2 住居の形態と集落について

(1) 奈良時代（1期）

奈良時代（8世紀前葉から8世紀後葉）と考えられる住居跡は4軒検出されており、出土遺物から、4軒の住居跡を2期に区分した。

I期 奈良時代（8世紀前葉）

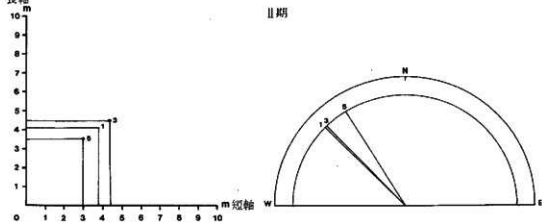
第4号住居跡が当該期に属する。調査区の南東部から検出され、平面形は方形を呈している。一辺が4m弱の住居跡で、主軸方向は $N-41^{\circ}-W$ を示し、北西壁に竈が付設されている。ピットは4か所の支柱穴が検出されている。



第56図 住居跡規模・主軸方向I期

II期 奈良時代（8世紀後葉）

第1・3・5号住居跡が当該期に属する。平面形は、第1・3号住居跡が方形を、第5号住居跡が長方形を呈し、規模は、第1号住居跡が一辺が約4.0m、第3号住居跡が約4.4mで、第5号住居跡が約3.5m×3.0mで、主軸方向は、第1号住居跡が $N-45^{\circ}-W$ 、第3号住居跡が $N-44^{\circ}-W$ 、第5号住居跡が $N-32^{\circ}-W$ を示し、それぞれ北西壁に竈が付設されている。主



第57図 住居跡規模・主軸方向II期

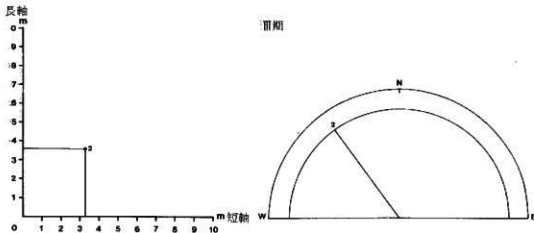
柱穴は一番人形の第3号住居跡から4か所検出されたが、第1・5号住居跡からは検出されなかった。3軒の住居跡は、第1号住居跡が調査区の北西部に、第3号住居跡が調査区の南西部に、第5号住居跡が調査区の中央部にそれぞれ位置している。時期は同じであるが、規模に違いが見られる。

(2) 平安時代(Ⅲ期)

平安時代(9世紀前葉)と考えられる住居跡は1軒検出されている。

Ⅲ期 平安時代(9世紀前葉)

第2号住居跡が当該期に属する。調査区の南西部から検出され、平面形は方形を呈している。一辺が約3.4mの住居跡で、主軸方向はN-36°-Wを示し、北西壁に竈が付設されている。ピットは4か所の支柱穴が検出されている。

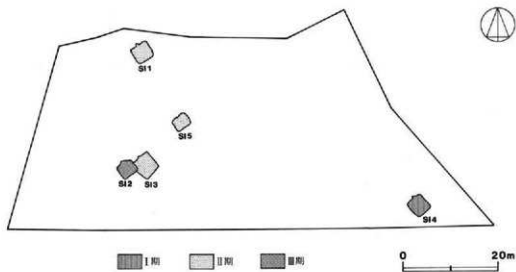


第58図 住居跡規模・主軸方向Ⅲ期

以上のことから、諏訪前遺跡から検出された住居跡はⅠ～Ⅲ期(8世紀前葉～9世紀前葉)の3期に区分することができ、当台地上には奈良時代から平安時代前期にわたって集落が形成されていたことがうかがわれる。当遺跡周辺で、奈良・平安時代の住居跡が検出されている遺跡は、水戸市の大銀町遺跡、薬王院東遺跡、砂川遺跡、松原遺跡、大塚新地遺跡がある。

参考文献

- (1) 水戸市大銀町遺跡発掘調査会『大銀町遺跡』1988年
- (2) 水戸市薬王院東遺跡発掘調査会『薬王院東遺跡』1991年
- (3) 茨城県教育財団「砂川遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第16集』1981年
- (4) 茨城県教育財団「松原遺跡・大塚新地遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第11集』1980年



第59图 集落变迁图 (I~III期)

第7章 高原古墳群（2号墳）

第1節 遺跡の概要

高原古墳群は、水戸市の南東部、東茨城台地南東端の標高28m前後の小さな起伏台地上に立地している。調査区は南北に約18m、東西に約18m、面積314㎡で、現況は宅地である。

調査は、高原古墳群の2号墳として開始したが、古墳の確認はできなかった。検出された遺構は、溝1条と昭和時代の防空壕1基である。溝は調査区の北西部から、防空壕は調査区の北東部から検出されている。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱出上している。昭和時代の遺物は、磁器の碗、盃である。その他、土師器細片等が出土している。

第2節 遺構と遺物

1 防空壕跡

当調査区北東部から、防空壕跡が1基検出されている。

第1号防空壕跡（第60図）

位置 調査区の北東部、A1区を中心に確認されている。

規模と形状 全長は約13.80mで、上幅1.05～2.20m、下幅0.55～0.90mで、断面形は「□」状である。

方向 A1d区から東方向（N-90°E）へほぼ直線的に延び、B1c区で鉤の手に曲がり、さらに東方向、調査区外へ延びている。

主部 調査区外へ延びているため不明である。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 踏み固められて硬く、入口から階段状に深くなっていく。

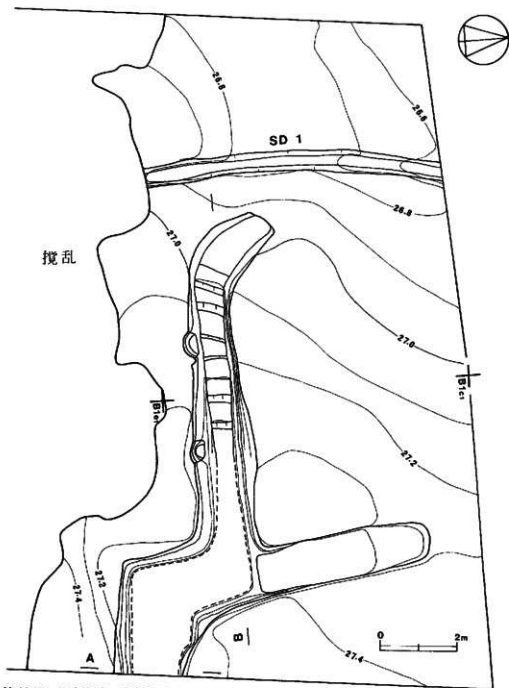
覆土 多量のローム粒子や白色粘土等を含み、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土から磁器細片等が出土している。

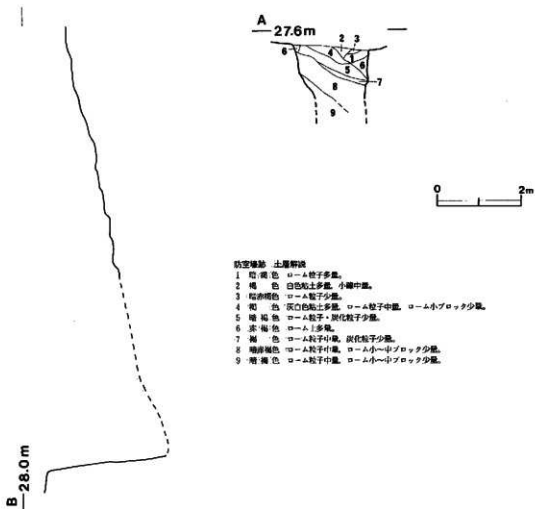
所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物等から昭和時代の防空壕跡と考えられる。

2 溝

当調査区北西部から、溝が1条検出されている。しかし、出土遺物がないため構築時期や性格をとらえることはできない。



第 60 圖 防空壕跡・溝突測圖



第1号溝 (第60図)

位置 調査区の北西部、A1区で確認されている。

規模と形状 全長は約7.75mで、上幅0.50～0.55m、下幅0.25～0.35m、深さ8cmである。

底面は平坦で、断面形は皿状を呈している。

方向 A1区から北方向(N-2°-E)へほぼ直線的に延びている。

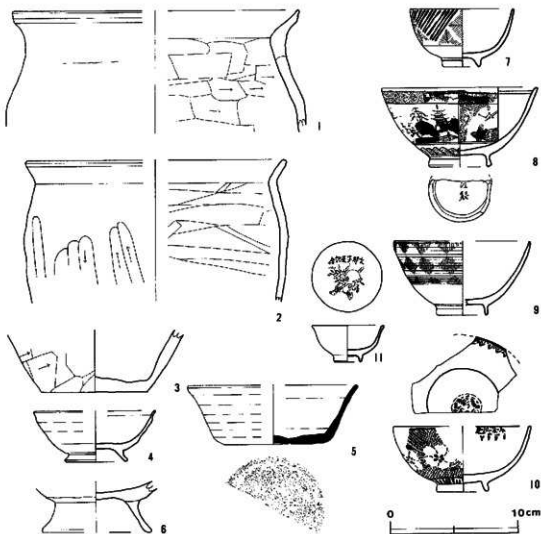
覆土 自然堆積。

遺物 出土していない。

所見 構築時期及び性格は不明である。

3 遺構外出土遺物

当調査区からは、試掘の際に、遺構と関連すると思われる遺物が少量出土しているのですが、ここでは、遺構外から出土している遺物について実測図を掲載し、観察表で解説する。



第61図 遺構外出土遺物実測・拓影図

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	加工・色調・焼成	備考
第61図 1	甕 土師器	A [22.6] B (9.8)	胴部から口縁部にかけての破片。 胴部は内彎しながら立ちあがり 頸部は「く」の字状に屈曲する。 I唇部を外上方につまみ出す。	I縁部及び頸部内・外面横ナデ。 胴部外面ナデ。	砂粒・石英・ 長石・釜母 にぶい褐色 普通	P1 10% 表土

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色面・地味	備考
第61図 2	甕 土師器	A [20.6] B (11.5)	胴部から口縁部にかけての破片 胴部は内彎気味に立ち上がり、 頸部は外反する。口器部は丸み を有する。	口縁部及び腹部内・外面、胴部 内面横ナデ。胴部外面へう削り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P2 10% 表土
3	甕 土師器	B (5.6) C 8.5	底部から胴下半部にかけての破片。 底部は平底で、胴部は内彎 気味に立ち上がる。	胴部外面下半へう削り。	砂粒 にぶい褐色 普通	P3 10% 表土
4	高台付平 土師器	A (9.6) B 4.1 D 5.0 E 0.7	高台部及び体部から口縁部にか けて一部欠損。高台部は「ハ」 の字状に開き、底部は平底で、 体部はやや内彎気味に立ち上 がる。口縁部は外反する。	体部下端横位へう削り。体部 内・外面横ナデ。高台貼り付け 後、ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P4 60% 表土
5	平 須臾器	A [13.4] B 4.8 C [8.4]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は外傾して 立ち上がり、口縁部はわずかに 外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ、 底部同様にう削り後、ナデ。	砂粒・硬・長石 灰色 普通	P6 25% 表土 底部へう削り 「X」
6	高台付平 土師器	B 4.1 D 8.6 E 1.5	高台部から体部にかけての破片 高台部は「ハ」の字状に開き、 底部は平底で、体部は外傾して 立ち上がる。	口縁部及び体部内面横ナデ。高 台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P5 30% 表土
7	甕 磁器	A 8.0 B 4.7 D 4.8 E 0.7	甕形。甕形茶碗。高台部は低く 直立し、底部は平底で、体部は 内彎しながら立ち上がり、口縁 部に至る。	外面文様プリント。全加施釉。	(胎土)白色 (釉)透明 (焼成)良	P7 100% 表土
8	甕 磁器	A [12.4] B 6.4 D [4.6] E 1.0	高台部から口縁部にかけて一部 欠損。甕形茶碗。高台部はやや 開き気味に付き、底部は平底で、 体部は内彎しながら立ち上がり 口縁部に至る。	外部染付。疊付露胎。	(胎土)灰白色 (釉)透明 (焼成)良	P8 50% 表土
9	甕 磁器	A [10.8] B 6.0 D [3.8] E 0.8	高台部から口縁部にかけての破片。 甕形茶碗。高台部は低く直 立し、底部は平底で、体部は内 彎しながら立ち上がり、口縁部 に至る。	外面文様プリント。高台下部露 胎。	(胎土)灰白色 (釉)透明 (焼成)良	P9 40% 表土
10	甕 磁器	A [10.8] B [5.3] D 4.0 E 0.6	高台部から口縁部にかけての破片。 高台部はやや開き気味に付き 底部は平底で、体部は内彎し ながら立ち上がり口縁部に至る。	外面及び内面文様プリント。疊 付露胎。	(胎土)灰白色 (釉)透明 (焼成)良	P11 30% 表土
11	蓋 磁器	A 5.6 B 3.0 D 2.1 E 0.6	甕形。高台部は直立し、体部は 強く内彎しながら立ち上がり、 口器部は外反する。	疊付露胎。	(胎土)灰白色 (釉)透明 (焼成)良	P10 100% 表土 内面「支那事 業記念」の文 字

第3節 考 察

当調査区から検出されている遺構のうち、時期の分かっている防空壕について、簡単に考察を述べてみたい。

旧常澄村において、防空壕がつくられるようになった当時の背景は、1937年（昭和12年）に勃発した日中戦争がやがて太平洋戦争（1941年－昭和16年）と拡大し、その太平洋戦争も日本の敗色が濃厚になってきた1945年（昭和20年）になると、米軍機による空襲が激しくなり、県内でも工場群をかかえた日立市、勝田市、経済の中心の水戸市、飛行場のあった鉾田町、小川町などが空襲に遭うようになった。旧常澄村も例外ではなく、造船所があった川又地区、小泉地区を中心に空襲があった。そのため、米軍が上陸することが予想された鹿島灘一帯には、官民一体となって防空壕が掘られている。旧常澄村でも、1944年（昭和19年）頃から、各家庭に防空壕を造るようになったのである。

今回調査した防空壕の形状については、随所に工夫を凝らした箇所が見られる。

- 出入口……外の爆風が直接中へ入らないように中になめめに入って行くようになっている。
- 明かりを置く棚……出入口から入って約3.7mと約6.7mの所に、壁を掘り込んで、奥行き約25cm、幅40～50cmのろうそく等を置くためと思われる棚が設けられている。
- 通路……外からの爆風が中へ入って来ても、直接の被害が出ないように、出入口から約10m入った所で鉤の手状に曲がっている。また、その曲がった所から、別の方向に換気口と思われる掘り込みがある。
- 深さ……調査区内の遺構の最深部は2.5mを越えており、空襲を避けるためかなり深く掘られている。
- 主部……調査区外へ延びているため不明である。

以上のように、米軍機による空襲から身を守るために、様々な工夫を凝らしている。

この防空壕も、1945年（昭和20年）8月15日の終戦と共にその機能を終え、使われることもなくなったと思われ、覆土にローム土や白色粘土、ゴミ等が含まれることから人為的に埋め戻していると考えられる。近所の人の話では、1軒一つの割合で、このほかにも、数多くの防空壕があるということである。

参考文献

- (1) 茨城県『茨城県史』近現代編 1984年
- (2) 常澄村『常澄村史』通史編 1989年

第8章 沢幡遺跡

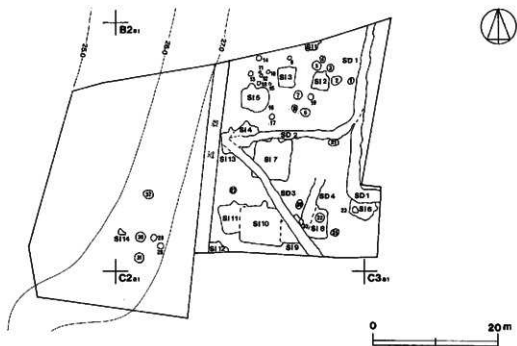
第1節 遺跡の概要

沢幡遺跡は、水戸市の南東部、東茨城台地南東端の標高27m前後の小さな舌状台地上に立地する平安時代の遺跡である。調査区は南北に約50m、東西に約56m、面積1,779㎡で、現況は畑である。

今回の調査によって検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡14軒、土坑30基、溝4条である。

平安時代の遺構は、竪穴住居跡14軒で、調査区の東部の台地上から検出されている。竈は北壁に付設されているものがほとんどであるが、東壁に付設されている住居跡も4軒ある。土坑30基、溝4条については、時期、性格等は不明である。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に約26箱出土している。平安時代の遺物は、土師器の坏、高台付坏、皿、甕、須恵器の坏、高台付坏、盤、蓋、甕、甌、壺及び円面硯等である。土師器の坏、皿、須恵器の坏の中には「堤東」や「伍仟」と墨書されたものもみられる。土製品は、支脚、球状土錘、紡錘車等、石製品は、砥石等、鉄製品は、鎌、鏝等である。



第62図 沢幡遺跡全体図

第2節 遺構と遺物

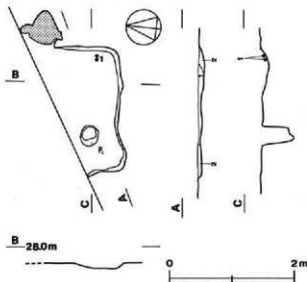
1 竪穴住居跡

当調査区から、竪穴住居跡は14軒検出されている。これらは、平安時代の住居跡で、調査区東部から13軒、西部から1軒検出されている。平面形は、ほぼ方形を呈しており、すべて竈が付設されている。出土遺物は、9世紀～10世紀前葉を中心とする土師器の坏、甕等や須恵器の坏、蓋、盤等である。

以下、検出された住居跡の特徴や主な遺物について記載していくことにする。

第1号住居跡 (第63図)

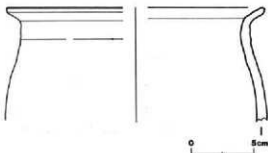
位置 調査区の北東部、B2as区を中心に確認されている。本跡の北部は調査区域外に延びている。



第1号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・焼土小〜中ブロック多量、ローム粒子中量、ローム小ブロック少量。
- 2 褐色 炭化粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック中量。

第63図 第1号住居跡実測・遺物出土位置図



第64図 第1号住居跡出土遺物実測図

規模と平面形 長軸 [2.48] m, 短軸 2.06 mで、長方形を呈するものと考えられる。

主軸方向 N-90°-E

壁 壁高は2~4 cmであるが、削平されてしまい明確に確認できない。

床 遺構確認時には床の一部が露呈していたが、竈の西側に、平坦で、踏み固められた硬い部分が確認される。

ピット 1か所 (P₁) 検出されている。P₁は、径30 cmの円形を呈し、深さ52 cmで、規模や位置から支柱穴のうちの1か所と考えられる。

竈 東壁中央の壁を約60 cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築され、袖部には補強材として凝灰岩を使用している。規模は、長さ55 cm, 幅65 cmである。天井部は崩落し、凝灰岩で補強された両袖部の一部が遺存している。火床は、床面がほとんど掘り窪められておらず、熱をうけ

て赤変硬化している。煙道は、火床から外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土の下層・中層から土師器片（甕1），土師器の細片（33点）が出土している。
1の土師器の甕は南東コーナーの壁下から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表

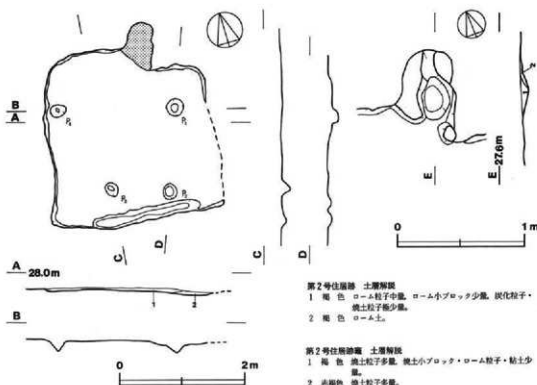
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第64図 1	甕 土師器	A (20.4) B (9.3)	胴部から口縁部にかけての破片。 胴部は内彎しながら立ち上がり、 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部は外傾する。口縁部を外 上方につまみ出す。	口縁部・頸部及び胴部内・外面 横ナデ。	粘土・色調・焼成 砂粒・ベミス 褐色 普通	P1 15% 南東コーナ 壁下

第2号住居跡 (第65図)

位置 調査区の北東部、B2c区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.88m、短軸2.58mの長方形を呈している。

主軸方向 N-21°-E



第65図 第2号住居跡・竈実測図

壁 壁高は2~4cmであるが、削平されてしまい、一部しか確認できない。

壁溝 南壁下の一部に検出されている。上幅19~22cm、深さ6~7cmで、断面形は「U」字状を呈している。

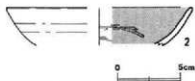
床 凸凹で、踏み固められ硬い。

ピット 4か所(P₁~P₄)検出されている。P₁~P₄は、径18~28cmの円形を呈し、深さ7~17cmで、配列はやや不規則であるが主柱穴と考えられる。

竈 北壁中央の壁を約52cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は長さ72cm、幅65cmである。天井部は崩落しているが、両袖の一部が遺存している。火床は、床面が約6cm掘り窪められており、熱をうけて赤変硬化している。煙道は、火床から外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土の下層・中層から、土師器片(環1)、土師器の細片(16点)、須恵器の細片(2点)等が出土している。2の土師器の環は南西壁中央付近の床面から出土している。



所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第66図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土土・色調・焼成	備考
第56図 2	環 土師器	A [14.8] B (3.1)	体部から口縁部にかけての破片。 体部はやや内彎して口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P2 15% 西壁中央付近 床面

第3号住居跡 (第67図)

位置 調査区の北東部、B2c₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.19m、短軸2.89mの長方形を呈している。

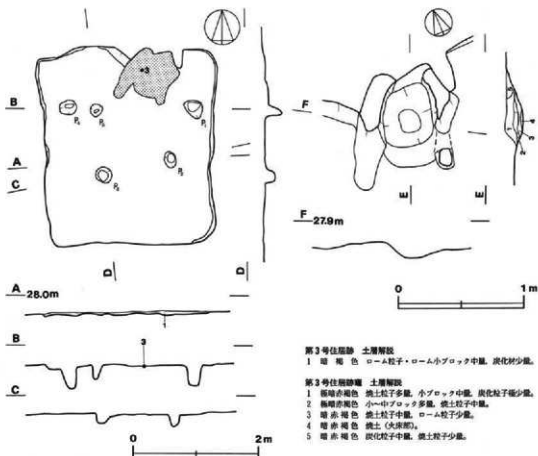
主軸方向 N-16°-E

壁 壁高は4~6cmであるが、削平されてしまい明確に確認できない。

床 ほぼ平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 5か所(P₁~P₅)検出されている。P₁~P₅は、径19~32cmの円形を呈し、深さ9~38cmで、配列はやや不規則であるが主柱穴と考えられる。

竈 北壁中央からやや東よりの壁を約14cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は長さ84cm、幅86cmである。天井部は崩落しているが、両袖部の一部が遺存している。火床は、床面が約6cm掘り窪められており、熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は、火床



第 67 図 第 3 号住居跡・窠突測・遺物出土位置図

から外傾して立ち上がっている。

覆土 ローム小ブロックを含むことから人為堆積と考えられる。



遺物 床面及び覆土の下層・中層から土師器片(環1)、土師器の細片(23点)、須恵器の細片(5点)、鉄滓(1点)等が出土している。3の土師器の環は窠内から逆位の状態で出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第 3 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第68図 3	環 土師器	A [13.6] B 5.2 C [7.0]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎気味 に立ち上がり、器厚を減じなが ら口縁部に至る。口縁部はわず かに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へラ磨き後、黒色処理。 底部回転ヘラ切り。	砂粒 にふい・橙色 普通	P3 25% 窠内 体部外面磨き □

第4号住居跡 (第69図)

位置 調査区の北東部、B2区を中心を確認されている。

重複関係 本跡の南西壁は、第13号住居跡の北西コーナー付近を掘り込み、本跡の南半分近くは第2号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.57m、短軸2.30mを確認したが、竈及び北東コーナーだけのため、平面形は不明である。

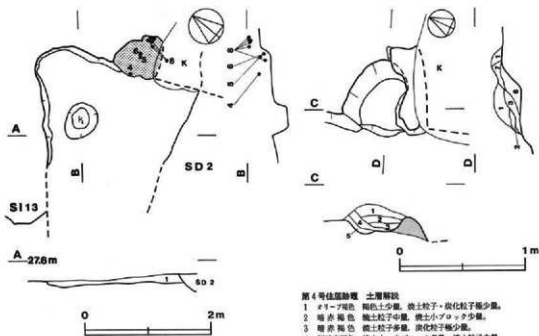
主軸方向 N-75°-E

壁 壁高は10~19cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 1か所(P₁)検出されている。P₁は、径55cmの円形を呈し、深さ6cmで、規模や位置から主柱穴のうちの1か所と考えられる。

竈 北東壁を約82cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ61cm、幅57cmである。天井部は崩落しているが、袖部の一部が遺存している。火床は、床面が約9cm掘り窪められており、熱をうけてレンガ状に赤変硬化している。煙道は、緩やかに外傾して立ち上がっている。



第4号住居跡 土層解説

1 極暗赤褐色 コーム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子極少量。

第4号住居跡竈 土層解説

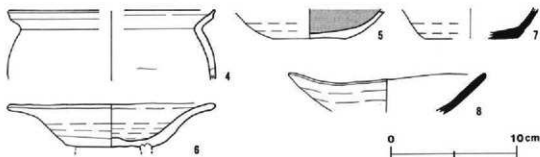
- 1 オリーブ褐色 褐色土少量、焼土粒子・炭化粒子極少量。
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量。
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子極少量。
- 4 極暗赤褐色 焼土小〜中ブロック多量、焼土粒子中量。
- 5 極暗赤褐色 焼土粒子極少量。
- 6 暗赤褐色 焼土小〜中ブロック・オリーブ褐色粘土中量。
- 7 極暗赤褐色 焼土粒子多量、オリーブ褐色粘土少量。

第69図 第4号住居跡・竈実測・遺物出土位置図

覆土 本跡は大半が第13号住居跡及び第2号溝と重複し、北東コーナー付近にわずかに暗褐色土が堆積し、自然堆積と思われる。

遺物 覆土の下層・中層から土師器片(甕1, 坏2), 土師器の細片(231点), 須恵器片(坏1, 皿1), 須恵器の細片(100点), 支脚片(5点), 鉄滓(3点)等が出土している。4の土師器の甕, 5の土師器の坏, 6の土師器の高台付皿, 8の須恵器の皿は竈内から, 7の須恵器の坏は北東部の覆土中層からそれぞれ出土している。

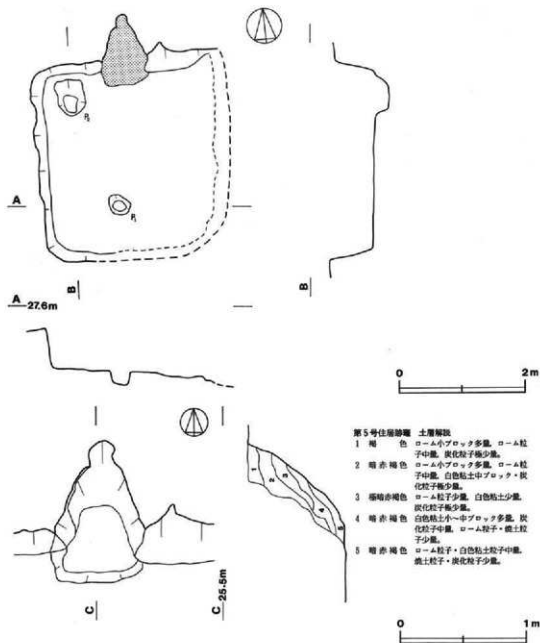
所見 本跡は, 重複関係から第13号住居跡より新しく, 第2号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第70図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第70図 4	甕 土師器	A [16.4] B (5.6)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して頸部に至り、頸部は「く」の字状に屈曲し口縁部は外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部・頸部及び胴部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい橙黄色	P4 竈内 10%
5	坏 土師器	B (2.4) C [6.0]	底部から体部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面横ナデ。体部外面下端回転ヘラ削り。体部内面ヘラ磨き後、黒色処理。底部回転糸切り。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい橙黄色 普通	P6 竈内 25%
6	高台付皿 土師器	A 16.3 B (3.5)	高台部欠損。体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で体部は大きく外反して立ち上がり。口縁部はほぼ水平になる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい黄橙黄色 普通	P7 竈内 80%
7	坏 須恵器	B (2.4) C [7.3]	底部から体部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒 灰色 普通	P8 北東部覆土 10%
8	皿 須恵器	A 15.7 B (3.3)	底部欠損。体部は大きく外傾して口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 不良	P5 竈内 80%



第71図 第5号住居跡・竈実測図

第5号住居跡（第71図）

位置 調査区の北東部、B2d₆区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東壁は、第16号土坑によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.29m、短軸(2.92)mで、長方形を呈するものと考えられる。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は54～71 cmで、垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 2か所 (P₁・P₂) 検出されている。P₁・P₂は、径29～43 cmの円形を呈し、深さ22～23 cmで、配列は不規則であるが、主柱穴であると考えられる。

竈 北壁中央の壁を約85 cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は長さ124 cm、幅119 cmである。天井部は崩落し、遺存状態が悪い。火床は、ほとんど掘り窪められておらず、熱を受けているが、あまり硬化していない。煙道は、火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 ほとんどが第16号土坑による擾乱のため不明である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、重複関係から第16号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第6号住居跡 (第72図)

位置 調査区の南部、B2h₃区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南西部は第23号土坑に、北部は第1号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [4.32] m、短軸 3.88 mで、長方形を呈するものと考えられる。

主軸方向 N-80°-E

壁 壁高は18～36 cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、踏み固められ硬い。

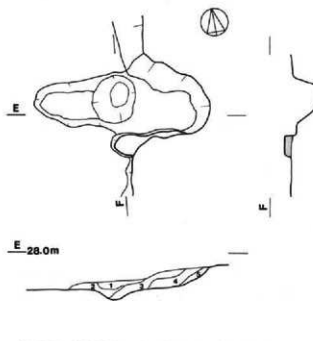
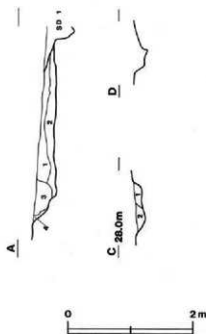
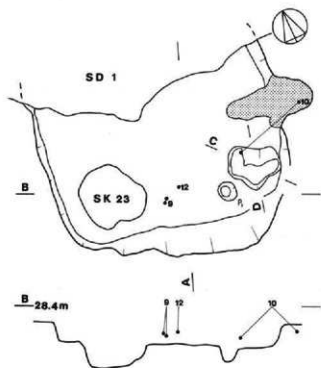
ピット 1か所 (P₁) 検出されている。P₁は、径30 cmの円形を呈し、深さ24 cmで、規模や位置から主柱穴のうちの1か所であると考えられる。

竈 東壁を約57 cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ141 cm、幅85 cmである。天井部は崩落しているが、袖部の一部が遺存している。火床は、床面が約17 cm掘り窪められており、熱をうけて赤変硬化している。煙道は、火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴 南東コーナー付近に検出されている。平面形は、長径85 cm、短径65 cmの不定形を呈し、深さは17 cmである。底面は凸凹で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土の下層・中層から土師器片 (甕2、坏1、高台付坏1)、土師器の細片 (20点)、須恵器の細片 (22点) 等が出土している。9の土師器の甕は南壁中央付近の覆土中層から、



第6号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子極少量。
- 2 暗赤褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量。
- 3 暗暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子極少量。
- 4 褐色 ローム粒子多量。

第6号住居跡貯蔵穴 土層解説

- 1 褐色 ローム土多量。
- 2 濃い赤褐色 ローム粒子少量、炭化粒子極少量。

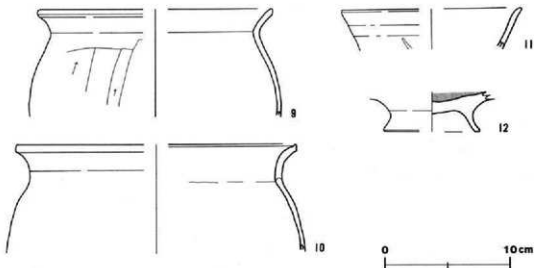
第6号住居跡竈 土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量、炭土粒子・炭土小ブロック少量。
- 2 暗暗赤褐色 ローム粒子・炭土粒子少量。
- 3 暗赤褐色 炭土粒子・炭土小ブロック中量、ローム小ブロック少量。
- 4 暗赤褐色 炭土粒子多量、炭土小ブロック中量、ローム小ブロック少量。
- 5 濃い赤褐色 ローム粒子中量、炭土粒子少量。



第72図 第6号住居跡・竈実測・遺物出土位置図

10の土師器の甕は竈内及び南東部中程の覆土中層から、11の土師器の坏は南東部の覆土中層から、12の土師器の高台付坏は南東部中程の覆土中層から逆位の状態でそれぞれ出土している。所見 本跡は、重複関係から第23号土坑及び第1号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第73図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 9	甕 土師器	A [18.6] B (8.7)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎気味に頸部に至り、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部は丸みを帯びる。	口縁部及び頸部内・外面、胴部内面横ナデ。胴部外面へう削り。	砂粒・石英・長石・雲母 におい褐色 普通	P9 10% 南壁中央付近 覆土中層
10	甕 土師器	A [22.2] B (8.8)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎気味に頸部に至り、頸部は外反し、口縁部は外反する。口唇部をわずかに上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面、胴部内面横ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 褐色 不良	P10 10% 竈内及び南東 部中程覆土中 層
11	坏 土師器	A [14.4] B (3.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P11 10% 南東部覆土
12	高台付坏 土師器	B (3.2) D [7.6] E 1.8	高台部から底部にかけての破片。高台部は足高気味で「ハ」の字状に開き、底部は平底。	体部内面へう磨き後、黒色処理。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・石英・雲母 におい黄褐色 普通	P12 20% 南東部中程土面

第7号住居跡 (第74・75・76図)

位置 調査区の東部、B2f区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の竈は第2号溝に、南壁及び西壁の一部は第3号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.68 m、短軸6.00 mの長方形を呈している。さらに、北壁東部上位は北に張り出している。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は55～80 cmで、垂直に立ち上がっている。北壁面には白色粘土が貼られている。

壁溝 北壁下を除き全周している。上幅18～28 cm、深さ5～20 cmで、断面形は「U」字状を呈している。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

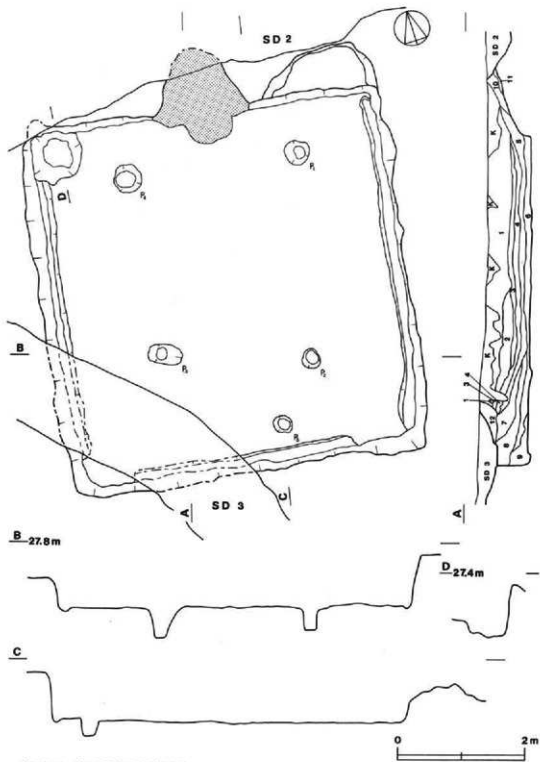
ピット 5か所(P₁～P₅)検出されている。P₁～P₄は、径30～54 cmの円形を呈し、深さ35～56 cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は、径30 cmの円形を呈し、深さ29 cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央を約109 cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ154 cm、幅154 cmである。天井部は崩落しているが、両袖部の一部が遺存し、両袖の内側から支脚が検出されている。火床は、床面が約22 cm掘り窪められており、熱をうけて赤変硬化している。煙道は、火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

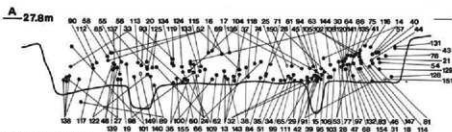
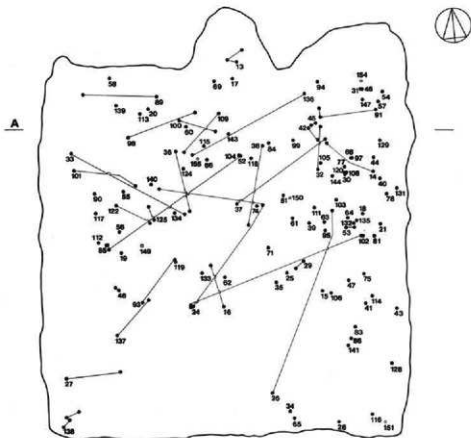
貯蔵穴 北西コーナーに検出されている。平面形は、長径80 cm、短径77 cmの不整形円形を呈し、深さは30 cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 ロームブロックを含む明褐色及び暗褐色土で、人為堆積と考えられる。

遺物 床面及び覆土下層から上層にかけて、土師器片(甕10、甌2、坏61、高台付坏22、皿6、高台付皿12、耳皿1)、土師器の細片(2,240点)、須恵器片(甕1、長頸甕2、坏8、高台付坏2、皿1)、須恵器の細片(411点)、灰釉陶器片(碗7)、灰釉陶器の細片(23点)、羽目片(1点)、支脚片(23点)、鉄滓(21点)、石(32点)等が出土している。13・17の土師器の甕は竈内から、25の須恵器の甕は中央部の床面から、27の須恵器の長頸甕は南西コーナー付近の覆土下層から、28の土師器の坏は南東コーナーの壁下から、29の土師器の坏は中央部の床面から、32の土師器の坏は北東部中程の床面から、35の土師器の坏は中央部の床面から、36の土師器の坏は北西部中程の床面から、37の土師器の坏は中央部及び北東部中程の床面から、38の土師器の坏は中央部の床面から、39の土師器の坏は中央付近の床面から、45の土師器の坏は北東部中程の床面から、51の土師器の坏は中央部の床面から、65の土師器の坏は南壁中央部の壁下から、89の須恵器の坏は北西部中程の床面及び貯蔵穴内から、91の須恵器の坏は北東部中程の床面から、92の須恵器の坏は柱穴(P₁)内から、95の須恵器の坏は竈内及び北西部中程の覆土下層から、128の土師器の皿は南東コーナーの壁下から、139の土師器の高台付皿は竈内及び北西コーナー付近の覆土下層からそれぞれ出土している。154の鐵は北東コーナーの壁下から出土している。

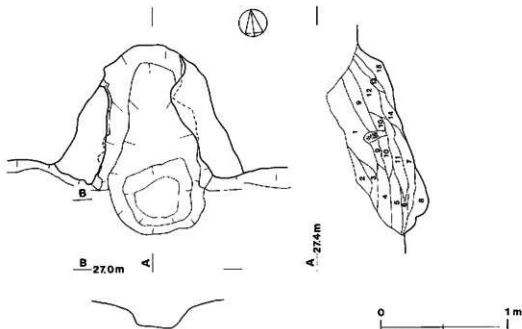


第74图 第7号住居跡実測図



- 第7号住居跡 土層解説
- 1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量。
 - 2 暗褐色 ローム粒子中量、粘土粒子・白色粘土粒子少量。
 - 3 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量、ローム小ブロック極少量。
 - 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量。
 - 5 暗褐色 炭化粒子・白色粘土粒子中量、ローム粒子少量。
 - 6 黒褐色 炭化粒子・炭化物多量、ローム粒子中量、粘土粒子・粘土小ブロック少量。
 - 7 赤褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子極少量。
 - 8 暗褐色 ローム粒子・白色粘土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子極少量。
 - 9 褐色 白色粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量、粘土粒子極少量。
 - 10 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・粘土粒子中量。
 - 11 褐色 ローム粒子中量、粘土粒子少量。
 - 12 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、ローム小ブロック極少量。

第75図 第7号住居跡遺物出土位置図



第7号住居跡 土層解説

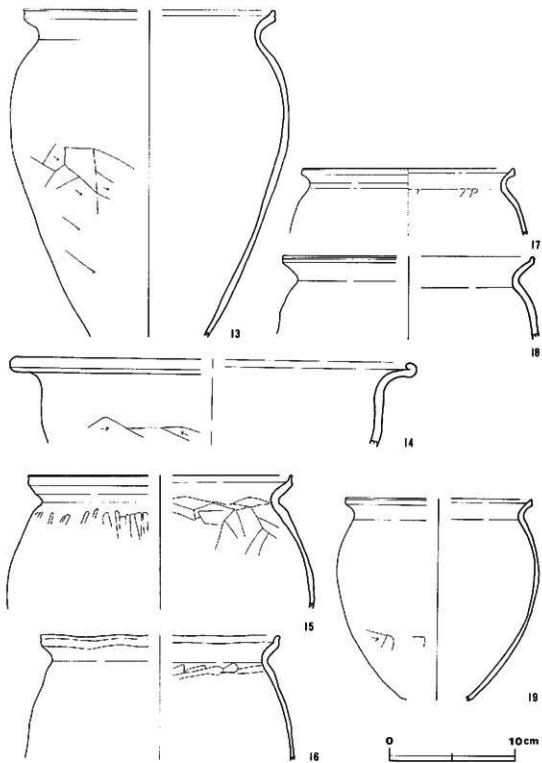
- | | | | | | |
|---|-------|-------------------------------------|----|-------|------------------------------|
| 1 | 黒い赤褐色 | ローム粘土・粘土粒子・山砂中量、粘土粒子・面上小ブロック・炭屑粒少量。 | 8 | 黒い赤褐色 | 粘土粒子多量、山砂・炭化粒中量。 |
| 2 | 暗褐色 | 炭化粒子多量、粘土粒子少量、ローム粒子少量。 | 9 | 黒い赤褐色 | 山砂中量、粘土粒子少量。 |
| 3 | 暗赤褐色 | 粘土粒子・炭化粒少量。 | 10 | 黒い赤褐色 | 粘土粒子・粘土小へ中ブロック多量、炭中量。 |
| 4 | 黒い赤褐色 | 粘土粒子中量、炭化粒・山砂少量。 | 11 | 暗赤褐色 | 粘土粒子・粘土小へ中ブロック・炭多量、炭化粒中量。 |
| 5 | 暗赤褐色 | 粘土粒子・粘土小ブロック多量、炭化粒中量、ローム粒子少量。 | 12 | 暗赤褐色 | 粘土粒子多量、炭化粒中量、粘土小へ中ブロック・山砂少量。 |
| 6 | 暗赤褐色 | 炭化粒子多量、炭中量、粘土粒子少量。 | 13 | 暗赤褐色 | 粘土粒子多量、炭一粒子・山砂少量。 |
| 7 | 暗赤褐色 | 粘土粒子多量、炭・山砂少量。 | 14 | 黒い赤褐色 | 粘土粒子・炭化粒・粘土粒子少量。 |
| | | | 15 | 暗赤褐色 | 山砂中量、粘土粒子少量。 |

第76図 第7号住居跡実測図

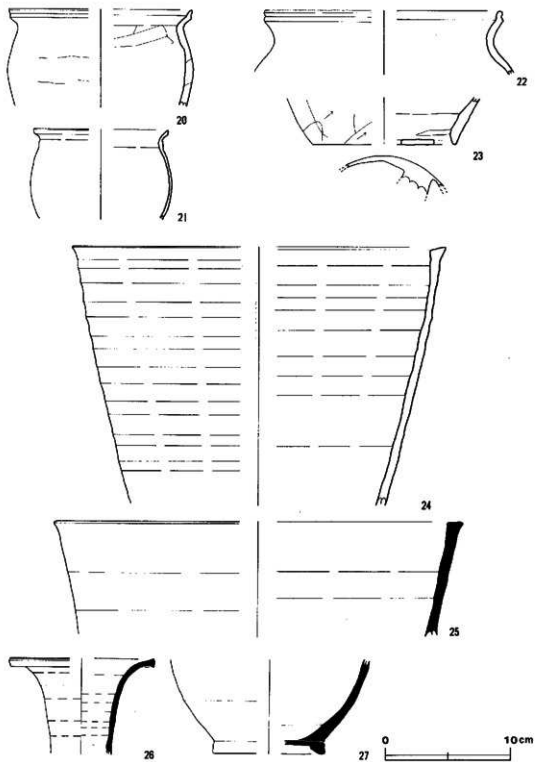
所見 本跡は、重複関係から第2・3号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表

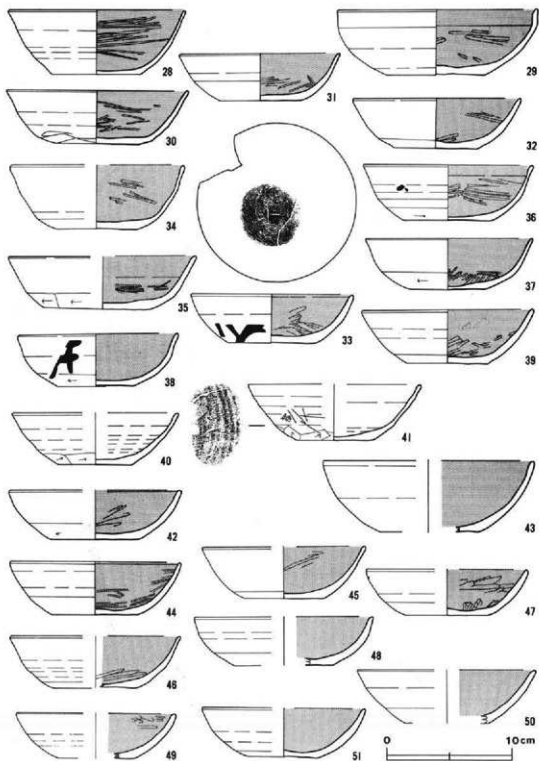
図版番号	器種	法卓 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	肌1・色調・構成	備考
第77図 13	甕 土師器	A [20.0] B (26.4)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内傾しながら立ち上がり、口縁部は外反し、口唇部を外上方向に突き出す。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面上半・内面ナデ。胴部外面下半へラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母・霽色	P13 25% 際内
14	甕 土師器	A [32.2] B (6.3)	胴部から口縁部にかけての破片。頸部は大きく外反し、口縁部を内側へ折りかえす。	口縁部及び胴部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母・霽色	P14 5% 北東部中程度土下層及び中層



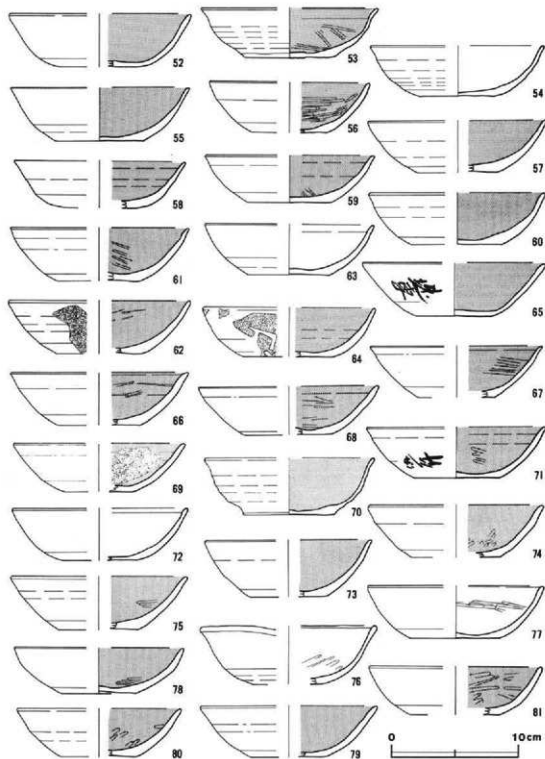
第77图 第7号住居跡出土遺物実測図



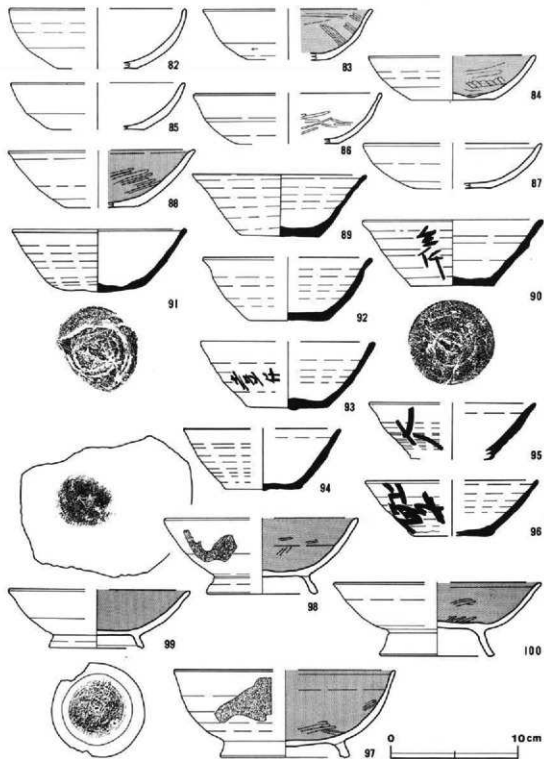
第78图 第7号住居跡出土遺物実測図



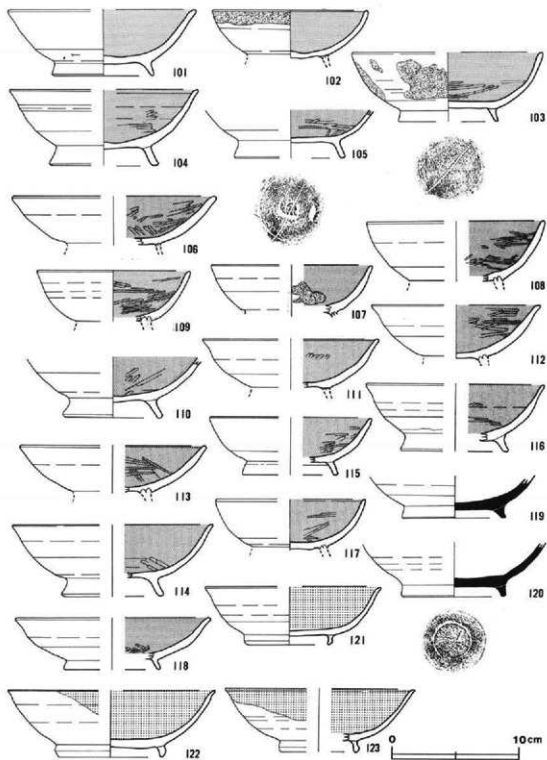
第 79 图 第 7 号住居跡出土遺物実測・拓影图



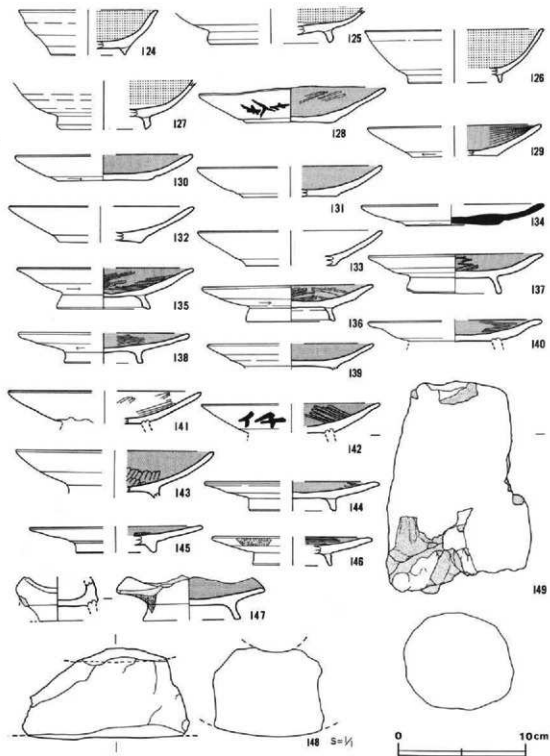
第80图 第7号住居跡出土遺物実測図



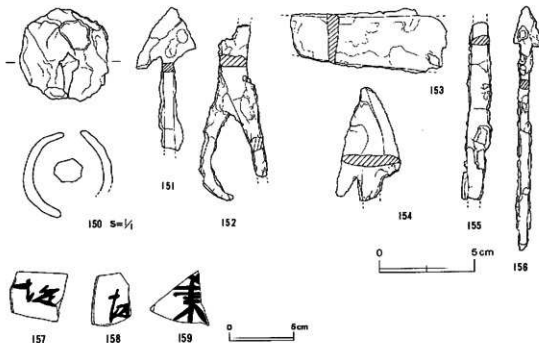
第81图 第7号住居跡出土遺物実測・拓影図



第 82 图 第 7 号住居跡出土遺物実測・拓影图



第83图 第7号住居跡出土遺物実測図



第 84 図 第 7 号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法域 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	産土・色・肉成	備考
第77図 15	甕 土師器	A [21.0] B (10.8)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り。胴部内面へラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 褐色 不良	P15 15% 南東部中央付近
16	甕 土師器	A [19.1] B (10.1)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。頸部内面へラ削り。	砂粒 褐色 普通	P16 15% 中央付近覆土中層
17	甕 土師器	A [18.8] B (5.4)	胴部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰褐色 良	P18 10% 東部中央付近覆土下層
18	甕 土師器	A [19.8] B (6.8)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P17 10% 胴内
19	甕 土師器	A [14.8] B (16.7)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ。胴部外面ト位手持ちへラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P19 20% 南西部中層跡
第78図 20	甕 土師器	A [14.8] B (7.8)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部内・外面及び頸部外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P20 10% 北西部中層覆土下層

図版番号	器種	流量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・灰・砂・磁 備考	
第78図 21	甕 土師器	A [10.8]	胴部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ	砂粒・雲母 に多い橙色 普通	P21 20% 東室中央付近 復土中層
		B (7.3)	胴部は内彎し、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を外上方にわずかにつまみ出す。	胴部内・外面ナデ。		
22	甕 土師器	A [18.8]	頸部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ	砂粒・長石・ 雲母 に多い黄褐色 不良	P22 5% 南東部覆土
		B (5.2)	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。			
23	甕 土師器	B (3.8)	胴部から胴下半部にかけての破片。	胴部外面下位へう削り。胴部内 面ナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母・ 磁 橙黄色 普通	P23 5% 南西部復土
		C [11.4]	胴部は外傾して立ち上がる。			
24	甕 土師器	A [28.8]	胴部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ	砂粒 淡黄褐色 普通	P24 20% 中央部覆土上層
		B (20.8)	胴部はやや外傾して口縁部に至る。口唇部は平直になる。			
25	甕 須恵器	A [32.8]	胴上半部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ	砂粒・長石 灰色 普通	P25 10% 中央部味面
		B (9.1)	胴部はやや外傾して口縁部に至る。口唇部は平直になる。			
26	長頸甕 須恵器	A [11.5]	頸部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ	砂粒 暗紫灰色 良	P26 10% 北東部及び南東部中復土下層
		B (7.7)	頸部は外反して口縁部に至る。口唇部は面をなす。			
27	長頸甕 須恵器	B (7.6)	高台部から胴上半部にかけての破片。	胴部下位回転へう削り。胴部内 面及び底面横ナデ。	砂粒・磁 褐色 普通	P27 30% 南西コーナ 付近覆土下層
		D (8.8)	直立する高台と一緒に なった平底が胴部につく。胴部 は内彎して立ち上がる。			
		E 1.0				
第79図 28	坏 土師器	A 14.0	口縁部一部欠損。底部は平底で、 体部は内彎しながら立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒 橙黄色 普通	P28 95% 南東コーナ 壁際
		B 5.2				
		C 7.0				
29	坏 土師器	A 15.9	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり、口縁部は ほぼ垂直になる。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・雲母 橙黄色 普通	P29 80% 中央部味面
		B 5.3				
		C 8.0				
30	坏 土師器	A 14.4	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり、口縁部は わずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 底部及び体部外面下端予持ちへう 削り。	砂粒・磁 に多い黄褐色 普通	P30 70% 北東部中層覆 土下層
		B 5.4				
		C 6.4				
31	坏 土師器	A 12.6	口縁部一部欠損。底部は平底で、 体部は内彎しながら立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒 灰白色 普通	P32 90% 北東コーナ 付近覆土下層
		B 3.8				
		C 5.4				
32	坏 土師器	A 13.4	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり口縁部に至 る。口唇部は丸い。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・雲母 橙黄色 普通	P33 80% 北東部中層味面
		B 4.2				
		C 5.6				
33	坏 土師器	A 13.0	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり口縁部に至 る。口唇部は丸い。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・雲母 淡黄褐色 良	P34 90% 北西コーナ 付近破線 体部外面側面 体部内面側面上
		B 4.0				
		C 7.0				

図版番号	器種	量量 (cm)	器形の特徴	予法の特徴	土・色調・地味	備考
第79図 34	坏土師器	A [13.8]	口縁部一部欠損。底部は平底で、 体部は内彎しながら立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・雲母・霰 浅黄褐色 普通	P35 70% 南部中央付近 塚下
		B 5.2				
		C 6.5				
35	坏土師器	A [14.9]	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり、口縁部は わずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・雲母 ぶい褐色 普通	P36 60% 中央部塚面
		B 4.3				
		C 8.5				
36	坏土師器	A 13.6	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり、口縁部は わずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒 ぶい褐色 普通	P37 80% 北西部中程塚面 体部外周部開口
		B 4.5				
		C 7.0				
37	坏土師器	A 13.4	底部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり、口縁部に 至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・石英・ 長石・雲母 灰黄色 普通	P38 80% 中央部及び北 東部中程塚面
		B 4.1				
		C 6.1				
38	坏土師器	A 12.9	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり、口縁部は わずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・長石・ 雲母 ぶい褐色 普通	P39 70% 中央部塚面 体部外周部開口
		B 4.3				
		C 6.1				
39	坏土師器	A 13.5	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり口縁部に至 る。口唇部は丸い。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・雲母 浅黄褐色 普通	P40 60% 中央付近塚面
		B 4.5				
		C 6.4				
40	坏土師器	A [13.2]	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり、口縁部は わずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 体部外面下端及び底部手持ちへ う削り。	砂粒・長石・ 雲母 赤褐色 普通	P41 50% 東部中央付近 覆土中層
		B 4.2				
		C 6.0				
41	坏土師器	A [13.8]	底部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり口縁部に至 る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 体部外面下端及び底部手持ちへ う削り。	砂粒・雲母 黒色 普通	P42 60% 南東部中程覆 土中層 体部外面刻書 「字付」
		B 4.5				
		C 6.0				
42	坏土師器	A [13.8]	底部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり口縁部に至 る。口唇部は丸い。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・雲母 ぶい褐色 良	P43 50% 北東部中程覆 土下層
		B 4.0				
		C [7.0]				
43	坏土師器	A [16.8]	底部から口縁部にかけての破片。 底部は平底で、体部は内彎しな がら立ち上がり口縁部に至る。 口唇部は丸い。	外面摩耗。口縁部及び体部外面 横ナデ。体部内面へう磨き後、 黒色処理。体部外面下端及び底 部回転へう削り。	砂粒 褐色 普通	P44 45% 東部中央付近 覆土中層
		B 5.7				
		C [8.0]				
44	坏土師器	A 13.5	底部から口縁部にかけての破片。 底部は平底で、体部は内彎しな がら立ち上がり口縁部に至る。 口唇部は丸い。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・雲母 浅黄褐色 普通	P45 45% 北東コーナ 付近覆土中層
		B 4.3				
		C 6.9				
45	坏土師器	A [13.0]	底部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり、口縁部は わずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・雲母 褐色 良	P46 50% 北東部中程塚面
		B 4.2				
		C [6.4]				
46	坏土師器	A [13.6]	底部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり、口縁部は わずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・雲母 褐色 普通	P47 50% 北東コーナ 付近覆土下層
		B 4.2				
		C [6.4]				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色相・焼成	備考
第79図 47	坏 土師器	A [12.8]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。 口縁部は丸い。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P48 45% 南東部中程覆土
		B 3.7				
		C [6.6]				
48	坏 土師器	A [14.2]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部内面磨耗。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P49 40% 南西部中程覆土下部
		B 3.9				
		C [7.8]				
49	坏 土師器	A [12.6]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。 口縁部は丸い。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 にふい橙色 良	P50 30% 北東部覆土
		B 3.7				
		C [6.2]				
50	坏 土師器	A [14.2]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒 淡黄褐色 普通	P51 25% 南西部及び南東部覆土
		B 4.3				
		C [6.6]				
51	坏 土師器	A [13.0]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。 口縁部は丸い。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 にふい橙色 良	P52 25% 中央部床面
		B 3.9				
		C 5.8				
第80図 32	坏 土師器	A [14.4]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部手持ちへう削り。	砂粒・雲母 淡黄褐色 普通	P53 25% 北西部中程覆土下層
		B 4.3				
		C [6.3]				
53	坏 土師器	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。底部回転へう切後、手持ちへう削り。	砂粒・石英・ 長石・雲母 にふい白色 良	P54 40% 東豊中央付近 覆土下層
		B 4.0				
		C 7.2				
54	坏 土師器	A [13.6]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒 褐色 良	P55 40% 北東コーナー 壁際
		B 4.1				
		C [6.0]				
55	坏 土師器	A [14.2]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部内面磨耗。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P56 40% 北西部中程覆土中層
		B 4.4				
		C 7.0				
56	坏 土師器	A [12.8]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 淡黄褐色 普通	P57 40% 北西部中程覆土下層
		B 4.1				
		C [6.0]				
57	坏 土師器	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 褐色 普通	P58 30% 北東コーナー 壁際
		B 4.2				
		C [6.4]				
58	坏 土師器	A [13.6]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・石英・ 長石・雲母 にふい赤褐色 普通	P59 25% 北西コーナー 壁際
		B 3.8				
		C [7.8]				
59	坏 土師器	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒 褐色 普通	P60 20% 北西部覆土
		B 3.8				
		C [6.8]				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色・画	備考
第80図 60	坏 土師器	A [13.8]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、一部黒色処理、体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒 にふい橙色 普通	P61 30% 北西部中程覆土下層
		B 4.2				
		C [7.2]				
61	坏 土師器	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理、体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P62 20% 中央付近覆土下層
		B 4.3				
		C [6.6]				
62	坏 土師器	A [14.4]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理、体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 にふい橙色 良	P63 20% 中央部覆土下層
		B 4.3				
		C [6.8]				
63	坏 土師器	A [13.3]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理、体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒 にふい橙色 良	P64 25% 北東部中程覆土下層
		B 4.1				
		C [6.6]				
64	坏 土師器	A [13.6]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理、体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 褐色 良	P65 25% 北東部中程覆土下層 体部外面漆付着
		B 4.0				
		C [7.2]				
65	坏 土師器	A [14.3]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理、体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P66 30% 南壁中央部覆土 体部外面漆付着
		B 4.3				
		C 6.0				
66	坏 土師器	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理、体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P67 25% 中央付近覆土下層
		B 4.2				
		C [6.6]				
67	坏 土師器	A [13.6]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理、体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒 褐色 普通	P68 25% 北東部覆土 体部外面漆付着
		B 4.2				
		C [6.2]				
68	坏 土師器	A [14.4]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理、体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 褐色 普通	P69 25% 北東部中程覆土下層
		B 3.9				
		C [7.0]				
69	坏 土師器	A [13.6]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理、体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P70 20% 北壁中央部覆土中層 体部内・外面漆付着
		B 3.9				
		C [5.8]				
70	坏 土師器	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理、底部回転へう切り後、へう削り。	砂粒・石英・雲母 にふい橙色 普通	P71 30% 南西部覆土
		B 4.6				
		C 7.3				
71	坏 土師器	A [14.2]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理、体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P72 25% 中央部覆土下層 体部外面漆付着 「口」付
		B 4.1				
		C [6.8]				
72	坏 土師器	A [13.3]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面摩耗、口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 淡黄褐色 普通	P73 20% 南西部覆土
		B 4.2				
		C [6.0]				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	彩・土質・焼成	備考
第80図 73	土師器	A [14.2]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底面回転へう削り。	砂粒・雲母 にぶい橙褐色	P74 20% 南東部覆土
		B 4.6				
		C [6.2]				
74	土師器	A [13.8]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底面回転へう削り。	砂粒・雲母 浅黄褐色 普通	P75 20% 中央部覆土下層
		B 4.2				
		C [7.2]				
75	土師器	A [13.8]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底面回転へう削り。	砂粒・雲母 浅黄褐色 良	P76 20% 南東部中程覆土中層 体部外面横ナデ
		B 4.3				
		C [6.4]				
76	土師器	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底面回転へう削り。	砂粒・長石 にぶい橙褐色 普通	P77 25% 北東部覆土
		B 4.8				
		C [5.8]				
77	土師器	A [13.8]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底面回転へう削り。	砂粒・雲母 にぶい橙褐色 普通	P78 25% 北東部中程覆土下層
		B 4.3				
		C [7.2]				
78	土師器	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底面回転へう削り。	砂粒 にぶい橙褐色 普通	P79 20% 東部中央部覆土
		B 3.7				
		C [6.0]				
79	土師器	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底面回転へう削り。	砂粒・雲母 にぶい橙褐色 普通	P80 20% 北東部覆土
		B 4.2				
		C [6.0]				
80	土師器	A [13.0]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。底面回転へう削り。	砂粒 明赤褐色 普通	P81 20% 北東部覆土
		B 3.9				
		C [6.0]				
81	土師器	A [13.6]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。 口唇部は丸い。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部内面下端及び底面回転へう削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P82 20% 東部中央付近覆土下層
		B 3.9				
		C [7.0]				
第81図 82	土師器	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底面回転へう削り。	砂粒・雲母 にぶい橙褐色 普通	P83 20% 北東部覆土
		B 4.9				
		C [6.2]				
83	土師器	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底面回転へう削り。	砂粒・雲母 灰褐色 良	P84 20% 南東部中程覆土上層
		B 4.1				
		C [6.4]				
84	土師器	A [13.2]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。 口唇部は丸い。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底面回転へう削り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 良	P85 20% 北東部中程覆土下層
		B 3.6				
		C 6.4				
85	土師器	A [13.8]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	体部外面横ナデ。口縁部及び体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底面回転へう削り。	砂粒 浅黄褐色 普通	P86 20% 北西部中程覆土中層
		B 3.8				
		C [7.6]				
86	土師器	A [14.8]	底部から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底面回転へう削り。	砂粒 浅黄褐色 良	P87 20% 南東部中程覆土中層
		B 4.1				
		C [8.2]				

図番	器種	寸法 (mm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・地味	備考
第87回 87	坏 土師器	A [14.0]	底面から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しな がら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き。体部外面下端 及び底面同転へう削り。	砂粒・雲母 灰色 普通	P88 15% 南西部覆土。
		B 3.7				
		C [6.0]				
88	坏 土師器	A [14.9]	底面から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎しな がら立ち上がり、口縁部はわず かに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底面同転へう 削り。底面摩耗。	砂粒・雲母 暗赤褐色 普通	P89 15% 南西部覆土。
		B 4.6				
		C [5.6]				
89	坏 須恵器	A 13.9	底面から口縁部にかけて一部欠 損。底面は平底で、体部は内彎 気味に立ち上がり、口縁部はわ ずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底面同転へう切り後、同転へう 削り。	砂粒・礫・長石 灰色 普通	P90 80% 北西部中程床 面及び貯蔵穴 内
		B 6.1				
		C 6.3				
90	坏 須恵器	A 14.0	口縁部一部欠損。底面は平底で 体部は外彎して立ち上がり、口 縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底面同転へう切り後、手持ちへ う削り。	砂粒・石英・ 長石 にぶい黄褐色 普通	P91 95% 北西部中程覆 土下層 体部外面塗書 「伍仟」 底面へう削り。
		B 5.4				
		C 6.6				
91	坏 須恵器	A 13.7	底面から口縁部にかけて一部欠 損。底面は平底で、体部は内彎 気味に立ち上がり口縁部に至る。 口唇部は丸い。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底面同転へう切り後、手持ちへ う削り。	砂粒・長石・礫 暗灰黄色 普通	P92 70% 北西部中程床 面同転へう削り。
		B 5.0				
		C 7.0				
92	坏 須恵器	A [13.3]	底面から口縁部にかけての破片。 底面は平底で、体部は内彎しな がら立ち上がり、口縁部はわず かに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底面同転へう切り後、同転へう 削り。	砂粒 明オリーブ灰色 普通	P93 40% 柱穴(P ₁)内
		B 5.1				
		C 6.2				
93	坏 須恵器	A [13.8]	底面から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎気味 に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底面同転へう切り。	砂粒・雲母 淡黄色 普通	P94 30% 南西部中程覆 土下層 体部外面塗書 「壹仟」
		B 5.5				
		C [6.4]				
94	坏 須恵器	A [12.5]	底面から口縁部にかけての破片。 底面は平底で、体部は内彎気味 に立ち上がり、口縁部はわず かに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底面同転へう切り。	砂粒・長石・礫 灰白色 普通	P95 30% 北東コーナ 付近覆土中層
		B 4.9				
		C [6.2]				
95	坏 須恵器	A [13.0]	底面から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は外彎して 立ち上がり、口縁部はわずかに 外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰黄色 普通	P96 20% 壺内及び北西部 中程覆土下層 体部外面塗書「大」
		B 4.5				
		C [6.4]				
96	坏 須恵器	A [13.6]	底面から口縁部にかけての破片 底面は平底で、体部は内彎気味 に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底面同転へう削り。	砂粒・雲母 淡黄色 普通	P97 20% 南西部覆土 体部外面塗書 「壹東」
		B 4.5				
		C [6.2]				
97	高台付 土師器	A [17.7]	高台部から口縁部にかけて一部 欠損。高台部は「ハ」の字状に 開き。底面は平底で、体部は内 彎しながら立ち上がり、口縁部 はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底面同転へう 削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙黄色 普通	P98 50% 北東部中程覆 土下層 体部外面塗書
		B 7.1				
		D 10.3				
		E 1.3				
98	高台付 土師器	A [15.4]	体部から口縁部にかけて一部欠 損。高台部は「ハ」の字状に開 き。底面は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり口縁部に至 る。口唇部は丸い。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底面同転へう 削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙黄色 普通	P99 50% 北西部中程覆 土下層 体部外面塗書
		B 6.2				
		D [8.6]				
		E 1.5				
99	高台付 土師器	A [14.4]	高台部から口縁部にかけて一部 欠損。高台部は「ハ」の字状に 開き。底面は平底で、体部は内 彎しながら立ち上がり、口縁部 はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底面同転へう 削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 淡黄褐色 普通	P100 55% 北東部中程覆 土下層 体部外面塗書
		B 4.7				
		D [7.4]				
		E 1.0				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装飾	備考
第81図 100	高台付環土師器	A [16.4]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部はやや足高で「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 浅黄褐色 良	P101 45% 北西部中程覆土下層
		B 5.9				
		D 9.0				
		E 2.1				
第82図 101	高台付環土師器	A [14.8]	高台部から口縁部にかけて一部欠損。「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部内面厚耗。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 ぶい橙褐色 普通	P102 30% 北西部中程覆土下層及び北西部コーナー付近覆土上層
		B 5.4				
		D 8.0				
		E 1.2				
102	高台付環土師器	A 12.4	高台部欠損。体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面厚耗。体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。底部回転へう削り。	砂粒・石英・長石・雲母 浅黄褐色 普通	P103 70% 東豊中央付近及び西南部中程覆土下層 体部外面横ナデ付
		B (4.0)				
103	高台付環土師器	A [15.0]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 ぶい橙褐色 普通	P104 30% 東豊中央付近及び西南部中程覆土下層 体部外面横ナデ付 底部へう削りノ
		B 5.6				
		D [7.8]				
		E 1.1				
104	高台付環土師器	A [14.8]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 ぶい橙褐色 普通	P105 30% 中央付近覆土下層
		B 5.2				
		D [8.4]				
		E 1.7				
105	高台付環土師器	B (3.9)	高台部から体部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 浅黄褐色 普通	P106 30% 東豊中央付近及び西南部中程覆土下層 底部へう削りノ
		D [8.8]				
		E 1.4				
106	高台付環土師器	A [16.0]	底部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。	砂粒・雲母 ぶい橙褐色 良	P107 30% 南東部中程覆土下層
		B (4.1)				
107	高台付環土師器	A [12.8]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 ぶい橙褐色 普通	P108 25% 北西部覆土 体部外面横ナデ付
		B (4.2)				
108	高台付環土師器	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 ぶい橙褐色 普通	P109 30% 北東部中程覆土上層
		B (4.9)				
109	高台付環土師器	A 12.0	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。	砂粒 灰白色 良	P110 30% 北西部中程覆土下層 体部外面横ナデ付
		B (4.1)				
110	高台付環土師器	B (4.9)	高台部から体部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 ぶい黄褐色 普通	P111 40% 南西部覆土
		D [7.7]				
		E 1.5				
111	高台付環土師器	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒 ぶい黄褐色 普通	P112 40% 北東部中程覆土下層
		B (4.1)				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 112	高台付土師器	A [13.4] B (4.5)	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へラ削り。	砂粒・雲母 灰白色 良	P113 30% 西壁中央付近 覆土中層
113	高台付土師器	A [14.6] B (3.9)	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き後、黒色処理。底部回転へラ削り。	砂粒 褐色 普通	P114 25% 北西コーナー 付近覆土下層
114	高台付土師器	A [16.0] B 5.8 D 8.0 E 1.4	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び底部及び体部外面下端回転へラ削り。体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き後、黒色処理。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 にぶい褐色 良	P115 25% 南東部中層覆 土下層
115	高台付土師器	A [12.7] B 4.7 D [7.6] E 1.1	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へラ削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P116 20% 北西部中層覆 土下層
116	高台付土師器	A [14.2] B 5.4 D [8.4] E 1.4	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き後、黒色処理。体部外面下端回転へラ削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 褐色 普通	P117 20% 南東部コーナ 部壁際
117	高台付土師器	A [11.8] B (4.1)	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へラ削り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P118 20% 西壁中央付近 覆土下層
118	高台付土師器	A [15.4] B 4.2 D [7.6] E 0.8	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部わずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へラ削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 雲母 普通	P119 15% 中央部中層覆 土下層
119	高台付須恵器	B (3.4) D 8.2 E 0.9	高台部から体部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。体部外面下端及び底部回転へラ削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石・ 雲母 灰白色 普通	P120 40% 中央付近覆土 下層
120	高台付須恵器	B (4.0) D 8.1 E 1.0	高台部から体部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転へラ削り。体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石・ 雲母 灰白色 普通	P121 30% 覆土 壁際へラ削り
121	碗 陶器	A [14.1] B 4.7 D [6.3] E 0.7	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は三日月高台で、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端及び底部回転へラ削り。体部内面灰輪施軸。	砂粒 (胎土)灰白色 (灰軸)オリ ブ灰色 普通	P122 50% 南東部覆土
122	碗 陶器	A [16.6] B 5.4 D 8.0 E 1.0	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は三日月高台で、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端及び底部回転へラ削り。体部内面灰輪施軸。	砂粒 (胎土)灰白色 (灰軸)オリ ブ黄色 普通	P123 30% 北西部中層覆 土下層
123	碗 陶器	A [15.2] B 5.1 D [6.2] E 0.9	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は三日月高台で、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端回転へラ削り。体部内・外面灰輪施軸。	砂粒 (胎土)灰白色 (灰軸)オリ ブ灰色 普通	P124 30% 南西部覆土

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第83図 124	陶器	A [11.0]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は断面二等辺三角形状の高台で、底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へり削り。高台貼り付け後、ナデ。体部内面全体に灰輪施軸。	砂粒 (胎土)灰白色 (灰輪)明緑灰色 良	P125 40% 中央付近覆土 下層
		B 3.7				
		D [6.0]				
		F 0.7				
125	陶器	B [(2.7)	高台部から体部にかけての破片。高台部は二日月高台で、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。体部外面下端及び底部回転へり削り。高台貼り付け後、ナデ。体部内面灰輪施軸。	砂粒 (胎土)灰白色 (灰輪)灰オリーブ灰色 普通	P126 20% 北西部中層覆土 下層
		D [9.4]				
		E 1.0				
126	陶器	A [14.0]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は二日月高台で、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端及び底部回転へり削り。高台貼り付け後、ナデ。体部内面灰輪施軸。	砂粒 (胎土)灰白色 (灰輪)灰オリーブ色 普通	P127 20% 南東部覆土
		B 4.3				
		D [7.2]				
		E 0.7				
127	陶器	B [(4.0)	高台部から体部にかけての破片。高台部は二日月高台で、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。体部外面下端及び底部回転へり削り。高台貼り付け後、ナデ。体部内面灰輪施軸。	砂粒・礫 (胎土)灰白色 (灰輪)オリーブ灰色 普通	P128 15% 南東部覆土
		D [7.0]				
		E 1.1				
128	土師器	A 14.9	完形。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へり磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へり削り。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P129 100% 南東コーナー 中層 北東部中層
		B 2.9				
		C 7.0				
129	土師器	A [13.6]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へり磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へり削り。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 良	P130 40% 北東コーナー 付近覆土下層
		B 2.5				
		C [6.8]				
130	土師器	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へり磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へり削り。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P131 40% 南東部覆土
		B 2.1				
		C 7.2				
131	土師器	A [14.6]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へり磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へり削り。	砂粒・雲母・礫 淡黄褐色 普通	P132 25% 東壁中央部壁部
		B 2.5				
		C [7.6]				
132	土師器	A [14.5]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へり磨き。体部内・外面磨耗。体部外面下端及び底部回転へり削り。	砂粒 褐色 普通	P133 25% 東壁中央付近 覆土下層
		B 3.0				
		C [6.6]				
133	土師器	A [14.6]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へり磨き。体部外面下端及び底部回転へり削り。	砂粒・雲母 普通	P134 15% 中央付近覆土 下層
		B 2.8				
		C [7.2]				
134	須恵器	A [14.4]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へり削り。	粒・長石・雲母 普通	P135 40% 中央付近覆土 下層
		B 1.7				
		C [7.4]				
135	灰台付 土師器	A [14.0]	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へり磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へり削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 にぶい褐色 良	P136 80% 東壁中央付近 覆土中層 体部内面付着
		B 3.3				
		D 7.3				
		E 1.1				

図版番号	器種	量量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・釉薬・焼成	備考
136	高台付皿 土師器	A 13.5	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部外面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 浅黄褐色 普通	P137 90% 北東コーナー 付近覆土下層
		B 3.0				
		D 7.0				
		E 1.1				
137	高台付皿 土師器	A 13.7	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P138 70% 南西海中程覆 土下層
		B 3.3				
		D 7.4				
		E 1.2				
138	高台付皿 土師器	A [13.4]	高台部から口縁部にかけて一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P139 60% 北西コーナー 惣類
		B 4.4				
		D [6.2]				
		E 0.8				
139	高台付皿 土師器	A [13.0]	高台部欠損。体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び全体が摩耗。体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 浅黄褐色 普通	P140 60% 壺内及び北西 コーナー付近 覆土下層
		B (2.1)				
140	高台付皿 土師器	A [13.4]	高台部欠損。底部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり、口縁部は内反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 浅黄褐色 普通	P141 50% 北西部中程覆 土下層
		B (1.7)				
141	高台付皿 土師器	A [15.4]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き。底部回転へう削り。	砂粒 褐色 普通	P142 20% 南東部中程覆 土下層
		B (2.6)				
142	高台付皿 土師器	A [14.2]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 褐色 普通	P143 20% 南東部覆土 体部外縁部付
		B (2.3)				
143	高台付皿 土師器	A [15.8]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内傾気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P144 20% 北西部中程土 面
		B (3.8)				
		E (1.0)				
144	高台付皿 土師器	A [13.6]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 褐色 普通	P145 20% 北東部中程覆 土下層
		B 2.4				
		D [6.8]				
		E 1.0				
145	高台付皿 土師器	A [13.8]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 褐色 普通	P146 20% 北西部覆土
		B 2.1				
		D [6.2]				
		E 0.8				
146	高台付皿 土師器	A [12.6]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 褐色 普通	P147 15% 南西部覆土 体部外面付着
		B 2.3				
		D [6.2]				
		E 1.0				
147	耳皿 土師器	長径 11.9	高台部から口縁部にかけて一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は丸く折り曲げられている。	口縁部及び体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面及び底部へう磨き。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 良	P148 60% 北東コーナー 付近覆土中層 体部外面付着
		短径 6.6				

図版番号	器 種	法 量					出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)		
第88図 148	羽 口	(4.7)	-	-	23.4	-	覆土	羽口片 DP1

図版番号	器 種	石 質	法 量				出 土 地 点	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第83図149	支 脚	越前青瓦粘	(17.1)	(11.5)	-	(715.0)	北西部中程覆土下層	Q1

図版番号	器 種	法 量				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第84図150	鈴	2.6	2.4	2.3	9.4	中央付近覆土下層	鉄製 M1
151	鏝	(7.7)	(3.0)	0.5	(16.3)	北東コーナー壁際	鉄製 M2
152	不明	(9.4)	(3.6)	0.7	(16.1)	北西部覆土	鉄製 M3
153	鏝	(8.4)	(3.4)	0.5	(32.6)	覆土	鉄製 M4
154	鏝	(6.0)	(3.4)	0.7	(18.8)	北東コーナー壁際	鉄製 M5
155	刀 子	(9.5)	1.4	0.5	(10.1)	南東部覆土	鉄製 M6
156	鏝	(13.0)	1.5	0.5	(13.7)	北西部覆土	鉄製 M7

図版番号	出土文字	種 別	器 種	部 位	備 考
第84図157	埴	土師器	環	体部外面	P 241 内面黒色処理 体部から1縁部にかけての破片 覆土
158	埴	土師器	環	体部外面	P 242 内面黒色処理 体部から口縁部にかけての破片 覆土
159	東	土師器	環	体部外面	P 243 内面黒色処理 体部片 覆土

第8号住居跡(第85・86図)

位置 調査区の南東部、B2₁₀区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南壁は第9号住居跡及び第4号溝に、南西コーナー付近は第3号溝に、北東部は第22号上杭に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.70m、短軸4.08mの長方形を呈している。

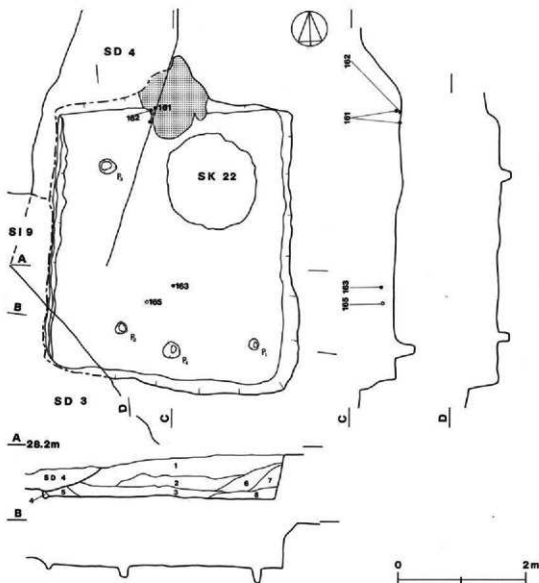
主軸方向 N-2°-E

壁 壁高は57～72cmで、垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 4か所(P₁～P₄)検出されている。P₁～P₃は、径16～29cmの円形を呈し、深さ16～23cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。P₄は、径26cmの円形を呈し、深さ31cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。

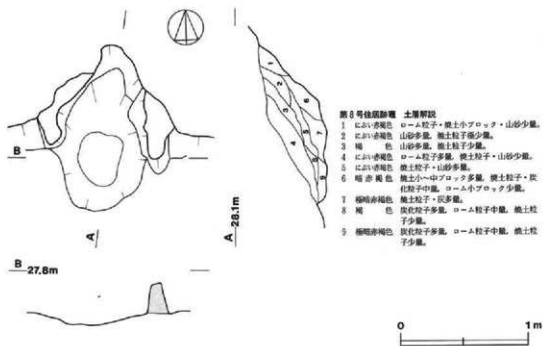
竈 北壁中央を約65cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ134cm、幅110cmである。天井部は崩落しているが、両袖部がわずかに遺存している。火床は、床面が約10cm掘り窪められているが、あまり焼けていない。煙道は、火床から急角度で外傾して立ち上がっている。



第8号住居跡 土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小へ中ブロック・炭化粒子少量。
- 3 暗赤褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化材・山砂少量。
- 4 褐色 ローム土多量。
- 5 灰白・褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子極少量。
- 6 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子極少量。
- 7 灰白・暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子極少量。
- 8 暗赤褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量。

第85図 第8号住居跡実測・遺物出土位置図



第86図 第8号住居跡竈実測図

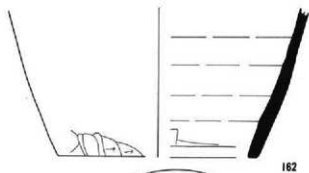
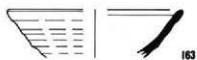
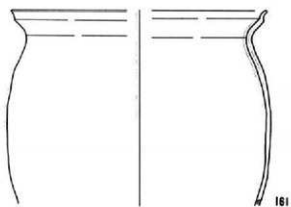
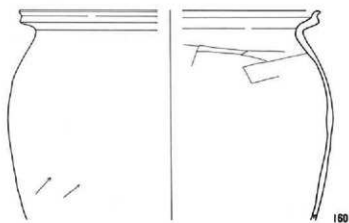
覆土 自然堆積。

遺物 覆土の下層・中層から土師器片（甕2、高台付皿1）、土師器の細片（302点）、須恵器片（甕1、坏1）、須恵器の細片（64点）、土製品（球状土錘1点）、鉄滓（8点）等が出土している。160・161の土師器の甕、162の須恵器の甕は竈内から、163の須恵器の坏は南東部中程の覆土中層から、164の土師器の高台付皿は北東部の覆土からそれぞれ出土している。165の球状土錘は南西部中程の覆土中層から出土している。

所見 本跡は、重複関係から第9号住居跡、第3・4号溝及び第22号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第87図 160	甕 土師器	A [24.0] B (18.0)	胴部から口縁部にかけての破片。 胴部は内彎しながら立ち上がり、 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部は外傾する。口唇部を外 上方につまみ出す。	口縁部・頸部内・外面及び胴部 外面横ナデ。胴部外面下位手持 ちへう削り。胴部内面へラナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母・燧 褐色 普通	P149 10% 竈内
161	甕 土師器	A [20.2] B (15.8)	胴部から口縁部にかけての破片。 胴部は内彎しながら立ち上がり、 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部は外傾する。口唇部を外 上方につまみ出す。	口縁部・頸部内・外面及び胴部 外面横ナデ。胴部内面へラナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母 明赤褐色 普通	P150 10% 竈内



185
s-1/2



第 87 图 第 8 号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・B類・地味	備考
第87図 162	甕 須恵器	B (12.0) C (16.2)	底部から胴部にかけての破片。 胴部は外傾して立ち上がる。	胴部内・外面横ナデ。胴部内・ 外面下位手持ちへラ削り。	砂粒・灰石 灰色 普通	P151 10% 壺内
163	坏 須恵器	A (14.0) B (3.9)	体部から口縁部にかけての破片。 体部はやや内彎気味に立ち上がり 口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒 灰黄色 普通	P152 15% 南東部中層覆 土中層
164	高台付皿 土師器	A (12.8) B 3.0 D (6.0) E 1.3	高台部から口縁部にかけての破 片。高台部は「ハ」の字状に割 き、底部は平底で、体部は大き く外傾して立ち上がり、口縁部 はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へラ磨き後、黒色処理。 高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P153 20% 北東部覆土

図版番号	器種	法 量					出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)		
第87図 165	球状土師	2.5	2.4	-	18.5	0.6	南西部中層覆土中層	DP2

図版番号	墨書文字	種別	器種	部位	備考
第87図166	向家	土師器	坏	体部外面	P245 内面黒色処理 体部から口縁部にかけての破片 覆土
167	堤	土師器	坏	体部外面	P246 内面黒色処理 体部から口縁部にかけての破片 覆土

第9号住居跡 (第88図)

位置 調査区の南東部、B2is区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の中央部は北西から南東にかけて第3号溝に、北東部は第33号土坑に掘り込まれ、東壁は第8号住居跡を、西壁は第10号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.92m、短軸3.27mであるが、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は20～30cmで、垂直に立ち上がっている。東西両壁は重複により消失している。

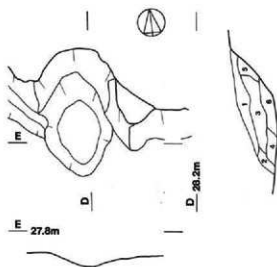
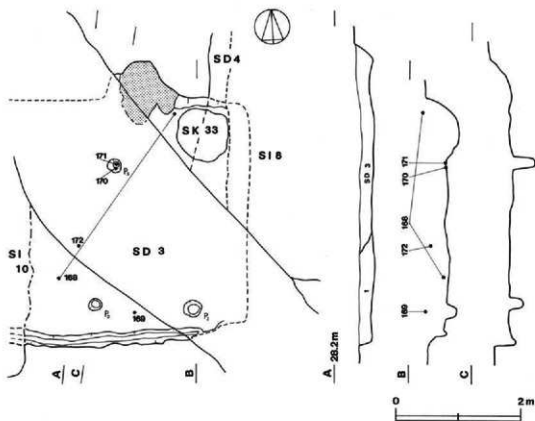
壁溝 南壁下に検出されている。上幅10～12cm、深さ11cmで、断面形は「U」字状を呈している。

床 平坦で、踏み固められ硬い。北西コーナーから南東コーナーにかけては第3号溝の溝底が確認されている。

ピット 3か所 (P1～P3) 検出されている。P1～P3は、径22～30cmの円形を呈し、深さ18～36cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

竈 北壁中央を約53cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ103cm、幅122cmである。天井部は崩落しているが、袖部がわずかに遺存している。火床は、床面が約6cm掘り窪められているが、あまり焼けていない。煙道は、火床から外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。



第9号住居跡 土層解説

1 褐色 ローム粒子少量、白色粘土粒子極少量。

第9号住居跡礎 土層解説

1 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・山砂少量。

2 暗褐色 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量。

3 暗赤褐色 焼土小〜中ブロック多量、焼土粒子中量、ローム粒子少量。

4 暗赤褐色 山砂多量、焼土粒子中量、ローム粒子少量。

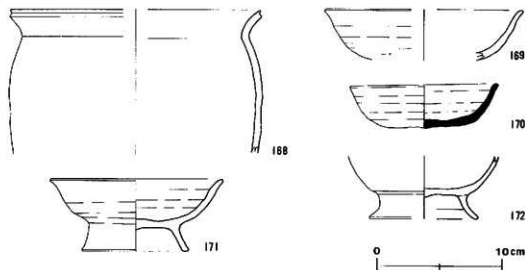
5 暗赤褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量、焼土粒子少量。

6 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量。

第88図 第9号住居跡・窠突測・遺物出土位置図

遺物 覆上下層から土師器片(甕1, 坏2, 高台付坏2), 土師器の細片(120点), 須恵器の細片(3点), 鉄滓(4点)等が出土している。168の土師器の甕は北壁中央付近の覆土上層及び南西コーナー付近の覆土下層から, 169の土師器の坏は南壁中央付近の覆土上層から, 170の須恵器の坏, 171の土師器の高台付坏は柱穴(P₃)内からそれぞれ出土している。

所見 本跡は, 重複関係から第8・10号住居跡より新しく, 第33号土坑, 第3号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第89図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地肌	備考
第89図 168	甕 土師器	A [20.0]	胴部から口縁部にかけての破片。 胴部は内彎しながら立ち上がり、 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部は外反する。口頸部を外 上方につまみ出す。	口縁部・頸部及び胴部上位内・ 外面横ナデ。	砂粒・石英・ 雲母 にふい橙色 普通	P154 10% 竈内
		B (11.7)				
169	坏 土師器	A [15.8]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎しながら立ち上がり、 口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 体部外面下端回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P157 20% 竈内
		B (4.1)				
170	坏 須恵器	A 11.8	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 気味に立ち上がり、口縁部はわ ずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・ 長石・雲母 にふい橙色 普通	P156 80% 柱穴(P ₃)内
		B 3.6				
		C 7.0				
171	高台付坏 土師器	A 13.9	体部から口縁部にかけて一部欠 損。高台部は足高で「ハ」の字 状に開き、底部は平底で、体部 は内彎気味に立ち上がり、口縁 部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 体部外面下端及び底部回転ヘラ 削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母 淡黄橙色 普通	P158 90% 柱穴(P ₃)内
		B 5.9				
		D 8.4				
		E 2.1				

図録番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色澤・成成	備考
第88図 172	高台付鉢 土師器	B (5.1) D 8.6 E 2.0	高台部から体部にかけての破片。高台部は足高で下半が外反し「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。体部外面下端回転へう削り。底面回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・赤母 におい黄褐色 普通	P159 20% 壺内

第10号住居跡 (第90・91図)

位置 調査区の南東部、B2i区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北東コーナーは第3号溝に、東壁の上部は第9号住居跡に掘り込まれている。

西壁中央から北部は第11号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 7.13 m, 短軸 5.96 m の長方形を呈している。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は 29 ~ 50 cm で、垂直に立ち上がっている。

壁溝 東壁下、南壁下の東部及び北壁下の西部に検出されている。上幅 20 ~ 22 cm, 深さ 5 ~ 10 cm で、断面形は「U」字状を呈している。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

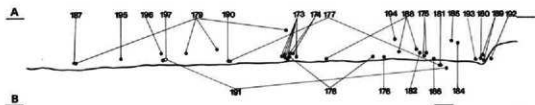
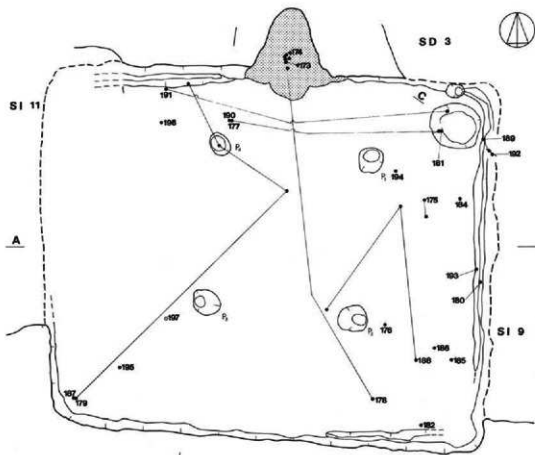
ピット 4か所 (P₁ ~ P₄) 検出されている。P₁ ~ P₄ は、径 28 ~ 48 cm の円形を呈し、深さ 64 ~ 77 cm で、規模や配列から支柱穴と考えられる。

竈 北壁中央を約 101 cm 壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ 148 cm, 幅 132 cm である。天井部は崩落しているが、両袖部がわずかに遺存している。火床は、床面が約 5 cm 掘り窪められており、熱をうけて赤変硬化している。煙道は、火床から外傾して立ち上がっている。

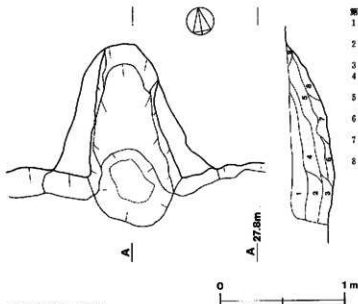
貯蔵穴 北東コーナーに検出されている。平面形は、径約 80 cm の円形を呈し、深さ 33 cm である。底面は凸凹で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土の下層・中層から土師器片 (甕 4, 坏 8, 高台付鉢 1, 高台付皿 2), 土師器の細片 (601 点), 須恵器片 (甕 2, 長頸壺 1, 坏 3), 須恵器の細片 (128 点), 鉄滓 (7 点), 土製品 (紡錘車 1 点, 支脚片 6 点), 土師質土器 (火舎 1 点) 等が出土している。173・174 の土師器の甕は壺内から、177 の須恵器の甕は貯蔵穴内から、178 の須恵器の甕は壺内及び南東コーナー付近の床面から、181 の土師器の坏は貯蔵穴内から、182 の土師器の坏は南東コーナーの壁下から、189 の須恵器の坏は北東コーナーの壁下から、193 の土師器の高台付皿は東壁中央部の壁下から、192 の灰袖陶器の碗は北東コーナー付近の壁下からそれぞれ出土している。197 の紡錘車は南西部中程の床面から出土している。



第90図 第10号住居跡実測・遺物出土位置図



第10号住居跡 土層解説

- 1 褐色 rome粒子多量、粘土粒子少量、焼土粒子・焼上小ブロック少量。
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・焼土粒・焼上小ブロック多量、rome粒子少量。
- 3 暗赤褐色 炭化粒子・焼土粒子・焼上小ブロック多量、硝子粒子少量。
- 4 K.灰白色 粘土粒子・焼土粒子・焼上小ブロック多量、rome粒子・rome小ブロック・灰中量。
- 5 暗赤褐色 焼土粒子・焼上小ブロック多量、灰・炭化粒中量。
- 6 暗赤褐色 焼土粒子・焼上小ブロック多量、灰中量。
- 7 暗赤褐色 粘土粒子・焼土粒子・焼上小ブロック多量。
- 8 K.灰白色 焼土粒子多量、硝子粒子少量、炭化粒子少量。
- 9 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量。

第10号住居跡 土層解説

- 1 暗赤褐色 rome粒子多量、rome小ブロック中量、炭化粒子少量。
- 2 褐色 rome粒子多量、rome小ブロック・炭化粒少量。
- 3 K.灰白色 rome粒多量、炭化粒子少量。
- 4 暗赤褐色 rome粒子多量、rome小ブロック・炭化粒子少量。
- 5 K.灰白色 rome粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子極少量。
- 6 褐色 rome粒子・rome小ブロック中量。
- 7 暗赤褐色 山形・焼土粒子中量、rome粒子少量。
- 8 褐色 rome粒子少量。

第10号住居跡貯蔵穴 土層解説

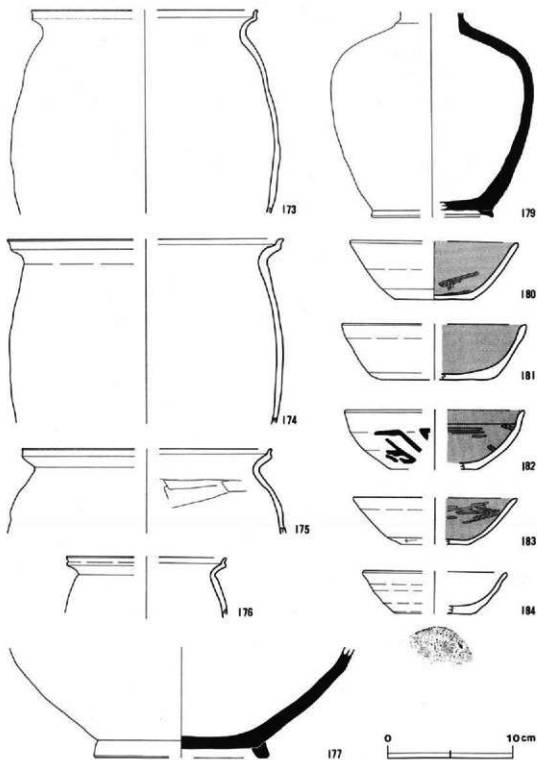
- 1 K.灰白色 rome粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量。
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子中量、rome粒子少量。
- 3 暗赤褐色 rome粒子中量、粘土粒子少量、焼上粒子少量。
- 4 褐色 rome粒子・rome小ブロック中量、炭化粒子少量。

第91図 第10号住居跡竪実測図

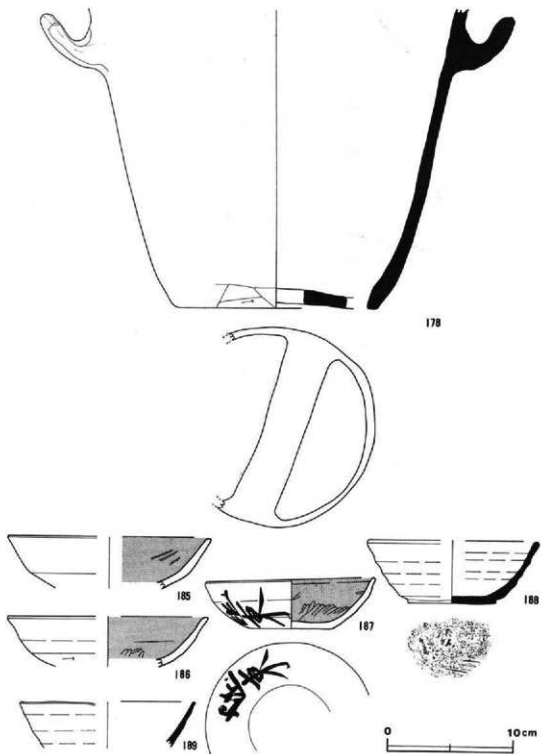
所見 本跡は、重複関係から第11号住居跡より新しく、第9号住居跡及び第3号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第10号住居跡出土遺物観察表

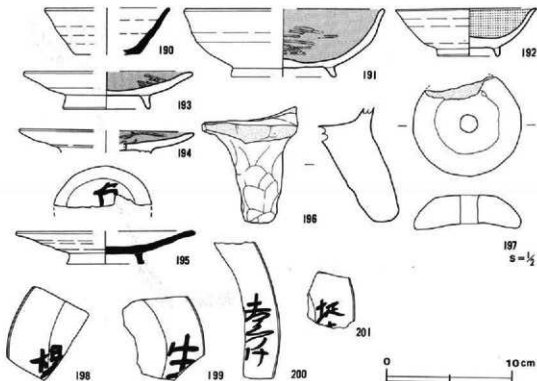
図版番号	器種	法量 (cm)	器影の特徴	手法の特徴	粒土・色調・焼成	備考
第92図 173	甕 上陶器	A [18.0]	胴部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母 淡黄褐色 普通	P160 15% 壺内
		B (16.5)	胴部は内彎しながら立ち上がり、 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部は外傾する。口唇部を外 上方につまみ出す。	胴部内・外面横ナデ。		
174	甕 上陶器	A [22.2]	胴部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・ 雲母 橙褐色 普通	P161 10% 壺内
		B (14.9)	胴部は内彎しながら立ち上がり、 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部は外傾する。口唇部を外 上方につまみ出す。	胴部内・外面ヘラナデ。		
175	甕 上陶器	A [20.0]	胴上半分から口縁部にかけての 破片。胴部は内彎しながら立ち 上がり、頸部は「く」の字状に 屈曲し、口縁部は外傾する。口 唇部を外上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母 灰褐色 普通	P162 10% 北東部中程度 上下割
		B (6.9)				



第 92 图 第 10 号住居跡出土遺物実測・拓影図



第93图 第10号住居跡出土遺物実測・拓影図



第94図 第10号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地味	備考
第92図 176	甕 土師器	A [12.8] B < 4.9)	胴上半分から口縁部にかけての破片。胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ。	砂粒・石英・雲母 褐色 普通	P163 10% 南東部中層覆土下層
177	甕 須恵器	B (9.0) D [14.0] E 1.4	高台部から胴下半部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部内・外面横ナデ。底部ナデ。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	P164 15% 貯蔵穴内
第93図 178	甕 須恵器	B (24.6) C 16.0	底部から胴部にかけての破片。底部は2孔式で、胴部は外傾して立ち上がる。	胴部内・外面横ナデ。胴部下端内・外面手持りヘラ削り。	砂粒 灰色 普通	P165 20% 甕内及び南東コーナー付近床面
第92図 179	長頸甕 須恵器	B (16.9) D 9.7 E 0.6	高台部から胴部にかけての破片。高台部は短く「ハ」の字状に開き、底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がり、上位に最大径を持つ。	胴部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 灰褐色 良	P166 30% 北西コーナー壁際
180	坏 土師器	A [13.0] B 4.7 C 6.1	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 淡黄褐色 普通	P167 55% 東壁中央部壁下

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色層・磁粒	備考
第92図 181	環 土師器	A [14.6]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎気味 に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へラ磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へラ 削り。	砂粒・長石・ 雲母 褐色 普通	P169 10% 貯蔵穴内
		B 4.5				
		C [8.6]				
182	環 土師器	A [14.4]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎しな がら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へラ磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へラ 削り。	砂粒・雲母 褐色 普通	P170 20% 南東コーナ ー壁際 体部外面塗書 「工」
		B 4.8				
		C [6.8]				
183	環 土師器	A [15.0]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎気味 に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へラ磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へラ 削り。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P171 20% 南東部覆土
		B 3.8				
		C [5.4]				
184	環 土師器	A [11.6]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は内彎気味 に立ち上がり、口縁部はわずかに 外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 底部回転へラ削り。	砂粒・長石 褐色 普通	P172 25% 北西部中程覆 土土層
		B 4.4				
		C [6.0]				
第93図 185	環 土師器	A [16.2]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎気味に立ち上がり口 縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部外面下端回転へラ削り。体部 内面へラ磨き後、黒色処理。	砂粒 褐色 普通	P173 20% 南東コーナ ー付近覆土土層
		B (4.3)				
186	環 土師器	A [15.8]	体部から口縁部にかけての破片 体部は内彎しながら立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部外面下端回転へラ削り。体部 内面へラ磨き後、黒色処理。	砂粒 褐色 普通	P174 20% 南東コーナ ー付近覆土下層
		B (4.1)				
187	環 土師器	A 13.4	口縁部一部欠損。底部は平底で、 体部は内彎しながら立ち上がり 口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へラ磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へラ 削り。	砂粒・長石・ 雲母 褐色 普通	P31 80% 南西コーナ ー壁際 体部外面塗書 「屋敷」
		B 4.2				
		C 6.6				
188	環 須恵器	A [13.2]	底部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 底部回転へラ削り。	砂粒 淡黄色 普通	P168 30% 南東部中程覆 土土層
		B 5.1				
		C 7.0				
189	環 須恵器	A [13.8]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は外傾して立ち上がり口縁 部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・ 雲母 灰色	P175 15% 北東コーナ ー壁際
		B (3.7)				
第94図 190	環 須恵器	A [10.0]	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は外傾して 立ち上がり、口縁部はわずかに 外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 底部回転へラ削り。	砂粒・長石 黄灰色 普通	P176 20% 北西部中程覆 土土層
		B 3.8				
		C [5.0]				
191	高台付牙 土師器	A [15.8]	高台部から口縁部にかけての破片。 高台部は「ハ」の字状に開 き、底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり口縁部に至 る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へラ磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へラ 削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 淡黄褐色 普通	P177 25% 壺内及び北東 コーナ付近 床面
		B 5.5				
		D [8.3]				
		E 0.8				
192	碗 須恵器	A 11.3	体部から口縁部にかけて一部欠 損。高台部は「ハ」の字状に開 き、底部は平底で、体部は内彎 しながら立ち上がり口縁部に至 る。口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 体部外面下端及び底部回転へラ 削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石 (粘土)灰白色 (灰箱)オリ ブ黄色 良	P178 70% 北東及び北東 コーナ付近 壁際
		B 3.9				
		D 4.9				
		E 0.8				
193	高台付土 師器	A [13.5]	体部から口縁部にかけて一部欠 損。高台部は「ハ」の字状に開 き、底部は平底で、体部は大き く外傾して立ち上がり口縁部に 至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へラ磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へラ 削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 淡黄褐色 普通	P179 50% 東部中央部壁 際
		B 3.1				
		D 6.8				
		E 1.0				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・産地	備考
第94図 194	高台付皿 1脚器	A [13.9]	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び体部外面横ナデ。体	砂粒・石英・ 長石・雲母 褐色 普通	P180 30% 北東部中程覆 上層 武部遺構「U」
		B (1.9)	底部は平底で、体部は大きく外	部内面へう磨き後、黒色処理。		
		E (0.4)	傾して立ち上がり口縁部に至る。	体部外面下端及び底部回転へう 削り。高台貼り付け後、ナデ。		
195	高台付皿 須臾器	A [14.2]	高台部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・骨・長石 暗灰黄色 普通	P181 30% 南西コーナ 付近覆土中層
		B 2.5	高台部は「へ」の字状に開	底部回転へう削り。高台貼り付		
		D 6.0	き、底部は平底で、体部は大き	け後、ナデ。		
		E 0.9	く外傾して立ち上がり、口縁部 はわずかに外反する。			
196	火舎 (須臾器)	B (9.3)	脚部片。3足と思われる火舎の 脚部。やや外に開いて設置する。	手ずくねの粘土の塊で作った脚 部を貼り付けている。	砂粒・石英・ 長石・雲母 褐色 普通	P182 5% 北西コーナ 付近覆土中層

図版番号	器種	法量					出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)		
第94図 197	粘刺串	5.7		1.8	(56.2)	0.8	南西部中程床面	DP1 須臾質 薄欠損

図版番号	墨書文字	種別	器種	部位	備考	
第94図198	境	土師器	坏	体部外面	P247 内面黒色処理	体部から口縁部にかけての破片 北東コーナ一部覆土下層
199	牛	1脚器	坏	体部外面	P248 体部から口縁部にかけての破片	覆土
200	煮付	土師器	坏	口縁部外面	P249 内面黒色処理	11編部片 北東コーナ一部覆土下層
201	境東	土師器	坏	体部外面	P251 内面黒色処理	体部から口縁部にかけての破片 北西コーナ一部覆土下層

第11号住居跡 (第95図)

位置 調査区の南東部、B2hs区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東壁は、第10号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.77m、短軸4.63mの方形を呈している。

主軸方向 N-6°-E

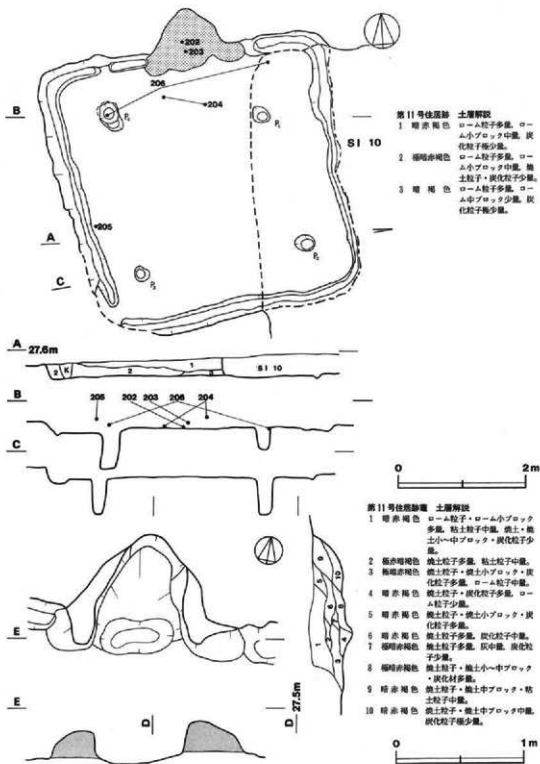
壁 壁高は18~28cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 南西コーナーのごく一部を除き回っている。上幅7~30cm、深さ4~6cmで、断面形は「U」字状を呈している。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 4か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁~P₄は、径21~51cmの円形を呈し、深さ35~58cmで、規模や配列から支柱穴と考えられる。

竈 北壁中央を約75cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ96cm、幅157cmである。天井部は崩落しているが、両袖の一部が遺存している。火床は、床面が約7cm掘り窪められており、熱をうけているがあまり焼けていない。煙道は、火床から外傾して立ち上



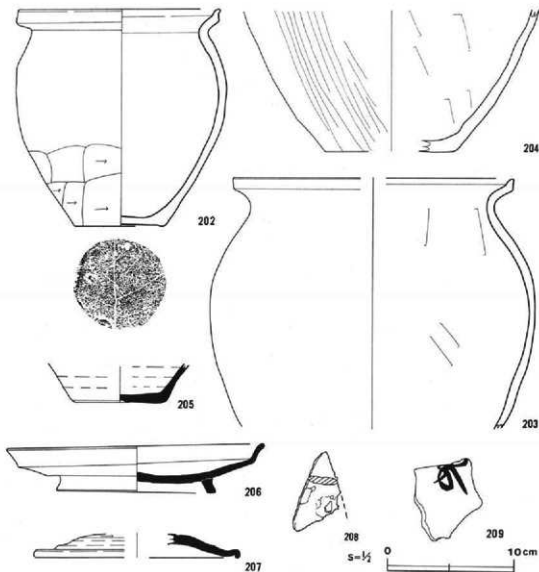
第95図 第11号住居跡・竈実測・遺物出土位置図

がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土の下層・中層から土師器片（甕3），土師器の細片（163点），須恵器片（坏1，蓋1），須恵器の細片（33点），鉄製品（鏃1点），鉄滓（2点）が出土している。202の土師器の甕は竈内から逆位の状態で，203の土師器の甕は竈内から，204の土師器の甕は北東部中程の覆土中層から，205の須恵器の坏は西壁中央付近の覆土中層から，207の須恵器の蓋は竈内からそれぞれ出土している。208の鉄鏃は北東部覆土から出土している。

所見 本跡は，重複関係から第10号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出



第96図 第11号住居跡出土遺物実測・拓影図

土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第 11 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粒土・色・地味	備考
第96図 202	壺 土師器	A 16.1	完形。底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈折し、口縁部は外傾する。11脚部を外上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。胴部外面上位ナデ。胴部外面下位手持ちへう削り。底部に木炭痕。	砂粒・石英・雲母 長石・雲母 褐色 普通	P183 100% 壺内
		B 17.5				
		C 7.2				
203	壺 土師器	A [22.0]	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈折し、口縁部は外傾する。11脚部を外上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。胴部外面上位ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	P184 20% 壺内
		B (20.3)				
204	壺 土師器	B (11.4)	底部から胴下部分にかけての破片。底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面下位へう磨き。胴部内面へうナデ。底部に木炭痕。	砂粒・長石・雲母・石英 明赤褐色 普通	P185 15% 北東部中程覆土中層
		C [10.4]				
205	坏 須恵器	B (3.2)	底部から体部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部手持ちへう削り。	砂粒・石英・長石 灰白色 普通	P186 30% 西壁中央付近覆土中層
		C 7.0				
206	壺 須恵器	A 20.6	高台部及び体部から口縁部にかけて一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外傾し、口縁部は体部から外反して立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部同断へう削り。	砂粒・塵 灰白色 普通	P187 90% 壺内及び北東コーナー壁層
		B 4.1				
		D [12.7]				
		E 1.2				
207	壺 須恵器	A [16.4]	天井部から口縁部にかけての破片。天井部は低く、緩やかに内彎して口縁部に至る。口縁部はわずかに外反し、底部は短く垂下する。	口縁部内・外面横ナデ。天井部同断へう削り。	砂粒・長石 灰白色 普通	P188 20% 壺内
		B (1.9)				

図版番号	器種	法 量				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)		
第96図208	鉢	(4.4)	(2.3)	0.4	(5.4)	北東市覆土	M3 鉄製

図版番号	出資文字	種 別	器 種	部 位	備 考
第96図209	家	土師器	坏	体部外面	P252 内面黒色地埋 体部片 北西コーナー付近覆土下層

第 12 号住居跡 (第 97 図)

位置 調査区の南東部、B2j区を中心に確認されている。

規模と平面形 竈及び北壁の一部しか確認できなかったため不明。

主軸方向 N - 9° - E

壁 壁高は 31 cm で、垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

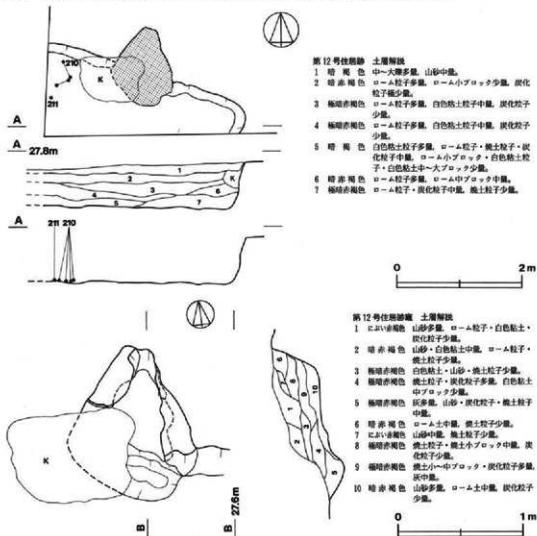
ビット 不明。

竈 北壁を約65cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ116cm、幅96cmである。天井部は崩落しているが、袖部の一部がわずかに遺存している。火床は、床面が約15cm掘り窪められており、熱をうけているがあまり焼けていない。煙道は、火床から緩やかに立ち上がり、その後急角度で外傾して立ち上がっている。

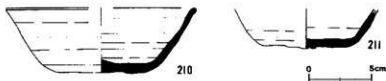
覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土の中層・下層から土師器の細片(57点)、須恵器片(坏2)、須恵器の細片(13点)等が出土している。210の須恵器の坏は北西部中程の覆土下層から、211の須恵器の坏は北西部中程の床面から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第97図 第12号住居跡・竈実測・遺物出土位置図



第98図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

図数番付	器種	法型 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装成	備考
第98図 210	坏 須恵器	A [15.2]	底部から口縁部にかけて一帯欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、へう削り。	少粒・糠・石灰・長石 灰白色 普通	P189 80% 北西部中程燻土下層
		B 5.2				
		C 7.4				
211	坏 須恵器	B (3.2)	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。	砂粒・糠・長石 灰黄色 普通	P190 30% 北西部中程燻土下層
		C 7.1				

第13号住居跡 (第99・100図)

位置 調査区のはほぼ中央部、B2es区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東壁上位は第2号溝に、南壁上位は第3号溝に、北東部上位は第4号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.45m、短軸3.30mの方形を呈している。

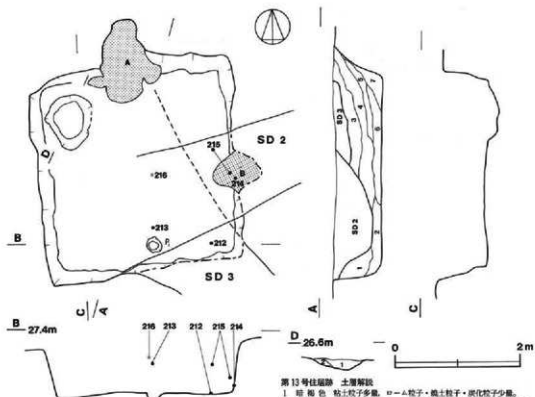
主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は73～81cmで、垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 1か所 (P₁) 検出されている。P₁は、径23cmで円形を呈し、深さ11cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。主柱穴は検出されない。

竈 2か所 (竈A, B) 検出されている。竈Aは、北壁中央を約69cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ133cm、幅117cmである。天井部は崩落しているが、両袖の一部がわずかに遺存している。火床は、床面が約5cm掘り窪められており、熱をうけているがあまり焼けていない。煙道は、火床から急角度で外傾して立ち上がっている。竈Bは、東壁中央を約41cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ79cm、幅60cmである。天井部は崩落しているが、右袖の一部がわずかに遺存している。火床は、床面が約3cm掘り窪められており、熱をうけているがあまり焼けていない。煙道は、火床から緩やかに立ち上がり、その後急角度で外傾して立ち上がっている。



第13号住居跡 土層解説

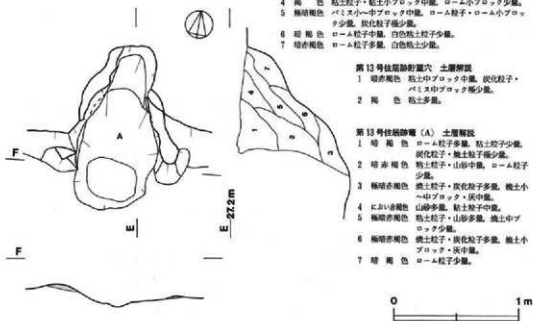
- 1 暗褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・粘土小ブロック少量、炭化粒子極少量。
- 3 暗赤褐色 粘土粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
- 4 褐色 粘土粒子・粘土小ブロック中量、ローム小ブロック少量。
- 5 極暗褐色 パミスルへ中ブロック中量、ローム粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子極少量。
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、白色粘土粒子少量。
- 7 暗赤褐色 ローム粒子多量、白色粘土少量。

第13号住居跡貯蔵穴 土層解説

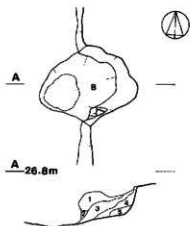
- 1 暗赤褐色 粘土中ブロック中量、炭化粒子・パミスル中ブロック極少量。
- 2 褐色 粘土多量。

第13号住居跡竈(A) 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、粘土粒子少量、炭化粒子・焼土粒子極少量。
- 2 暗赤褐色 粘土粒子・山砂中量、ローム粒子少量。
- 3 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量、焼土小へ中ブロック・灰中量。
- 4 におい赤褐色 山砂多量、粘土粒子中量。
- 5 極暗赤褐色 粘土粒子・山砂多量、焼土中ブロック少量。
- 6 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量、焼土小ブロック・灰中量。
- 7 暗褐色 ローム粒子少量。

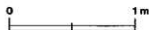


第99図 第13号住居跡・竈実測・遺物出土位置図



第13号住居跡層 (B) 土層解説

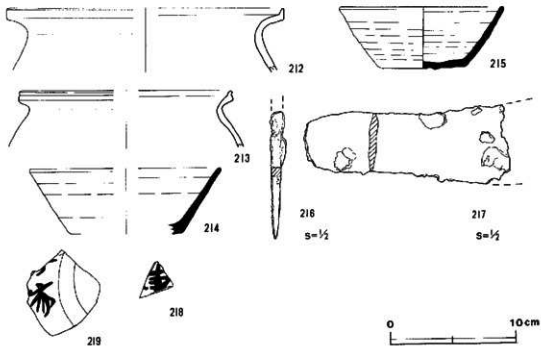
- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量、粘土小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック少量。
- 2 緑褐色 ローム粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量。
- 3 暗赤褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子中量。
- 4 緑褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック中量、炭化粒子少量。
- 5 紅褐色 粘土粒子・炭化粒子多量、焼土粒子中量、焼土中ブロック少量。



第100図 第13号住居跡層実測図

覆土 自然堆積。

遺物 覆土の下層・中層から土師器片 (甕2, 坏1), 土師器の細片 (157点), 須恵器片 (坏2), 須恵器の細片 (88点), 鉄製品 (鐵1点, 鎌1点) 等が出土している。212の土師器の甕は南東コーナーの壁下から, 213の土師器の甕は南東部中程の覆土中層から, 214の須恵器の坏は甕B内から, 215の須恵器の坏は甕B内及び東壁中央付近の覆上下層からそれぞれ出土している。216の鐵, 217の鎌は覆土中層から出土している。



第101図 第13号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は、重桜関係から第4号住居跡、第2・3号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・灰質・磁化	備考
第101図 212	甕 土師器	A [21.8]	頸部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母 にふい橙色 普通	P191 10% 南東コーナー 壁際
		B (5.2)	頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部を外傾する。口唇部を上 方につまみ出す。			
213	甕 土師器	A [19.0]	頸部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P192 10% 南東部中程覆 土中層
		B (4.7)	頸部は「く」の字状に屈曲し、 口唇部を外上方につまみ出す。			
214	坏 須恵器	A [15.2]	体部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・霏・石英・ 長石 にふい赤褐色 普通	P194 30% 竈内
		B 5.3	体部は外傾して立ち上がり口縁 部に至る。			
		C [9.0]				
215	坏 須恵器	A 13.1	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は外傾 して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 底部回転へう切り後、ナデ。	砂粒・霏・長石 灰色 普通	P195 85% 竈内及び東 部中央付近覆 土下層
		B 5.0				
		C 7.0				

図版番号	器種	法 量				出土地点	備 考
		長さ(m)	径(m)	厚さ(m)	重量(g)		
第101図 216	甕	(6.8)	(0.9)	(0.3)	(5.3)	覆土	M9 鉄製
217	甕	(10.9)	(4.3)	(0.4)	(42.8)	中央部覆土下層	M10 鉄製

図版番号	墨書文字	種 別	器 種	部 位	備 考
第101図 218	東	土師器	坏	体部外面	P253 内面黒色処理 体部片 覆土
219	匚家	土師器	坏	体部外面	P254 内面黒色処理 底部から体部にかけての破片 竈内

(注) □は墨書があっても判読できないもの、あるいは欠損部があるため判読できないもの

第14号住居跡 (第102図)

位置 調査区の南西部、B2i区を中心に確認されている。

規模と平面形 竈及び床面と思われる一部しか確認できなかったため不明である。

主軸方向 (N-110°-E)

床 竈前面は、平坦で踏み固められ硬い。

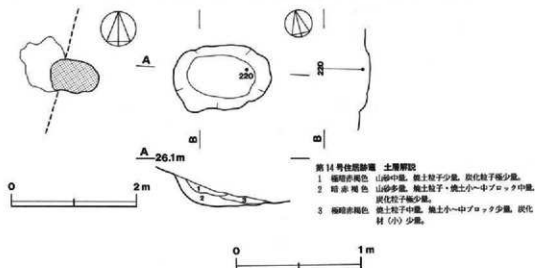
竈 東壁に付設され、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ79cm、幅51cmである。天井部は崩落し、遺存状態が悪い。火床は、床面がほとんど掘り窪められていない。煙道は、火床から急角度で外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

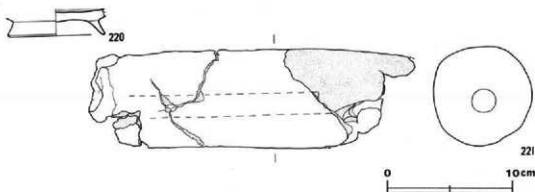
遺物 竈内から土師器片(高台付坏1)、土師器の細片(8点)、土製品(羽口1点)が出土して

いる。220の土師器の高台付坏、221の羽口は竈内から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第102図 第14号住居跡・竈実測・遺物出土位置図



第103図 第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考		
第103図 220	高台付坏	B (2.1)	高台部から底部にかけての破片	体部内面へラ磨き後、黒色処理。	砂粒・雲母	P196 20%		
	土師器	D 7.5	高台部は「ハ」の字に開き、	高台貼り付け後、ナデ。	にぶい褐色	竈内		
		E 1.2	底部は平底を呈する。		良			
図版番号	器種	法量				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			孔径(cm)
第103図221	羽口	(26.2)	8.0	-	(1086.3)	1.8	竈内	DPS

表6 沢幡遺跡竪穴住居跡一覧表

番号	位置	土層方向	平面形	規模		井桁	ピット	貯・埋	遺物	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(m)					
1	PDa	N-38°E	長方形	2.48×2.06	2~4	平垣	1	遺	自然	土師器片25点(灰, 甕, 甕)
2	PDa	N-23°E	長方形	2.88×2.58	2~4	凸形	4	遺	自然	土師器片16点(灰, 甕), 須恵器片2点(灰)
3	PDa	N-18°E	長方形	3.13×2.89	4~5	平垣	5	遺	人為	土師器片25点(灰, 甕), 須恵器片5点(灰), 鉄押1点
4	PDa	N-75°E	不明	(3.57)×(2.26)	10~15	平垣	1	遺	自然	土師器片21点(灰, 甕), 須恵器片186点(灰, 甕, 甕), 支脚片5点, 鉄押2点, 石1点
5	PDa	N-0°	方形	3.29×(2.22)	54~71	平垣	2	遺	不明	SK-15と重複
6	PDa	N-89°E	長方形	4.323×3.08	18~36	平垣	1	遺	自然	土師器片20点(灰, 甕), 須恵器片22点(灰, 甕), 支脚片1点, 鉄押5点, 石1点
7	PDa	N-5°E	長方形	6.68×5.08	55~80	平垣	5	遺	人為	土師器片22点(灰, 甕, 高台付灰, 甕, 甕), 須恵器片41点(灰, 高台付灰, 甕, 甕, 円筒形), 須恵器片23点(甕), 支脚片2点, 鉄押2点, 石2点
8	PDa	N-2°E	長方形	4.70×4.08	57~72	平垣	4	遺	自然	土師器片30点(灰, 高台付灰, 甕), 須恵器片64点(灰, 甕, 甕), 須恵器片1点(甕), 鉄押8点, 石2点
9	PDa	N-5°E	方形	3.82×(3.27)	29~30	平垣	3	遺	自然	土師器片22点(灰, 高台付灰, 甕), 須恵器片2点(甕), 鉄押4点
10	PDa	N-5°E	長方形	7.13×5.98	29~50	平垣	4	遺	自然	土師器片1点(灰, 高台付灰, 甕, 甕), 須恵器片12点(灰, 高台付灰, 甕, 甕), 支脚片6点, 鉄押7点
11	PDa	N-6°E	方形	4.77×4.62	18~28	平垣	4	遺	自然	土師器片10点(灰, 高台付灰, 甕), 須恵器片23点(灰, 甕, 甕)
12	PDa	N-5°E	不明	不明	31	平垣	不明	遺	自然	土師器片57点(灰, 甕), 須恵器片13点(灰, 甕)
13	PDa	N-3°E	方形	3.45×3.30	73~81	平垣	1	遺	自然	土師器片157点(灰, 甕), 須恵器片60点(灰, 甕, 甕)
14	PDa	(N-118°E)	不明	不明	不明	平垣	不明	遺	自然	土師器片6点(甕)

2 土坑

当調査区からは、西部を中心に土坑が30基検出されている。これらの土坑からは土師器片・須恵器片が極少量出土している。このうち、明らかに他の土坑と規模及び平面形の異なるもの1基については文章で解説した。他の土坑については、遺物が覆土上層からの出土であり流れ込みと考えられ、特筆すべき事柄は有していないことから、一覧表に記載した。

第16号土坑(第104図)

位置 調査区の北東部、B2d区を中心に確認されている。

重複関係 第5号住居跡の東壁を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径4.50m, 短径3.85mの不定形を呈している。

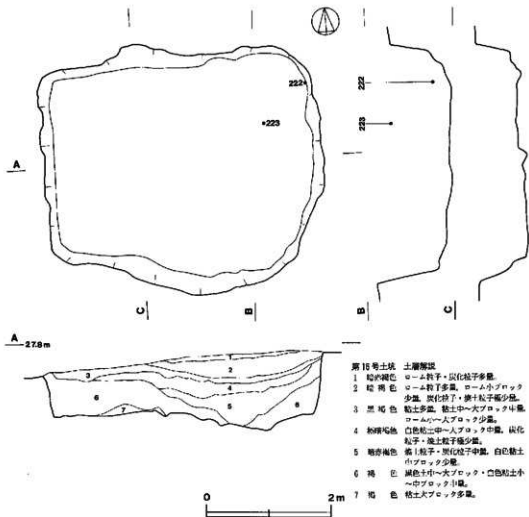
長径方向 N-88°-W

壁面 壁高は78~116cmで、外傾して立ち上がっている。

底面 凸凹。

覆土 全体的に白色粘土ブロック、ロームブロック・粒子を含み、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土の下層から上層にかけて土師器の細片(234点), 須恵器片(環2), 須恵器の細片



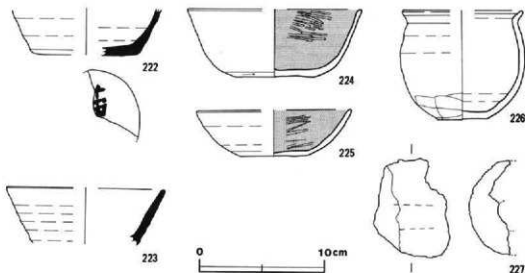
第104図 第16号土坑実測・遺物出土位置図

(197点)等が出土している。222の須恵器の坏は北東コーナー付近の覆土下層から、223の須恵器の坏は北東部中程の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、重複関係から第5号住居跡より新しい時期に構築されている。第5号住居絶後に、東壁を掘り込み、大形の土坑としたものと思われる。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の上坑と考えられる。

第16号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色類・織	備考
第105図 222	坏	B (3.8) C (8.4)	底部から体部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底削り持ちヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P197 20% 北東部埋蔵 底部埋蔵口



第105図 第16・23・33号土坑出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・地味	備考
第105図 223	坏 須恵器	A [12.6] B (4.5)	体部から口縁部にかけての破片、 体部は外傾して立ち上がり口縁 部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ、	砂粒 灰白色 良	P198 15% 覆土中層

第23号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・地味	備考
第105図 224	坏 土師器	A [13.8] B 5.5 C 6.4	底部から口縁部にかけての破片。 底部は平底で、体部は内彎しな がら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 体部外面下端及び底部回転へう 削り。	砂粒・石英・ 雲母 浅黄褐色 普通	P199 35% 南東部覆土下層
225	坏 土師器	A [12.4] B 3.7 C [5.6]	底部から口縁部にかけての破片。 底部は平底で、体部は内彎しな がら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面へう磨き後、黒色処理。 底部回転へう削り。	砂粒・雲母 褐色 普通	P200 20% 北東部覆土上層

第33号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・地味	備考
第105図 226	鉢 土師土器	A [9.6] B 8.8 C 4.0	胴部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、胴部は内彎 しながら立ち上がり、頸部はく びれ、口縁部は外傾する。	口縁部・頸部及び胴部内・外面 横ナデ。胴部外面下端及び底部 手持ちへう削り。	砂粒 および黄褐色 普通	P155 70% 北東部覆土上層

図版番号	器種	法 量					出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)		
第105図227	羽口	(6.2)	8.0	-	(97.3)	1.8	覆土	DP3

表7 沢幡遺跡土坑一覧表

番号	位置	方位方向	平面形	深 度			構造	土質	出土遺物	備 考	
				長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)					
1	R0 ₁	N-41°E	不整形円形	1.16	0.97	14	外堀	竪穴	土師器片1点(甕)、須恵器片1点(甕)		
2	R0 ₂	N-14°E	不整形	1.41	1.27	24	外堀	凸凹	自然	土師器片15点(甕、甗)、須恵器片10点(甕、甗)、石2点	
3	R0 ₃	N-21°E	楕円形	1.22	1.07	6	外堀	凸凹	自然	土師器片1点(甕)	
4	R0 ₄	N-31°W	不整形円形	1.30	0.91	6	外堀	凸凹	自然		
5	R0 ₅	N-39°W	不整形円形	1.53	1.40	22	外堀	凸凹	自然	土師器片2点(甕)	
6	R0 ₆	N-39°W	不整形	1.68	1.34	21	外堀	平坦	自然	土師器片4点(甕)	
7	R0 ₇	N-17°W	不整形円形	1.41	1.35	27	外堀	凹状	自然	土師器片6点(甕)、須恵器片2点(甕)、鉄製品1点	
8	R0 ₈	N-3°W	不整形	1.17	0.95	15	外堀	平坦	自然	土師器片15点(甕)、須恵器片1点(甕、甗)、石2点	
9	R0 ₉	N-43°E	楕円形	0.90	0.71	17	竪堀	円形	外堀		
10	R0 ₁₀	N-62°E	円形	0.98	0.93	26	外堀	凸凹	自然		
11	R0 ₁₁	N-69°W	不整形円形	0.45	0.41	37	外堀	凹状	自然		
12	R0 ₁₂	N-49°E	不整形円形	0.82	0.82	19	外堀	凸凹	自然	土師器片1点(甕)	
13	R0 ₁₃	N-34°W	不整形	0.94	0.82	43	外堀	凸凹	自然	土師器片1点(甕)	
14	R0 ₁₄	N-29°E	不整形円形	0.96	0.85	46	垂直	平坦	自然	土師器片3点(甕、甗)、須恵器片3点(甕)	
15	R0 ₁₅	N-39°W	不整形	0.51	0.48	65	垂直	凸凹	自然	土師器片1点(甕)、須恵器片4点(甕)	
16	R0 ₁₆	N-86°W	不整形	4.50	3.85	116	外堀	凸凹	人工	土師器片23点(甕、甗)、須恵器片197点(甕、甗)、石5点、鉄製品2点	SI-5と重複
17	R0 ₁₇	N-12°W	円形	0.90	0.94	11	垂直	平坦	自然		
18	R0 ₁₈	N-8°W	楕円形	0.64	0.58	24	外堀	凹状	自然	土師器片1点(甕)、須恵器片1点(甕)	
19	R0 ₁₉	N-47°W	不整形円形	1.15	1.00	23	垂直	凸凹	自然		
21	R0 ₂₁	N-62°E	楕円形	1.60	1.34	11	外堀	平坦	自然	土師器片17点(甕、甗)、須恵器片1点(甕)	SI-2と重複
22	R0 ₂₂	N-49°W	楕円形	1.60	1.47	13	外堀	円形	外堀	土師器片15点(甕、甗)、須恵器片2点(甕)	SI-8と重複
23	R0 ₂₃	N-49°W	不整形	1.13	1.01	30	垂直	平坦	自然	土師器片12点(甕、甗)	SI-6と重複
25	R0 ₂₅	N-27°W	不整形円形	1.34	1.23	52	外堀	平坦	自然	土師器片3点(甕、甗、甗)、須恵器片1点(甕)	
26	R0 ₂₆	N-17°E	不整形円形	1.54	1.18	41	外堀	平坦	自然	土師器片2点(甕)、須恵器片1点(甕)	
27	R0 ₂₇	N-29°E	楕円形	1.23	1.07	105	傾斜	凹状	自然	土師器片4点(甕)	
28	R0 ₂₈	N-39°E	不整形円形	1.06	1.04	15	外堀	平坦	自然	土師器片1点(甕)、須恵器片2点(甕、甗)	
29	R0 ₂₉	N-14°E	円形	1.16	1.08	35	垂直	平坦	自然	土師器片6点(甕、甗)、須恵器片6点(甕、高台付甕)	
30	R0 ₃₀	N-27°E	楕円形	1.70	1.53	45	垂直	平坦	外堀	土師器片15点(甕)、須恵器片8点(甕、高台付甕)	
31	R0 ₃₁	N-8°E	楕円形	1.73	1.56	37	垂直	平坦	自然	土師器片5点(甕、甗)、須恵器片2点(甕)	
32	R0 ₃₂	N-43°W	不整形円形	1.57	1.47	45	外堀	平坦	自然	土師器片5点(甕、甗)、須恵器片1点(高台付甕)	
33	R0 ₃₃	N-36°W	不整形円形	0.90	0.87	19	外堀	凹状	外堀	土師器片7点(甕、甗)	SI-9と重複

3 溝

本調査区から、溝は4条検出されている。これらの溝からは、土師器片や須恵器片が出土している。しかし、いずれも覆土上層からの出土であり、流れ込みと考えられるので、構築時期や性格をとらえることはできない。

第1号溝 (第106区)

位置 調査区の東部、B2、B3区に確認されている。

重複関係 本跡は、B3h区で第6号住居跡の北部の床及び壁を掘り込み、B2d区で第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 全長は約31.5mで、上幅1.10～2.10m、下幅0.15～0.98m、深さ30～44cmである。底面は凸凹しており、断面形はU状を呈している。

方向 B3a区から西方向(N-85°-W)へ、B2g区で直角に曲がり、北方向(N-5°-E)へほぼ直線的に延びている。溝の東端及び北端はさらに調査区外へ延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土上層から、流れ込みと思われる土師器片(坏1)、土師器の細片(137点)、須恵器の細片(43点)が出土している。

所見 本跡は、平安時代前期の住居跡と思われる第6号住居跡を掘り込んでいることから、平安時代前期以降の溝と考えられる。また、第2号溝に掘り込まれていることから、第2号溝より古い。性格は不明である。

第2号溝(第106図)

位置 調査区の北東部、B2区に確認されている。

重複関係 本跡はB3e区で第4号住居跡を、B3e区で第7号住居跡を、B3e区で第13号住居跡を、B3e区で第21号土坑を、B3d区で第1号溝を掘り込み、B3e区で第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 全長は約21.0mで、上幅0.91～1.77m、下幅0.22～0.78m、深さ33～38cmである。底面は凸凹しており、断面形は皿状を呈している。

方向 B2e区から東方向(N-88°-E)へほぼ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土上層から、流れ込みと思われる土師器片(高台付坏1)、土師器の細片(211点)、須恵器の細片(38点)等が出土している。

所見 本跡は、平安時代前期の住居跡と思われる第4号住居跡、第7号住居跡、第13号住居跡を掘り込んでいることから、平安時代前期以降の溝と考えられる。また、第1号溝を掘り込み、第3号溝に掘り込まれていることから、第1号溝より新しく、第3号溝より古い。性格は不明である。

第3号溝(第107図)

位置 調査区の南東部、B2区に確認されている。

重複関係 本跡はB3fs区で第7号住居跡を、B3is区で第8号住居跡を、B3hr区で第9号住居跡を、B3hr区で第10号住居跡を、B3es区で第13号住居跡を掘り込み、B3es区で第2号溝に掘り込まれ、B3is区で第4号溝と重複している。

規模と形状 全長は約23.7mで、上幅1.29～1.81m、下幅0.34～0.81m、深さ25～31cmである。底面は凸凹で、断面形は皿状を呈している。

方向 B2js区から北西方向(N-38°-W)へほぼ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土上層から、流れ込みと思われる土師器片(環2)、土師器の細片(406点)、須恵器の細片(36点)等が出土している。

所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、平安時代前期の住居跡と思われる第7号住居跡、第8号住居跡、第9号住居跡、第10号住居跡、第13号住居跡を掘り込んでいることから、平安時代前期以降の溝と考えられる。また、第2号溝よりは古い時期に構築されている。第4号溝との新旧関係及び性格は不明である。

第4号溝(第107図)

位置 調査区の南東部、B2区に確認されている。

重複関係 本跡はB3hs区で第8号住居跡を、B3is区で第9号住居跡を掘り込み、B3es区で第3号溝と重複している。

規模と形状 全長は約8.1mで、上幅1.17～1.61m、下幅0.42～0.56m、深さ32～34cmである。底面は凸凹しており、断面形は皿状を呈している。

方向 B2is区から北方向(N-22°-E)へほぼ直線的に延びている。

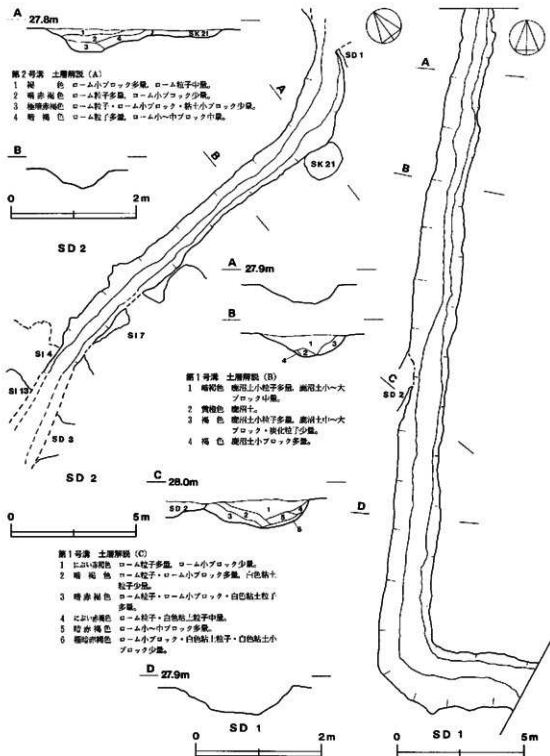
覆土 自然堆積。

遺物 覆土上層から、流れ込みと思われる土師器の細片(181点)、須恵器の細片(21点)が出土している。

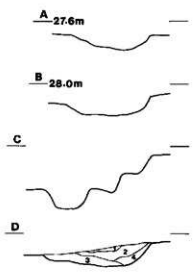
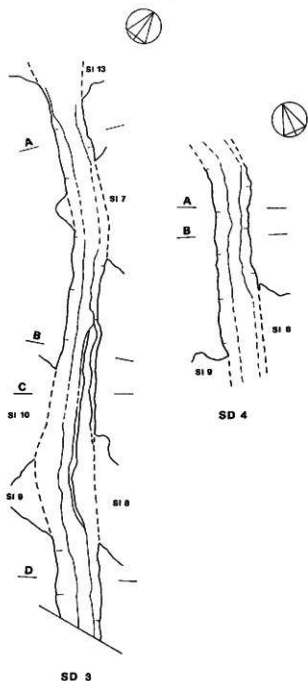
所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、平安時代前期の住居跡と思われる第8号住居跡、第9号住居跡を掘り込んでいることから、平安時代前期以降の溝と考えられる。性格及び第3号溝との新旧関係は不明である。

第1号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第106図 228	環	A [14.6]	底部から口縁部にかけての破片。口縁部及び体部外面横ナデ。体	口縁部及び体部外面横ナデ。体	砂粒・長心・雲母 橙色 普通	P201 20% 覆土
	土師器	B 4.9	底部は平底で、体部は内彎しな	部内面へつき後、黒色処理。		
	C [5.6]	がら立ち上がり口縁部に至る。	底面凹陥へラ削り。			

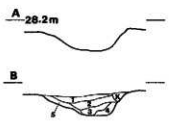


第106図 第1・2号溝実測図



SD 3

- 第3号溝 土層解説 (D)
- 1 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子極少量。
 - 2 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量。
 - 3 暗赤褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量。
 - 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量。

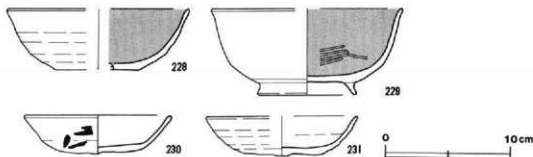


SD 4

- 第4号溝 土層解説 (B)
- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中～大ブロック中量。
 - 2 暗赤褐色 ローム粒子少量。
 - 3 黒褐色 ローム粒子少量。
 - 4 褐色 ローム粒子中量。
 - 5 暗赤褐色 ローム粒子中量。



第107図 第3・4号溝実測図



第108図 第1・2・3号溝出土遺物実測図

第2号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第108図 229	高台付耳土師器	A [15.2] B 7.0 D [7.8] E 1.0	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き後、黒色処理。底部及び体部外面下端回転へラ削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 浅黄褐色 普通	P202 20% 覆土

第3号溝出土遺物観察表

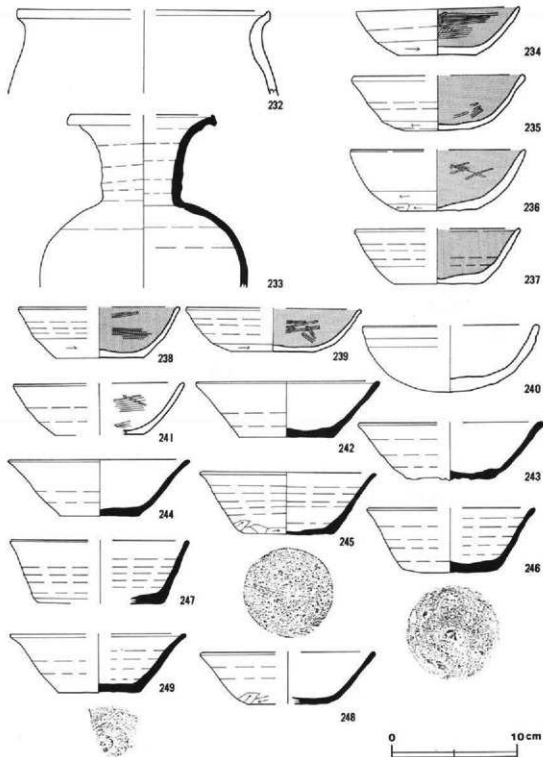
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第108図 230	皿 土師器	A 11.8 B 3.1 C 7.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へラ削り後、ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P203 60% 覆土 体部外面黒書 □
231	皿 土師器	A [12.0] B 3.3 C 6.4	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へラ削り後、ナデ。	砂粒 浅黄褐色 普通	P204 50% 覆土

4 遺構外出土遺物

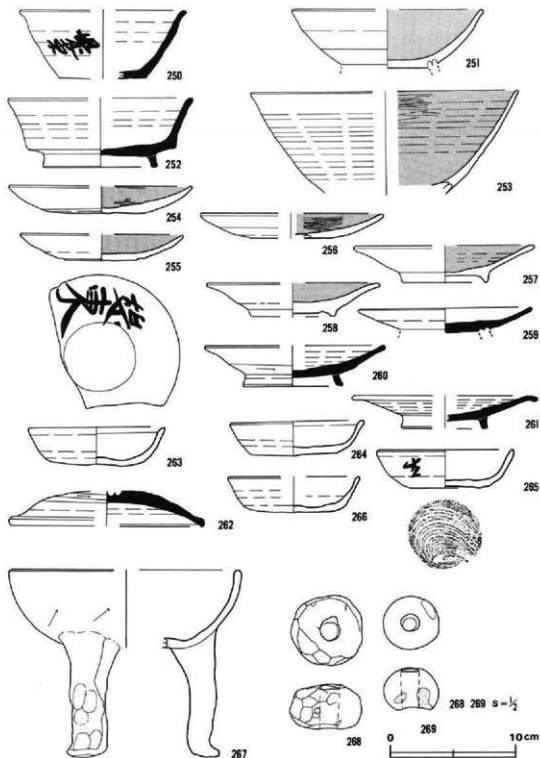
当調査区からは、試掘や表土除去の際に、遺物が少量出土しているので、ここでは、遺構外出土遺物として実測図を掲載し、観察表で解説する。

遺構外出土遺物観察表

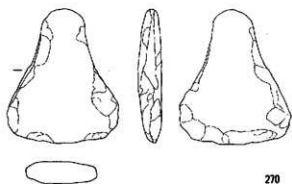
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第109図 232	婁土師器	A [20.0] B (6.8)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は外反し、口縁部は外傾する。口唇部を上方へつまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P205 5% 表土
233	長頸壺 須恵器	A [11.4] B (14.0)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎する。頸部は外反しながら立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は面をなす。	口縁部・頸部及び胴部内・外面横ナデ。	砂粒・糠 灰色 普通	P206 30% 表土
234	坏土師器	A 12.8 B 3.9 C 6.2	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へラ削り。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P207 80% 表土



第109図 遺構外出土遺物実測・拓影図



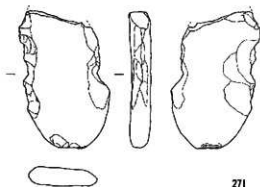
第110图 遺構外出土遺物実測・拓影图



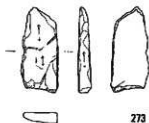
270



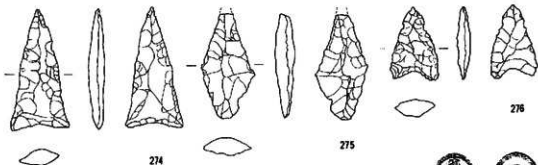
272



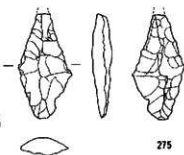
271



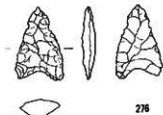
273



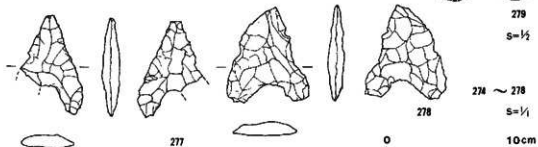
274



275



276



277



278

s=1/2

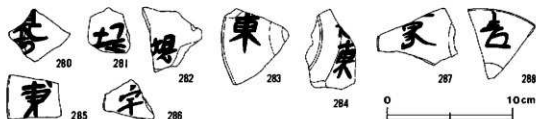
274 ~ 278

s=1/1

278



第111图 濠沟外出土遗物实测·拓影图



第 112 図 遺構外出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器種の特徴	手法の特徴	肌・色裏・地色	備考
第100図 235	環	A 13.6	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母にぶい橙色 普通	P208 50% 表土
	土師器	B 4.5				
	C 5.0					
236	環	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・石灰・長石・雲母 橙色 普通	P209 45% 表土
	土師器	B 5.0				
	C 6.3					
237	環	A [13.0]	底部から口縁部にかけての破片。全体摩耗。口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・石灰・長石・雲母 橙色 普通	P210 35% 表土
	土師器	B 4.5				
	C 6.9					
238	環	A [12.8]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P211 25% 表土
	土師器	B 4.1				
	C 7.0					
239	環	A [13.6]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・長石にぶい橙色 普通	P212 25% 表土
	土師器	B 3.5				
	C [6.4]					
240	環	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片。底部は丸底で、体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部外側直下に二条の沈線が通る。	全体摩耗。	砂粒・石灰・雲母 灰白色 普通	P214 40% 表土
	土師器	B 5.4				
241	環	A [13.6]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、底部回転へう削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P216 30% 表土
	土師器	B 4.1				
	C 7.0					
242	環	A [14.5]	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、ナデ。	砂粒・糠 浅黄褐色 普通	P213 70% 表土 底部へう記号「×」
	須恵器	B 4.6				
	C 7.5					
243	環	A [14.4]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。	砂粒・糠 浅黄褐色 普通	P215 30% 表土
	須恵器	B 4.6				
	C 7.0					
244	環	A [14.2]	底部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう削り。	砂粒・長石 灰白色 普通	P217 90% 表土
	須恵器	B 4.6				
	C 6.2					

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・産地	備考
第109図 245	環須恵器	A 13.9	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端手持ちへう削り。底部回転へう切り後、へう削り。	砂粒・石英・長石・黴灰色 普通	P218 80% 表土 底部へら記号「一」
		B 5.0				
		C 7.4				
246	環須恵器	A [13.3]	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、ナデ。	砂粒・長石・黴オリーブ灰色 普通	P219 50% 表土 底部へら記号「二」
		B 5.2				
		C 7.6				
247	環須恵器	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端及び底部手持ちへう削り。	砂粒・長石・黴普通	P220 20% 表土
		B [10.0]				
		C [10.0]				
248	環須恵器	A [13.6]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内傾気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端及び底部手持ちへう削り。	砂粒・長石・黄灰色 普通	P221 20% 表土
		B 4.2				
		C [6.2]				
249	環須恵器	A [13.8]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。	砂粒・長石 灰色 普通	P222 20% 表土
		B 4.7				
		C 6.6				
第110図 250	環須恵器	A [13.2]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。	砂粒 灰オリーブ色 普通	P223 15% 表土 体部外面墨書「提束」
		B 5.6				
		C [7.0]				
251	高台付埴土師器	A [15.1]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内傾しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 褐色 普通	P224 30% 表土
		B (4.8)				
252	高台付埴須恵器	A [14.7]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう削り。	砂粒・長石・黴灰色 普通	P225 40% 表土
		B 5.6				
		D 9.0				
		E 1.1				
253	環土師器	A [21.2]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部外面下端へう削り。体部内面へう磨き後、黒色処理。	砂粒・雲母 ふいひ黄褐色 普通	P226 20% 表土
		B (8.3)				
254	環土師器	A [14.5]	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・石英・長石・雲母 ふいひ黄褐色 普通	P227 70% 表土
		B 2.2				
		C 6.6				
255	皿土師器	A [13.0]	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。底部回転へう削り。	砂粒・雲母 灰白色 良	P228 60% 表土 体部外面墨書「提束」
		B 2.1				
		C [5.7]				
256	皿土師器	A [14.4]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き。体部内・外面黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・長石・雲母 淡黄色 普通	P229 25% 表土
		B 2.0				
		C [6.3]				
257	高台付埴土師器	A [14.3]	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	全体摩耗。口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 淡黄色 普通	P230 60% 表土
		B 3.0				
		D 6.7				
		E 0.8				

図版番号	器種	法 量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	土・色・肌・地味	備 考
第110図 258	高台付皿 土師器	A [13.6]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は低く「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。底部回転へう削り。	砂粒・雲母 淡黄褐色 普通	P231 40% 表採
		B 2.7				
		D [6.4]				
		E 0.5				
259	高台付皿 須恵器	A 13.8	高台部欠損。底部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、手持ちへう削り。	砂粒・長石 灰白色 普通	P232 70% 表土
		B (2.0)				
260	高台付皿 須恵器	A [14.1]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端回転へう削り。底部手持ちへう削り。	砂粒・礫 灰黄色 良	P233 40% 表土
		B 3.3				
		D 7.7				
		E 1.0				
261	高台付皿 須恵器	A [14.7]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部及び体部外面下端回転へう削り。	砂粒・長石 にふい黄褐色 良	P234 30% 表土
		B 2.6				
		D [6.8]				
		E 1.0				
262	蓋 須恵器	A [15.5]	天井部から口縁部にかけての破片。天井部は平皿で、内彎しながら口縁部に至る。口縁部はわずかに外反し、端部は短く屈曲する。	口縁部内・外面ナデ。天井部回転へう削り。	砂粒・長石 灰白色 普通	P239 40% 表土
		B (2.8)				
263	皿 土師器	A 10.8	完形。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。	砂粒・石英・ 長石・雲母 褐色 普通	P235 100% 表土
		B 3.2				
		C 7.4				
264	皿 土師器	A 10.6	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。	砂粒・雲母 にふい黄褐色 普通	P236 90% 表土
		B 2.9				
		C 5.8				
265	皿 土師器	A 10.7	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。	砂粒 淡黄褐色 普通	P237 80% 表土 体部外面黒書「生」
		B 3.1				
		C 5.9				
266	皿 土師器	A [10.4]	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P238 80% 表土
		B 2.9				
		C 6.4				
267	火 盆 土師器	A [18.0]	脚部から口縁部にかけての破片。脚部は脚足状で、底部は丸底で体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう削り。脚部手づくね。	砂粒・長石・礫 にふい赤褐色 普通	P240 20% 表土
		B 15.2				
		E 10.8				

図版番号	器 種	法 量				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第110図268	球状土師	2.4	3.8	-	33.8	1.0	表土 DP6
269	球状土師	2.2	2.9	-	17.3	1.0	表土 DP7

図版番号	器 種	石 質	法 量				出土地点	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第110図270	打製石斧	凝灰岩	10.9	8.0	1.8	215.8		表土 Q2

図版番号	器 種	石 質	法 量				出土地点	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)		
第1118 21	打製石斧	オセツノケシ	(12.1)	7.1	1.5	(185.2)	表土	Q3
272	砥石	凝灰岩	(8.0)	(2.8)	(2.5)	(58.7)	表土	Q4
273	砥石	頁岩	(7.0)	(3.1)	(1.1)	(26.1)	表土	Q5
274	鏃	チャート	3.2	1.6	0.5	1.7	表土	Q6
275	鏃	チャート	2.8	1.4	0.5	1.4	表土	Q7
276	鏃	凝灰石	2.0	1.2	0.4	0.7	表土	Q8
277	鏃	メノウ	2.6	1.6	0.5	0.9	表土	Q9
278	鏃	チャート	(2.5)	2.2	0.4	1.5	表土	Q10

図版番号	銭 名	初 鋳 年		出土地点	備 考
		時 代	年 号		
第1118 279	寛永通寶	寛永元年	1668年	表土	M11

図版番号	墨点文字	種 別	器 種	部 位	備 考	
第112 200	掬束	土師器	環	体部外面	P 255	内面黒色処理 体部片 表土
281	掬	土師器	環	体部外面	P 256	内面黒色処理 体部片 表土
282	掬	土師器	環	体部外面	P 257	内面黒色処理 体部片 表土
283	束	土師器	環	体部外面	P 258	内面黒色処理 体部・口縁部片 表土
284	掬束	土師器	環	体部外面	P 259	内面黒色処理 体部片 表土
285	束	土師器	環	体部外面	P 260	内面黒色処理 体部・口縁部片 表土
286	字	土師器	環	体部外面	P 261	内面黒色処理 体部片 表土
287	□家	土師器	環	体部外面	P 262	内面黒色処理 体部・口縁部片 表土
288	□	土師器	環	体部外面	P 263	内面黒色処理 体部・口縁部片 表土

(注) □は墨点があっても判読できないもの、あるいは欠損部があるため判読できないもの

第3節 考 察

当期調査から検出された竪穴住居跡は14軒で、それらは出土遺物等からいずれも平安時代に位置付けられる。ここでは、土器をⅠ～Ⅳ期に区分し、各期ごとに住居跡の特徴を述べ、集落についても若干の検討を加えていくことにする。集落については、道路幅という限定された範囲内の調査結果に基づくもので、遺物及び遺構の重複関係に重点を置き、これらの時期区分を行った。

1 土器の様相について

Ⅰ期(第113図)

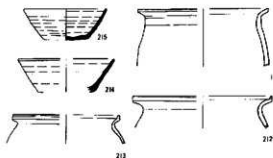
本期に該当する遺物は、土師器の甕、須恵器の環等である。土師器の甕は、内彎しながら立ち上がり、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部を外上方につまみ出している。須恵器の環は、平底で、体部は外傾して立ち上がっている。底部には回転ヘラ切り後、ナデが施されている。底径

は口径の2分の1より大きい。本期は、平安時代前期（9世紀前半）に位置付けられるものと思われる。

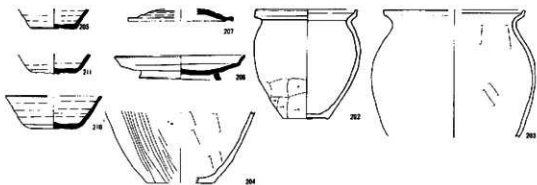
II期（第114図）

本期に該当する遺物は、土師器の甕、須恵器の坏、盤、蓋等である。土師器の甕は、前期とほぼ同様であるが、胴部外面下位に手持ちへら削りやへら磨きが施

され、底部に木葉痕を残すものもある。須恵器の坏は、平底で、体部は外傾して立ち上がる。口縁部がわずかに外反するものもある。底部には回転へら切り後無調整のものや回転へら切り後へら削りが施されているものがある。底径が口径の2分の1よりも小さくなるものが出てくる。盤は、平底で、「ハ」の字状に開く高台が付き、体部は大きく外反し、口縁部は体部から外反して立ち上がる。底部に回転へら削りが施されている。蓋は、天井部が低く、緩やかに内彎して口縁部に至り、口縁部はわずかに外反し、端部は短く垂下する。天井部に回転へら削りが施されている。本期は、平安時代前期（9世紀中葉）に位置付けられるものと思われる。



第113図 第1期出土土器



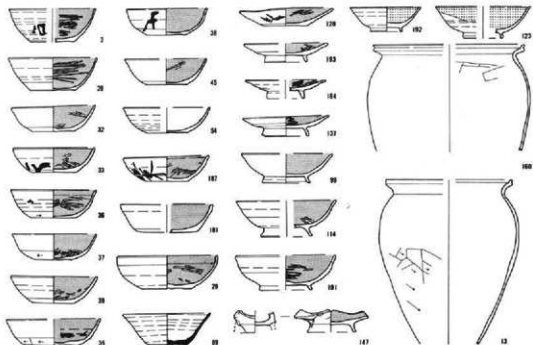
第114図 第II期出土土器

III期（第115図）

本期に該当する遺物は、土師器の甕、瓶、坏、高台付坏、皿、高台付皿、耳皿、須恵器の甕、瓶、長頸壺、坏、高台付坏、皿、高台付皿、灰釉陶器の碗等である。土師器の甕は、前期とほぼ同様であるが、小形のもの（口径11cm前後）、中形のもの（口径15cm前後）、大形のもの（口径20cm前後）の3種類がみられる。瓶は、胴部が外傾して立ち上がり、口唇部が平坦になる。胴部外面下位にへら削りが施されている。坏は、内彎しながら立ち上がるものがほとんどで、口縁部がわずかに外反するものもある。底部及び体部外面下端に回転へら削りが施されているものがほとんどで、中には底部が回転へら切り後無調整のものや回転系切りのもの、手持ちへら削りの

ものもある。内面にへら磨き後黒色処理が施されているものが極めて多い。なかには、内・外面とも黒色処理がされているものもある。また、外面に漆が付着しているものもみられる。高台付坏は、「ハ」の字状に開く高台が付くほかは、坏とはほぼ同様である。皿は、平底で、体部が大きく外傾して立ち上がっている。調整技法は坏と同様である。高台付皿も、「ハ」の字状に開く高台が付くほかは、皿と同様である。耳皿は、1点だけで、高台付皿の体部を丸く折り曲げている。底部及び体部外面にへら磨きが施され、内面はへら磨き後黒色処理が施されている。坏や皿、高台付皿の底部や体部には墨書されているものもある。

須恵器の甕は、平底で、「ハ」の字状に開く短い高台が付き、胴部は内彎気味に立ち上がっている。甗は、胴部がやや外傾して口縁部に至り、口唇部が平坦なものと、2孔式で胴部が外傾して立ち上がり、胴部下位内・外面に手持ちへら削りが施されているものがある。長頸壺は、直立する高台のものと、「ハ」の字状に開く短い高台のものがあり、胴部が内彎して立ち上がり、上位に最大径を持つ。頸部は外反しながら立ち上がる。底部や胴部外面下位に回転へら削りが施されている。坏は、平底で、体部は外傾して立ち上がるものと、内彎気味に立ち上がるものがあり、口縁部が外反するものもある。底部に回転へら切り後、回転へら削りや手持ちへら削りが施されていたり、回転へら切り後無調整のものもある。口径は13cm前後のものがほとんどで、底径が口径の2分の1より小さくなるものがほとんどである。高台付坏は、「ハ」の字状に開く高台が

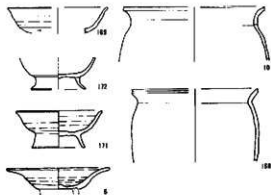


第115図 第Ⅲ期出土土器

付き、体部は内彎しながら立ち上がる。底部や底部及び体部外面下端に回転ヘラ削りが施されている。皿は、体部が大きく外傾して立ち上がり、底部に回転ヘラ削りが施されている。高台付皿は、「ハ」の字状に開く高台が付き、体部は大きく外傾し、口縁部がわずかに外反する。底部に回転ヘラ削りが施されている。灰釉陶器の碗は、本期に特有のもので、高台が三日月高台のものと断面二等辺三角形のものがある。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。底部及び体部外面下端に回転ヘラ削りが施され、内面に灰釉が施されている。本期は、土師器・須恵器とも出土量及び器種が最も豊富な時期で、平安時代前期（9世紀後葉）に位置付けられるものと思われる。

IV期（第116図）

本期に該当する遺物は、土師器の甕、坏、高台付坏、高台付皿、須恵器の坏、皿等である。土師器の甕は、前期とほぼ同様であるが、口径が20cm前後になる。坏は、内彎しながら立ち上がるものと外傾して立ち上がるものがあり、口縁部がわずかに外反するものもある。内面にはヘラ磨き後黒色処理を施しているが、ヘラ磨きだけのものもでてくる。底部が回転糸切りのもの、体部外面下端が回転ヘラ削りのものもある。高台付坏は、坏に「ハ」の字状に開く2cm前後の足高の高台が付くようになる。高台付皿は、体部が大きく外反して立ち上がり、口縁部がほぼ水平になる。底部は回転ヘラ切りである。須恵器の坏は、平底で、体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部に回転ヘラ削りが、体部外面下端に回転ヘラ削りが施されている。皿は、体部が大きく外傾して口縁部に至る。本期は、出土遺物のうち土師器の占める割合が多く、平安時代前期（10世紀前葉）に位置付けられるものと思われる。



第116図 第IV期出土土器

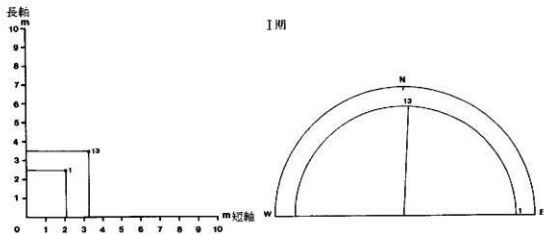
2 住居の形態と集落について

平安時代（9世紀前葉から10世紀前葉）と考えられる住居跡が14軒検出されており、出土遺物や重複関係から、14軒の住居跡を4期に区分した。

I期 平安時代（9世紀前葉）

第1・13号住居跡が当該期に属する。第1号住居跡は約半分が調査区外へ延びているため不明な点が多いが、平面形は、第13号住居跡が方形を呈し、一辺が約3.4mである。主軸方向は第1号住居跡がN-90°-Eを示し、竈が東壁に付設され、第13号住居跡はN-3°-Eを示し、

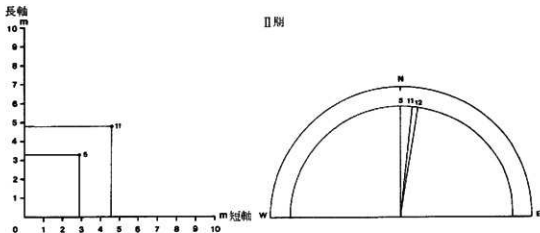
竈が東壁と北壁の2か所に付設されている。ピットは、第13号住居跡では出入口施設に伴うピットが1か所検出されている。時期は同じであるが、規模に違いが見られる。



第117図 住居跡規模・主軸方向Ⅰ期

Ⅱ期 平安時代（9世紀中葉）

第5・11・12号住居跡が当該期に属する。第12号住居跡は大部分が調査区外へ延びているため不明な点が多いが、平面形は第5・11号住居跡とも方形を呈し、規模は、第5号住居跡は一辺が3m前後、第11号住居跡は一辺が約4.7mである。主軸方向はいずれもN-0°からN-10°-E以内を示し、北壁に竈が付設されている。支柱穴は、第11号住居跡から4か所検出されている。

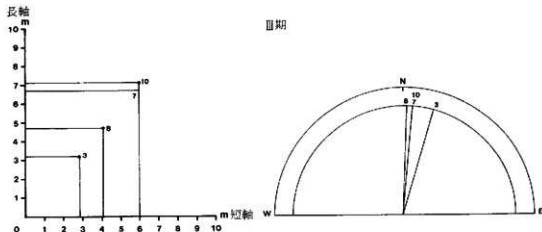


第118図 住居跡規模・主軸方向Ⅱ期

Ⅲ期 平安時代（9世紀後葉）

第3・7・8・10・14号住居跡が当該期に属する。第14号住居跡は竈周辺しか検出されなかったため不明な点が多いが、他の4軒は、平面形がすべて長方形を呈し、規模は、一辺が3m

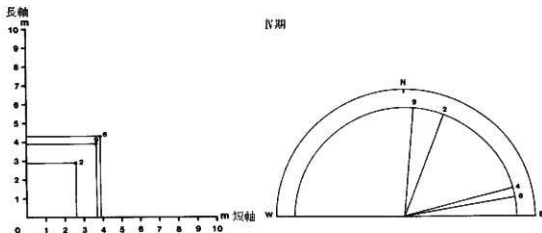
前後の住居跡（第3号住居跡）、一辺が4m 台の住居跡（第8号住居跡）、一辺が6～7mの大形の住居跡（第7・10号住居跡）と様々である。主軸方向は第14号住居跡以外はいずれも $N-0^{\circ}$ から $N-20^{\circ}-E$ 以内を示し、北壁に竈が付設されている。主柱穴はいずれも4か所検出され、第7号住居跡はさらに出入口施設に伴うピットも検出されている。



第119図 住居跡規模・主軸方向Ⅲ期

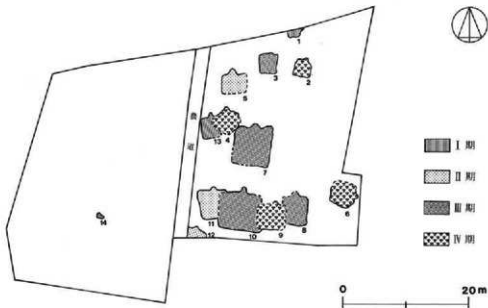
Ⅳ期 平安時代（10世紀前葉）

第2・4・6・9号住居跡が当該期に属する。平面形は第2・6号住居跡が長方形を呈し、第9号住居跡が方形を呈している。住居跡の規模は、一辺が3m前後の住居跡（第2号住居跡）、4m前後の住居跡（第6・9号住居跡）と、あまり違いがない。主軸方向は第2・9号住居跡が $N-21^{\circ}-E$ ・ $N-5^{\circ}-E$ を示し、竈が北壁に付設され、第4・6号住居跡が $N-75^{\circ}-E$ ・ $N-80^{\circ}-E$ を示し、竈が東壁に付設されている。主柱穴は1か所から4か所検出されている。



第120図 住居跡規模・主軸方向Ⅳ期

以上のことから、当調査区から検出された住居跡はⅠ～Ⅳ期（9世紀前葉～10世紀前葉）の4期に区分することができ、当地上には平安時代前期に集落が形成されていたことがうかがわれる。特に、9世紀後葉には、大形の住居跡が2軒検出され、その出土遺物の中に、愛知県の猿投窯で作られた灰釉陶器の碗が出土しており、この時期が、当調査区における集落の中心的時期になると考えられる。当遺跡周辺で、奈良・平安時代の住居跡が検出されている遺跡は、水戸市の大舘町遺跡、薬王院東遺跡、砂川遺跡、松原遺跡、大塚新地遺跡がある。



第121図 集落変遷図（Ⅰ～Ⅳ期）

参考文献

- (1) 浅井 哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ）」『研究ノート創刊号』茨城県教育財団 1992年
- (2) 水戸市大舘町遺跡発掘調査会『大舘町遺跡』1988年
- (3) 水戸市薬王院東遺跡発掘調査会『薬王院東遺跡』1991年
- (4) 茨城県教育財団「砂川遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第16集』1981年
- (5) 茨城県教育財団「松原遺跡・大塚新地遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第11集』1980年

第9章 高原遺跡

第1節 遺跡の概要

高原遺跡は、水戸市の南東部、東茨城台地南東端の標高28m前後の小さな舌状台地上に立地する奈良・平安時代及び江戸時代の複合遺跡である。調査区は北西から南東に約71m、北東から南東に約40m、面積2,458㎡で、現況は畑地と陸田である。

今回の調査によって検出された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、土坑36基、溝6条、井戸1基である。

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡6軒で、調査区全域から検出されている。竈が確認されている住居跡が4軒で、うち3軒は北東壁に、1軒は北西壁に付設されている。土坑36基のうち、3基からは人骨が検出され、江戸時代には、調査区は墓域になっていたものと思われる。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に約52箱出土している。奈良・平安時代の遺物は、土師器の杯、甕、須恵器の坏、壺、土師質土器の皿等である。また、墓域と思われる土坑から土師質土器の皿や煙管、釘等も出土している。

第2節 基本層序

第122図は、当調査区の基本層序を観察するために設けたテストピットの土層図である。場所は、調査区内で最も標高が高い地点とし、南東部のB2c₄区を選定した。

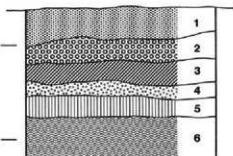
第1層は、表土で、ローム粒子・炭化粒子を含み、厚さは25～38cmである。第2層は、赤褐色のローム層で、18～30cmの厚さに堆積している。本層の上面が「遺構確認面」にあたる。

第3層は、明褐色のハードローム層で、16～25cmの厚さに堆積している。第4層は、黄褐色の鹿沼バミス層である。第5層は、褐色の粘土層である。

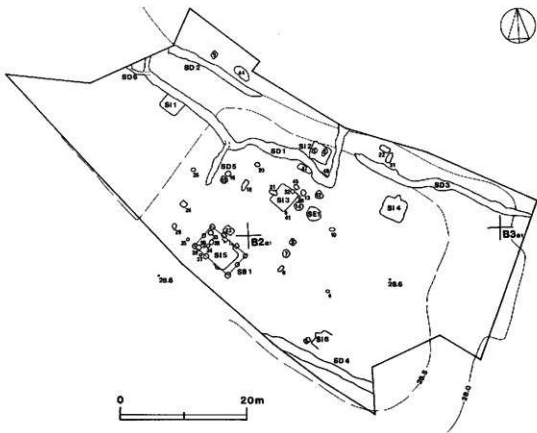
29.0m —

28.0 —

27.0 —



第122図 基本土層図



第123図 高原遺跡全体図

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当調査区から、竪穴住居跡は6軒検出されている。これらは、奈良・平安時代の住居跡で、台地中央部に分布している。平面形は、ほぼ方形を呈し、第1・3号住居跡を除き、竈が付設されている。出土遺物は、8世紀～9世紀を中心とする土師器の坏、甕等や、須恵器の坏、壺、土師質土器の皿等である。

以下、検出された住居跡の特徴や主な遺物について記載していくことにする。

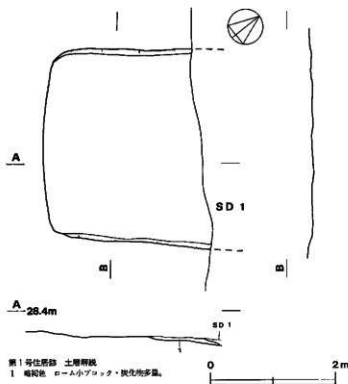
第1号住居跡（第124図）

位置 調査区の北西部、A1e区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北東部は第1号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.21m、短軸2.67mであるが、方形を呈するものと思われる。

主軸方向 [N - 36° - E]



第124図 第1号住居跡実測図

壁 南東壁及び北西壁の壁高は3～8cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。南西壁耕作により削平されている。床 平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 検出されない。

竈 検出されない。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土から土師器の細片(2点)が出土している。

所見 本跡は、重複関係から第1号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第2号住居跡 (第125図)

位置 調査区の北東部、A2g₁区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西部床面は第1号上坑に、北東部床面は第2号上坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.18m、短軸2.70mの長方形を呈している。

主軸方向 N-19°-E

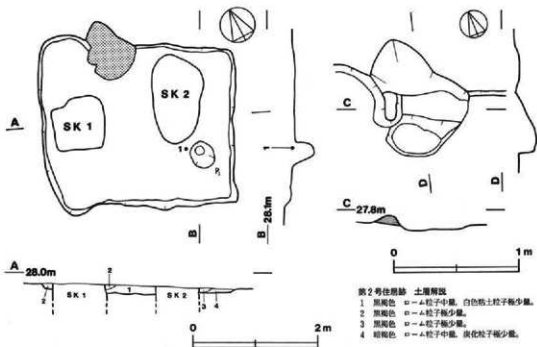
壁 壁高は2～10cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 1か所(P₁)検出されている。P₁は、径40cmの円形を呈し、深さ33cmで、規模や配置から主柱穴のうちの1か所と考えられる。

竈 北壁中央からやや西寄りの壁を約43cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ95cm、幅76cmである。天井部は崩落し、袖部がわずかに遺存している。火床は、床面が約15cm掘り窪められているが、あまり締まっていない。煙道は、火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

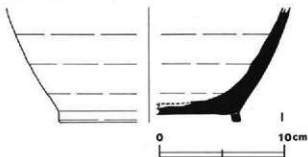
覆土 自然堆積。



第125図 第2号住居跡・竈実測・遺物出土位置図

遺物 床面及び覆土から土師器の細片（7点）、須恵器片（甕1）、須恵器の細片（4点）が出土している。1の須恵器の甕は南東部中程の床面から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第126図 第2号住居跡出土遺物実測図

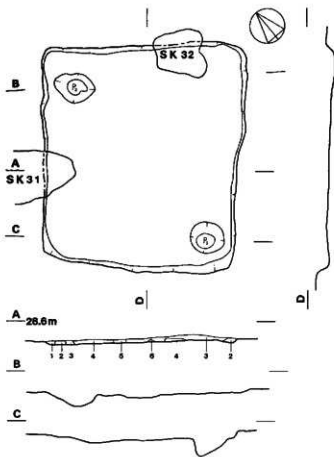
第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第126図	甕	B (9.2)	高台部から胴部にかけての破片。	胴部内・外面横ナデ。	砂粒・長石	PI 10%
1	須恵器	D [14.4]	高台部は豊付が平皿で、「ハ」の字状に開く。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がる。	下廻り筋へラ削り。高台貼り付け後ナデ。	褐灰色 普通	南東部中程床面
		E 0.8				

第3号住居跡（第127図）

位置 調査区のほぼ中央部、A2b区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北東壁は第32号土坑に、北西壁は第31号土坑に掘り込まれている。



第3号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子少量。
- 2 暗褐色 粘土粒子多量。
- 3 黒褐色 ローム粒の中盤、ローム中ブロック少量。
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム大ブロック多量、礫少量。
- 5 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量、炭化物中盤。
- 6 明褐色 ローム粒子多量。

第127図 第3号住居跡実測図

規模と平面形 長軸3.73m, 短軸3.29mの長方形を呈している。

主軸方向 N-39°-E

壁 壁高は4~17cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 凸凹で、踏み締められ硬い。

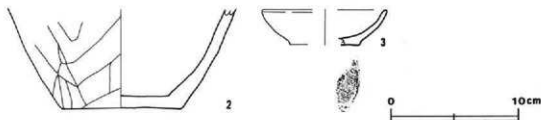
ピット 検出されない。

竈 検出されない。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土の下層・中層から土師器片(甕1), 土師質土器片(皿1), 土師器・土師質土器の細片(29点), 須恵器細片(3点)が出土している。2の土師器の甕, 3の土師質土器の皿は東部の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、重複関係から第31・32号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物等から平安時代後期の住居跡と考えられる。



第128図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第128図 2	須 土師器	B 8.1	底部から胴部にかけての破片。 底部は平底で、体部は内彎気味 に立ち上がる。	胴部外面下端手持ちへう削り。 胴部内面横ナデ。底部回転へう 切り後、手持ちへう削り。	砂粒・雲母・ 長石 にふい赤褐色 普通	P2 15% 覆土下層
		C 9.6				
3	須 土師土器	A [9.8]	底部から体部にかけての破片。 底部は平底で、体部は内彎しな がら立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転 糸切り。	砂粒・雲母・ バミス にふい褐色 普通	P3 30% 覆土下層
		B 2.8				
		C [5.6]				

第4号住居跡 (第129・130図)

位置 調査区の東部、B1_{je}区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.72 m、短軸3.54 mの方形を呈している。

主軸方向 N-28°-E

壁 壁高は50～64 cmで、垂直に立ち上がっている。

壁溝 北東壁左側を除き回っている。上幅12～20 cm、深さ3～5 cmで、断面形はU字状を呈している。

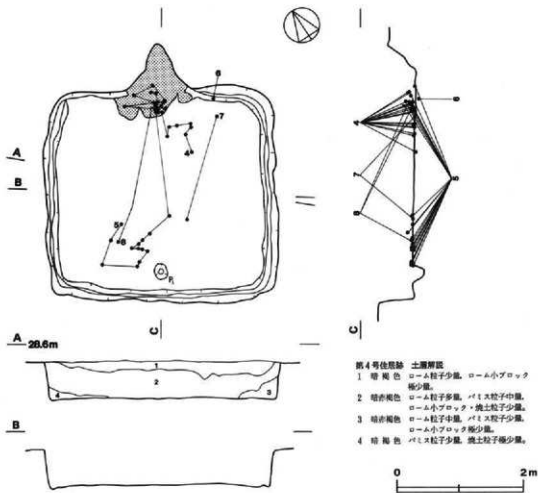
床 平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 1か所 (P₁) 検出されている。P₁は、径23 cmの円形を呈し、深さ18 cmで、規模や配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北東壁中央の壁を約77 cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ119 cm、幅126 cmである。天井部は崩落しているが、袖部は遺存している。火床は、床面が約2 cm掘り窪められており、熱を受けているがあまり硬化していない。煙道は、火床から外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土の下層・中層から、土師器片 (壺2)、土師器の細片 (140点)、須恵器片 (坏3)、須恵器の細片 (14点) 等が出土している。4の土師器の壺は竈内及び東部中程の床面から、5の土師器の壺は竈内及び西部中程の床面から、6の須恵器の坏は東コーナー付近の床面



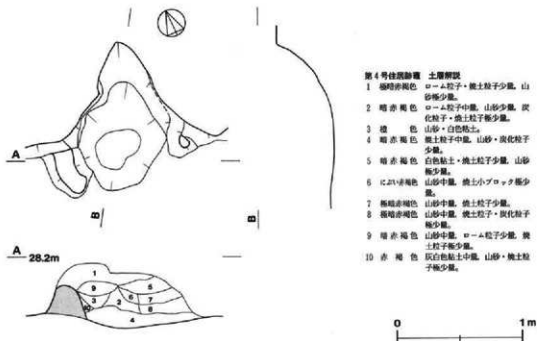
第129図 第4号住居跡実測・遺物出土位置図

から、7の須恵器の坏は中央部及び東部中程の床面から、8の須恵器の坏は竈内及び西部中程の床面から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から奈良時代の住居跡と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第131図 4	甕 土師器	A [23.1] B (29.6)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎しながら立ち上がり頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を外につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。胴部外面上半及び内面ナデ。胴部外面下半斜位ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母にふい・橙褐色普通	P4 30% 竈内及び東部中程床面
5	甕 土師器	A 16.4 B (16.0)	底部欠損。胴部から口縁部にかけて一部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり頸部は強く屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を外上方にわずかにつまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。胴部内・外面横ナデ。胴部外面下端手持ちヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 明赤褐色普通	P5 70% 竈内及び西部中程床面



第130図 第4号住居跡実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・構成	備考
第131図 6	環 須恵器	A 12.2	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部手持ちへう削り。	砂粒・礫・長石 灰黄色 普通	P6 80% 東コーナー付 近床面
		B 4.2				
		C 8.4				
7	環 須恵器	A [12.5]	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端回転へう削り。底部回転へう切り。	砂粒・礫・長石 灰黄色 普通	P7 70% 中央部及び東 部中程床面
		B 4.2				
		C 8.4				
8	環 須恵器	A 13.2	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒 灰白色 普通	P8 60% 壺内及び南部 中程床面
		B 4.2				
		C 8.2				

第5号住居跡 (第132図)

位置 調査区の南西部、B1a区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南部は、第1号掘立柱建物跡の中央部を掘り込んでいる。

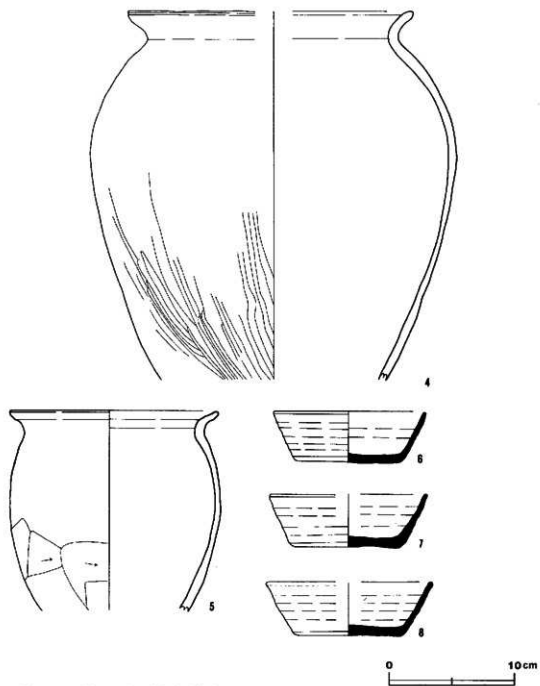
規模と平面形 長軸3.94m、短軸3.75mの方形を呈している。

主軸方向 N-45°-E

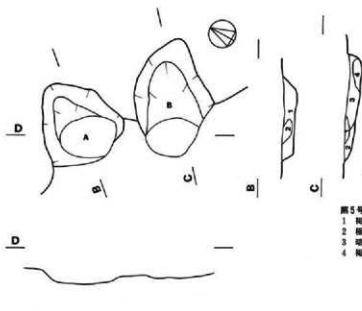
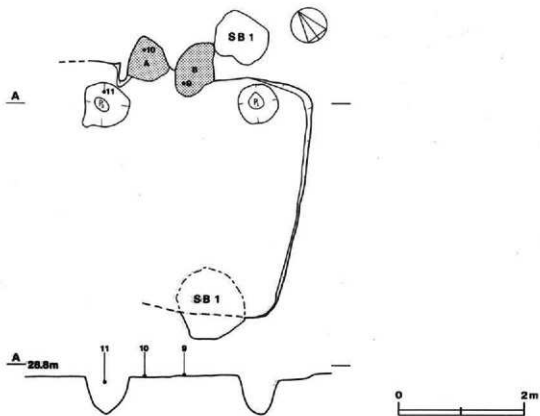
壁 壁高は9cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 2か所 (P₁, P₂) 検出されている。P₁, P₂は、径64~71cmの円形を呈し、深さ58



第 131 图 第 4 号住居跡出土遺物実測図



第5号住居跡(A) 土層解説

- 1 暗赤褐色 黄土粒子多量、 \square - Δ 粒子少量。
- 2 灰褐色 炭化物多量、黄土粒子中量。

第5号住居跡(B) 土層解説

- 1 褐色 \square - Δ 層。
- 2 暗褐色 黄土粒子中量、炭化粒子少量。
- 3 暗褐色 黄土小へ中ブロック- \square - Δ 粒子多量。
- 4 褐色 山砂粒子多量、黄土粒子少量。

第132図 第5号住居跡・竈実測・遺物出土位置図

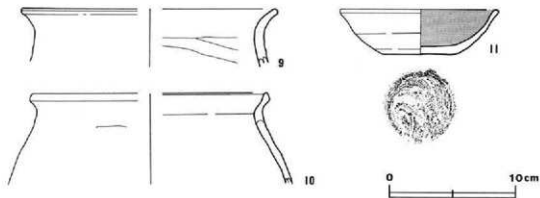
cmで、規模や配列から主柱穴のうちの2か所であると考えられる。

竈 2か所検出されている。竈Aは、北東壁を約47cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ71cm、幅69cmである。天井部は崩落し、袖部も遺存していない。火床は、床面が約6cm掘り窪められており、熱をうけているが硬化していない。煙道は、火床から外傾して立ち上がっている。竈Bは、北東壁を約48cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ91cm、幅64cmである。天井部は崩落し、袖部も遺存していない。火床は、床面が約3cm掘り窪められており、熱を受けているが硬化していない。煙道は、火床から外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土から、土師器片(竈2、坏1)、土師器の細片(29点)、須恵器の細片(3点)等が出土している。9の土師器の甕は竈B内から、10の土師器の甕は竈A内から、11の土師器の坏は柱穴(P₂)内からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第133図 第5号住居跡出土遺物実測・拓影図

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第133図 9	甕 土師器	A [20.6] B (4.7)	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は外反して立ち上がり、口 縁部は外傾する。口唇部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。頸部内 面ヘラナデ。	砂粒・長石・ 雲母 黄褐色 普通	P9 竈B内 5%
10	甕 土師器	A [18.8] B (7.4)	胴部から口縁部にかけての破片。 強りのある胴部で、頸部は 「く」の字状に屈曲し、口縁部 は外傾する。口唇部を上方にわ ずかにつまみ出す。	口縁部内・外面及び胴部内面横 ナデ。	砂粒 にふい橙色 普通	P10 5% 竈A内
11	坏 土師器	A 12.5 B 3.5 C 5.7	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は内彎 気味に立ち上がり、口縁部はわ ずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体 部内面黒色処理。底部回転糸切 り。	砂粒・長石・ 雲母 にふい橙色 普通	P11 70% 柱穴(P ₂)内

第6号住居跡 (第134図)

位置 調査区の南部, B2区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.55 m, 短軸1.20 mであるが, 方形を呈するものと思われる。

主軸方向 N-53°-W

壁 壁高は12 cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 踏み固められ硬い。

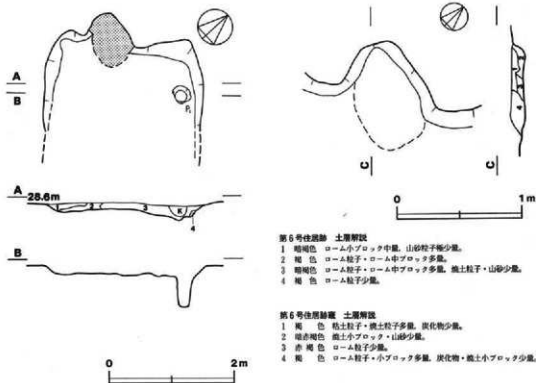
ピット 1か所 (P₁) 検出されている。P₁は, 径28 cmの円形を呈し, 深さ51 cmで, 規模や配置から支柱穴のうちの1か所であると考えられる。

竈 北西壁中央からやや南西寄りの壁を約43 cm壁外へ掘り込み, 粘土と山砂で構築されている。規模は, 長さ87 cm, 幅82 cmである。天井部は崩落し, 袖部も遺存していない。火床は, 床面がほとんど掘り窪められておらず, 熱をうけているが硬化していない。煙道は, 火床から外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層から, 土師器の細片 (53点), 須恵器の細片 (2点) 等が出土している。

所見 本跡は, 遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第6号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量, 山砂粒子極少量。
- 2 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック多量。
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック多量, 粘土粒子・山砂少量。
- 4 褐色 ローム粒子少量。

第6号住居跡竈 土層解説

- 1 褐色 粘土粒子・焼土粒子多量, 灰化物少量。
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・山砂少量。
- 3 赤褐色 ローム粒子少量。
- 4 褐色 ローム粒子・小ブロック多量, 灰化物・焼土小ブロック少量。

第134図 第6号住居跡・竈実測図

表8 高原竪穴住居跡一覧表

番号	位置	方位	平面形	規模		築	土	土	土	出土遺物	備考
				長軸×短軸 (m)	厚 (m)						
1	A1a	[N-36°E]	[方]形	3.23 × 3.97	2~3	平	不明	自然	土師器片2点(須)	SD-1と重複	
2	A2a	N-19°E	長方形	2.18 × 2.70	2~10	平	1	覆	土師器片7点(須), 須恵器片4点(須, 蓋), 炭化粒1点	SK-1・2と重複	
3	A3a	N-39°E	長方形	3.73 × 3.29	4~17	平	-	-	向土 土師器片・土師製土師片2点(須, 須), 須恵器片2点(須) 鉄製品1点	SK-21・22と重複	
4	B1a	N-28°E	方形	3.72 × 3.54	50~64	平	1	覆	自然 土師器片14点(須, 蓋), 須恵器片14点(須, 蓋) 鉄製品3点		
5	B2a	N-49°E	方形	3.94 × 3.75	5	平	2	覆	自然 土師器片29点(須, 蓋, 須), 須恵器片3点(須)	CR-1と重複	
6	D0a	N-32°W	[方]形	2.35 × 1.20	12	平	1	覆	自然 土師器片13点(須, 蓋), 須恵器片2点(須)		

2 掘立柱建物跡

当調査区からは、掘立柱建物跡が南西部から1棟検出されている。この掘立柱建物跡は、重複関係から、第5号住居跡より古い時期に構築されているが、遺構に伴う遺物が少ないことから、時期については不明確である。

第1号掘立柱建物跡 (第135図)

位置 調査区の南西部、B1a区を中心に確認されている。

重複関係 本跡のP₁は第5号住居跡に、P₆は第39号土坑に掘り込まれている。

長軸方向 N-48°-W

規模 柱穴は、10か所 (P₁~P₁₀) 検出されている。南北3間 (約7.1m)、東西2間 (約4.4m) の南北棟の建物で、柱間寸法は、桁行2.15~2.60m、梁行2.02~2.38mである。柱穴の掘り方は、長径0.75~1.16m、短径0.69~1.00mで、楕円形を呈している。深さは、0.15~0.68mで、断面形は方形、U字状を呈している。柱痕跡は検出されていないが、P₃、P₄、P₅、P₉の底面には、柱を建てたと思われる非常に硬く締まった面が確認されている。

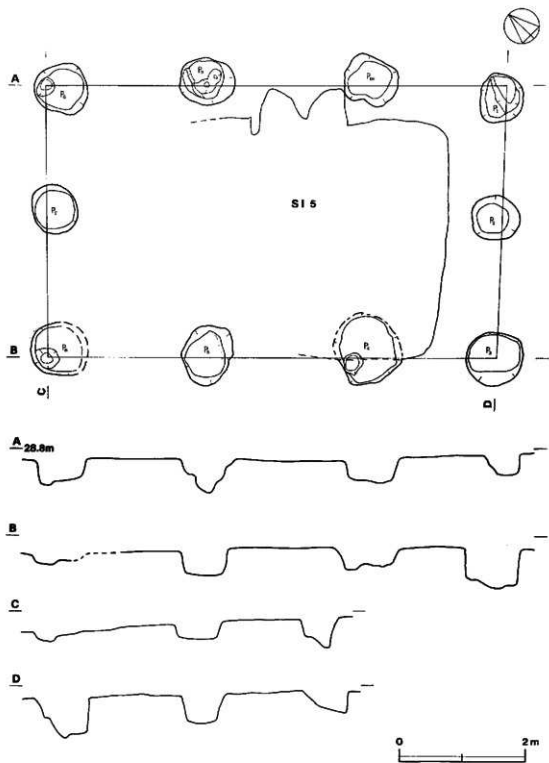
覆土 ロームブロック、ローム粒子を多量に含む褐色及び暗褐色土が人為的に埋め戻されている。

遺物 覆土から土師器の細片 (13点)、須恵器の細片 (4点) が出土している。

所見 本跡は、重複関係から第5号住居跡及び第39号土坑より古い時期に構築されていることから、平安時代前期あるいはそれ以前の建物跡と考えられる。

3 土坑

当調査区からは、北部から南部にかけて36基の土坑が検出されている。ここでは、36基の土坑のうち、江戸時代の墓塚と思われる土坑3基について記述することとし、残る土坑については、一覧表に記載した。なお、土坑番号は調査当初に付した番号である。



第 135 图 第 1 号掘立柱建物跡実測図

第1号土坑（第136図）

位置 調査区の北東部、A1g₃区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第2号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径0.85 m、短径0.82 mの方形を呈している。

長径方向 N-19°-E

壁面 壁高は64 cmで、垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 全体にローム小ブロックを含み、人為堆積と思われる。

遺物 人骨、鉄釘、古銭が出土している。12～19の鉄釘は覆土下層から出土している。

所見 人骨、棺桶に使われたと思われる鉄釘、古銭が出土していることから墓塚と考えられる。

第2号土坑（第136図）

位置 調査区の北東部、A1g₄区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第2号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.40 m、短径0.85 mの楕円形を呈している。

長径方向 N-26°-E

壁面 壁高は110 cmで、ほぼ垂直に立ち上がり、一部内傾している。

底面 平坦。

覆土 全体にローム小ブロックを含み、人為堆積と思われる。

遺物 土師質土器（皿1）、人骨、古銭が出土している。20の土師質土器の皿は覆土下層から出土している。

所見 人骨、古銭が出土していることから墓塚と考えられる。

第9号土坑（第136図）

位置 調査区の北部、A1c₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.18 m、短径0.82 mの長方形を呈している。

長径方向 N-34°-E

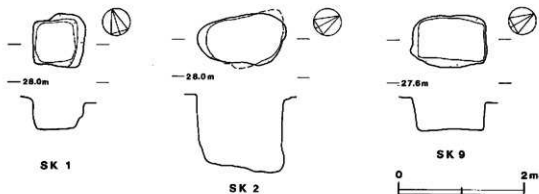
壁面 壁高は51 cmで、垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。

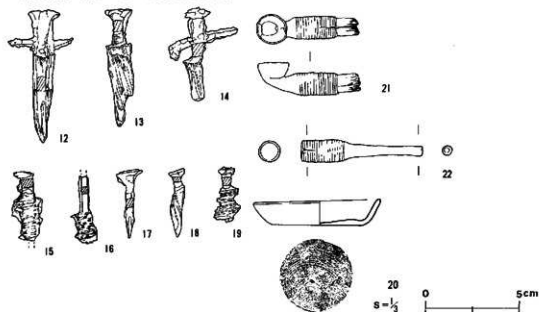
覆土 全体にローム小ブロックを含み、人為堆積と思われる。

遺物 人骨、煙管、古銭が出土している。21・22の煙管は覆土下層から出土している。

所見 人骨、古銭が出土していることから墓塚と考えられる。



第136图 第1・2・9号土坑实测图



第137图 第1・2・9号土坑出土遺物实测・拓影图

第1号土坑出土遺物观察表

图版番号	器 種	法 量				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第137图12	釘	7.0	3.4	0.8	3.2	覆土下層	M4 鉄製 木葉付着
13	釘	6.2	1.4	0.6	0.0	覆土下層	M5 鉄製 木葉付着
14	釘	4.9	3.7	0.8	6.8	覆土下層	M6 鉄製 木葉付着
15	釘	(3.7)	1.6	0.5	(2.5)	覆土下層	M7 鉄製 木葉付着
16	釘	(3.6)	1.3	0.4	(1.0)	覆土下層	M8 鉄製 木葉付着
17	釘	3.6	1.4	0.3	0.7	覆土下層	M9 鉄製 木葉付着
18	釘	3.6	0.9	0.3	0.6	覆土下層	M10 鉄製 木葉付着
19	釘	(3.0)	1.5	0.5	(0.9)	覆土下層	M11 鉄製 木葉付着

第2号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色・焼成	備考
第137図 20	皿	A 10.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外縁して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部円転承切り。	粘土 褐色 普通	PI2 90% 覆土下層
	上肩部	B 2.1				
	C 7.2					

第9号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第137図出	椀	(5.3)	1.6	1.8	(8.1)	覆土下層	M1 副製 器宇の一部・産台・火取
22	椀	(6.4)	1.1		(5.6)	覆土下層	M2 別製 椀口

表9 高原遺跡土坑一覧表

番号	位置	方位	平面形	器 形			土質	形状	出土	出土遺物	備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)					
1	A1a	N-13°-E	方形	0.85	0.82	46	硬質	平坦	人丸		SI-2土層
2	A1a	N-20°-E	楕円形	1.46	0.85	110	硬質	平坦	人丸		SI-2土層
4	D0a	N-50°-E	円形	0.46	0.43	15	硬質	圓状	自然		
5	D0a	N-75°-W	不定形	1.09	1.06	37	外硬	圓状	人丸		
6	D0a	N-45°-E	楕円形	1.15	0.62	10	硬質	圓状	人丸		
7	D0a	N-30°-E	不定形	1.14	1.07	11	硬質	圓状	人丸		
8	D0a	N-45°-W	方形	1.10	0.98	16	硬質	凸形	人丸		
9	A1a	N-34°-E	長方形	1.38	0.82	51	硬質	平坦	人丸	褐色器片14点(重)	
10	A2a	N-50°-W	楕円形	0.96	0.74	9	硬質	平坦	自然		
12	A2a	N-35°-W	不定形	1.25	1.25	15	硬質	凸形	自然	土層器片3点(重)	
13	A2a	N-40°-E	不定形	0.90	0.90	10	硬質	凸形	人丸		
14	A2a	N-45°-W	方形	1.29	1.24	31	硬質	平坦	人丸	土層器片6点(重, 5点)	
15	A1b	N-45°-W	方形	1.27	1.16	12	硬質	圓状	人丸		
16	A1b	N-24°-E	不定形	1.25	0.94	22	硬質	凸形	人丸		
18	A1c	N-31°-E	長方形	1.87	0.92	63	硬質	平坦	人丸	土層器片11点(重), 保護器片6点(重, 高脚)	
20	A2b	N-50°-E	円形	0.81	0.80	20	硬質	凸形	自然	土層器片4点(重)	
21	A2b	N-25°-E	長方形	1.56	0.81	08	外硬	平坦	人丸		
22	A2b	N-60°-W	長方形	1.69	0.98	40	外硬	平坦	人丸		
23	A1c	N-50°-W	長方形	1.76	1.18	52	硬質	平坦	人丸	土層器片1点(重)	
24	A1b	N-54°-W	方形	1.00	0.95	26	外硬	平坦	人丸	土層器片2点(重)	
26	A1b	N-63°-W	方形	0.96	0.69	22	外硬	平坦	人丸		
29	A1c	N-20°-E	不定形	0.83	0.81	38	外硬	凸形	自然		
31	A2c	N-52°-W	不定形	1.34	0.87	47	硬質	平坦	自然		SI-3土層
32	B1c	N-13°-W	不定形	0.97	0.85	11	硬質	圓状	自然	土層器片6点(重)	SI-3土層
33	A1c	N-40°-E	円形	0.86	0.86	18	硬質	圓状	人丸		
34	D0a	N-30°-E	方形	0.58	0.48	15	硬質	圓状	人丸		
35	D0a	N-42°-E	円形	0.54	0.58	19	硬質	圓状	人丸		
36	D1a	N-61°-W	円形	0.36	0.34	26	外硬	圓状	人丸		

番号	位置	表示方向	平面形	規模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長さ(m)	幅(m)	高さ(m)					
37	B1a	-	円形	0.50	0.50	25	煉瓦	凹状	人瓦		
38	B1a	N-27°W	円形	0.72	0.72	14	煉瓦	凹状	人瓦		
39	B1a	N-20°W	円形	0.95	0.97	54	煉瓦	平状	人瓦		SR-1と重複
40	A2b	-	円形	0.51	0.51	14	煉瓦	平状	自然		
41	A2c	N-20°E	円形	0.38	0.50	16	煉瓦	凸状	自然		
44	A2c	N-42°W	不整形円形	3.13	1.35	49	煉瓦	凸状	人瓦		
45	A2c	N-24°W	不整形円形	1.11	0.74	12	煉瓦	凹状	内瓦	十師器片1点(2)	
47	A2b	N-62°W	長方形	2.20	0.26	49	煉瓦	平状	人瓦		SD-1と重複
48	A2b	N-67°W	長方形	1.85	0.31	47	煉瓦	平状	人瓦		SD-1と重複

4 溝

当調査区からは、溝が4条検出されている。重複関係からいづれも住居跡より新しい時期に構築されたものと考えられるが、出土遺物が少ないためそれぞれの構築時期や性格等をとらえることはできない。

第1号溝(第138図)

位置 調査区の北部、A2、A3区に確認されている。

重複関係 本跡は、A1d₁区で第6号溝と重複し、A1g₀区で第5号溝に掘り込まれ、A1e₁区で第1号住居跡を、A2h₁区で第47・48号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 全長は約45.9mで、上幅0.56～1.56m、下幅0.15～0.30m、深さ25～45cmである。断面形は∪状を呈し、底面は凸凹している。

方向 A2f₁区から南方向(N-14°W)へ直線的に伸び、A2h₁区ではほぼ直角に曲がり、西方向(N-57°W)へほぼ直線的に伸び、A1d₁区ではほぼ直角に曲がり、北方向(N-7°E)へ直線的に伸びている。西方向へ伸びている部分のほぼ中央に幅約7.5m、長さ約3.7mの舌状の張り出しを持つ。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土から、流れ込みと思われる十師器の細片(119点)、須恵器の細片(20点)、陶器の細片(12点)等が出土している。

所見 本跡は、平安時代の住居跡と思われる第1号住居跡を掘り込んでいることから、平安時代前期以降の溝と考えられる。第6号溝との新旧関係は不明である。また、溝で囲まれた区域から墓塚が検出されていることから、葬域を区切る溝の可能性も考えられる。

第2号溝(第138図)

位置 調査区の北部、A1、A2区に確認されている。

規模と形状 全長は約 16.5 m で、上幅 1.00～1.45 m、下幅 0.35～0.67 m、深さ 24～27 cm である。断面形は～状を呈し、底面は凸凹している。

方向 A2e1 区から北西方向 (N-52°-W) へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土から、流れ込みと思われる土師器の細片 (13 点)、須恵器の細片 (12 点)、陶磁器の細片 (11 点) 等が出土している。

所見 第 3 号溝とつながると考えられる。出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、性格及び時期等は不明である。

第 3 号溝 (第 139 図)

位置 調査区の北東部、A 2、A 3 区に確認されている。

規模と形状 全長は約 29.1 m で、上幅 0.89～1.57 m、下幅 0.78～1.29 m、深さ 24～37 cm である。断面形は～状を呈し、底面は凸凹している。

方向 A3j1 区から西方向 (N-61°-W) へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土から、流れ込みと思われる土師器の細片 (35 点)、須恵器の細片 (14 点) 等が出土している。

所見 第 2 号溝とつながると考えられる。出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、性格及び時期は不明である。

第 4 号溝 (第 139 図)

位置 調査区の南部、B 2 区に確認されている。

規模と形状 全長は約 17.3 m で、上幅 0.97～1.58 m、下幅 0.35～0.64 m、深さ 24～41 cm である。断面形は～状を呈し、底面は凸凹している。

方向 B2g1 区から西方向 (N-62°-W) へ直線的に延びている。

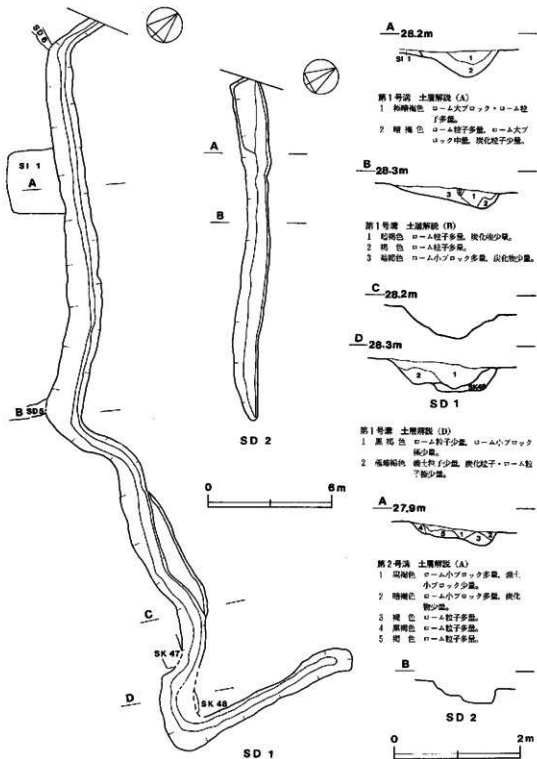
覆土 自然堆積。

遺物 覆土から、流れ込みと思われる土師器の細片 (41 点)、須恵器の細片 (10 点) 等が出土している。

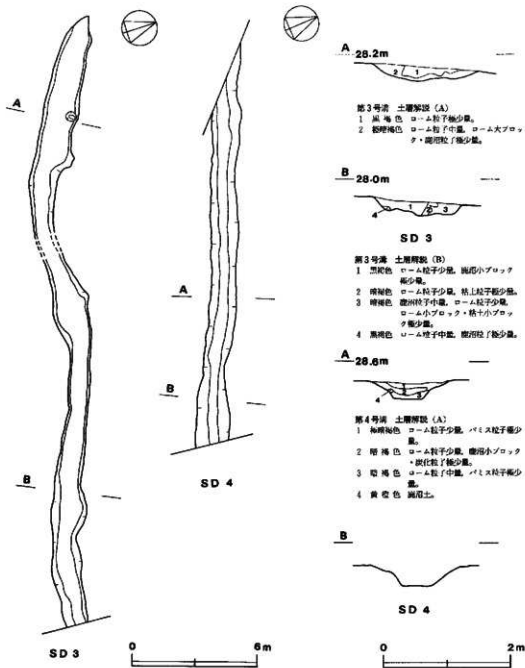
所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、性格及び時期は不明である。

第 5 号溝 (第 140 図)

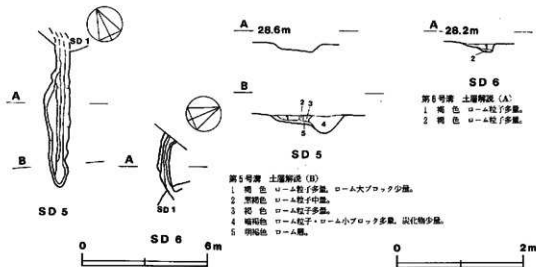
位置 調査区のはほぼ中央部、A 1 区に確認されている。



第138図 第1・2号溝実測図



第139図 第3・4号溝実測図



第140図 第5・6号溝実測図

重複関係 本跡はA1g₂区で第1号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 全長は約8.0mで、上幅0.59～1.20m、下幅0.21～0.45m、深さ12～32cmである。断面形は～状を呈し、底面は凸凹している。

方向 A1h₂区から北方向(N-29°-E)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

所見 本跡は、重複関係から第1号溝より新しい時期に構築されているが、性格及び時期は不明である。

第6号溝 (第140図)

位置 調査区の北西部, A1区に確認されている。

重複関係 本跡はA1d₁区で第1号溝と重複している。

規模と形状 全長は約2.5mで、上幅0.30～0.47m、下幅0.10～0.22m、深さ14～16cmである。断面形は～状を呈し、底面は凸凹している。

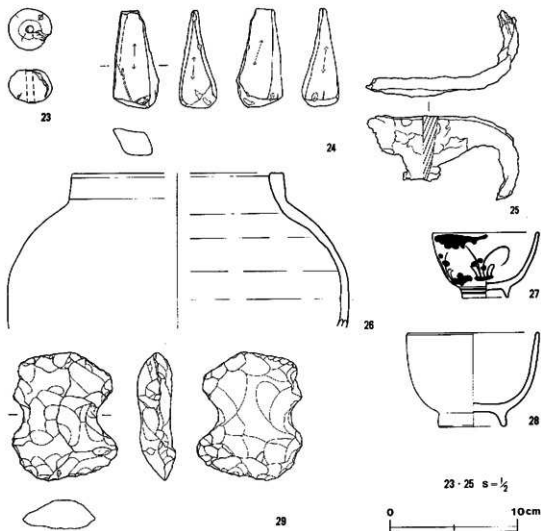
方向 A1d₁区から西方向(N-65°-W)へ湾曲して延びている。

覆土 自然堆積。

所見 性格及び時期, 第1号溝との新旧関係は不明である。

第1号溝出土遺物観察表

図版番号	器 種	法 定					出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)		
第141図 23	球状土塊	1.8	2.4	-	7.2	0.4	覆土小堀	DPI



第141図 第1・2・3号溝出土遺物実測図

図版番号	器種	材質	法 量				出土地点	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第141図21	硯石	翻灰岩	(8.0)	3.7	3.0	(76.5)	覆土中層	Q1

図版番号	器種	法 量				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第141図25	硯	(8.0)	(4.6)	0.8	(34.8)	覆土中層	M12 鉄夾

第2号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・セシ・焼成	備考
第141図 26	壺 瓦質土器	A [16.7] B (12.5)	胴部から口縁部にかけての破片。口縁部・頸部及び胴部内・外面は内斂し、頸部がほぼ垂直に立ち上がり口縁部に至る。口縁部は面をなす。	口縁部・頸部及び胴部内・外面は内斂し、頸部がほぼ垂直に立ち上がり口縁部に至る。口縁部は面をなす。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 普通	P15 覆土上層 5%

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第141図 27	碗 磁器	A 8.4	碗形茶碗。高台は低く直立し、 体部は内彎しながら立ち上がり 口縁部に至る。	外面染付。豊付高粘。	(胎土)オリ ブ灰色 (釉)透明 (焼成)良	P16 100% 覆土中層
		B 5.3				
		D 3.6				
		E 0.7				
28	碗 陶器	A 10.2	体部から口縁部にかけて一部欠 損。高台部はやや剛き気味に付 き、体部は内彎しながら立ち上 がり口縁部に至る。	全而施釉。	(胎土)にぶい 褐色 (釉)透明 (焼成)普通	P17 70% 覆土中層
		B 7.6				
		D 5.3				
		E 1.2				

第3号溝出土遺物観表

図版番号	器種	石質	法量				出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第141図29	石筭	砂岩	10.3	8.4	2.4	251.0	覆土中層	Q2

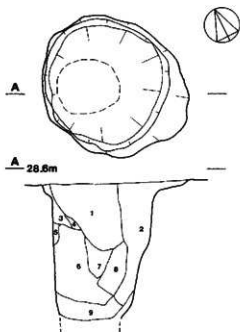
5 井戸

当調査区からは、調査区の中央部に井戸が1基検出されている。しかし、出土遺物がほとんどないため、時期等は不明である。

第1号井戸 (第142図)

位置 調査区の中央部、A1j3区を中心に確認されている。

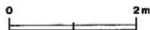
規模と形状 掘り方は、上面が、長径2.43m、短径2.10mの楕円形を呈し、調査ができた深さは2.2mである。確認面から深さ20cmの所で直径約1.6mの円形を呈し、その後徐々に細くな



第142図 第1号井戸実測図

第1号井戸 土層解説

- 黒褐色 ローム粒子・白色粘土粒少量、白色粘土ブロック・黄土粒子極少量。
- 暗赤褐色 炭石大ブロック・白色粘土大ブロック・ローム大ブロック多量。
- 暗褐色 ローム小ブロック少量、白色粘土・ローム粒少量。
- 黄褐色 ローム粒子少量。
- 暗褐色 ローム粒子少量、褐色粘土・ローム小中ブロック少量、白色粘土ブロック極少量。
- 暗褐色 肥田中ブロック・白色粘土小ブロック・ローム中ブロック少量、ローム粒少量。
- 黄褐色 白色粘土粒子・ローム粒少量。
- 黄褐色 肥田小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、白色粘土小ブロック極少量。
- 黄褐色 ローム粒子・白色粘土粒子少量。



り、確認面から深さ2.2mの所で直径約1.0mの円形を呈している。

覆土 全体にロームブロック・白色粘土ブロックを含み、人為堆積と思われる。

遺物 覆土から土師器の細片(4点)、須恵器の細片(2点)等が出土している。

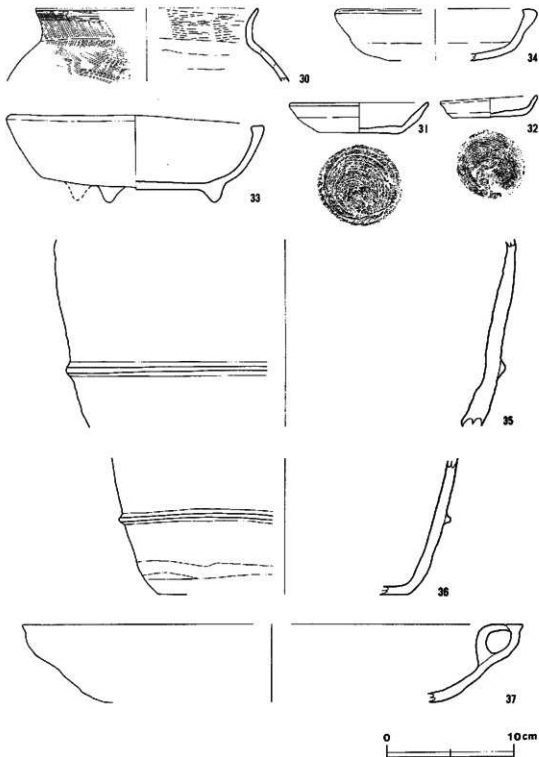
所見 確認面下2.2mの深さまで調査したが、危険が伴うためそれ以下の調査は断念した。遺構の形態から井戸と考えられる。出土遺物がほとんどないため時期等は不明である。

6 遺構外出土遺物

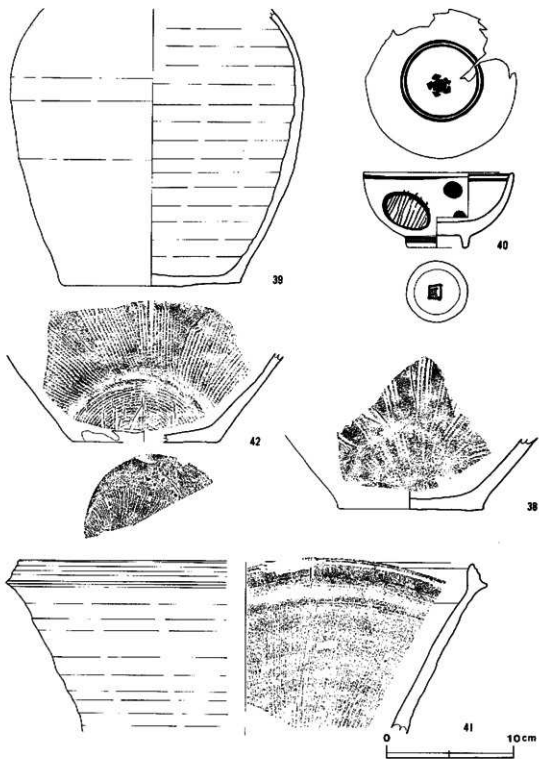
当調査区からは、試掘や表土除去の際に、遺物が少量出土しているため、ここでは、遺構外出土遺物として実測図を掲載し、観察表で解説する。

遺構外出土遺物観察表

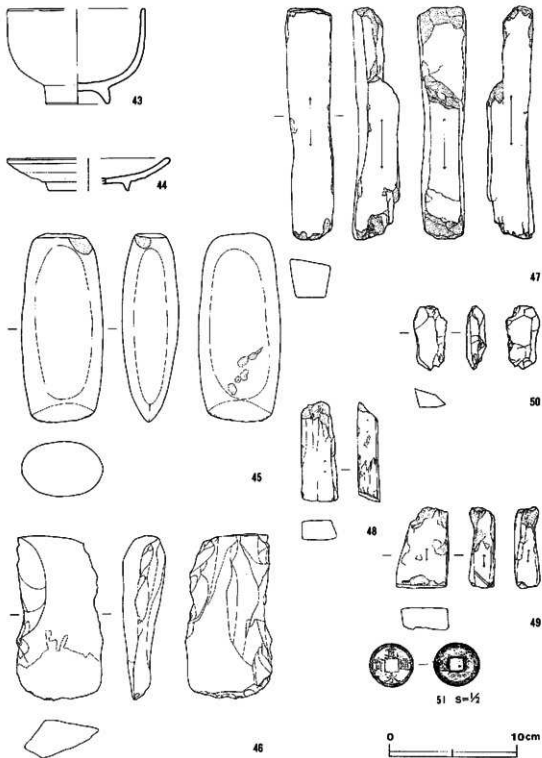
図版番号	器種	法隆(㎝)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・組成	備考
第143区 30	壺 土師器	A [17.5] B (6.0)	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は外反して口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面斜位ナデ。	砂粒・長石にふい褐色普通	P18 5% 表土
31	皿 土師器	A 11.1 B 2.5 C 6.9	口縁部 一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回轉糸切り。	砂粒・スコリア 褐色普通	P19 85% 表土
32	小皿 土師器	A 7.5 B 1.7 C 5.7	底部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回轉糸切り。	砂粒 褐色普通	P20 70% 表土
33	香炉 土師器	A 20.2 B 6.2 E 1.5	頸部から口縁部にかけて一部欠損。脚部は断面三角形を呈する。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり口縁部に至る。口唇部は面をなす。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・礫にふい黄褐色普通	P21 70% 表土
34	香炉 土師器	A [16.2] B (4.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり口縁部に至る。口唇部は面をなす。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒 明褐色普通	P22 20% 表土
35	風炉 土師器	B (15.1)	胴部片。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部内・外面横ナデ。	砂粒 褐色普通	P23 15% 表土 胴部外面一部欠損
36	風炉 土師器	B (11.0) C [20.0]	底部から胴部にかけての破片。底部は平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色普通	P24 10% 表土
37	内耳土器 土師器	A [40.0] B (6.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は大きく外傾して立ち上がり、口縁部は内彎する。口唇部は面をなす。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。耳は横合。	砂粒 黒褐色普通	P25 10% 表土 体部外面ス付替
第144区 38	携鉢 土師器	B (5.9) C 11.5	底部から体部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横ナデ。	砂粒 褐色普通	P26 10% 表土
39	壺 陶器	B (22.4) C 14.2	胴部一部欠損。頸部から口縁部にかけて欠損。底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色普通	P13 60% 表土 底彎蓋(蓋美)
40	碗 磁器	A 12.0 B 6.1 D 4.9 E 1.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台部は直立し、底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	外面文様プリント。全面施釉。	(胎土)灰白色(釉)透明(焼成)普通	P14 70% 表土



第 143 圖 遺構外出土遺物実測・拓影図



第144圖 遺構外出土遺物実測・拓影図



第145图 遺構外出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 41	襷鉢 陶器	A [36.0]	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ	砂粒・石英・長石 におい赤褐色 普通	P27 10% 表土
		B (13.8)				
42	襷鉢 陶器	B (6.8)	底部から体部にかけての破片。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。	口縁部及び体部外面横ナデ。底部回転糸切り。	(胎土)明褐色 (釉)黒褐色 (焼成)普通	P28 10% 表土
		C [11.5]				
第145図 43	碗 陶器	A [11.0]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は直立し、底部は平底で、体部は内傾して立ち上がり口縁部は直立する。	全面施釉。	(胎土)浅黄色 (釉)透明 (焼成)普通	P29 30% 表土
		B 7.2				
		D 5.0				
		E 1.3				
44	皿 陶器	A [12.6]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は直立し、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底部及び高台部露胎。	(胎土)灰黄色 (釉)灰オリーブ色 (焼成)普通	P30 30% 表土
		B 2.6				
		D [6.4]				
		E 0.7				

図版番号	器種	石質	法量				出土地点	備考
			長さ(cm)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)		
第146図 45	石斧	閃緑岩	15.2	6.5	4.5	768.7	表土	Q3
46	石斧	砂岩	13.2	6.9	3.4	319.7	表土	Q4
47	砥石	流紋岩	(13.2)	2.9	3.1	(242.3)	表土	Q5
48	砥石	流紋岩	(8.1)	3.0	1.7	(67.3)	表土	Q7
49	砥石	頁岩	(6.6)	4.2	1.8	(75.8)	表土	Q8
50	不明	頁岩	8.1	2.3	1.3	29.7	表土	Q9

図版番号	銭名	初 辨 年		出土地点	備考
		時 代	年 号		
第145図 51	賈水通寶	江戸時代	賈永元年	表土	M3

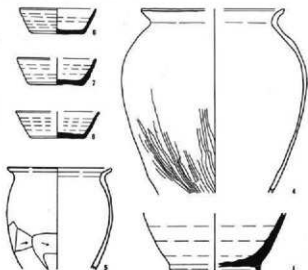
第4節 考 察

当調査区から検出された竪穴住居跡は6軒で、それらは出土遺物等から奈良時代、平安時代に位置付けられる。ここでは、この6軒の住居跡のうち、実測可能な遺物が出上している4軒について、十器をⅠ～Ⅲ期に区分し、各期ごとに住居跡の特徴を述べ、集落についても若干の検討を加えていくことにする。集落については、道路幅という限定された範囲内の調査結果に基づくもので、遺物及び遺構の重複関係に重点を置き、これらの時期区分を行った。

1 土器の様相について

Ⅰ期(第146図)

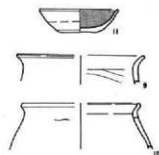
本期に該当する遺物は、土師器の甕、須恵器の坏、壺等である。甕は、胴部が内彎しながら立ち上がり、頸部が「く」の字状または強く屈曲し、口縁部が外傾し、口唇部を外または外上方につまみ出している。胴部外面下半に斜位のへら磨きかへら削りが施されている。須恵器の坏は、平底で、体部が外傾して立ち上がる。底部が手持ちへら削りのものと、底部及び体部外面下端が回転へら削りのものがある。壺は、平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。胴部は内彎気味に立ち上がっている。胴部外面下端に回転へら削りが施されている。本期は、奈良時代(8世紀後葉)に位置付けられるものと思われる。



第146図 第I期出土土器

II期 (第147図)

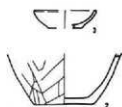
本期に該当する遺物は、土師器の甕、坏等である。甕は、張りのある胴部で、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が外傾し、口唇部を上方にわずかにつまみ出すものと、頸部が外反して立ち上がり、口縁部が外傾し、口唇部が丸いものがある。坏は、平底で、体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部は回転糸切りで、体部内面に黒色処理が施されている。本期は、平安時代前期(9世紀後葉)に位置付けられるものと思われる。



第147図 第II期出土土器

III期 (第148図)

本期に該当する遺物は、土師器の甕、土師質土器の皿である。甕は、平底で、胴部は内彎しながら立ち上がる。底部は回転へら切り後に手持ちのへら削りが施され、胴部外面下端にも手持ちのへら削りが施されている。皿は、平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。底部は回転糸切りである。本期は、平安時代中期(11世紀中葉)に位置付けられるものと思われる。



第148図 第III期出土土器

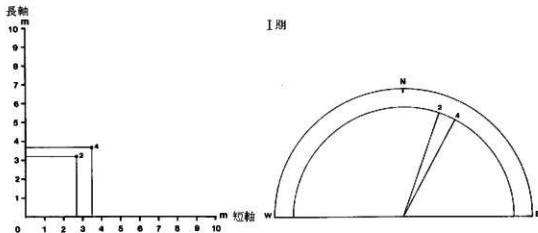
2 住居の形態と集落について

(1) 奈良時代(1期)

奈良時代（8世紀後葉）と考えられる住居跡は2軒検出されている。

I期 奈良時代（8世紀後葉）

第2・4号住居跡が当該期に属する。平面形は、第2号住居跡が長方形を呈し、約3.2m×2.7mで、第4号住居跡が方形を呈し、一辺が約3.6～3.7mで、主軸方向は第2号住居跡がN-19°-E、第4号住居跡がN-28°-Eを示し、第2号住居跡が北壁に、第4号住居跡が北東壁に竈が付設されている。主柱穴は、第2号住居跡から主柱穴のうちの1か所が検出されたが、第4号住居跡からは検出されなかった。しかし、第4号住居跡からは出入り口施設に伴うピットが1か所検出されている。2軒の住居跡は、第2号住居跡が調査区の北東部に、第4号住居跡が調査区の東部にと約11m離れて位置している。時期は同じであるが、規模に若干の違いがみられる。



第149図 住居跡規模・主軸方向 I期

(2) 平安時代（II, III期）

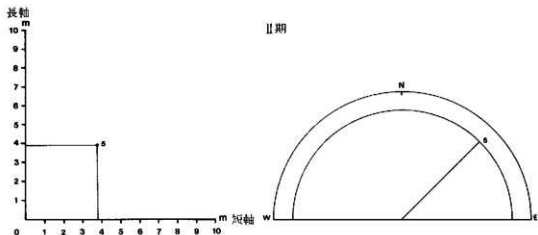
平安時代（9世紀後葉～11世紀中葉）と考えられる住居跡が4軒検出されているが、出土遺物から時期を区分できる住居跡2軒について、それらを2期に区分した。

II期 平安時代前期（9世紀後葉）

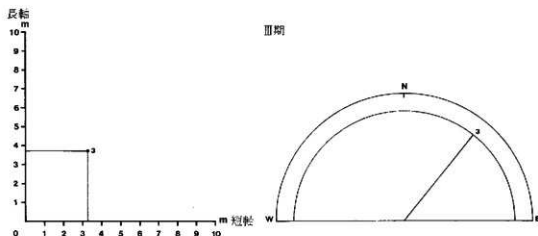
第5号住居跡が当該期に属する。調査区の南西部から検出され、平面形は一辺が4m前後の方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-45°-Eで、北東壁に竈が2か所検出されている。この竈はつくり替えられたものと思われる。主柱穴は2か所だけが検出された。

III期 平安時代中期（11世紀中葉）

第3号住居跡が当該期に属する。調査区のはほぼ中央部から検出され、平面形は長方形を呈し、約3.7m×3.3mの住居跡で、主軸方向はN-39°-Eを示している。炉または竈、主柱穴は検出されていない。



第150図 住居跡規模・主軸方向 II期

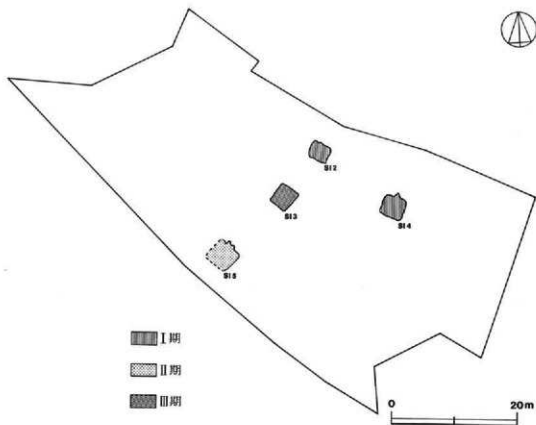


第151図 住居跡規模・主軸方向 III期

以上のことから、高原遺跡で検出された住居跡はⅠ～Ⅲ期（8世紀後葉～11世紀中葉）の3期に区分することができ、当地上には奈良時代から平安時代にかけて、断続的に集落が形成されていたことがわかれる。当調査区周辺で、奈良・平安時代の集落が検出されている遺跡は、水戸市の大鋸町遺跡、薬王院東遺跡、砂川遺跡、松原遺跡、大塚新地遺跡がある。

参考文献

- (1) 浅井 哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器（1）」『研究ノート創刊号』茨城県教育財団 1992年
- (2) 水戸市大鋸町遺跡発掘調査会『大鋸町遺跡』1988年
- (3) 水戸市薬王院東遺跡発掘調査会『薬王院東遺跡』1991年
- (4) 茨城県教育財団「砂川遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第16集 1981年



第152図 集落変遷図（I～III期）

- (5) 茨城県教育財団「松原・大塚新地遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第11集』1980年
(6) 笠間市史編纂委員会『笠間大洲遺跡』1987年

第10章 北屋敷遺跡

第1節 遺跡の概要

北屋敷遺跡は、水戸市の南東部、東茨城台地南東端の標高16 m前後の谷津に面した台地縁部に立地する古墳時代、奈良・平安時代及び江戸時代の複合遺跡である。調査区は、北東から南西に115 m、北西から南東に21 m、面積2,146 m²で、現況は宅地と山林である。

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、古墳1基で、調査区の北東部から検出されている。古墳は、横穴式石室を持つ円墳である。

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡が5軒で、調査区の中央部から南西部にかけて検出されている。そのうち4軒に竈が確認され、北壁に付設されているもの3軒、北東壁に付設されているもの1軒である。また、本期に比定される溝は2条検出されている。

江戸時代の遺構は、土坑が4基検出され、いずれも墓塚である。

その他、掘立柱建物跡、土坑、溝については、出土遺物がほとんどないため、時期・性格等不明である。

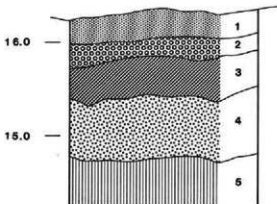
遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20 cm)に約40箱出土している。古墳時代前期から後期の遺物は、土師器の壺、埴、器台、鉄製品の直刀、刀子、鎌が出土している。奈良・平安時代の遺物は、土師器の坏、高台付坏、甕、須恵器の坏、高台付坏、盤、蓋、甕等が出土している。土製品では、瓦、球状土錘等が出土している。江戸時代中期の遺物は、磁器、印籠、古銭が出土している。

17.0 m —

第2節 基本層序

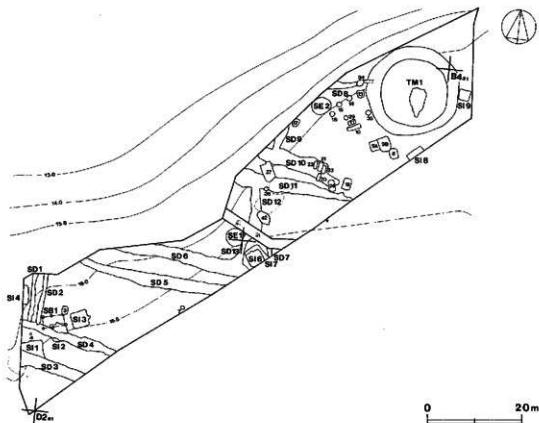
第153図は、当調査区の基本層序を観察するために設けたテストピットの土層図である。場所は、調査区内で最も標高が高い地点とし、北東部のB3ha区を選定した。

第1層は、黒褐色の表土で、ローム粒子・炭化粒子を含み、厚さは24～31 cmである。第2層は、暗褐色の表土で、ローム粒子を含み、厚



第153図 基本土層図

さは17～26 cmである。第3層は、赤褐色のローム層で、32～43 cmの厚さに堆積している。本層の上面が「遺構確認面」にあたる。第4層は、赤褐色のハードローム層で、58～70 cmの厚さに堆積している。第5層は、黄橙色のパミス層である。



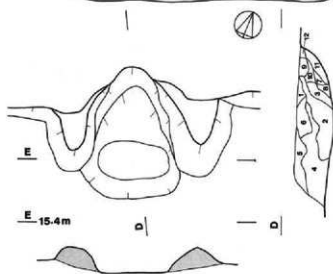
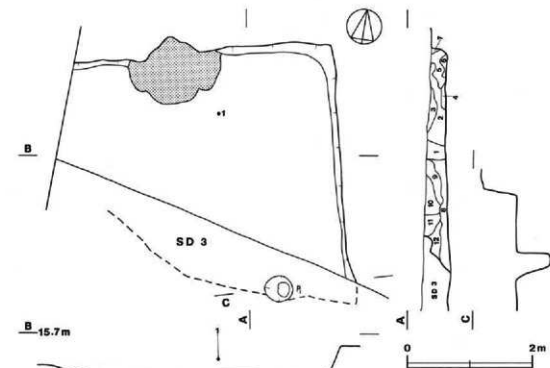
第154図 北屋敷遺跡全体図

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当調査区から、竪穴住居跡は8軒検出されている。古墳時代の住居跡は3軒で、調査区の中央部及び北東部に検出され、平面形はほぼ方形を呈している。奈良・平安時代の住居跡は5軒で、調査区の中央部及び南西部から検出され、そのうち4軒から竪が検出されている。出土遺物は、古墳時代の土師器の壺、埴、奈良・平安時代の土師器の坏、高台付坏、高台付皿、甕、須恵器の坏、高台付坏、土製品の瓦等である。

以下、検出された住居跡の特徴や主な遺物について記載していくことにする。



第1号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック多量、焼土粒子少量。
- 2 褐色 ローム粒子・山砂中ブロック多量、焼土小ブロック少量。
- 3 褐色 ローム粒子・山砂粒子多量、山砂中ブロック・焼土中ブロック・炭化物粒子少量。
- 4 褐色 山砂層。
- 5 褐色 ローム粒子・山砂粒子多量、山砂大ブロック中層、焼土粒子少量。
- 6 褐色 ローム粒子・山砂粒子・山砂中ブロック中層、炭化物粒子少量。
- 7 褐色 ローム粒子・山砂粒子多量。
- 8 暗褐色 ローム粒子多量、山砂粒子・焼土小ブロック中層、炭化物少量。
- 9 暗褐色 山砂大ブロック・山砂粒子多量、炭化物中層、焼土小ブロック少量。
- 10 褐色 山砂粒子多量、焼土小ブロック中層、ローム粒子・ローム大ブロック少量。
- 11 暗褐色 山砂粒子中層、焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量。
- 12 暗褐色 山砂小～中ブロック多量、ローム粒子・焼土小ブロック少量。

第1号住居跡 土層解説

- 1 褐色 山砂小ブロック多量、ローム中ブロック・焼土小ブロック少量。
- 2 褐色 灰・焼土小ブロック多量、ローム小ブロック少量。
- 3 褐色 灰多量、ローム小ブロック・焼土中ブロック中層、炭化物粒子少量。
- 4 褐色 ローム粒子・山砂小ブロック多量、焼土中ブロック中層、炭化物粒子少量。
- 5 褐色 山砂大ブロック・焼土中～大ブロック・山砂粒子多量。

- 6 褐色 山砂粒子・焼土小～大ブロック多量、山砂大ブロック・炭化物粒子少量。
- 7 黒褐色 灰多量、ローム粒子・焼土中ブロック中層。
- 8 褐色 山砂層。
- 9 暗褐色 灰多量、ローム小ブロック・焼土粒中層、山砂粒子少量。
- 10 黒褐色 ローム小ブロック・焼土粒子・灰中層、山砂粒子少量。
- 11 褐色 ローム粒子多量。
- 12 暗褐色 ローム土。

第155図 第1号住居跡・竈実測・遺物出土位置図

第1号住居跡 (第155図)

位置 調査区の南西部, C1g区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南部は第3号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.30m, 短軸4.11mであるが, 方形を呈するものと思われる。

主軸方向 N-15°-E

壁 壁高は10~52cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 踏み固められ硬い。

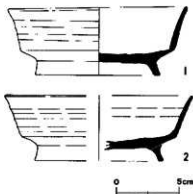
ピット 1か所 (P₁) 検出されている。P₁は, 径41cm, 深さ54cmで, 規模及び配置から主柱穴のうちの1か所と考えられる。

竈 北壁中央部の壁を約30cm壁外へ掘り込み, 粘土と山砂で構築されている。規模は, 長さ106cm, 幅150cmである。天井部は崩落しているが, 両袖部が遺存している。火床は, 床面が約3cm掘り窪められており, 熱をうけているが硬化していない。煙道は, 火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土下層・中層にかけて, 土師器の細片 (69点), 須恵器片 (高台付坏2), 須恵器の細片 (32点) 等が出土している。1の須恵器の高台付坏は北東部中程の覆土中層から, 2の須恵器の高台付坏は竈内から出土している。

所見 本跡は, 重複関係から第3号溝より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。



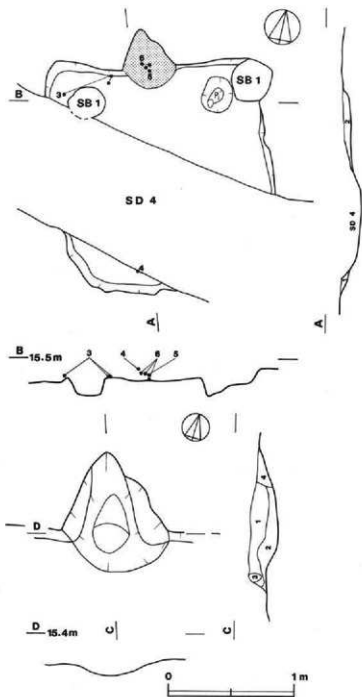
第156図 第1号住居跡
出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第156図 1	高台付坏 須恵器	A 14.4	体部及び口縁部の一部が欠損。 高台部は翼付きが平坦で, 「ハ」 の字状に割き, 底部は平坦で, 体部は外傾して立ち上がり, 口 縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 底部同軸へう削り。高台部貼り 付け後, ナデ。	砂粒・長石・礫 楊灰色 普通	P1 70% 北東部中程覆 土中層
		B 5.6				
		D 9.9				
		E 1.1				
2	高台付坏 須恵器	A [14.8]	高台部から口縁部にかけての破 片。高台部は翼付きが平坦で, 「ハ」の字状に割き, 底部は平 坦で, 体部は外傾して立ち上 がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 底部同軸へう削り。高台部貼り 付け後, ナデ。	砂粒・長石・礫 灰色 普通	P2 40% 竈内
		B 5.3				
		D [10.2]				
		E 1.3				

第2号住居跡 (第157図)

位置 調査区の南西部, C2f区を中心に確認されている。



第2号住居跡 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、山砂中
ブロック少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、黄土粒
子・炭化物(小) 数少量。

第2号住居跡 土層解説

- 1 褐色 山砂粒子多量、黄土粒子・炭化粒子少量。
- 2 濃い黄褐色 黄土粒子多量、山砂少量。
- 3 褐色 ローム土。
- 4 褐色 黄土粒子数少量。

第157図 第2号住居跡・竈実測・遺物出土位置図

重複関係 本跡の南東部から西部にかけて第4号溝に、北東コーナー・北西コーナー付近は第1号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.65 m、短軸3.61 mの方形を呈している。

主軸方向 N-19°-E

壁 壁高は5~24 cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

ピット 1か所(P₁)検出されている。P₁は、径53 cm、深さ29 cmで、規模及び配置から主柱穴のうちの1か所であると考えられる。

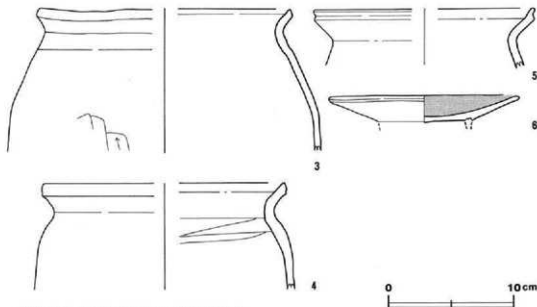
竈 北壁中央部の壁を約62 cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ91 cm、幅84 cmである。天井部は崩落し、両袖部も消失している。火床は、床面が約9 cm掘り窪められており、熱をうけているがあまり硬化していない。煙道は、火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土下層・中層から土師器片(甕3、高台付皿1)、土師器の細片(97点)、須恵器の細片(6点)等が出土している。3の土師器の甕は北西コーナー付近の床面から、4の土師器の甕は南西コーナー付近の覆土中層から、5の土師器の甕・6の土師器の高台付皿は竈内から出土している。

所見 本跡は、重複関係から第1号掘立柱建物跡及び第4号溝より古い時期に構築されている。

遺構の形態及び出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第158図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法型 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第158図 3	甕 土師器	A [20.0] B (11.4)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部をわずかに上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。胴部外面上半横ナデ。	砂粒・雲母 におい 橙色 普通	P3 15% 北西コーナー 付近床面
4	甕 土師器	A [19.2] B (8.6)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部をわずかに上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。胴部外面上半横ナデ。	砂粒・石英 明赤褐色 普通	P4 5% 南西コーナー 付近覆土中層
5	甕 土師器	A [17.5] B (4.6)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P5 5% 壺内
6	高台付Ⅱ 土師器	A 14.9 B (2.1)	高台部欠損。体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平座で、体部は大きく外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。底部は摩耗が激しく不明。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P6 70% 壺内 二次焼成を受け 体部内・外面割離

第3号住居跡 (第159図)

位置 調査区の南西部、C2区Eを中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.42 m、短軸3.38 mの方形を呈している。

主軸方向 N-67°-E

壁 壁高は6~39 cmで、垂直に立ち上がっている。

壁溝 東コーナーのごく一部を除き回っている。上幅8~31 cm、深さ3~7 cmで、断面形は「U」字状を呈している。

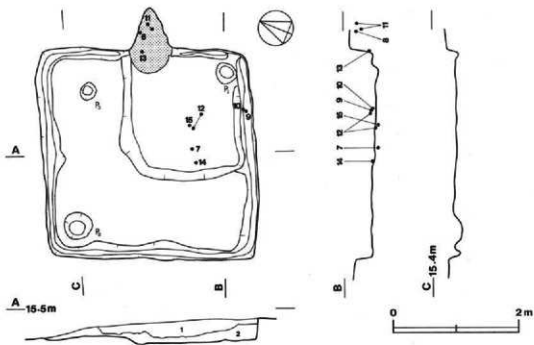
床 平坦で、踏み固められ硬い。東側約4分の1が一段低くなっている。

ピット 3か所 (P₁~P₃) 検出されている。P₁~P₃は、径24~48 cmの円形を呈し、深さ11~15 cmで、規模及び配列から支柱穴のうちの3か所と考えられる。

竈 北東壁中央部の壁を約64 cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築され、両袖内側に補強材として凝灰岩を使用している。規模は、長さ101 cm、幅70 cmである。天井部は崩落しているが、両袖部の一部が遺存している。火床は、床面が約2 cm掘り窪められており、熱を受けてレンガ状に赤変硬化している。さらに、燃焼部側面も焼土化している。煙道は、火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

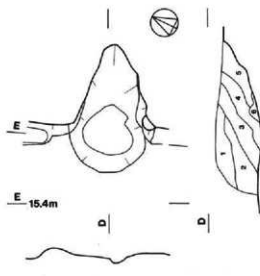
覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土下層から中層にかけて、土師器片 (甕3、坏2、高台付坏2、高台付皿2)、土師器の細片 (132点)、須恵器の細片 (31点) が出土している。7の土師器の甕は中央付近の



第3号住居跡 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子・白色粘土極少量。
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小へ中ブロック少量、粘土粒子極少量。



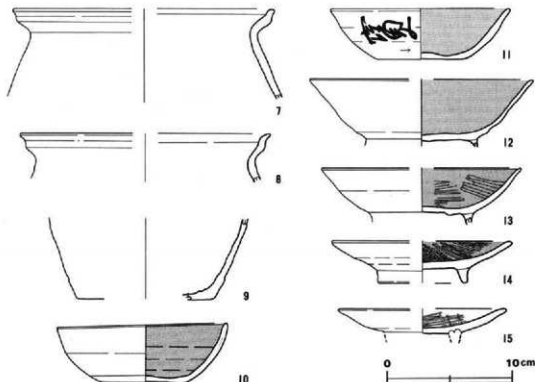
第3号住居跡跡 土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子・ローム小ブロック・灰中ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子極少量。
- 2 暗褐色 灰多量、粘土小ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子極少量。
- 3 暗褐色 灰多量、ローム粒子・粘土小ブロック中量、ローム小ブロック少量。
- 4 暗褐色 灰中量、粘土粒子・粘土小ブロック少量、粘土小ブロック極少量。
- 5 暗赤褐色 粘土小ブロック中量、灰少量、粘土粒子・ローム粒子極少量。
- 6 極暗赤褐色 灰中量、粘土小ブロック少量、粘土粒子極少量。

第159図 第3号住居跡・竈実測・遺物出土位置図

床面から、8の土師器の甕は竈内から、9の土師器の甕・10の土師器の坏は南壁中央付近の覆土下層から、11の土師器の坏は竈内から、12の土師器の高台付坏は南東部中程の床面から、13の土師器の高台付坏は竈内から、14の土師器の高台付皿は中央付近の覆土下層から、15の土師器の高台付皿は南東部中程の床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期の住居跡と考えられる。



第160図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第160図 7	甕 土師器	A [21.1] B (7.2)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にふい赤褐色 普通	P7 10% 中央付近床面
8	甕 土師器	A [19.9] B (3.9)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部を外上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・ 雲母 明赤褐色 普通	P8 5% 甕内
9	甕 土師器	B (6.5) C [11.0]	底部から胴下半部にかけての破片。底部は平底で、胴部は外傾して立ち上がる。	胴部内面横ナデ。胴部外面下半及び底部手持ちヘラ削り。	砂粒・石英・ 雲母 明赤褐色 普通	P9 5% 南壁中央付近 覆土下層
10	坏 土師器	A 13.7 B 4.8 C 6.7	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部内面黒色処理。体部外面下端及び底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石・ 雲母 明赤褐色 普通	P10 90% 南壁中央付近 覆土下層
11	坏 土師器	A 14.5 B 4.1 C 7.8	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転ヘラ削り。	砂粒 にふい褐色 普通	P11 50% 甕内 体部外面墨書 「賈」

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色澤・焼成	備考
第160図 12	高台付 土師器	A [17.9] B (5.5)	高台部欠損。底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内傾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P12 40% 南西部中位区画
13	高台付 土師器	A [16.0] B (4.6)	高台部欠損。底部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内傾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石 にふい褐色 普通	P98 60% 窟内
14	高台付 土師器	A [14.4] B (3.4) D [6.8] E 1.3	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に弱き、底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へう削り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P13 30% 南西部中央付 近覆土下層
15	高台付 土師器	A [13.5] B (2.1)	高台部欠損。底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は大きく外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へう磨き。底部回転へう削り。	砂粒 明赤褐色 普通	P14 25% 南西部中位区画

第4号住居跡 (第161図)

位置 調査区の南西部、C1d₅区を中心に確認されている。

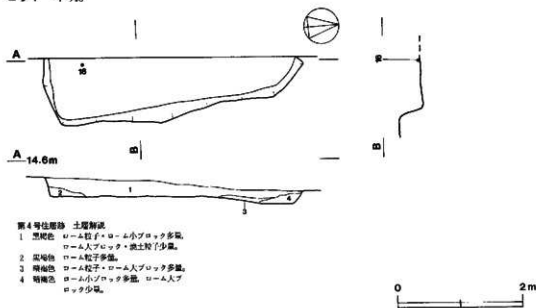
規模と平面形 約8割が調査区域外のため、規模及び平面形は不明である。

主軸方向 不明。

壁 壁高は36cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、あまり踏み固められていない。

ピット 不明。



第161図 第4号住居跡実測・遺物出土位置図

竈 不明。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土の下層・中層から、土師器の細片（5点）、須恵器片（坏1）、須恵器の細片（3点）等が出土している。16の須恵器の坏は南東コーナー付近の覆土下層から出土している。



第162図 第4号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は、大部分が調査区域外であるが、出土遺物等から平安時代前期の住居跡と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色澤・胎成	備考
第162図 16	坏 須恵器	A [11.5] B (3.4)	体部から口縁部にかけての破片、 体部は外傾し、口縁部はわずかに 外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P15 15% 南東コーナー 付近覆土下層

第6号住居跡（第163図）

位置 調査区の中央部、C3a1区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第7号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.19m、短軸3.17mであるが、方形を呈するものと思われる。

主軸方向 N-35°-W

壁 壁高は15～21cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

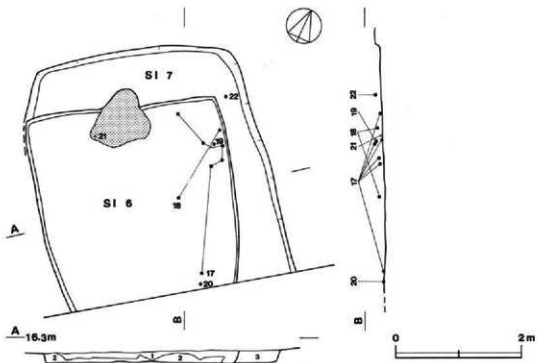
ビット 検出されない。

竈 北西壁中央部の壁を約33cm壁外へ掘り込み、粘土と山砂で構築されている。規模は、長さ97cm、幅98cmである。天井部は崩落しているが、袖部が遺存している。火床は、床面が約7cm掘り窪められており、熱を受けているがあまり硬化していない。煙道は、火床から外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 床面及び覆土の下層・中層にかけて、土師器片（甕2、坏1）、土師器の細片（41点）、須恵器片（坏1、高台付坏1）、須恵器の細片（5点）、瓦片等が出土している。17の土師器の甕は北部中程の床面から、18の土師器の甕は北部中程の覆土中層から、19の須恵器の坏は北部中程の覆土中層から、20の須恵器の高台付坏は東部中程の床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、重複関係から第7号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から奈良時代の住居跡と考えられる。

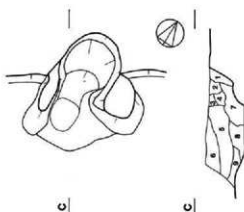


第6・7号住居跡 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子極少量。
- 2 暗褐色 ローム中量、ローム粒子少量、白色粘土粒子・焼土粒子極少量。
- 3 暗赤褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・白色粘土粒子極少量。

第6号住居跡 土層解説

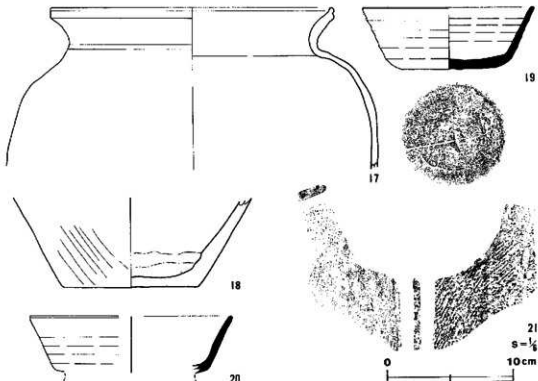
- 1 暗赤褐色 焼けた粘土層。
- 2 褐色 粘土粒子多量、焼土粒子中量。
- 3 黒褐色 粘土粒子中量。
- 4 褐色 粘土層、焼土粒子少量。
- 5 褐色 粘土層、焼土中ブロック中量。
- 6 暗褐色 粘土粒子中量、焼土粒子少量。
- 7 褐色 粘土層、焼土小ブロック中量。
- 8 褐色 粘土層、焼土中ブロック少量。
- 9 褐色 粘土小ブロック・焼土粒子少量。



第163図 第6・7号住居跡・窠実測・遺物出土位置図

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第164図 17	甕 土師器	A 22.2 B (13.0)	胴上半部から口唇部にかけての破片。胴上半部は内彎し、頸部は外反し口縁部に至る。口唇部を上方につまみ出す。	口縁部・頸部及び胴上半部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 褐色 普通	P16 30% 北部中程床面
18	甕 土師器	B (7.2) C 10.7	底部から胴下半部にかけての破片。底部は平底で、胴下半部は外彎して立ち上がる。	胴部外面下端へラ磨き。胴部内面横ナデ。	砂粒 濃い褐色 普通	P17 10% 北部中程覆土下層



第164図 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色・地味	備考
第164図 19	環 須恵器	A [13.7]	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 暗灰黄色 普通	P99 70% 北部中程床面 底部ヘラ記号「-」
		B 5.0				
		C 8.4				
20	高台付環 須恵器	A [15.9]	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P19 20% 東部中程床面
		B (4.3)				

図版番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第164図 21	平 瓦	(25.0)	(15.5)	1.8	(820.0)	西部中程床面	T45 北面に布当帳、北面に墨目の圧痕

第7号住居跡 (第163図)

位置 調査区の中央部、C3a1区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第6号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 (3.96) m、短軸 (3.60) m であるが、方形を早するものと思われる。

主軸方向 N - 37° - W

壁 壁高は19 cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

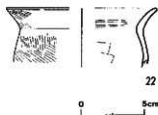
ビット 検出されない。

炉 検出されない。(第6号住居跡に掘り込まれてしまったものと思われる。)

覆土 自然堆積。

遺物 覆土の下層から、土師器片(壺1)、土師器の細片(8点)等が出土している。22の土師器の壺は北コーナー付近の覆上下層から出土している。

所見 本跡は、重複関係から第6号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第165図 第7号住居跡
出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	量量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第165図 22	壺 土師器	A [12.0] B (4.8)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内樽し、頸部は外反して口縁部に至る。	口縁部及び頸部内・外面、胴部外面ハケ目。胴部内面へう削り。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P20 10% 北コーナー付 近掘上下層

第8号住居跡 (第166図)

位置 調査区の北東部、B3e9区を中心に確認されている。

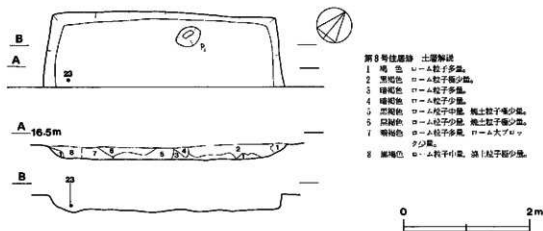
規模と平面形 約8割が調査区域外のため、規模及び平面形は不明である。

主軸方向 不明。

壁 壁高は20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦だが、踏み固められていない。

ビット 1か所 (P1) 検出されている。P1は、径35cm、深さ38cmで、規模及び配置から柱穴



- 第8号住居跡 土層解説
- 1 褐色 rome 粘土多量。
 - 2 黒褐色 rome 粘土少量。
 - 3 暗褐色 rome 粘土多量。
 - 4 暗褐色 rome 粘土少量。
 - 5 黒褐色 rome 粘土中量、粘土粘土少量。
 - 6 暗褐色 rome 粘土少量、粘土粘土少量。
 - 7 暗褐色 rome 粘土多量、rome 大ブロック少量。
 - 8 黒褐色 rome 粘土中量、粘土粘土少量。

第166図 第8号住居跡実測・遺物出土位置図

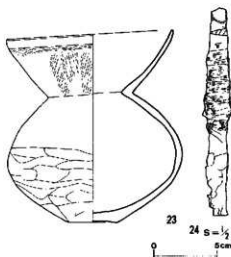
のうちの1か所と考えられる。

炉 不明。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層・中層から、土師器片（埴1）、土師器の細片（78点）等が出土している。23の土師器の埴は西部中程の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から古墳時代中期の住居跡と考えられる。



第8号住居跡出土遺物観察表

第167図 第8号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色澤・焼成	備考
第167図 23	埴 土師器	A 13.1	口縁部一部欠損。底部は平底。そろばん玉状を呈する胴部で、中位に最大径をもつ。頸部で強く絞ら込み、口縁部はやや内灣する。	口縁部外縁へケ目。口縁部内面横ナデ。胴部外面上半へラ磨き、胴部外面下半子持ちへラ削り。	砂粒 棕色 普通	P21 85% 西部中程覆土 下層
		B 15.6				
		C 3.7				

図版番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第167図24	刀子	(11.1)	1.5	0.4	(14.8)	覆土	M1 木炭付着

第9号住居跡（第168図）

位置 調査区の北東部、B4b1区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.42m、短軸2.22mの方形を呈している。

主軸方向 N-3°E

壁 壁高は20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められ硬い。

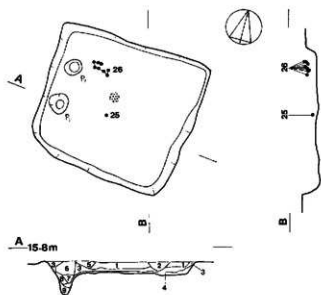
ピット 2か所（P1・P2）検出されている。P1・P2は、径27～33cm、深さ35cmで、規模及び配列から柱穴のうちの2か所と考えられる。

炉 ほぼ中央部の床面に焼土が薄く広がって堆積している。範囲は直径約15cmの広がりをもっている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層・中層から、土師器片（壺2）、土師器の細片（7点）等が出土している。25の土師器の壺は中央部の覆土下層から、26の土師器の壺は北西部中程の覆土中層から出土している。

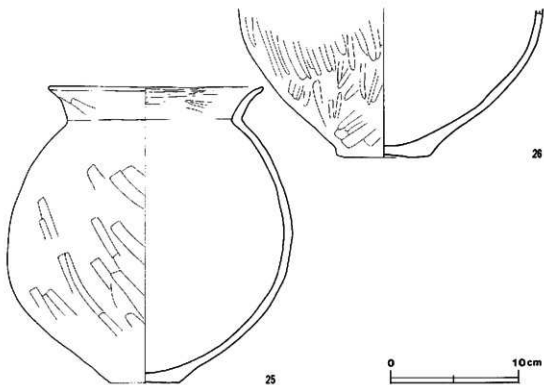
所見 本跡は、遺構の形態及び出土遺物から古墳時代後期の住居跡と考えられる。



第9号住居跡 土層解説

- | | | |
|-------|-----|------------------------|
| 1 黒褐色 | □-△ | 粒子中量、炭化粒子・焼土
粒子極少量。 |
| 2 暗褐色 | □-△ | 粒子中量、炭化粒子極少量。 |
| 3 暗褐色 | □-△ | 粒子少量、炭土粒子極少量。 |
| 4 赤褐色 | □-△ | 土多量。 |
| 5 黒褐色 | □-△ | 粒子少量、焼土粒子極少量。 |
| 6 暗褐色 | □-△ | 粒子少量、焼土粒子少量。 |
| 7 暗褐色 | □-△ | 粒子極少量。 |
| 8 暗褐色 | □-△ | 粒子少量、炭化粒子極少量。 |
| 9 暗褐色 | □-△ | 粒子少量。 |

第168图 第9号住居跡実測・遺物出土位置图



第169图 第9号住居跡出土遺物実測图

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第158図 25	壺 土師器	A 17.0	頸部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、胴部は球状を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。口唇部は丸い。	口縁部内・外両横ナデ及びハケ目。体部外面ハケ目。底部手持ちへう削り。	砂粒・雲母・バミス にふい黄褐色 普通	P60 75% 中央部復土下層 胴部外面二次 焼成痕
		B 23.9				
		C 5.6				
26	壺 土師器	B (12.0)	底部から胴下半部にかけての破片。底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面下半及び底部手持ちへう削り。	砂粒 黒褐色 普通	P61 20% 北西部中層復 土中層
		C 7.6				

表10 北屋敷遺跡壁穴住居跡一覧表

番号	位置	土地方向	平面形	規模		床面	ビッド・地	掘土	出土遺物	備考
				長軸・短軸(m)	高さ(m)					
1	C1a	N-15°E	方形	4.30 × (4.11)	10-52	平坦	1	掘	土師器片90点(壺) 須恵器片32点(高台付杯, 甕)	8D-3と重複
2	C2a	N-15°E	方形	3.95 × 3.93	5-24	平坦	1	掘	土師器片70点(杯, 甕, 甕) 須恵器片6点(甕, 甕)	8B-1, 8D-4と重複
3	C3a	N-97°E	方形	3.42 × 3.38	6-29	平坦	3	自然	土師器片132点(杯, 高台付杯, 甕, 甕) 須恵器片31点(杯, 高台付杯, 甕)	
4	C14a	不明	不明	不明	36	平坦	不明	不明	自然 土師器片5点(甕) 須恵器片5点(甕)	
6	C3a	N 25° W	方形	3.19 × 3.17	15-21	平坦	-	掘	自然 土師器片8点(甕)	8I-7と重複
7	C3a	N-27° W	方形	3.30 × 3.60	19	平坦	不明	不明	自然 土師器片8点(甕)	8I-6と重複
8	B3a	不明	不明	不明	29	平坦	1	不明	自然 土師器片76点(甕)	
9	B4a	N-2° E	方形	2.42 × 2.32	29	平坦	2	掘	自然	

2 古墳 (第170・171図)

(1) 概要

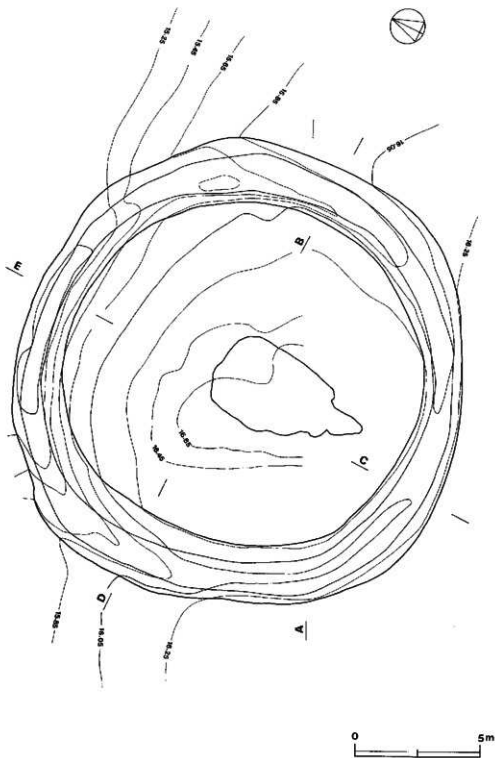
本墳は、調査区の北東部A3区、A4区、B3区、B4区に所在する円墳で、東方向に突き出した標高16mの凸状台地縁辺部に、自然の地形を生かして構築されている。現況は山林で、墳丘は削平されていた。本墳は円形を呈し、周溝が全周している。

埋葬施設は、墳丘の中央部からやや南東寄りに、N-5°-Eに主軸方向を持つ横穴式石室を構築している。

遺物は、横穴式石室内から直刀3口、刀子3点、鉄鎌約30点が出土している。

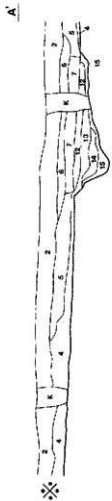
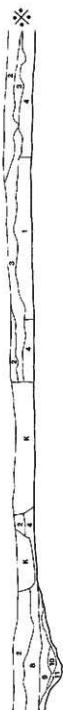
(2) 墳丘

墳丘は削平されているが、規模は東西径13.50m、南北径14.00mで円形を呈している。墳丘の中央部からやや南東よりに埋葬施設を確認している。土層は、上層が15~28cmでローム粒子を少量含む暗褐色土及び黒褐色土である表土が堆積し、中層は墳丘の残存と思われる厚さ13~



第 170 图 第 1 号墳实测图

A-16.8m



第1号堆 土層解説 (A)

- 1 暗褐色 凝灰岩粒子中量, r-m 粒子少量,
- 2 暗褐色 r-m 粒子少量,
- 3 黑褐色 r-m 粒子少量, 粘土粒子極少量,
- 4 暗赤褐色 r-m 土少量, 炭化粒子極少量,
- 5 暗褐色 r-m 粒子少量, 炭化粒子極少量,
- 6 暗褐色 r-m 粒子少量, 炭化粒子極少量,
- 7 暗褐色 r-m 粒子少量, 凝灰岩粒子極少量,
- 8 暗褐色 r-m 粒子少量, 凝灰岩粒子極少量,
- 9 暗褐色 r-m 粒子少量, 凝灰岩粒子極少量,
- 10 暗褐色 r-m 粒子少量, 凝灰岩粒子極少量,
- 11 暗褐色 r-m 土少量, 凝灰岩粒子・粘土粒子極少量,
- 12 暗褐色 r-m 土少量,
- 13 暗褐色 r-m 土少量, 粘土粒子極少量,
- 14 暗褐色 r-m 土少量, 粘土粒子・粘土粒子極少量,
- 15 暗褐色 r-m 土中量, 炭化粒子極少量,



第1号堆 土層解説 (B)

- 1 暗褐色 r-m 粒子極少量,
- 2 暗褐色 r-m 粒子・凝灰岩粒子極少量,
- 3 暗褐色 r-m 粒子少量, r-m 土・凝灰岩粒子極少量,
- 4 暗赤褐色 r-m 土中量, r-m 小ブロッコ・ r-m 粒子少量,
- 5 暗赤褐色 r-m 土・ r-m 粒子少量,



第1号堆 土層解説 (C)

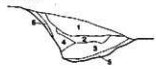
- 1 暗赤褐色 r-m 粒子少量, 炭土粒子・凝灰岩粒子極少量,
- 2 暗褐色 r-m 土少量, 凝灰岩粒子極少量,
- 3 暗赤褐色 r-m 土・ r-m 粒子少量, 凝灰岩粒子極少量,
- 4 暗赤褐色 r-m 土少量, 凝灰岩粒子極少量,
- 5 暗褐色 r-m 土少量,



第1号堆 土層解説 (D)

- 1 暗赤褐色 r-m 粒子少量, 炭化粒子極少量,
- 2 暗褐色 r-m 土少量,
- 3 暗褐色 r-m 土中量, r-m 小〜中ブロッコ・ r-m 粒子少量,
- 4 暗褐色 r-m 粒子・粘土質粒子少量,
- 5 暗褐色 r-m 土少量, r-m 土・凝灰岩粒子極少量,
- 6 暗褐色 r-m 土少量,
- 7 暗赤褐色 r-m 土少量, 凝灰岩粒子極少量,
- 8 暗褐色 r-m 土少量,

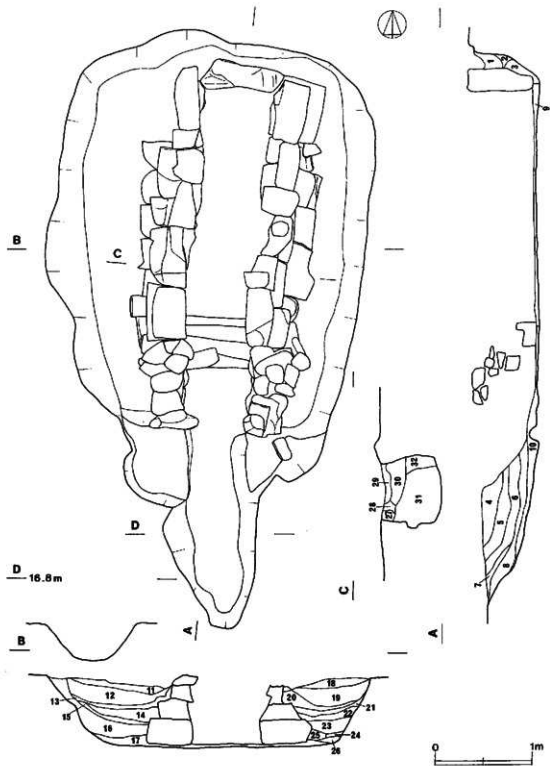
E-15.8m



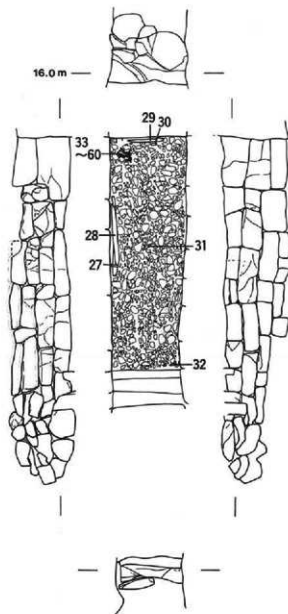
第1号堆 土層解説 (E)

- 1 暗褐色 r-m 粒子少量, 炭化粒子極少量,
- 2 暗赤褐色 r-m 土中量, r-m 小〜中ブロッコ少量,
- 3 暗赤褐色 r-m 土中量, r-m 小ブロッコ少量, p-m 小ブロッコ極少量,
- 4 暗褐色 r-m 土中量, r-m 小〜大ブロッコ・ p-m 粒子極少量,
- 5 暗赤褐色 p-m 多量, r-m 土少量,
- 6 暗赤褐色 r-m 土・ r-m 粒子少量,





第 171 图 第 1 号坑实测图



第1号墳主体部 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、粘土粒子極少量。
- 2 暗赤褐色 粘土粒子極少量。
- 3 暗赤褐色 粘土粒子・ローム粒子極少量。
- 4 暗赤褐色 凝灰岩大ブロック多量、粘土中ブロック中量。
- 5 暗赤褐色 ローム土中量、粘土粒子極少量。
- 6 褐色 凝灰岩小〜大ブロック・粘土多量。
- 7 黒褐色 ローム小〜中ブロック中量、粘土粒子極少量。
- 8 にぶい褐色 粘土層。
- 9 褐色 ローム土中量。
- 10 にぶい褐色 粘土層。
- 11 黒褐色 凝灰岩小〜大ブロック中量、ローム粒子少量。
- 12 極暗褐色 凝灰岩中〜大ブロック・凝灰岩粒子・粘土粒子中量、ローム粒子極少量。
- 13 黒褐色 凝灰岩小ブロック少量、凝灰岩粒子・ローム粒子極少量。
- 14 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子極少量。
- 15 黒褐色 凝灰岩小ブロック中量、凝灰岩粒子・ローム粒子少量。
- 16 赤褐色 粘土粒子極少量。
- 17 にぶい赤褐色 粘土粒子・凝灰岩粒子極少量。
- 18 にぶい褐色 粘土層、凝灰岩小ブロック極少量。
- 19 褐色 ローム粒子少量、粘土粒子極少量。
- 20 にぶい褐色 粘土層、凝灰岩小〜大ブロック多量。
- 21 暗赤褐色 ローム粒子少量。
- 22 赤褐色 粘土粒子極少量。
- 23 褐色 粘土層。
- 24 赤褐色 粘土粒子多量、ローム粒子極少量。
- 25 にぶい褐色 粘土層。
- 26 赤褐色 凝灰岩中〜大ブロック中量、粘土小ブロック少量。
- 27 暗赤褐色 凝灰岩粒子少量、凝灰岩小ブロック極少量。
- 28 極暗褐色 凝灰岩粒子極少量。
- 29 黒褐色 凝灰岩中量、凝灰岩粒子極少量。
- 30 黒褐色 凝灰岩粒子少量、凝灰岩小ブロック極少量。
- 31 黒褐色 凝灰岩粒子中量、凝灰岩中〜大ブロック少量。
- 32 極暗褐色 凝灰岩粒子極少量。



34 cmのローム粒子及び炭化粒子・焼土粒子を含む暗赤褐色土及び暗褐色土が盛土され、本層から下層にかけて埋葬施設が確認されている。下層は旧表土が確認できなかったが、ソフトローム及びハードローム層（地山）である。

(3) 周溝

周溝は墳丘を全周しており、規模は、東西方向で外径18.60 m、内径13.60 m、南北方向で外

径18.10 m, 内径14.10 mで, 上幅1.50~2.90 m, 下幅0.90~1.20 m, 深さ37~69 cmである。周溝の覆土は自然堆積で, ローム粒子を少量, 炭化粒子・焼上粒子・凝灰岩粒子を極少量含む黒褐色土・暗褐色土・暗赤褐色土が堆積している。

(4) 埋葬施設

埋葬施設は, 墳丘の中央部からやや南東寄りに検出されている。掘り方は, 確認面で南北4.90 m, 東西3.31 m, 深さは約76 cmで, 底面は南北4.68 m, 東西2.76 mである。壁面はローム上で外傾して立ち上がっている。掘り方と横穴式石室の間には, ローム粒子や粘土ブロックを少量含む硬く締まっている褐色土及び黒褐色土の層とにぶい橙色の粘土層が交互に裏込めされている。

埋葬施設は横穴式石室で, 凝灰岩で構築されている。主軸方向はN-5°-Eである。規模は, 外法で長さ約3.90 m, 幅約1.80 m, 内法で長さ約3.67 m, 幅約0.83 m, 高さ約0.72 mである。石室は, 上蓋が石室内に崩落した状態で検出されているが, 羨道と玄室に分けられる。羨道の長さは約1.20 m, 幅約0.70 m, 玄室は長さ約2.47 m, 幅は奥壁付近で約0.83 m, 中央付近で約0.79 m, 入口付近で約0.72 mである。玄室と羨道の境には柵石が置かれている。玄室の奥壁は, 縦約70 cm, 横約85 cm, 厚さ約25 cmの一枚石を, 側壁は縦30 cm前後, 横50 cm前後, 厚さ20 cm前後の石を用いており, 奥壁が一番近い下段の左右の石のみが縦積みで, あとはすべて横積み構築されている。壁は, 側壁中央付近は周りの土圧を受けたためやや内彎して立ち上がっているが, 他は垂直に立ち上がっている。玄室の床面には川原石の玉石が厚さ5~6 cmで一面に敷かれている。石室内の覆土は凝灰岩の小~大ブロックを少量含む暗赤褐色土・暗褐色土及び黒褐色土で, 締まりがやや弱い。

(5) 埋葬施設内出土遺物 (第172・173図)

遺物は, 横穴式石室内から出土している。人骨は見られず, 副葬品は, 直刀3口, 刀子3点, 鉄鏃約30点である。

次に, それぞれの遺物について詳細に記述する。

① 直刀(3口)

直刀3口のうち2口(27・28)は, 横穴式石室内の中央部西側の壁際の床面から, 鋒を北に刃を東に向け重なって出土している。1口(29)は横穴式石室内の北部の壁際の床面から, 鋒を西に刃を南に向け出土している。

27の直刀は, 28の直刀の下に出土し, 全長79.2 cm, 刀身長64.0 cm, 茎長15.2 cmで, 方形と思われる七つ穴の鐔と柄の木質の一部が遺存した茎部が確認される。造りは平造りの直刀で, 棟は角棟で, 鋒は「フクラ」が付き, 関は棟関が無く, 刃関の幅は2.5 cmであると思われる。茎部は元幅2.4 cmで, 先にいっても幅は変わらず, 茎尻は栗尻を呈している。錆が激しく関の角度, 目釘穴等は確認できない。

28の直刀は、27の直刀の上に重なって出土し、鋒から刃部のみで、刀身長は65.2cmである。造りは平造りの直刀で、棟は角棟で、関及び茎部分は遺存していない。鋒は「フクラ」が付いている。

29の直刀は、全長35.6cm、刀身長27.4cm、茎長8.2cmで、柄の木質の一部が遺存した茎部が確認される。造りは平造りの直刀で、棟は角棟で、鋒は「フクラ」が付き、関は両関で、棟関の幅は0.9cm、刃関の幅は0.2cmであると思われる。錆が激しく関の角度は確認できない。茎部は元幅が0.7cmで、茎尻に向かってやや細くなっており、茎尻から1.2cmの所に直径4mmの日釘穴が1個認められ、茎尻は栗尻を呈している。

直刀観察表

(単位はcm)

図録番号	器種	全長	刀身長	刀身幅		関幅		茎長	茎幅		備考
				先幅	元幅	背関	刃関		先幅	元幅	
第172927	直刀	79.2	66.0	3.1	4.2	-	2.5	15.2	2.5	2.1	M29 鋼及び木質の柄の一部が遺存
26	直刀	-	65.2	2.7	3.0	-	-	-	-	-	M30 茎部欠損
29	直刀	35.6	27.4	1.9	2.5	0.9	0.2	8.2	0.5	0.7	M31 木質の柄の一部が遺存

② 刀子 (3点)

刀子3点のうち30の刀子は、横穴石室内の北部、29の直刀の2cm南側の床面から、刃部を南に向け出土し、31の刀子は、横穴式石室内の中央部の床面から、刃部を南に鋒を西に向け出土し、32の刀子は、横穴式石室内の南部欄干近くの床面から、茎及び刃の一部が出土している。

30の刀子は、全長8.0cm、刀身長4.5cm、茎長3.5cmで、茎部に木質が遺存しているが、関、茎幅、茎尻等は錆が進んでいるため確認できない。

31の刀子は、全長11.3cm、刀身長6.8cm、茎長4.5cmで、茎部に木質が遺存している。棟は角棟で、関は棟関・刃関とも錆が進んでいるため確認できない。茎部は元幅0.7cmで、茎尻に向かってやや細くなっている。日釘穴は確認できない。鞘の一部が遺存している。

32の刀子は、全長8.1cm、刀身長6.1cm、茎長2.0cmで、茎部には木質が遺存しているが、関、茎幅、茎尻等は錆が進んでいるため確認できない。

刀子観察表

(単位はcm)

図録番号	器種	全長	刀身長	刀身幅		関幅		茎長	茎幅		備考
				先幅	元幅	背関	刃関		先幅	元幅	
第1729230	刀子	(8.0)	4.5	-	-	-	-	3.5	-	-	M32 木質の一部が遺存
31	刀子	(11.3)	6.8	-	-	-	-	4.5	0.4	0.7	M31 木質の一部が遺存
32	刀子	(8.1)	(6.1)	-	-	-	-	(2.0)	-	-	M35

③ 鉄 鍔 (約30点)

鉄鍔は、横穴式石室内の北西部、29の直刀の18cm南側の床面から、鋒を北西にむけて、重なり合って出土している。まとまって出土したため正確な固体数は不明である。これらの鉄鍔は、

完形で出土しているものは少なく、鉄身や柄部のみのもが多く、形状はいわゆる細根系の鉄鏃で、頸部は長頸である。関は棘状の両関で、茎は断面形が四角形で、茎尻に至るに従い細くなる。また、茎には木質が遺存し、その上を木皮により口巻が堅固にされている。

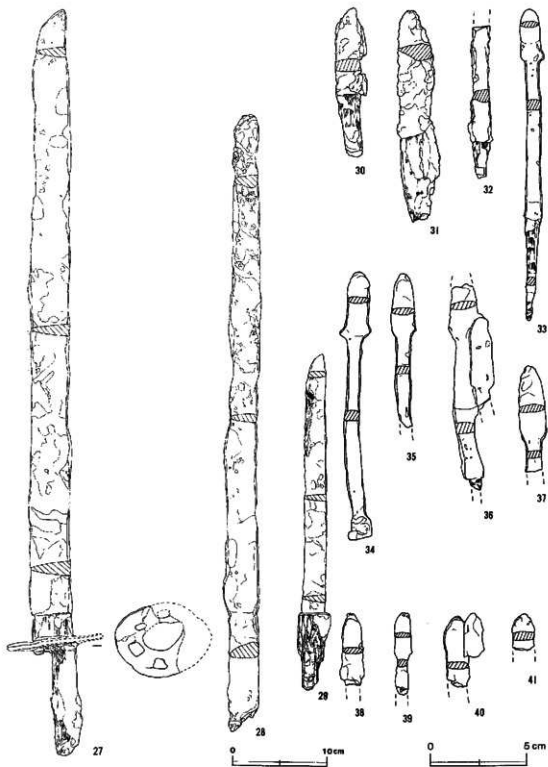
鉄鏃観察表

(単位はcm)

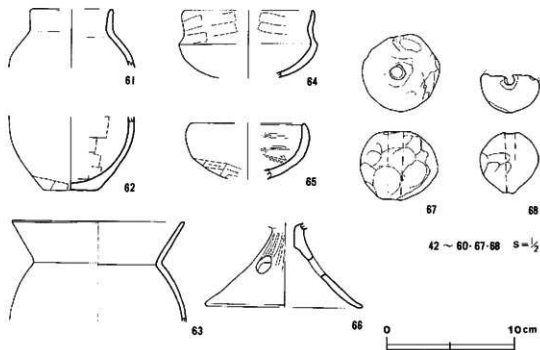
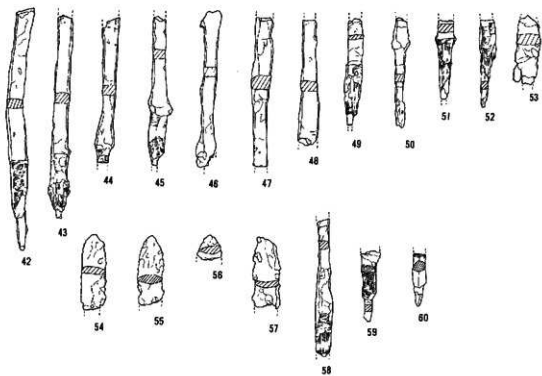
調査番号	全長	頸身長	鉄身幅			関幅	茎長	重量(g)	備考
			先端	中幅	元幅				
第1726033	16.6	2.7	0.9	1.0	1.3	0.1	5.5	14.1	M33 ほぼ完形 木質の一部が遺存 長頸
34	(14.3)	3.6	1.0	1.1	1.6	-	-	(12.3)	M34 茎部欠損 木質の一部が遺存 長頸
35	(8.2)	3.3	0.9	1.2	1.2	-	-	(7.9)	M35 頸部の一部及び茎部欠損
36	(11.0)	(3.0)	-	1.3	1.5	0.2	(0.6)	(12.2)	M36A 鉄身部の 柄及び茎部欠損 長頸
38	(4.7)	3.7	0.8	1.1	1.2	-	-	(3.0)	M36B 鉄身部片
37	(5.7)	4.2	1.0	1.3	1.3	-	-	(4.4)	M37 鉄身部片
38	(3.8)	(3.6)	1.0	1.1	1.3	-	-	(3.4)	M38 鉄身部片
39	(4.4)	2.3	0.8	0.8	0.9	-	-	(2.5)	M39 鉄身部片
40	(3.8)	3.4	1.0	1.1	1.2	-	-	(3.0)	M40A 鉄身部片
40	(2.3)	(2.3)	0.9	1.0	-	-	-	(2.0)	M40B 鉄身部片
41	(1.9)	(1.9)	1.1	-	-	-	-	(1.3)	M41 鉄身部片
第1726042	(12.8)	-	-	-	-	0.2	4.6	(13.2)	M42 鉄身部欠損 木質の一部が付着 長頸
43	(10.7)	-	-	-	-	0.3	3.3	(11.3)	M43 鉄身部欠損 木質の一部が付着 長頸
44	(7.7)	-	-	-	-	0.2	(0.8)	(9.3)	M44 頸部片 木質の一部が付着 長頸
45	(8.0)	-	-	-	-	0.3	2.9	(8.0)	M45 頸部及び茎部片 木質の一部が付着 長頸
46	(8.4)	(1.0)	-	-	(1.1)	(0.2)	(0.4)	(8.2)	M46 鉄身部及び頸部片 長頸
47	(7.9)	-	-	-	-	-	-	(10.1)	M47 頸部片 長頸
48	(5.7)	-	-	-	-	-	-	(7.8)	M48 頸部片 長頸
49	(5.6)	-	-	-	-	0.2	(3.4)	(4.2)	M49 茎部片 木質の一部が付着
50	(5.8)	-	-	-	-	0.2	(4.2)	(3.9)	M50 茎部片 木質の一部が付着
51	(4.2)	-	-	-	-	0.3	3.0	(2.7)	M51 茎部片 木質の一部が付着
52	(4.6)	-	-	-	-	-	(4.5)	(2.5)	M52 茎部片 木質の一部が付着
53	(3.7)	(3.2)	(1.1)	1.2	1.2	-	-	(4.9)	M53 鉄身部片
54	4.0	(3.7)	1.0	1.2	1.2	-	-	(3.9)	M54 鉄身部片
55	(3.8)	(3.8)	1.0	1.3	1.3	-	-	(3.5)	M57 鉄身部片
56	(1.4)	(1.4)	1.0	-	-	-	-	(0.7)	M58 鉄身部片
57	(3.8)	(3.8)	1.0	1.3	1.4	-	-	(3.5)	M59 鉄身部片
58	(7.4)	-	-	-	-	0.2	(2.3)	(5.8)	M60 頸部及び茎部片 木質の一部が付着 長頸
59	(3.8)	-	-	-	-	0.3	(3.5)	(2.1)	M61 茎部片 木質の一部が付着
60	(2.8)	-	-	-	-	0.1	(1.1)	(1.7)	M62 茎部片 木質の一部が付着

(6) その他の出土遺物

横穴式石室の裏込めから構築時に混入したと思われる土師器の細片や周溝の覆土から流れ込みと思われる土師器の破片等が出土しているので、まとめて実測し、観察表で解説する。



第 172 图 第 1 号墳出土遺物実測図



第173图 第1号墳出土遺物実測図

土器・土製品観察表

図版番号	器種	法尺 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼味	備考
第173図 61	壺 土師器	A [6.4] B (4.8)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部はやや外反気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び胴部内・外面横ナデ。胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 褐色 普通	P83A 10% 主体部覆土
62	壺 土師器	B (6.0) C [4.5]	底部から胴下半部にかけての破片。底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部内・外面ナデ。胴部外面下端及び底部手持ちへう削り。	砂粒・雲母 褐色 普通	P83B 30% 主体部覆土
63	壺 土師器	A [13.8] B (8.0)	胴上半部から1/3縁部にかけての破片。胴部は内彎し、口縁部は外傾する。	1/3縁部内・外面磨き。胴部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P86 20% 主体部覆土
64	坏 土師器	A [10.1] B 5.4	底部から口縁部にかけての破片。底部は丸底で、体部と口縁部との境に稜をもつ。体部は内彎し、口縁部は外反気味に立ち上がり、口唇部はわずかに内彎する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部手持ちへう削り。	砂粒・長石・ 雲母 褐色 普通	P84 25% 周溝南西部覆土中層
65	坏 土師器	A [9.0] B (4.6)	底部から口縁部にかけての破片。底部は丸底で、体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	体部外面横ナデ。体部内面へう磨き。底部手持ちへう削り。	砂粒・長石・ 雲母 赤褐色 普通	P85 20% 周溝北西部覆土中層
66	器台 土師器	D 12.6 E (6.8)	脚部片。脚部は外反して下方へ開く。3孔を穿つ。	脚部外面縁位のへう磨き。脚部内面ナデ。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P87 60% 主体部覆土

図版番号	器種	法					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)		
第173図 67	球状土師	3.7	4.1		57.4	0.8	周溝南西部覆土中層	DP5
68	球状土師	3.3	3.1	-	(15.2)	0.5	周溝北西部覆土中層	DP6

3 掘立柱建物跡

当該調査区の南西部から掘立柱建物跡が1棟検出されている。しかし、この掘立柱建物跡は、他の遺構と重複し合っているうえ、遺構に伴う遺物がほとんどないことから、時期については不明確である。

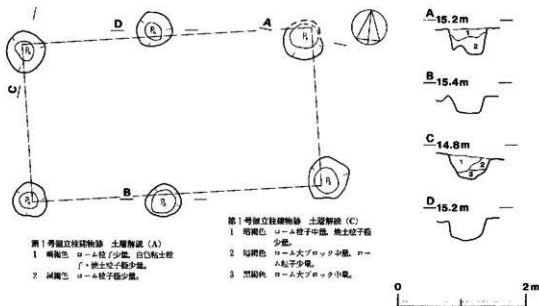
第1号掘立柱建物跡(第174図)

位置 調査区の南西部、C2f区を中心に確認されている。

重複関係 本跡のP₁、P₂は第2号住居跡を、P₃は第4号溝を掘り込み、P₄は第3号土坑に掘り込まれている。

長軸方向 N-77°-E

規模 柱穴数は6か所(P₁~P₆)であり、長方形に検出されている。南北1間(約2.5m)、東西2間(約5.6m)の東西棟の建物で、柱間寸法は、桁行2.15~2.46m、梁行2.54mである。柱穴の掘り方は、平面形が長径0.54~0.68m、短径0.53~0.55mの円形を呈している。深さ



第174図 第1号掘立柱建物跡実測図

は19～37cmで、断面形はU字状を呈している。柱痕跡は検出されていない。

覆土 ローム小ブロック、ローム粒子を含む褐色及び暗褐色土で人為的に埋め戻されている。

遺物 覆土から、土師器の細片(10点)、須恵器の細片(8点)が出上している。

所見 本跡は、平安時代前期の住居跡と思われる第2号住居跡を掘り込んでいることから、平安時代前期以降に構築された建物跡と考えられる。

4 土坑

当調査区からは、全域にわたり24基の土坑が検出されている。ここでは、24基の上坑のうち、江戸時代中期の墓塚と思われる土坑4基について記述することとし、残る土坑については一覽表に記載した。なお、土坑番号は調査当初に付した番号である。

第20号土坑(第175図)

位置 調査区の北東部、B3g₁区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第10号溝を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.75m、短径0.73mの不整形長方形を呈している。

長径方向 N-14°-E

壁面 壁高は70cmで、垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 全体にローム小ブロックを含み、人為堆積と思われる。

遺物 人骨片が出土している。

所見 人骨片が出土していることから墓塚と考えられる。

第21号土坑（第175図）

位置 調査区の北東部，B3f区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第10号溝を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.94 m，短径1.00 mの不整長方形を呈している。

長径方向 N-8°-E

壁面 壁高は95 cmで，垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 全体にローム小ブロックを含み，人為堆積と思われる。

遺物 覆土下層から人骨，古銭及び鉄釘が出土している。

所見 人骨，古銭，棺桶に使われたと思われる鉄釘が出土していることから墓塚と考えられる。

第22号土坑（第175図）

位置 調査区の北東部，B3f区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第10号溝を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.95 m，短径0.72 mの不整長方形を呈している。

長径方向 N-0°

壁面 壁高は113 cmで，垂直に立ち上がっている。

底面 凸凹。

覆土 全体にローム小ブロックを含み，人為堆積と思われる。

遺物 北部の覆土下層から印籠，花瓶，煙管，古銭がそれぞれ出土している。

所見 人骨，副葬品及び古銭が出土していることから墓塚と考えられる。

第23号土坑（第175図）

位置 調査区の北東部，B3f区を中心に確認されている。

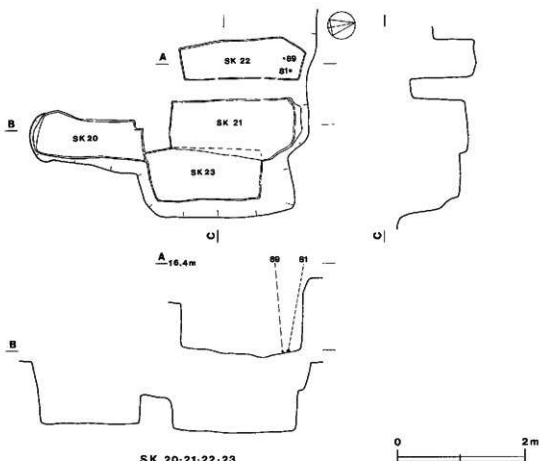
重複関係 本跡は第10号溝を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.85 m，短径0.85 mの不整長方形を呈している。

長径方向 N-12°-E

壁面 壁高は95 cmで，垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。



SK 20-21-22-23

第175図 第20・21・22・23号土坑実測・遺物出土位置図

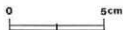
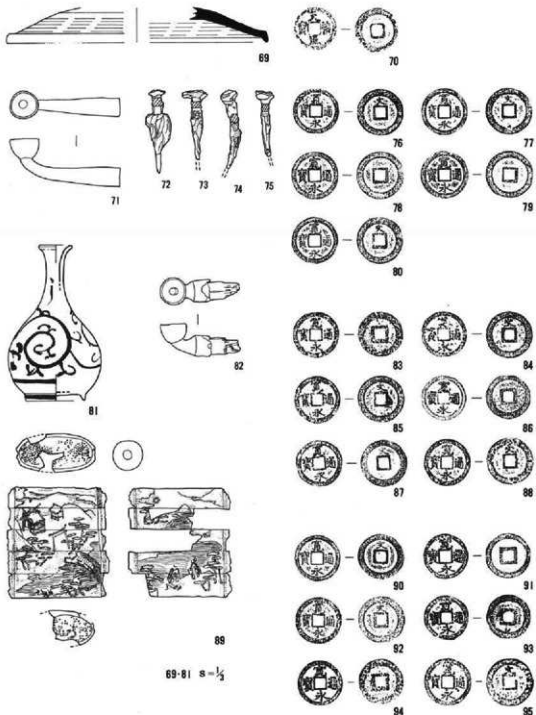
覆土 全体にローム小ブロックを含み、人為堆積と思われる。

遺物 覆土下層から人骨、古銭が出土している。

所見 人骨片及び古銭が出土していることから墓塚と考えられる。

第3号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土質・色調・構成	備考
第176図 69	蓋 須恵器	A [21.0] B (2.8)	天井部から口縁部にかけての破片。天井部は低く、緩やかに内彎して口縁部に至る。口縁部はわずかに外反し、端部は短く垂下する。	口縁部内・外面焼ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒・長石・濃灰オリープ 普通	P58 20% 覆土中層



第176图 第3·9·21·22·23号土坑出土遗物实测·拓影图

第9号土坑出土遺物観察表

図版番号	銭名	初 鋳 年		出土地点	備 考
		時 代	年 号		
第176図 70	天祐通寶	北 宋	天祐元年(1017年)	覆土	M5

第21号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	法 量				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第176図 71	樽 蓋	(5.5)	1.5	2.6	7.6	覆土下層	M11 銅製 磨目・火風
72	釘	4.5	1.4	0.5	2.3	覆土下層	M12 鉄製 木釘付着
73	釘	(3.8)	1.4	0.4	1.3	覆土下層	M13 鉄製 木釘付着
74	釘	(4.2)	1.0	0.5	1.5	覆土下層	M14 鉄製 木釘付着
76	釘	(3.5)	1.0	0.4	0.9	覆土下層	M15 鉄製

図版番号	銭名	初 鋳 年		出土地点	備 考
		時 代	年 号		
第176図 76	寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M6
77	寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M7
78	寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M8
79	寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M9
80	寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M10

第22号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	法 量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	土・色・地味	備 考
第176図 81	花瓶 磁器	A 2.6 B 12.6 D 4.7 E 0.5	完形。直立する高台付き。底部は平底。胴部は内唎しながら立ち上がり、細くなりながら頸部に至る。頸部は直立し、口縁部は外反する。	外面染付、全面施釉。唐草文。	磁土・白色 (輪)透明 (地味)普通	P59 100% 北庭覆土下層 伊万里焼

図版番号	器 種	法 量				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第176図 82	煙 草	(4.2)	1.5	1.8	(3.5)	覆土下層	M22 銅製 煙草の一部・磨目・火風

図版番号	銭名	初 鋳 年		出土地点	備 考
		時 代	年 号		
第176図 83	寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M23
84	寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M24
85	寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M25
86	寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M26
87	寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M27
88	寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M28

図版番号	器 種	法 量			出土地点	備 考
		高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第176図 89	印 紙	(5.3)	(5.4)	(2.2)	底面	W1 梨地身輪。総輪の直径1.6cm・高さ1.4cm・孔径0.5cm

第23号土坑出土遺物観察表

図版番号	銭名	初 終 年		出土地点	備 考
		時 代	年 号		
第176図	90 寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M12
	91 寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M13
	92 寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M14
	93 寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M15
	94 寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M16
	95 寛永通寶	江戸時代	寛永元年(1668年)	覆土下層	M17

表11 北屋敷遺跡土坑一覽表

番号	位置	方位方向	平面形	面 積			壁 厚	材 質	覆土	出土遺物	備 考
				長さ (m)	幅 (m)	容積 (m ³)					
3	C2a	N 8° E	長方形	1.74	1.33	40	外堀	平堀	人土		SD-1と等価
4	C1a	N-56° W	扇形	0.35	0.48	44	外堀	扇状	自然		
7	C2a	N-28° W	扇形	0.32	0.71	33	外堀	内堀	同様	十層部片1点(銀)	
8	B3a	N 17° W	長方形	2.15	1.80	47	外堀	平堀	人土		
9A	B3a	N-17° W	不整形	2.08	1.80	33	外堀	平堀	人土		
9B	B3a	N-17° W	不整形	3.02	2.36	57	外堀	平堀	人土	十層部片2点(銀)	
10	B3a	N 85° E	不整形	3.00	0.92	27	外堀	凸形	人土	土層部片2点(銀)	
11	B3a	N-22° W	不整形	1.80	0.97	24	外堀	凸形	人土	土層部片15点(銀)	
13	B3a	-	不整形	0.73	0.79	10	外堀	平堀	自然		
14	B3a	N-48° E	不整形	1.15	1.10	24	外堀	凸形	自然		
15	B3a	N-42° E	不整形	1.13	1.06	21	外堀	凸形	自然		
16	B3a	N-42° E	不整形	1.38	0.51	20	外堀	平堀	自然		
17	B3a	N-24° E	不整形	1.80	1.20	14	縁料	平堀	自然	十層部片7点(銀)	
18	B3a	N-9° E	不整形	2.54	1.80	34	外堀	平堀	人土	土層部片2点(銀), 縁部部片5点(銀)	
20	B3a	N-14° E	不整形	1.75	0.73	70	塹	平堀	人土		SD-10と等価
21	B3c	N-8° E	不整形	1.94	1.03	95	塹	平堀	人土		SD-10と等価
22	B3c	N-9°	不整形	1.86	0.72	113	塹	凸形	人土	縁部片	SD-10と等価
23	B3c	N-13° E	不整形	1.85	0.85	86	塹	平堀	人土		SD-10と等価
24	B3c	N-9° W	不整形	2.52	1.45	40	外堀	平堀	同様	土層部片1点(銀), 瓦片1点	SD-10と等価
26	B3c	N-24° E	不整形	1.80	0.80	25	外堀	扇状	自然		SD-11と等価
27	B3c	N-21° W	不整形	4.13	2.45	100	塹	平堀	人土	土層部片12点(銀), 縁部部片4点(瓦片付)	SD-10と等価
29	B3a	N-23° W	円形	1.86	0.97	33	外堀	平堀	同様	十層部片2点(銀), 蓋台付	
34	B3a	N-17° E	扇形	1.83	1.38	15	縁料	扇状	自然		SD-8と等価
35	B3a	N-25° W	円形	1.30	1.23	32	外堀	凸形	自然		
42	B3a	N-42° W	不整形	3.28	2.11	181	外堀	平堀	人土		SD-12と等価

5 溝

当調査区からは、溝が13条検出されている。2条については出土遺物から平安時代に構築さ

れたものと思われ、他の11条については重複関係より平安時代の住居跡より新しい時期に構築されたものと思われる。

第1号溝 (第177図)

位置 調査区の南西部、C1区に確認されている。

重複関係 本跡の南部は、C1f区で第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 全長は約11.4mで、上幅0.66～1.15m、下幅0.36～0.64m、深さ39～40cmである。底面は凸凹しており、断面形は \sim 状を呈している。

方向 C1f区から北方向(N-1°-E)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土上層から流れ込みと思われる土師器の細片(118点)、須恵器の細片(30点)等が出上している。

所見 本跡は、重複関係から第4号溝より古い時期に構築されている。出土遺物は流れ込みと考えられ、性格及び構築時期は不明である。

第2号溝 (第177図)

位置 調査区の南西部、C1区に確認されている。

重複関係 本跡の南部は、C1f区で第4号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 全長は約11.0mで、上幅0.61～0.91m、下幅0.34～0.63m、深さ19～24cmである。底面は凸凹しており、断面形は皿状を呈している。

方向 C1f区から北方向(N-5°-E)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土上層から流れ込みと思われる土師器の細片(48点)等が出上している。

所見 本跡は、重複関係から第4号溝より新しい時期に構築されている。出土遺物は流れ込みと考えられ、性格及び構築時期は不明である。

第3号溝 (第178図)

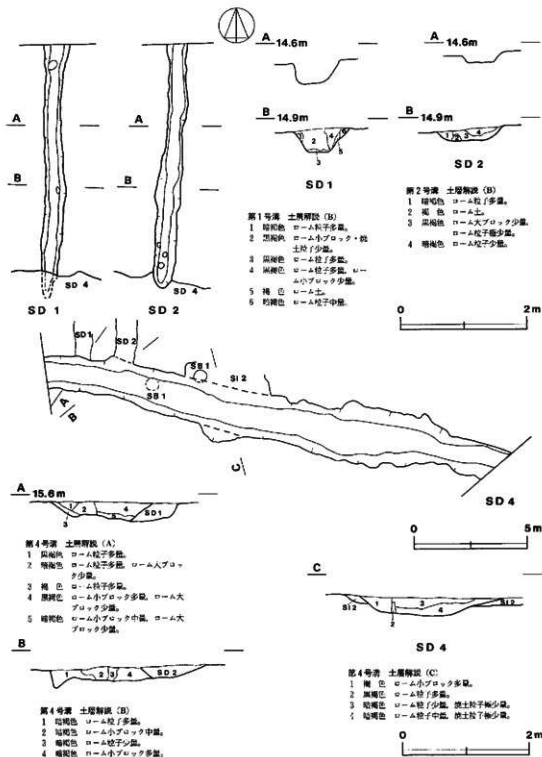
位置 調査区の南西部、C1、C2区に確認されている。

重複関係 本跡は、C1b区で第1号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 全長は約12.7mで、上幅2.18～2.51m、下幅1.36～1.45m、深さ49～111cmである。底面は凸凹しており、断面形は \sim 状を呈している。

方向 C2b区から西方向(N-76°-W)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。



第177図 第1・2・4号溝実測図

遺物 覆土中層から上層にかけて、流れ込みと思われる土師器の細片（364点）、須恵器片（高台付坏1、蓋1）、須恵器の細片（179点）、土師質土器片（内耳土器3）、土師質土器の細片（349点）、陶器片（緑釉小皿1）等が出土している。

所見 本跡は、重複関係から第1号住居跡より新しい時期に構築されている。出土遺物は流れ込みと考えられ、性格及び構築時期は不明である。

第4号溝（第177図）

位置 調査区の南西部、C1、C2区に確認されている。

重複関係 本跡は、C1f区で第1号溝を、C2f区で第2号住居跡を掘り込み、C1f区で第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 全長は約24.5mで、上幅1.25～2.50m、下幅0.65～1.50m、深さ21～30cmである。底面は凸凹しており、断面形は皿状を呈している。

方向 C2g区から西方向（N-78°-W）へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中層から上層にかけて、流れ込みと思われる土師器の細片（53点）、須恵器の細片（69点）、土師質土器片（小皿1）、土師質土器の細片（21点）等が出土している。

所見 本跡は、重複関係から第1号溝及び平安時代前期と思われる第2号住居跡を掘り込んでいることから、平安時代前期より新しく、第2号溝より古い時期に構築されている。出土遺物は流れ込みと考えられ、性格は不明である。

第5号溝（第178図）

位置 調査区の南西部、C2区に確認されている。

規模と形状 全長は約30.0mで、上幅1.46～2.83m、下幅1.04～1.74m、深さ24～61cmである。底面は凸凹しており、断面形は～状を呈している。

方向 C2c区から西方向（N-86°-W）へ直線的に延びている。

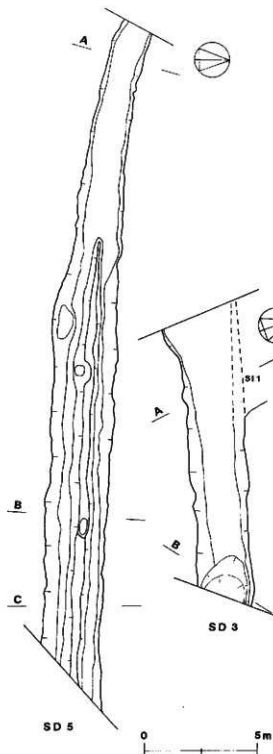
覆土 自然堆積。

遺物 覆土中層から上層にかけて、流れ込みと思われる土師器の細片（155点）、須恵器の細片（68点）等が出土している。

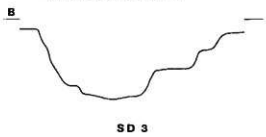
所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、本跡の性格及び構築時期は不明である。

第6号溝（第179図）

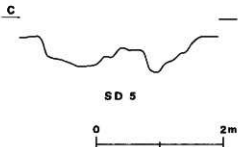
位置 調査区の南西部、C2、C3区に確認されている。



- 第3号溝 土層解説 (A)
- 1 褐色 山砂多量、黄土粒子中量、ローム粒子少量。
 - 2 黒褐色 山砂多量、ローム粒子・焼上粒子・山砂小ブロック少量。
 - 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック中量。
 - 4 褐色 ローム粒子・ローム大ブロック多量。
 - 5 暗褐色 ローム粒子多量、山砂中量。



- 第5号溝 土層解説 (B)
- 1 黒褐色 ローム粒子多量、黄土粒了極少量。
 - 2 褐色 ローム土。
 - 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量。
 - 4 暗褐色 ローム粒子・ローム大ブロック多量。
 - 5 褐色 ローム土。
 - 6 暗褐色 ローム小ブロック多量。
 - 7 褐色 ローム土。
 - 8 暗褐色 ローム粒子・ローム小〜中ブロック多量、焼上粒子極少量。
 - 9 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量。
 - 10 暗褐色 ローム小ブロック多量、炭化粒了極少量。
 - 11 褐色 ローム粒子多量。



第178図 第3・5号溝実測図

重複関係 本跡は、C2b区で第13号溝と重複している。

規模と形状 全長は約20.4mで、上幅2.29～3.31m、下幅1.16～1.38m、深さ47～79cmである。底面は凸凹しており、断面形は∪状を呈している。

方向 C3b区から西方向(N-79°-W)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中層から上層にかけて、流れ込みと思われる土師器の細片(47点)、須恵器片(環1)、須恵器の細片(45点)等が出土している。

所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、本跡の性格・構築時期及び第13号溝との新旧関係は不明である。

第7号溝(第179図)

位置 調査区の北部、C3区に確認されている。

規模と形状 全長は約3.0mで、上幅0.78～1.11m、下幅0.27～0.45m、深さ47cmである。

底面は平坦で、断面形は皿状を呈している。

方向 C3a区から北方向(N-15°-W)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土上層から流れ込みと思われる土師器の細片(1点)、土師質土器の細片(5点)が出土している。

所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、木跡の性格及び構築時期は不明である。

第8号溝(第179図)

位置 調査区の北東部、B3区に確認されている。

重複関係 本跡は、B3b区で第1号古墳を掘り込み、B3b区で第34号土坑に掘り込まれている。

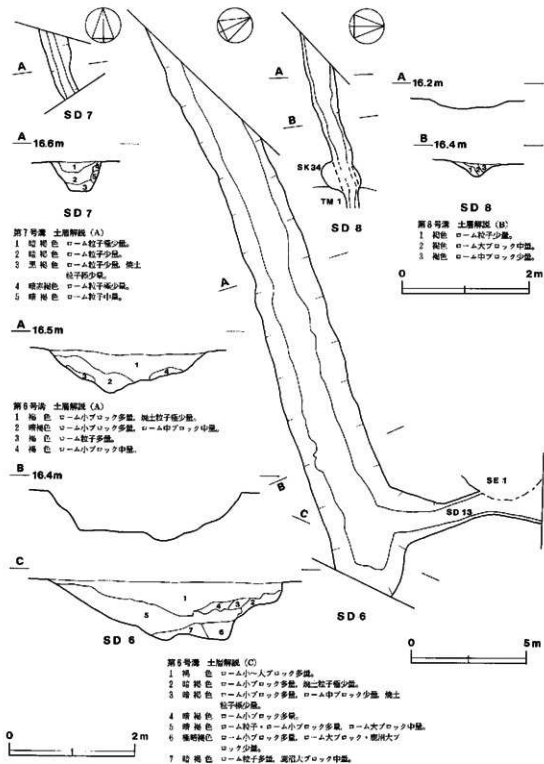
規模と形状 全長は約7.2mで、上幅0.52～1.13m、下幅0.22～0.92m、深さ14～15cmである。底面は平坦で、断面形は皿状を呈している。

方向 B3b区から西方向(N-102°-W)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 出土していない。

所見 重複関係から第1号古墳より新しく、第34号土坑より古い時期に構築されている。出土遺物がないため、性格及び構築時期は不明である。



第179図 第6・7・8・13号溝実測図

第9号溝 (第180図)

位置 調査区の北部、B3区に確認されている。

重複関係 本跡は、B3e区で第10号溝と重複している。

規模と形状 全長は約2.7mで、上幅1.32～1.59m、下幅0.29～0.37m、深さ17～19cmである。底面は平坦で、断面形は皿状を呈している。

方向 B3f区から北方向(N-11°-E)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土上層から土師器の細片(1点)、須恵器の細片(2点)が出土している。

所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、本跡の性格・構築時期及び第10号溝との新旧関係は不明である。

第10号溝 (第180図)

位置 調査区の北東部、B3区に確認されている。

重複関係 本跡は、B3g区で第20号土坑に、B3h区で第21・22・23号土坑に、B3g区で第24号土坑に、B3f区で第27号土坑に掘り込まれ、B3f区で第9号溝と重複している。

規模と形状 全長は約17.5mで、上幅2.17～3.47m、下幅0.31～0.70m、深さ55～80cmである。底面は凸凹しており、断面形は皿状を呈している。

方向 B3g区から西方向(N-72°-W)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中層から上層にかけて、土師器片(坏1)、土師器の細片(183点)、須恵器の細片(40点)、土師質土器片(小皿1)、土師質土器の細片(21点)等が出土している。

所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、江戸時代中期の幕壊と思われる第21・22・23号土坑より古い時期に構築されていることから、江戸時代中期以前の溝と考えられる。性格及び第9号溝との新旧関係は不明である。

第11号溝 (第181図)

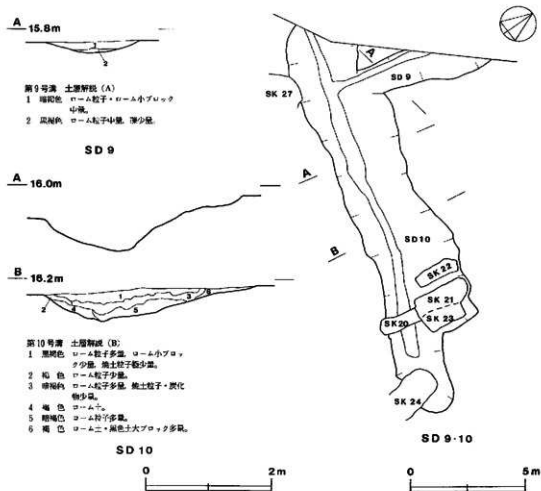
位置 調査区の中央部、B2、B3区に確認されている。

重複関係 本跡は、B3h区で第12号溝と重複し、B3g区で第27号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 全長は約24.0mで、上幅0.52～3.50m、下幅0.18～0.90m、深さ20～76cmである。底面は凸凹しており、断面形は皿状を呈している。

方向 B3h区から西方向(N-80°-W)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。



第180図 第9・10号溝実測図

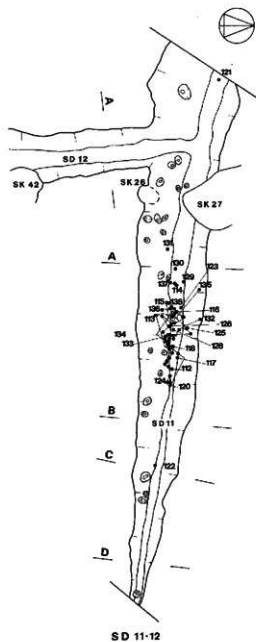
遺物 底面及び覆土下層から中層にかけて、土師器片（甕7，瓶1），土師器の細片（1,141点），須恵器片（瓶1，長頸壺1，短頸壺1，坏6，高台付坏5，盤1，蓋4），須恵器の細片（184点）等が出土している。

所見 本跡の南半分から径17～37cm，深さ15～25cmの円形または楕円形のピットが22か所検出されている。ピットの間隔は不規則ではあるが，柵列等が伴っていた可能性が考えられる。本跡は重複関係から第27号上坑より古い時期に構築されているが，第12号溝とは同時期に存在したと考えられる。出土遺物から平安時代前期の溝と考えられる。

第12号溝（第181図）

位置 調査区の中央部，B3区に確認されている。

重複関係 本跡は，B3h区で第11号溝と重複し，B3i区で第42号上坑に掘り込まれている。



A 15.6m



第11号溝 土層解説 (A)

- 1 暗褐色 ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
- 4 明褐色 ローム上
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、葉土粒子・風化土層少量
- 6 灰 色 ローム大ブロック多量
- 7 灰 色 ローム粒子多量
- 8 明褐色 ローム上
- 9 灰褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
- 10 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
- 11 暗褐色 ローム粒子少量
- 12 暗 色 ローム粒子少量
- 13 暗 色 ローム大ブロック多量、ローム小ブロック少量

B 16.4m



C 15.8m



D 16.4m



SD 11

第11号溝 土層解説 (C)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗 色 ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 5 暗 色 ローム粒子中量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量

A 16.0m



SD 12



第181図 第11・12号溝実測・遺物出土位置図

規模と形状 全長は約3.4mで、上幅1.74～2.06m、下幅0.58～0.78m、深さ34～38cmである。底面は凸凹しており、断面形は皿状を呈している。

方向 B3i区から北方向(N-5°-W)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層から上層にかけて土師器の細片(11点)、須恵器の細片(14点)が出土している。

所見 本跡は、重複関係から第42号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態及び出土遺物から第11号溝とは同時期に存在したと考えられ、平安時代前期の溝と思われる。

第13号溝(第179図)

位置 調査区の中央部、C2、C3区に確認されている。

重複関係 本跡は、C2j区で第1号井戸と、C2be区で第6号溝と重複している。

規模と形状 全長は約6.5mで、上幅1.04～1.06m、下幅0.72～0.84mである。底面は平坦で、断面形は皿状を呈している。

方向 C2be区から北方向(N-15°-W)へ直線的に延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中層から上層にかけて流れ込みと思われる土師器の細片(12点)、須恵器の細片(13点)、土製品(球状土錘1)が出土している。

所見 出土遺物はいずれも流れ込みと考えられ、本跡の性格・構築時期及び第1号井戸・第6号溝との新旧関係は不明である。

第3号溝出土遺物観察表

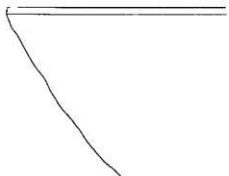
図版番号	器種	法型 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色・加工	備考
第182図 96	高台付杯 須恵器	A [15.7]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は贅付きが平坦で、「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は外傾しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石にふい黄褐色普通	P25 20% 覆土
		B 6.1				
		D [10.4]				
		E 1.4				
97	蓋 須恵器	A [20.6]	天井部から口縁部にかけての破片。天井部は低く、丸みをもって口縁部に至る。口縁部は外反し、端部は短く外下方に折れ曲がる。	口縁部内・外面横ナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒・長石暗赤灰色普通	P26 15% 覆土
		B (2.3)				
98	内耳土器 土師器	A [38.0]	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は大きく外傾し、口縁部はわずかに内傾する。口唇部は面をなす。	口縁部及び胴部内・外面横ナデ。耳は接合。	砂粒・長石・雲母褐色普通	P22 20% 覆土
		B (13.6)				
99	内耳土器 土師器	A [36.0]	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾し口縁部に至る。口唇部は面をなす。	口縁部及び胴部内・外面横ナデ。耳は接合。	砂粒・長石褐色普通	P23 15% 覆土 胴部外面ス 付着
		B (14.7)				



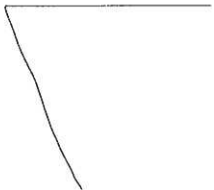
96



97



98



99



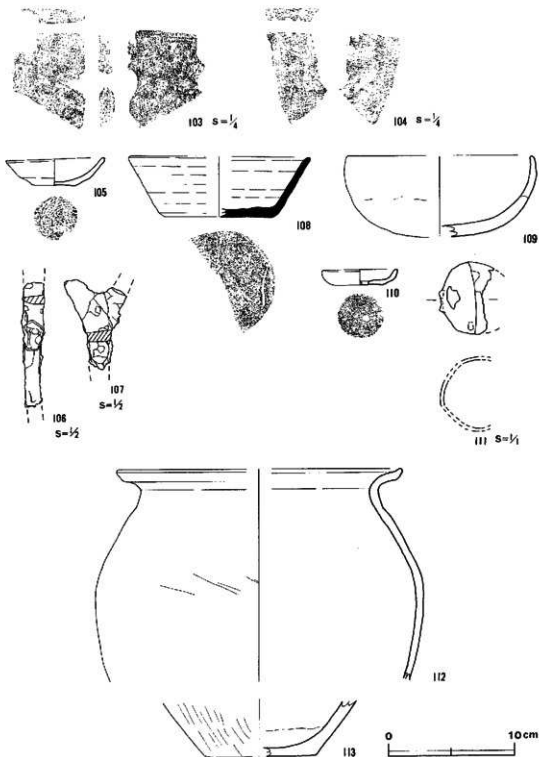
100

102 $8\frac{1}{4}$ 

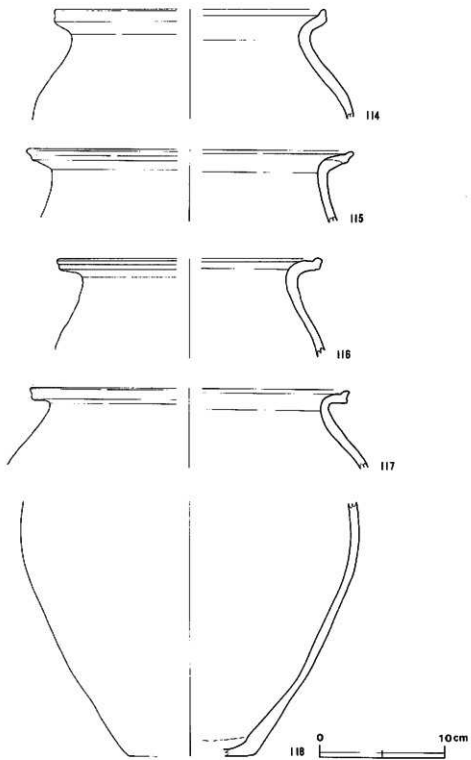
101



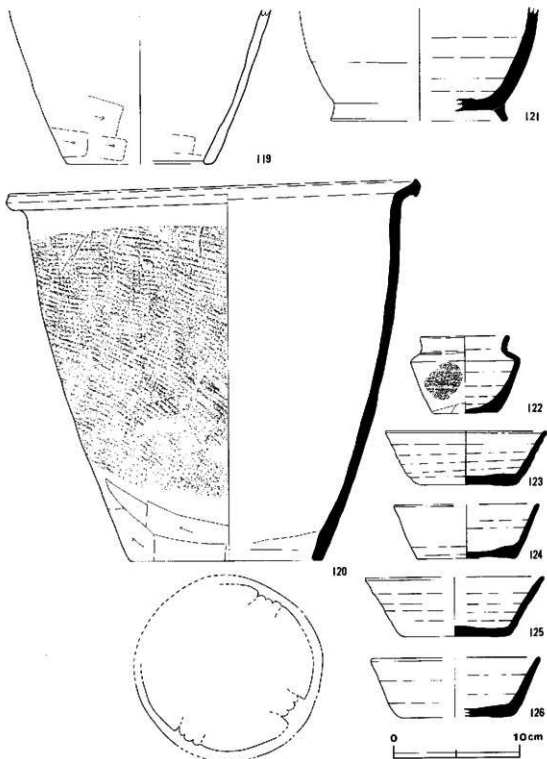
第182图 第3号沟出土遗物实测·拓影图



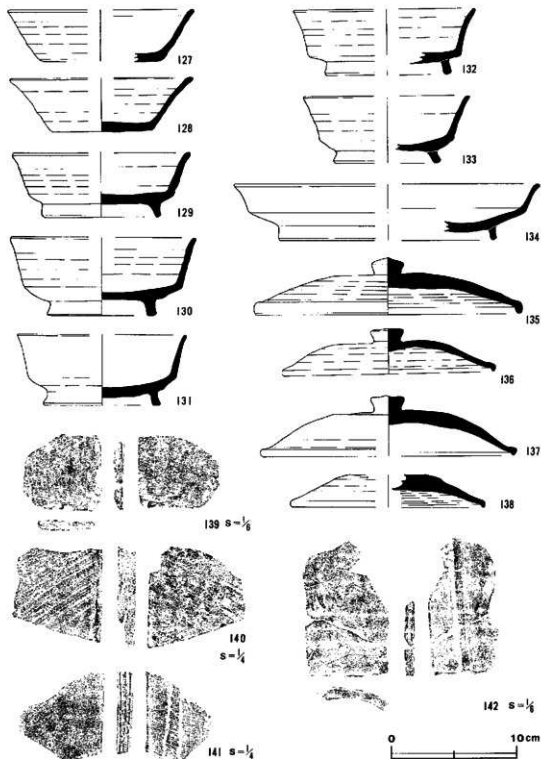
第183图 第3·4·6·10·11号沟出土遗物实测·拓影图



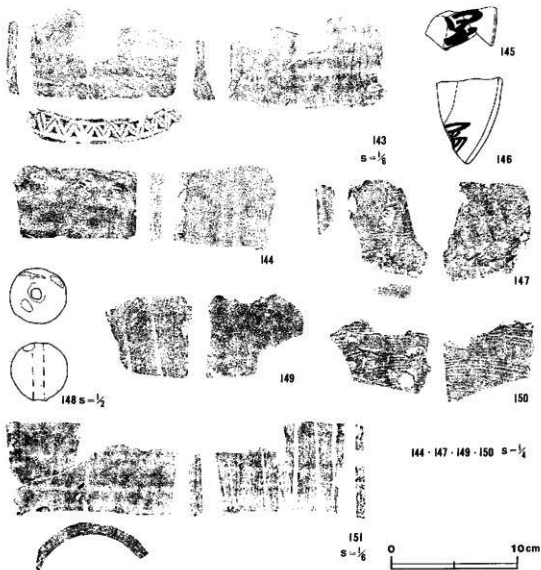
第184图 第11号溝出土遺物実測図



第185图 第11号沟出土物实测·拓影图



第186图 第11号溝出土遺物実測・拓影図



第187图 第11·12·13号清出土文物实测·拓影图

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第182図 100	内耳土器 付録1器	A [31.4] B (5.7)	口縁部片。口縁部は外傾し、口 唇部は面をなす。	口縁部内・外面横ナデ。耳は接 合。	砂粒 灰褐色 普通	P24 5% 覆土 体部外面ス 付着
101	小皿 陶器	A [10.4] B 2.5 C 4.8	底部から口縁部にかけての破片 底部は平底で、体部は大きく外 傾して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部隆起。体部内・外面横ナ デ。底部回転糸切り。	砂粒 褐灰色 普通	P27 50% 覆土 蓋戸(付録小皿)

図版番号	器種	法 量				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第182図102	丸瓦	(18.0)	(10.2)	1.8	(450.0)	覆土	T3 凹面・凸面ともナデ
第183図103	平瓦	(10.5)	(7.2)	1.8	(173.0)	覆土	T4 凹面も当煎
104	平瓦	(8.7)	(7.2)	(1.3)	(140.0)	覆土	T5 凹面も当煎

第4号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第183図 105	皿 土師器	A 7.8 B 2.3 C 3.5	口縁部一部欠損。底部は平底で、 体部は外傾して立ち上がり口縁 部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底部回転糸切り。	砂粒 褐色 普通	P28 95% 覆土

図版番号	器種	法 量				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第183図106	鉢	(6.7)	1.3	0.5	(7.1)	覆土中層	M2 鉄製品
107	鉢	(4.8)	(3.2)	0.6	(11.7)	覆土中層	M3 鉄製品

第6号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第183図 108	坏 須臾器	A [14.2] B 4.9 C [8.6]	底部から口縁部にかけての破片。 底部は平底で、体部は外傾して 立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底部手持ちへら削り。	砂粒・長石 暗灰黄色 普通	P29 40% 覆土

第10号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地味	備考
第183図 109	坏 土師器	A [14.6] B (6.5)	底部から口縁部にかけての破片。 底部は丸底で、体部は内傾しな がる立ち上がり、口縁部はわず かに内彎する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底部手持ちへら削り。	砂粒・長石 におい褐色 普通	P30 35% 覆土
110	皿 土師器	A 6.0 B 1.2 C 3.8	完形。底部は平底で、体部は内 彎しながら立ち上がり口縁部 に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ 底部回転糸切り。	砂粒 棕色 普通	P31 100% 覆土

図版番号	器種	法 量				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第183図111	鉢	(1.2)	2.0	(1.5)		覆土中層	M4 鉄製

第11号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	新1・色調・地味	備考
第183図 112	甕 土師器	A [22.8] B (17.1)	胴部から口縁部にかけての破片。 胴部は内彎しながら立ち上がり、 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部は外傾する。口唇部を外 上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面、胴部 内面横ナデ。胴部外面上位へつ 削り。	砂粒・長石・ 雲母 赤褐色 普通	P32A 20% 覆土
113	甕 土師器	B (4.5) C [8.8]	底部から胴部下にかけての破片。 底部は平底で、胴部は内彎し ながら立ち上がる。	胴部外面下位へつ磨き。底部手 持ちへつ削り。	砂粒・長石・ 雲母 赤褐色 普通	P32B 5% 覆土
第184図 114	甕 土師器	A [21.2] B (8.9)	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部は外傾する。口唇部を上 方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・ 雲母 褐色 普通	P33 10% 覆土
115	甕 土師器	A [12.6] B (5.8)	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口縁部は外傾する。口唇部を外 上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・ 雲母 にぶい褐色 普通	P34 10% 覆土
116	甕 土師器	A [25.0] B (6.8)	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は大きく外反し、口縁部は 外傾する。口唇部を外上方につ まみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母 褐色 普通	P35 5% 覆土
117	甕 土師器	A [25.0] B (6.3)	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は大きく外反し、口縁部は 外傾する。口唇部を外上方につ まみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母 褐色 普通	P36 5% 覆土
118	甕 土師器	B (20.5) C [10.4]	底部から胴部にかけての破片。 底部は平底で、胴部は内彎しな がら立ち上がる。	胴部外面下端へつ磨き。胴部 内・外面ナデ。底部手持ちへつ 削り。	砂粒・石英・ 長石・雲母 赤褐色 普通	P37 20% 覆土
第185図 119	甕 土師器	B (12.4) C [11.6]	胴部破片。甲孔式。胴部は内彎気 味に立ち上がる。	胴部内・外面下位手持ちへつ削 り。	砂粒・石英・ 長石・雲母 にぶい褐色 普通	P38 20% 覆土
120	甕 須恵器	A 32.4 B 30.6 C 15.4	底部から口縁部にかけて 部欠 損。4孔式。胴部は内彎気味に 立ち上がり、口縁部は大きく外 反する。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。 胴部外面格子目状のたたき。胴 部内面横位・縦位のナデ。胴部 下端内・外面手持ちへつ削り。	砂粒 黄灰色 普通	P39 80% 覆土
121	長頸甕 須恵器	B (8.9) D [14.2] E 0.9	高台部から体部下位にかけての 破片。高台部は「ハ」の字状に 開き、底部は平底で、体部は内 彎気味に立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。高台貼り 付け後、ナデ。	砂粒・糖 黒褐色 普通	P40 10% 覆土
122	短頸甕 須恵器	A 7.1 B 6.2 C 5.2	完形。底部は平底で、体部は内 彎気味に立ち上がり、上位で大 きく内彎する。頸部は短く外反 して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部・頸部及び体部内・外面 横ナデ。体部外面下位端及び底部 手持ちへつ削り。	砂粒・長石 灰白色 普通	P41 100% 覆土
123	環 須恵器	A 12.7 B 4.3 C 8.1	体部から口縁部にかけて一部欠 損。底部は平底で、体部は外傾 して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 底部回転へつ切り後、手持ちへ つ削り。	砂粒・長石 灰白色 普通	P42 80% 覆土
124	環 須恵器	A [11.4] B 4.3 C 8.0	底部から口縁部にかけての破片。 底部は平底で、体部は外傾して 立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。 底部手持ちへつ削り。	砂粒・長石 灰黄色 普通	P43 40% 覆土

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・地味	備考
第185図 125	環 須臾器	A [14.2]	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び体内内・外面横ナデ。 底部回転へう切り後、手持ちへう削り。	砂粒 灰黄色 普通	P44 40% 覆土
		B 4.7	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。			
		C 8.6				
126	環 須臾器	A [13.6]	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び体内内・外面横ナデ。 底部回転へう切り後、手持ちへう削り。	砂粒・長石 灰黄色 普通	P45 30% 覆土
		B 4.8	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。			
		C [9.4]				
第186図 127	環 須臾器	A [15.0]	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び体内内・外面横ナデ。 底部回転へう切り。	砂粒・長石 褐白色 普通	P46 30% 覆土
		B 4.2	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。			
		C [9.4]				
128	環 須臾器	A [14.6]	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部及び体内内・外面横ナデ。 底部手持ちへう削り。	砂粒・長石 暗灰黄色 普通	P47 30% 覆土
		B 4.3	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。			
		C 8.0				
129	高台付環 須臾器	A [14.0]	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体内内・外面横ナデ。 底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・赤・長石 灰白色 普通	P48 70% 覆土
		B 5.2				
		D 8.7				
		E 1.1				
130	高台付環 須臾器	A [14.6]	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体内内・外面横ナデ。 底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P49 60% 覆土
		B 6.2				
		D [8.7]				
		E 1.3				
131	高台付環 須臾器	A [13.2]	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体内内・外面横ナデ。 底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P50 60% 覆土
		B 5.7				
		D 9.1				
		E 1.1				
132	高台付環 須臾器	A [14.1]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体内内・外面横ナデ。 底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P51 40% 覆土
		B 5.3				
		D [9.6]				
		E 1.2				
133	高台付環 須臾器	A [13.1]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体内内・外面横ナデ。 底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P52 20% 覆土
		B 5.4				
		D 8.2				
		E 1.0				
134	盤 須臾器	A [24.4]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は丸底で、体部は大きく外傾し、口縁部は体部から外反して立ち上がる。	口縁部及び体内内・外面横ナデ。 底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P53 20% 覆土
		B 4.5				
		D [17.2]				
		E 1.2				
135	蓋 須臾器	A 21.0	天井部から口縁部にかけて一部欠損。天井部は低く、丸味をもって口縁部に至る。口縁部はわずかに外反し、端部は短く垂下する。つまみは宝珠形を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。天井部回転へう削り。	砂粒・長石・赤 灰色 普通	P54 80% 覆土
		B 3.3				
		F 2.6				
		G 1.3				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色調・地味	備考
第186図 136	蓋 須臾器	A 16.8	つまみから口縁部にかけて一部欠損。天井部は低く、丸味をもって口縁部に至る。口縁部はわずかに外反し、端部は短く垂下する。つまみは最高で中央部はわずかに突出する。	口縁部内・外面横ナデ。天井部回転へり削り。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P55 70% 覆土
		B 3.7				
		F 2.7				
		G 1.1				
137	蓋 須臾器	A [20.0]	つまみから口縁部にかけての破片。天井部は低く、丸味をもって口縁部に至る。口縁部はわずかに外反し、端部は短く垂下する。つまみは最高で中央部はわずかに突出する。	口縁部内・外面横ナデ。天井部回転へり削り。	砂粒・長石・礫 灰黄色 普通	P56 40% 覆土
		B 4.8				
		F 1.3				
		G 2.8				
138	蓋 須臾器	A [15.4]	天井部から口縁部にかけての破片。天井部は低く、丸味をもって口縁部に至る。口縁部はわずかに外反し、端部は短く垂下する。	口縁部内・外面横ナデ。天井部回転へり削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P57 40% 覆土
		B (2.8)				

図版番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第186図136	平瓦	(12.5)	(13.2)	2.2	(560.0)	覆土	T11
		(11.5)	(10.4)	2.2	(374.0)		
		(10.0)	(8.4)	1.0	(123.0)		
		(17.8)	(12.2)	1.4	(380.0)		
第187図143	平瓦	(15.2)	25.1	4.2	(1200.0)	覆土	T9
		(9.7)	(12.2)	1.5	(305.0)		

図版番号	墨書文字	種別	器種	部位	備考
第187図145	家	上腹部	坏	体部外面	P101 内面黒色処理 体部片 覆土
146	□	須臾器	蓋	天井部外面	P102 天井部から口縁部にかけての破片 覆土

(注) □は墨書があっても判読できないもの、あるいは欠損部があるため判読できないもの

第12号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第187図147	平瓦	(10.0)	(11.0)	2.4	(253.0)	覆土	T17 凹面半当瓦

第13号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)		
第187図148	球状土器	3.1	3.1	-	27.0	0.6	覆土	DP1
149	丸瓦	(9.8)	(10.0)	2.5	(310.0)	-	覆土	T22 凹面半当瓦
150	平瓦	(7.8)	(11.2)	1.3	(175.0)	-	覆土	T23 凹面半当瓦
151	丸瓦	(15.5)	(14.0)	2.8	(1250.0)	-	覆土	T21 凹面半当瓦

6 井戸

当調査区の中央部及び北部から井戸が2基検出されているが、掘り方が深く、危険が伴うため

完掘はできなかった。

第1号井戸 (第188図)

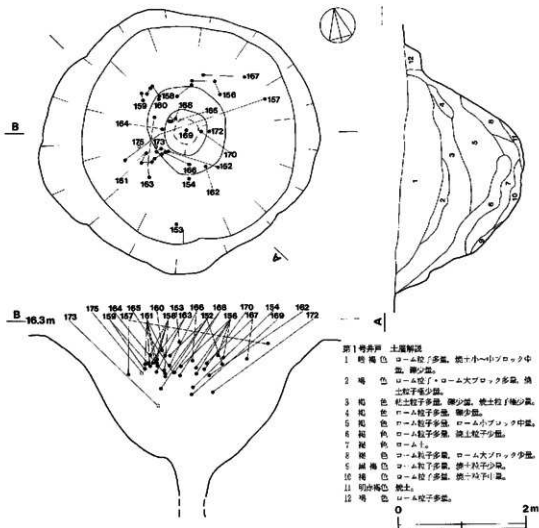
位置 調査区の中央部、B2j₀区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第13号溝に掘り込まれている。

規模と形状 掘り方は、上面が、長径4.47m、短径4.34mの円形を呈し、調査ができた深さは2.60mである。深さ1.90mまでは鍋底状を呈しており、そこからさらに直径0.50mの円筒形に掘り込まれている。

覆土 全体にローム粒子・ロームブロックが多量に含まれ、人為堆積と思われる。

遺物 覆上中層から上層にかけて、土師器片(壺1, 埴1, 甕6), 土師器の細片(621点), 須恵器片(長頸壺1, 短頸壺1, 坏5, 高台付坏1, 蓋1), 須恵器の細片(72点), 土師質土器



第188図 第1号井戸実測・遺物出土位置図

片(碗2)、手握土器片2、土製品(球状土錘1、管状土錘1、羽口1)等が出土している。

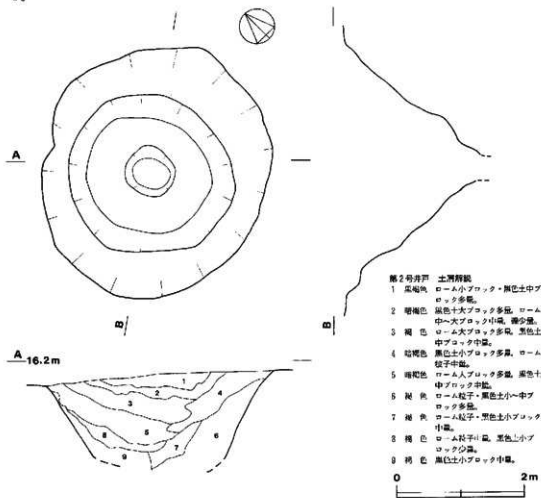
所見 確認面下2.60mの深さまで調査したが、危険が伴うためそれ以下の調査は断念した。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期以前の井戸と考えられる。

第2号井戸(第189図)

位置 調査区の北部、B3c₄区を中心に確認されている。

規模と形状 掘り方は、上面が、長径4.19m、短径3.42mの楕円形を呈し、調査ができた深さは2.18mである。深さ1.80mまでは鍋底状を呈しており、そこからさらに直径0.57mの円筒形に掘り込まれている。

覆土 全体にローム粒子・ロームブロック・黒色土ブロックが多量に含まれ、人為堆積と思われる。



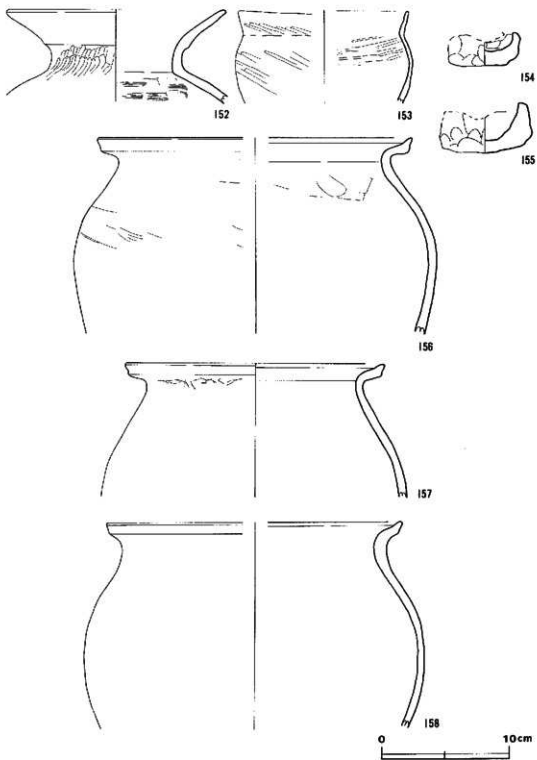
第189図 第2号井戸実測図

遺物 覆上中層から上師器の細片（6点）が出土している。

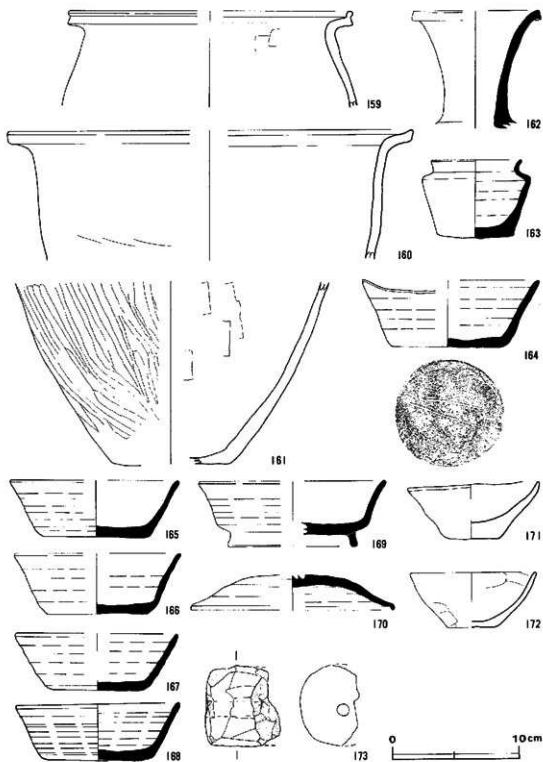
所見 確認面下2.18mの深さまで調査したが、危険が伴うためそれ以下の調査は断念した。遺構の形態及び出土遺物から平安時代前期以前の井戸と考えられる。

第1号井戸出土遺物観察表

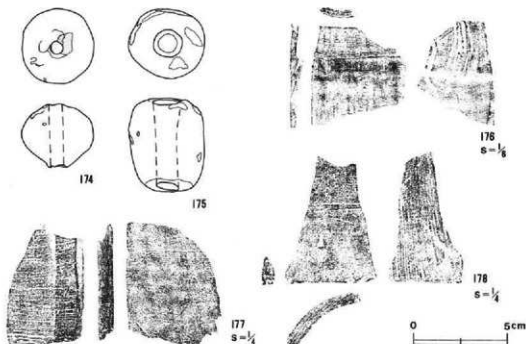
採取番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	目・色調・地肌	備考
第190回 152	壺 土師器	A 17.2 B (7.6)	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は外反しながら立ち上がり、 口縁部は外傾する。	口縁部及び頸部内・外面磨き。	砂粒・長石・ 雲母 にふい褐色 普通	P68 10% 中央部覆土中層
153	埴 土師器	A [13.6] B 7.5	胴部から口縁部にかけての破片。 胴部は内彎し、頸部はくびれる。 口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部・頸部及び胴部内・外面 ヘラ磨き。	砂粒・長石・ 雲母 明赤褐色 普通	P79 20% 南西側覆土中層
154	手製土器	A [5.4] B 2.7 C 4.5	口縁部の一部が欠損。底部は平 底で、体部は内彎気味に立ち上 がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ナデ。	砂粒 浅黄褐色 普通	P81 80% 中央部覆土中層
155	手製土器	A [6.3] B 3.3 C 3.5	口縁部の一部が欠損。底部は丸 底で、体部は内彎気味に立ち上 がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ナデ。 普通	砂粒 にふい褐色 普通	P82 80% 中央部覆土中層
156	壺 土師器	A [25.0] B (15.8)	胴上半部から口縁部にかけての 破片。胴部は内彎し、頸部は大き く外反し、口縁部は外傾する。 口器部を外上方につまみ出す。	口縁部・頸部及び胴部内・外面 横ナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母 にふい赤褐色 普通	P82 20% 中央部覆土中層
157	壺 土師器	A 20.4 B (10.8)	胴上半部から口縁部にかけての 破片。胴部は内彎し、頸部は大き く外反し、口縁部は外傾する。 口器部を外上方につまみ出す。	口縁部・頸部及び胴部内・外面 横ナデ。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P63 10% 西部及び東部 中層覆土中層
158	壺 土師器	A [23.2] B (16.6)	胴部から口縁部にかけての破片。 胴部は「く」の 字状に扇出し、口縁部は外傾す る。口器部を外上方につまみ出 す。	口縁部・頸部及び胴部内・外面 横ナデ。	砂粒・石英・ 雲母 にふい褐色 普通	P64 10% 中央部覆土中層
第191回 159	壺 土師器	A [22.4] B (7.8)	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は大きく外反し、口縁部は 外傾する。口縁部を上方につま み出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母 明赤褐色 普通	P65 5% 中央部覆土中層
160	壺 土師器	A [22.4] B (10.5)	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は大きく外反し、口縁部は 外傾する。口器部を外上方につ まみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・ 長石・雲母 明赤褐色 普通	P66 5% 中央部覆土中層
161	壺 土師器	B (14.2) C [9.5]	底部から胴下半部にかけての破 片。底部は平底で、胴部は内彎 しながら立ち上がる。	胴部外面ヘラ磨き。胴部内面ナ デ。底部木炭痕。	砂粒・石英・ 長石・雲母 明赤褐色 普通	P67 40% 中央部覆土中層
162	長頸壺 須恵器	A [9.8] B (9.6)	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は外反しながら立ち上がり 口縁部に至る。口器部は面をな す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P60 5% 中央部覆土中層



第190图 第1号井戸出土遺物実測図



第191图 第1号井戸出土遺物実測・拓影图



第192図 第1号井戸出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装成	備考
第191図 163	短頸壺 須恵器	A 7.0	体部一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、上位で内傾する。頸部はわずかに外反し、口縁部に至る。	口縁部・頸部及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 暗灰色 普通	P70 80% 中央部覆土中層
		B 6.4				
		C 6.0				
164	環 須恵器	A [13.9]	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P73 70% 中央部覆土中層 底部ヘラ記号 [二]
		B 5.4				
		C 8.7				
165	環 須恵器	A [13.5]	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P74 60% 中央部覆土中層
		B 4.6				
		C 8.5				
166	環 須恵器	A [13.2]	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 灰白色 普通	P75 60% 中央部覆土中層
		B 4.9				
		C 8.1				
167	環 須恵器	A [12.8]	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・霞 灰色 普通	P76 60% 北東部覆土中層
		B 4.6				
		C 7.5				
168	環 須恵器	A 13.1	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 灰オリーブ色 普通	P77 70% 中央部覆土中層
		B 4.6				
		C 6.9				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地味	備考
第191図 169	高台付耳須恵器	A [14.8]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石 黄灰色 普通	P78 30% 中央部覆土中層
		B 5.3				
		D [10.3]				
		E 1.2				
170	蓋須恵器	A [16.1]	天井部から口縁部にかけての破片。天井部は低く、緩やかに内傾して口縁部に至る。口縁部はわずかに外反し、端部は短く垂下する。	口縁部内・外面横ナデ。天井部回転へう削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P80 25% 中央部覆土中層
		B (2.9)				
171	埴土埴土	A 10.5	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部及び体部内・外面ナデ。	砂粒 浅黄褐色 普通	P71 60% 中央部覆土中層
		B 4.6				
		C 4.6				
172	埴土埴土	A [10.0]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内傾しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ナデ。	砂粒・長石 ぶい・褐色 普通	P72 30% 中央部覆土中層
		B 4.4				
		C 3.8				

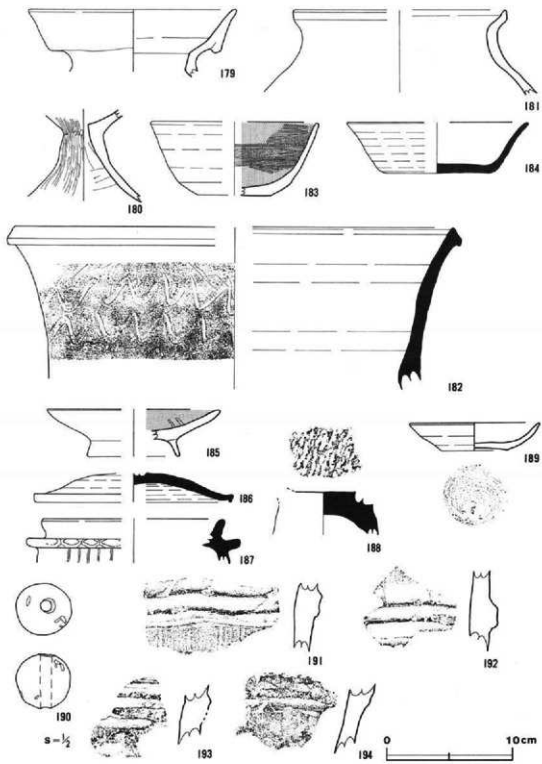
図版番号	器種	法量					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(mm)		
第191図173	瓦口	(6.0)	(6.5)	-	(180.2)	1.2	覆土	DP3
第192図174	埴状土埴	3.5	3.9	-	46.6	0.7	覆土	DP2
		175	管状土埴	5.0	4.1	-	70.0	1.6
176	丸瓦	(17.0)	(12.5)	1.8	(555.0)	-	覆土	T27 田舎布当敷
177	丸瓦	(14.0)	(9.5)	2.1	(360.0)	-	覆土	T28 田舎布当敷
178	丸瓦	(14.0)	(9.5)	1.7	(240.0)	-	覆土	T29 田舎布当敷

7 遺構外出土遺物

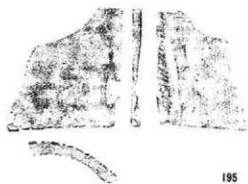
当調査区からは、試掘や表土除去の際に、遺物が少量出土しているため、ここでは、遺構外出土遺物として実測図を掲載し、観察表で解説する。

遺構外出土遺物観察表

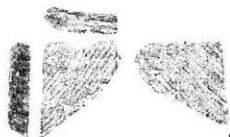
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地味	備考
第193図 179	蓋土師器	A 16.4	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は外反し、口縁部は有段で外傾して立ち上がる。	口縁部及び頸部内・外面磨き。	砂粒 ぶい・褐色 普通	P88 10% 表土
		B (5.0)				
180	器台土師器	B (7.6)	頸部は外反して下方へ開く。	頸部外面磨きのへう磨き。頸部内面手持りへう削り。	砂粒・長石 褐色 普通	P96 20% 表土
		E (5.5)				
181	埴土師器	A [16.8]	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口縁部を上方につまみ出す。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 ぶい・褐色 普通	P89 15% 表土
		B (6.7)				
182	壺須恵器	A [35.0]	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は外反して口縁部に至る。口縁部は面をなす。	口縁部及び頸部内・外面横ナデ。口縁部外面に二段の波状文。	砂粒・長石・暗緑灰色 普通	P90 5% 表土
		B (13.0)				



第193圖 遺構外出土遺物実測・拓影図



195



196



197



198



199



200



201

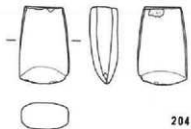


202

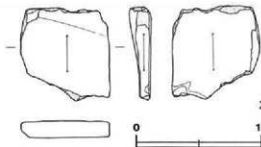


203

195~201 s = 1/4



204



205

10 cm

第194图 遺構外出土遺物実測・拓影图

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	土・色・地味	備考
第193図 183	土師器 須恵器	A [13.0]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き後、黒色処理。体部外面下端及び底部回転へラ削り。	砂粒 灰色 普通	P91 40% 表土
		B 4.2				
		C [5.8]				
184	土師器 須恵器	A [14.4]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で、体部は外彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転へラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P93 40% 表土
		B 4.2				
		C 8.2				
185	高台付土師器	A [13.8]	高台部から口縁部にかけての破片。高台部は「ハ」の字状に開き、底部は平底で、体部は大きく外反して立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き後、黒色処理。底部回転へラ削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 灰色 普通	P94 25%
		B 3.8				
		D [7.2]				
		E 1.3				
186	土師器 須恵器	A [15.6]	天井部から口縁部にかけての破片。天井部は低く、緩やかに内彎しながら口縁部に至る。口縁部はわずかに外反し、端部は短く垂下する。	口縁部内・外面横ナデ。天井部回転へラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P96 40% 表土
		B (2.4)				
187	土師器 須恵器	A [14.3]	外縁部片。外縁は短く外屈する。外縁及び突帯横ナデ。突帯が通る。	外縁及び突帯横ナデ。突帯が通る。突帯が通る。	砂粒・長石 灰色 普通	P97 10% 表土
		B (3.6)				
188	土師器 須恵器	B (3.4)	台部から脚部にかけての破片。台部は平面で、脚部は外彎しながら下降する。	台部へラ状工具による一定方向の刺突痕。脚部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P100 20% 表土
189	土師器 須恵器	A 10.2	体部から口縁部にかけて一部欠損。底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒 灰白色 普通	P92 60% 表土
		B 2.3				
		C 5.2				

図版番号	器種	法 量					出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)		
第193図190	球状土師	2.9	2.9	-	22.4	0.6	表土	DP7
191	円筒埴輪	(6.4)	(10.7)	1.5	(155.0)	-	表土	DP8
192	円筒埴輪	(6.9)	(7.9)	1.5	(95.0)	-	表土	DP9
193	円筒埴輪	(6.2)	(6.0)	1.5	(65.0)	-	表土	DP10
194	円筒埴輪	(6.8)	(7.4)	1.5	(105.0)	-	表土	DP11
第194図195	丸瓦	(14.0)	(16.8)	1.1	(250.0)	-	表土	T30 西面に布当痕
196	平瓦	(11.0)	(9.5)	2.8	(285.0)	-	表土	T31 西面に布当痕
197	丸瓦	(7.8)	(9.0)	2.3	(245.0)	-	表土	T32 西面に布当痕
198	平瓦	(9.6)	(10.2)	1.8	(200.0)	-	表土	T34 西面に布当痕
199	平瓦	(9.0)	(7.0)	2.8	(245.0)	-	表土	T38 西面に布当痕、西面に網目の瓦痕
200	平瓦	(8.0)	(7.0)	2.3	(180.0)	-	表土	T39 西面に布当痕、凸面に網目の瓦痕
201	平瓦	(7.0)	(8.5)	1.8	(140.0)	-	表土	T40 西面に布当痕、凸面に網目の瓦痕
202	丸瓦	(7.0)	(6.8)	1.7	(105.0)	-	表土	T41 西面に布当痕
203	平瓦	(5.8)	(7.5)	1.6	(87.0)	-	表土	T43 西面に布当痕

図版番号	器種	石質	法 量				出土地点	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)		
第194図204	石片	砂岩	(6.3)	4.0	2.2	(101.4)	表土	O1

図版番号	器種	石質	法 範				出土地点	備 考
			高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第194(226)	磁石	黄岩	(7.6)	7.1	1.4	(121.8)	表上	92

第4節 考 察

当調査区から検出された竈穴住居跡は8軒で、それらは出土遺物等から古墳時代、奈良時代、平安時代に分けられる。ここでは、土器をⅠ～Ⅵ期に区分し、各期ごとに住居跡の特徴を述べ、集落についても若干の検討を加えていくことにする。集落については、道路幅という限定された範囲内の調査結果に基づくもので、遺物及び遺構の重複関係に重点を置き、これらの時期区分を行った。

また、当調査区から検出された古墳(第1号墳)についても若干の検討を試みる。

1 土器の様相について

Ⅰ期(第195図)

本期に該当する遺物は、土師器の壺である。壺は、胴部が内彎し、頸部が外反して口縁部に至る。胴部外面及び口縁部内・外面にハケ目が施され、胴部内面にはヘラ削りが施されている。本期は、古墳時代(4世紀後半)に位置付けられるものと思われる。



第195図
Ⅰ期出土土器

Ⅱ期(第196図)

本期に該当する遺物は、土師器の埴である。埴は、平底で、胴部がそろばん玉状を呈し、中位に最大径をもつ。頸部で強く絞り込み、口縁部はやや内彎する。胴部の外面下半に手持ちのヘラ削りが、上半にはヘラ磨きが施され、口縁部外面にはハケ目が施されている。本期は、古墳時代(5世紀前半)に位置付けられるものと思われる。



第196図
Ⅱ期出土土器

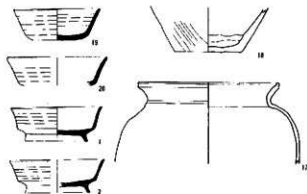
Ⅲ期(第197図)

本期に該当する遺物は、土師器の壺である。壺は、平底で、胴部が球状を呈し、口縁部が外反して立ち上がる。底部に手持ちのヘラ削りが施され、胴部外面及び口縁部内・外面にハケ目が施されているものと、底部及び胴部外面下半に手持ちのヘラ削りが施されているものがある。本期は、古墳時代(6世紀前半)に位置付けられるものと思われる。

Ⅳ期(第198図)

本期に該当する遺物は、土師器の甕、須恵器の坏、高台付坏である。土師器の甕は、平底で、胴部は内彎して立ち上がり、頸部は外反し、口縁部は外傾し、口唇部を外上方へつまみ出してい

る。胴部外面下端にヘラ磨きが施されている。須恵器の坏は、平底で、体部が外傾して立ち上がる。底部は手持ちヘラ削りが施されている。口径の2分の1よりも底径が大きい。高台付坏は、体部が外傾して立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口径は約15cmのものである。底部には回転ヘラ削りが施されている。本期は、奈良時代（8世紀後葉）に位置付けられるものと思われる。



第198図 IV期出土土器

V期（第199図）

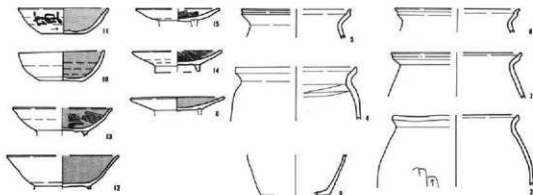
本期に該当する遺物は、須恵器の坏である。坏は、体部が外傾し、口縁部がわずかに外反する。本期は、平安時代（9世紀前葉）に位置付けられるものと思われる。



第199図
V期出土土器

VI期（第200図）

本期に該当する遺物は、土師器の甕、坏、高台付坏、高台付皿である。甕は、平底で、胴部が内彎して立ち上がり、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が外傾し、口唇部を外上方につまみ出している。底部及び胴部外面に手持ちヘラ削りがみられるものもある。坏は、平底で、体部が内彎しながら立ち上がるものと内彎気味に立ち上がり口縁部がわずかに外反するものがある。底部及び体部外面下端に回転ヘラ削りが施され、体部内面はヘラ磨き後、黒色処理が施されている。高台付坏は、平底で、体部が内彎しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反するもので、坏と同様に、底部及び体部外面下端に回転ヘラ削りが施され、体部内面はヘラ磨き後、黒色処理が施されている。高台付皿も、平底で、体部が大きく外傾して立ち上がるもので、坏と同様に、底部及び体部外面下端に回転ヘラ削りが施され、体部内面はヘラ磨き後、黒色処理が施されている。本期は、平安時代（9世紀後葉）に位置付けられるものと思われる。



第200図 VI期出土土器

2 住居の形態と集落について

(1) 古墳時代 (I～III期)

古墳時代 (4世紀後半～6世紀前半) と考えられる住居跡は3軒検出されており、出土遺物から、3軒の住居跡を3期に区分した。

I期 古墳時代 (4世紀後半)

第7号住居跡が当該期に属する。調査区の中央部から検出され、大部分が第6号住居跡に掘り込まれてしまっているが、平面形は方形を呈するものと思われる。一辺が約4m弱の住居跡で、主軸方向はN-37°-Wを示している。

II期 古墳時代 (5世紀前半)

第8号住居跡が当該期に属する。調査区の北東部から検出され、主柱穴のうちの1か所だけが検出されたが、大部分が調査区外のため、規模及び平面形、主軸方向等は不明である。

III期 古墳時代 (6世紀前半)

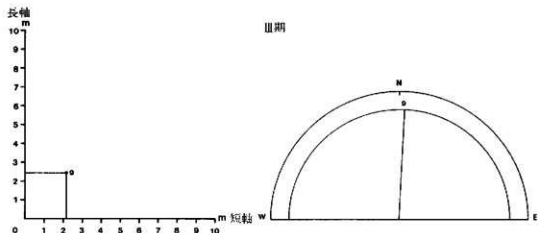
第9号住居跡が当該期に属する。調査区の北東部から検出され、平面形は方形を呈している。一辺が約2.3mの住居跡で、主軸方向はN-3°-Eを示し、ほぼ中央部の床面に炉と思われる焼土が薄く広がって堆積している。主柱穴が2か所検出されている。非常に小形の住居跡である。

(2) 奈良時代 (IV期)

奈良時代 (8世紀後半) と考えられる住居跡は2軒検出されている。

IV期 奈良時代 (8世紀後半)

第4・6号住居跡が当該期に属する。第4号住居跡は調査区の南西部から検出されたが、大部分が調査区域外のため不明な点が多い。第6号住居跡は調査区の中央部に検出され、平面形は方形を呈している。一辺が約3.2mの住居跡で、主軸方向はN-35°-Wを示し、北西壁に竈が付設されている。柱穴は検出されていない。



第 201 図 住居跡規模・主軸方向

(3) 平安時代 (V~VI期)

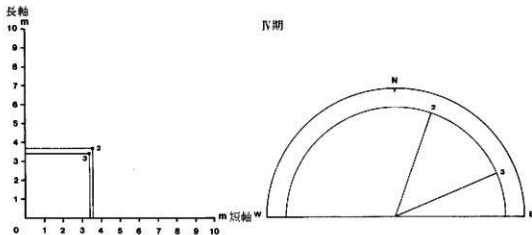
平安時代 (9世紀前葉~9世紀後葉) と考えられる住居跡は3軒検出されており、出土遺物から、3軒の住居跡を2期に区分した。

V期 平安時代 (9世紀前葉)

第1号住居跡が当該期に属する。第1号住居跡は調査区の南西部から検出され、第1号住居跡は、平面形が方形を呈するものと思われ、一辺が約4.3mの住居跡で、主軸方向はN-15°-Eを示し、北壁に竈が付設されている。柱穴は支柱穴のうちの1か所が検出されている。

VI期 平安時代 (9世紀後葉)

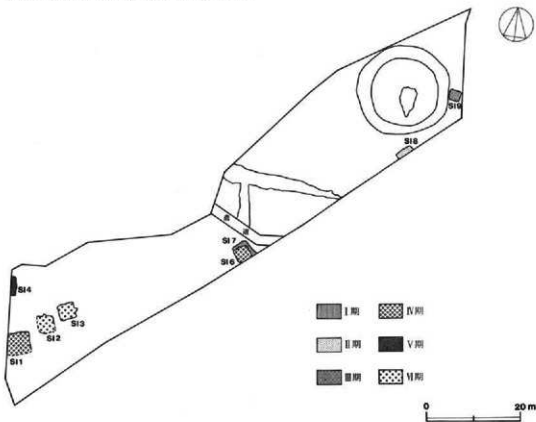
第2・3号住居跡が当該期に属する。それぞれ調査区の南西部から検出され、平面形は方形を呈し、第2号住居跡は一辺が約3.6m、第3号住居跡は一辺が3.4mで、主軸方向は第2号住居



第 202 図 住居跡規模・主軸方向

跡がN-19°-Eを示し、竈が北壁に付設されているのに対し、第3号住居跡がN-67°-Eを示し、竈が北東壁に付設されている。支柱穴は、第2号住居跡から1か所、第3号住居跡から3か所検出されている。2軒の住居跡は約1.5m離れて位置している。時期は同じであるが主軸方向に違いがみられる。

以上のことから、北屋敷遺跡から検出された住居跡はI～VI期（4世紀後葉～9世紀後葉）の6期に区分することができ、当台地上には古墳時代から平安時代前期にわたって、断続的に集落が形成されていたことがうかがわれる。また、IV期からV期にかけての遺物が出土している溝も2条あり、その遺物の中から、那賀郡の「郡の寺」であった『台渡廃寺跡』から出土している軒平瓦と同型の軒平瓦（143）が出土している。



第203図 集落変遷図（I～VI期）

3 第1号墳の構築時期について

本墳は、那珂川右岸の台地縁辺部に構築されている円墳である。旧常澄村内には、9つの古墳群があり、その中で調査されているのは、森戸古墳群（4世紀後半から6世紀後半）、下入野古

墳群、大串古墳群（4世紀後半から5世紀初頭）、金山塚古墳群（5世紀）、栗崎古墳群の5つに過ぎない。今回調査した古墳は、金山塚古墳群と谷津を挟んでいることから、現在までに調査されているものと時期はずれるが、この金山塚古墳群の一部と考えても良いのではないだろうか。

本項では、今回調査した古墳の形状及び出土遺物から、北屋敷遺跡の第1号墳の構築時期について述べることにする。

(1) 古墳の形状

本墳の横穴式石室は、規模が外法で長さ3.90m、幅1.80m、内法で長さ3.67m、幅0.83m、高さ0.72mと、比較的小形のものであり、構造は凝灰岩の切り石を、1段目に比較的大きな石を並べ置き、その上にやや小さな石を積んでいく無袖型横穴式石室で、羽子板状を呈し、床一面に玉石を敷いている。県内では高萩市の赤浜2号墳にみられる。

横穴式石室は、一般的に県内では「6世紀前半頃の前方後円墳に現れ、筑波山より北辺の地域に広がる傾向を示している。……、むしろ限られた地域の中ではあるが、円墳を主体とする古墳群の中に主体的に現れる。6世紀終末から7世紀に入ると、虎塚古墳群にみられるように一部の地域に辛うじて残されるに過ぎない」¹⁾。県内において、円墳を主体とする古墳群の中で、横穴式石室を主体とするものには、那珂郡大宮町一輪山古墳群、常陸太田市橋山古墳群、真壁郡協和町寺山古墳群、つくば市平沢・山口古墳群等があげられる²⁾。

(2) 出土遺物

本墳から出土している副葬品は、直刀3口、刀子3点、鉄鏃約30点で、すべて横穴式石室内から出土している。直刀3口のうち大形の直刀1口(27)は、全長が約80cmあり、背関がなく、刃関が約2.5cm確認されたが、刃関の角度は錆が激しく確認できなかった。小形の直刀(29)は、全長が約36cmあり、背関が約0.9cm、刃関が約0.2cm確認されたが、刃関の角度は錆が激しく確認できなかった。これらの直刀や鉄鏃の形状からは、F3杵 敷氏の分類³⁾によると大形の直刀(27)は古墳時代後期(6世紀前半)、小形の直刀(29)は古墳時代後期(6世紀後半)に比定することができ、鉄鏃は、鏃身部が柳葉状を呈し、頸部が長く、関部が棘関を持つことから、関義則氏の分類⁴⁾によると、細根系の鏃で、古墳時代後期(6世紀後半)に比定することができる。

以上、埋葬施設の特徴及び出土遺物から、北屋敷遺跡から検出された第1号墳は、古墳時代後期(6世紀後半)に比定できるものと思われる。

注

(1)・(2) 阿久津 久・片平 雅俊「常陸の後期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館 1992年

- (3) 日杵 勲 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 1984年
「古墳時代鉄刀の多変量解析」『日本古代文化研究』第3号 1986年
- (4) 関 義則 「古墳時代後期鉄鏝の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 1986年

参考文献

- (1) 石野 博信 他 編『古墳時代の研究』雄山閣 1992年
- (2) 茨城県 「古墳時代」『茨城県資料』考古資料編 1974年
- (3) 常澄村 『常澄村史』通史編 1989年
- (4) 茨城県歴史館図録『特別展茨城の古瓦』1977年
- (5) 浅井 哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ）」『研究ノート 創刊号』茨城県教育財団 1992年
- (6) 水戸市大鋸町遺跡発掘調査会 『大鋸町遺跡』1988年
- (7) 水戸市葉王院東遺跡発掘調査会 『葉王院東遺跡』1991年
- (8) 茨城県教育財団 「砂川遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第16集』1981年
- (9) 茨城県教育財団 「松原・大塚新地遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第11集』1980年

附 章

高原遺跡出土鉄器・鉄滓の金属学的解析

岩手県立博物館 赤沼 英男

高原遺跡出土鉄器・鉄滓の金属学的解析について以下に報告する。

1. 分析資料

分析した資料は、25の鉄鎌、12の釘、鉄滓の合計3点である。資料の形状および試料採取位置を図1に示す。

2. 分析用試料の調整

鉄器の分析には、試料を保存処理する際に採取することができた鱗片を用いた。採取した鱗片のうち最大のものを組織観察に、他は化学分析に供した。鉄滓資料については、中心線にそって切断し、切断面のいっぼうの中央付近より試料を採取した。採取した試料は鉄器と同様に2分し、それぞれを組織観察と化学分析に供した。

3. 分析方法

組織観察用試料は鉄器・鉄滓とも樹脂に埋め込み、表面生成鱗層の垂直面をできるだけ浅く削り取った後、ダイヤモンドペーストを用いて仕上げ研磨を行った。研磨の工程では試料中の化学成分の溶出を避けるため、水を一切使用しない方法をとった。研磨した試料は金属顕微鏡によるミクロ観察に供し、また、鉄器に残存する非金属介在物および鉄滓組織のうち、代表的なものについてはEPMAによりその組成を決定した。

化学分析用試料は王水・ふっ化水素酸を使って完全に溶解した後、全鉄 (T.Fe)、銅 (Cu)、マンガン (Mn)、りん (P)、チタン (Ti)、カルシウム (Ca)、アルミニウム (Al)、マグネシウム (Mg)、バナジウム (V)、けい素 (Si) を誘導結合プラズマ発光分光分析法 (ICP-AES法) により定量した。

4. 分析結果

4-1 鉄器の化学組成

表1は鉄器から採取した試料片の化学組成である。T.Feは25の鉄鎌では65.50%、12の釘で

は59.34%と低く錆化が進んでいることを指摘できる。12の釘では鉄鉱石の指標元素であるP、砂鉄の指標元素であるTiがそれぞれ0.065、0.057%とやや高い値を示しているが、原料鉱石の判定には不十分である。25の鉄鎌についても鉄鉱石使用の指標元素であるCu、Mn、P、砂鉄使用の指標元素であるTiがいずれも低いレベルにあるため、化学組成でもって原料鉱石を判定することはできない。

4-2 鉄器から採取した試料片のマクロ組織と非金属介在物組成

図2-aは25の鉄鎌より採取した錆試料片のマクロ組織である。灰色部は黒錆、暗灰色部は赤錆、黒色部は亀裂及び欠落孔を表す。25の鉄鎌、12の釘いずれもほとんどが赤錆層によって構成されており、錆化が著しいことが組織観察からもわかる。

図3は25の鉄鎌に観察された非金属介在物の2次電子像と反射電子像、EPMAによる定性分析結果である。灰色粒状化合物(W)からはFe、暗灰色角状化合物(F)からはFe、Si、黒色領域(D)からはFe、Si、Al、Ca、K、Na、P、Tiが検出されており、それぞれウスタイト(FeO)、FeO-SiO₂系化合物(ファヤライト: 2FeO・SiO₂と推定される)、FeO-SiO₂-CaO-Al₂O₃-K₂O-Na₂O-P₂O₅-TiO₂系のガラス質けい酸塩と判定される。12の釘については非金属介在物を見いだすことができなかった。

4-3 鉄器地金の材質

化学組成、非金属介在物組成を総合すると、25の鉄鎌は鍛造鉄器であり、非金属介在物中にチタン化合物が観察されないことから、鋼の製造には鉄鉱石が使用されたものと判定される。12の釘については鍛造鉄器であることは明らかであるが、化学組成上の特徴は認められず、非金属介在物も見いだすことができなかったため、鋼の製造に使用された原料鉱石は不明である。

4-4 鉄滓のマクロおよびミクロ組織

図4-a₁は鉄滓のマクロ組織、図4-a₂は図4-a₁領域A₁部のミクロ組織である。内部に白色粒状化合物(W)、暗灰色柱状化合物(F)、黒色領域(D)が認められる。図5-aはNa10鉄滓の2次電子像と反射電子像、図5-bはEPMAによる定性分析結果であるが、この分析によって化合物(W)はウスタイト(FeO)、化合物(F)はFeO-SiO₂系化合物(ファヤライト: 2FeO・SiO₂と推定される)、黒色領域(D)はFeO-SiO₂-CaO-Al₂O₃-K₂O-Na₂O-P₂O₅系のガラス質けい酸塩であることがわかる。

4-5 鉄滓の化学組成

表2は鉄滓の化学組成である。T.Feは62.39%と高いレベルにある。マクロおよびマイクロ組織において観察されたウスタイト、 FeO-SiO_2 系化合物に起因するものと解釈される。 SiO_2 が12.36%とやや高いレベルにあるが、他についてはいずれも2%未満と低レベルにある。

5. 考察

前近代における鍛造鉄器制作のプロセスは、ア、原料鉱石から鉄分を抽出する、イ、抽出した鉄分を精製する、ウ、鉄器を製作する、という3つの段階に大別される。アは通常製鉄（もしくは製錬）と呼ばれているが、高原遺跡内において上述の操作を行ったとみられる遺構、遺物、すなわち製鉄炉と多量の鉄滓は検出されてはいない。従って、高原遺跡内において製鉄もしくは製錬が行われていた可能性はほとんどないといえる。

次にイについて検討したい。現在日本の研究者によって提案されている前近代の鋼製造法は、図6-1に示すように、原料鉱石を製鉄炉の中に入れ還元によって得られた鉄塊から鋼部分のみを抽出し鍛錬して鉄器をつくるという直接製鋼法と、原料鉱石を製錬してまず鉄塊を生産し、次に小型の炉の中に鉄塊を入れ熔融し、脱炭・精製して鋼を製造するという間接製鋼法である¹⁹⁻²⁰。直接製鋼法に基づいて解釈すると、鋼塊に含まれる不純物の除去と炭素含有量を調整する精錬鍛冶操作に従って排滓されたものとみることができ、この場合精錬鍛冶の素材となる鋼塊の流通が不可欠である。しかし、鋼塊の流通があったという客観的な事実がなく、直接製鋼法に基づく精錬鍛冶が行われていたものと断定することはできない。

それでは図6-2に示す間接製鋼法ではどうであろうか。この方法による鋼の製造には、一定量の鉄塊と脱炭材（脱炭材としては、砂鉄か鉱石粉の使用が考え出されている。）および木炭を加熱することによって、鉄塊の脱炭が進み鋼が製造されるという作業仮説が出されている。脱炭の初期には鉄塊、脱炭材、炉壁材に含有される低融点物質が熔融し、鉄浴表面に流動性の高いスラグを形成する。脱炭が進み鋼が生成するにつれて炉内は熔融状態から半熔融状態へと変わる。鉄浴表面に形成されるスラグ中の鉄濃度は、脱炭材から分離した鉄分、あるいは空気中の酸素によって鉄浴表面が再酸化されることにより生成するウスタイトのために増大する。ウスタイトはさらに炉壁材、もしくはスラグ中の SiO_2 と反応し、ファヤライトを析出させる。マイクロ組織がウスタイト、 FeO-SiO_2 系化合物、ガラス質けい酸塩からなる鉄滓は、脱炭が相当進んだ段階で鉄塊から分離された精錬滓とみなすことは一応可能であるが、遺構の状態が不明であるため断定はできない。

精製された鉄素材をもとに最終製品を製作するという鍛冶の工程では、鍛造薄片とウスタイト、ファヤライトを主体とする鉄滓が排出される。鉄滓はその組成から鍛冶滓と判定することも可能

である。

発掘者によると、12の釘は江戸時代であるが、他についてはその時代が不明とされている。従って、鉄滓、25の鎌も12の鉄釘と同時代のものであることが明確になれば、同遺跡では外部から供給された銑塊を脱炭、精製し鋼を製造する精錬と精製した鋼をもとに鉄器を製作する操作、もしくは外部から供給された鋼塊をもとに鉄器を製作する操作が行われていたものと判断される。この点については今後の発掘調査の進展と遺構および遺物の解析によって、明らかにしていきたい。

註

- 1) 大澤正巳：「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』1983年
- 2) 佐々木稔：「ふたたび古代の炒鋼法について」『たたら研究 27』1985年
- 3) 赤沼英男：「古代から中世における北の鉄の変遷」『北の鉄文化』岩手県立博物館 1990年

表1 鉄器の化学組成(%)

(高原)

資料名	T.Fe	Cu	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V
25 鉄鎌	65.50	0.005	0.006	0.017	0.016	0.379	0.574	0.031	0.028	0.001
12 釘	59.34	0.002	0.010	0.065	0.057	1.610	0.065	0.832	0.062	0.002

表2 鉄滓の化学組成(%)

資料名	T.Fe	Cu	Mn	P	Ti	SiO ₂	CaO	Al	Mg	V
鉄滓	62.39	0.004	0.047	0.062	0.095	12.40	1.600	0.847	0.056	0.003

北屋敷遺跡出土鉄器・鉄滓の金属学的解析

岩手県立博物館 赤沼 英男

北屋敷遺跡出土鉄器・鉄滓の金属学的解析について以下に報告する。

1. 分析資料

分析した資料は、27・28・29の直刀、33の鉄鑑、および鉄滓の合計5点である。資料の形状および資料採取位置を図1に示す。

2. 分析用資料の調整

鉄器の分析には、資料を保存処理する際に採取することができた錆片を用いた。採取した錆片のうち最大のものを組織観察に、他は化学分析に供した。鉄滓資料については中心線にそって切断し、切断面のいっぽうの中央付近より試料を採取した。採取した試料は鉄器と同様に2分し、それぞれを組織観察と化学分析に供した。

3. 分析方法

組織観察用試料は鉄器・鉄滓とも樹脂に埋め込み、表面生成錆層の垂直面をできるだけ浅く削り取った後、ダイヤモンドペーストを用いて仕上げ研磨を行った。研磨の工程では試料中の化学成分の溶出を避けるため、水を一切使用しない方法をとった。研磨した試料は金属顕微鏡によるミクロ観察に供し、また、鉄器に残存する非金属介在物および鉄滓組織のうち、代表的なものについてはEPMAによりその組成を決定した。

化学分析用試料は王水・ふっ化水素酸を使って完全に溶解した後、全鉄 (T.Fe)、銅 (Cu)、マンガン (Mn)、りん (P)、チタン (Ti)、カルシウム (Ca)、アルミニウム (Al)、マグネシウム (Mg)、バナジウム (V)、けい素 (Si) を誘導結合プラズマ発光分光分析法 (ICP-AES法) により定量した。

4. 分析結果

4-1 鉄器の化学組成

表1は鉄器から採取した試料片の化学組成である。27の直刀の刃・棟部にはPが0.240、0.254%、28の直刀の刃・棟部にはCuが0.099、0.915%、29の直刀の刃部にはCuが0.784、Pが0.249%、棟部にはCuが0.195%含有されている。上述の3点の直刀のT.Feは52～64%の

低いレベルにあるが、いずれにも銅製の金具の使用はなく、銅製の遺物が供伴して出上ったという事実も認められないことから、28・29の直刀から検出されたCu分はもとの健全な地金中に含有されていたとみなすことができる。27の直刀の刃および棟部から検出されたP分も錆化が同程度である他の2振りの直刀のP含有量と比較することによって、埋蔵環境からの汚染の影響によるものではないと判断される。33の鉄鏃からもCuが0.064%と比較的高い値で検出されている。

4-2 鉄器から採取した試料片のマクロ組織と非金属介在物組成

図2は各直刀から採取した錆試料片のマクロ組織である。灰色部は黒錆、暗灰色部は赤錆、黒色部は亀裂および欠落孔を表す。3振りの直刀から採取した試料片はいずれも黒錆層と赤錆層からなり、錆化が進んでいることがわかる。

図3-aは27の直刀の刃部、図2-a₁領域A₁部のマイクロ組織であるが、白色を呈した細線状の結晶とその欠落孔が観察される。この結晶はもとの健全な鋼におけるパーライト相中のフェライトが錆化によって失われ、セメントタイトのみが残ったものと推定される⁹⁾。セメントタイトおよびその欠落孔が占める領域は緻密であることから、もとの健全な地金は炭素含有量0.5%の比較的硬い鋼とみなすことができる。図3-bから明らかのように29の直刀刃部にもセメントタイトの欠落孔が観察され、この組織によってもとの健全な地金は炭素含有量0.3~0.4%の軟鋼と判定される。28の直刀、33の鉄鏃については錆化がすすんでおり、もとの健全な地金の状態を推測することができなかった。

4-3 27の直刀の刃部に観察される非金属介在物の組成

図4は27の直刀の刃部に観察される非金属介在物の2次電子像と反射電子像、EPMAによる定性分析結果である。非金属介在物はFeO-SiO₂-CaO-Al₂O₃-K₂O-MgO-P₂O₅系のガラス質けい酸塩と判定される。他の2振りの直刀については、非金属介在物を見いだすことができなかった。

4-4 鉄器地金の材質

化学組成、非金属介在物組成によると、27の直刀の刃部は含りの鉄鉱石を原料鉱石として製造された比較的硬い鋼を素材としていることが判明した。棟部については非金属介在物が観察されないため砂鉄の使用については不明であるが、鋼の製造に含りの鉄鉱石が使用されたことは明らかである。28・29の直刀の刃・棟部は、含銅の鉄鉱石を原料鉱石として製造された鋼によって製作されている。ただし、組織中に非金属介在物を見いだすことができなかったため、鋼

の製造過程での砂鉄の使用については言及できない。また、29の直刀刃部には軟銅が配されている。なお、33の鉄鑞の製作に使用された地金の原料鉱石も含銅の鉄鉱石の可能性はあるが、含有量が不十分であり積極的に断定することはできない。

4-5 鉄滓のマクロおよびマイクロ組織

図5-a₁は鉄滓のマクロ組織、図5-a₂領域A₁部のマイクロ組織である。内部に灰色を呈した化合物(H)と黒色領域(D)が認められる。図6-aは二次電子像と反射電子像、EPMAによる定性分析結果であるが、化合物(H)からはFe、Alが強く検出されておりFeO-Al₂O₃系の化合物、黒色領域(D)はFeO-SiO₂-CaO-Al₂O₃-K₂O-MgO-TiO₂系のガラス質けい酸塩と判定される。

4-5 鉄滓の化学組成

表2は鉄滓の化学組成である。T.Feが6.25%と低い反面、SiO₂は84.80%と高いレベルにある。鉄滓はその多くがガラス質けい酸塩からなることがわかる。

5. 考察

前近代における鍛造鉄器製作のプロセスは、ア、原料鉱石から鉄分を抽出する、イ、抽出した鉄分を精製する、ウ、鉄器を製作する、という3つの段階に大別される。アは通常製鉄(もしくは製錬)と呼ばれているが、北屋敷遺跡内において上述の操作を行ったとみられる遺構、遺物、すなわち製鉄炉と多量の鉄滓は検出されていない。従って、製鉄が行われていた可能性はほとんどないといえる。

次にイについて検討したい。現在日本の研究者によって提案されている前近代の鋼製造法は、図7-1に示すように、原料鉱石を製鉄炉の中に入れ還元によって得られた鉄塊から鋼部分のみを抽出し鍛錬して鉄器をつくるという直接製鋼法と、原料鉱石を製錬してまず銑鉄塊を生産し、次に小型の炉の中に鉄塊を入れ熔融し、脱炭・精製して鋼を製造するという間接製鋼法である²⁻⁴⁾。

直接製鋼法に基づいて解釈すると、鋼塊に含まれる不純物の除去と炭素含有量を調整する製錬鍛冶段階であるが、この場合精錬鍛冶の素材となる鋼塊の流通が不可欠である。しかし、鋼塊の流通があったという客観的な事実はなく、直接製鋼法に基づく精錬鍛冶が行われていたものと断定することはできない。

それでは図7-2に示す間接製鋼法ではどうであろうか。この方法による鋼の製造には、一定量の銑鉄塊と脱炭材(脱炭材としては、砂鉄か鉱石粉の使用が考え出されている。)および木炭

を加熱することによって、鉄鉄塊の脱炭が進み鋼が製造されるという作業仮説が出されている。脱炭の初期には鉄鉄塊、脱炭材、炉壁材に含有される低融点物質が溶融し、鉄浴表面に流動性の高いスラグを形成する。脱炭が進み鋼が生成するにつれて炉内は溶融状態から半溶融状態へと変わる。鉄浴表面に形成されるスラグ中の鉄濃度は、脱炭材から分離した鉄分、あるいは空気中の酸素によって鉄浴表面が再酸化されることにより生成するウスタイトのため増大する。ウスタイトはさらに炉壁材、もしくはスラグ中の SiO_2 と反応し、フェヤライトを析出させる。

鉄滓の T、Fe 含有量は低く精錬の比較的早い段階で排出された鉄滓である可能性が高い。また、 $\text{FeO}-\text{Al}_2\text{O}_3$ 系の化合物が検出されていることから炉壁付近で生成したスラグであり、炉壁材にはハロイサイト粘土が用いられたものと考えられる⁹⁾。なお、鉄滓中にチタン化合物が検出されないことから、脱炭材として砂鉄が使用された可能性は低い。

上述のように北塚敷遺跡では直接製鋼法での精錬鍛冶か間接製鋼法での精錬のいずれかが行われていたと解釈されるが、そのいずれかに判定することは現段階では困難である。今後の発掘調査の進展によって鉄鉄塊および鋼塊が検出され、その組成が判明すればこの点を明らかにすることができるであろう。また、出上した3振りの直刀と鉄鏝の P または Cu 含有量は高いレベルにある反面、鉄滓中の Cu および P は低レベルにあることから、これら4点の鉄器が遺跡内で製作されたとみなすことはできず、製品としてもたらされた可能性が高い。

註

- 1) 日吉製鉄史同好会『稲荷山鉄剣の六片の錆』『鉄の文化史』東洋経済新聞社 1984年
- 2) 大澤正巳：「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』1983年
- 3) 佐々木稔：「ふたたび古代の炒鋼法について」『たたら研究 27』1985年
- 4) 赤沼英男：「古代から中世における北の鉄の変遷」『北の鉄文化』岩手県立博物館 1990年
- 5) 東京大学名誉教授渡邊秀雄および元コロイドリサーチ取締役佐々木稔氏のご教授による。

表1 鉄器の化学組成^(%)

(北屋敷)

資料名	T.Fe	Cu	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	
27直刀	刃	59.06	0.041	0.006	0.240	0.004	0.623	0.034	0.137	0.075	tr
	棟	52.94	0.009	0.006	0.254	0.047	3.160	0.130	1.560	0.056	0.003
28直刀	刃	62.16	0.099	0.003	0.009	0.001	0.355	0.019	0.013	0.059	0.002
	再分析	60.67	0.003	0.006	0.018	0.014	nd	nd	nd	nd	nd
	棟	63.47	0.195	0.006	0.088	0.002	0.453	0.034	0.013	0.121	0.002
29直刀	刃	61.81	0.784	0.005	0.249	0.002	0.796	0.064	0.070	0.045	0.001
	棟	64.77	0.195	0.003	0.031	0.004	0.340	0.024	0.017	0.020	0.002
	中身	58.28	1.240	0.004	0.070	0.008	0.586	0.022	0.123	0.017	0.001
33鉄鑑		64.93	0.064	0.006	0.021	0.001	0.345	0.026	0.008	0.025	0.001

注) ndは検出されずを表す。

表2 鉄滓の化学組成^(%)

資料名	T.Fe	Cu	Mn	P	Ti	SiO ₂	CaO	Al	Mg	V
鉄滓	6.25	nd	0.135	0.044	0.245	84.80	5.390	5.830	1.160	0.013

注) ndは検出されずを表す。

結 語

一般国道6号東水戸道路改良工事地内に所在する中ノ割遺跡他6遺跡の発掘調査は、平成2年度と平成3年度に実施した。調査の結果、中ノ割遺跡、小山遺跡、諏訪前遺跡、高原古墳群、沢幡遺跡、高原遺跡、北屋敷遺跡のそれぞれの遺跡から、縄文時代から古墳時代、奈良・平安時代、江戸時代にわたる遺構、遺物を検出し、多くの貴重な資料を得ることができた。

中ノ割遺跡からは、縄文時代後期の土坑、縄文時代早期から縄文時代後期、平安時代の遺物が出土し、人々が断続的に生活していたことがうかがわれる。小山遺跡からは、縄文時代中期の竪穴住居跡が1軒検出されたが、この住居跡が調査区外へかかることから、集落は当遺跡よりも南側の台地上に延びているものと思われる。

北屋敷遺跡からは、古墳時代の竪穴住居跡や円墳が検出されたが、住居跡が調査区外へかかることから、集落は当遺跡よりも南の台地上に延びているものと思われる。

諏訪前遺跡、沢幡遺跡、高原遺跡、北屋敷遺跡からは、奈良・平安時代の竪穴住居跡が検出され、特に竪穴住居跡や溝から瓦片が出土していることから、奈良・平安時代には常澄地区に役所又は寺院などが存在したことも考えられる。

高原遺跡、北屋敷遺跡からは、江戸時代の墓塚が検出され、江戸時代には墓域になっていたものと考えられる。

中ノ割遺跡他6遺跡は、各々その性格を異にし、調査範囲が道路幅という制約はあっても、常澄地区に残された先人たちの生活の一端をうかがい知ることができた。

最後に、本報告書が、今後、当地域の歴史を解明するうえで、ささやかな一助となれば幸いである。

なお、本報告書をまとめるにあたり、水戸市教育委員会、旧常澄村教育委員会をはじめ、関係機関並びに関係各位から御指導、御協力を賜ったことに対し、文末ながら深く謝意の意を表する次第である。

写 真 图 版

中ノ割遺跡	小山遺跡
諏訪前遺跡	高原古墳群
沢幡遺跡	高原遺跡
北屋敷遺跡	



調査前全景



遺構確認状況



調査終了全景

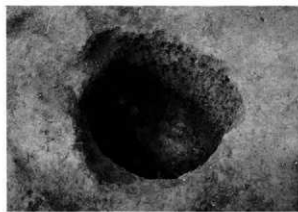
PL 2



第12号土坑



第27号土坑

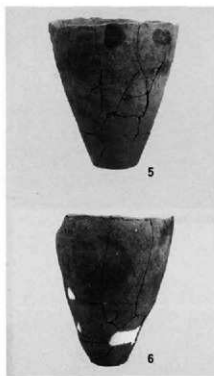


第27号土坑遺物出土状況

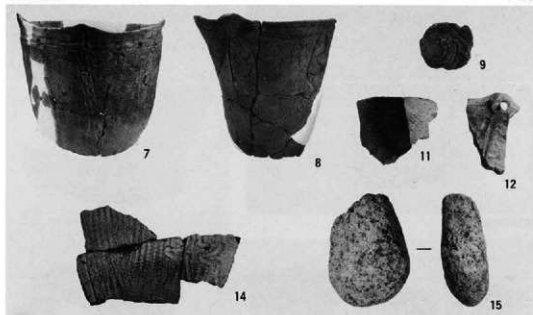
中ノ割遺跡



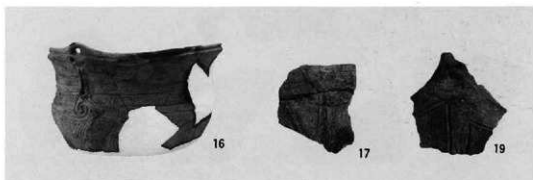
第12号土坑出土遺物



第27号土坑出土遺物



第27号土坑出土遺物



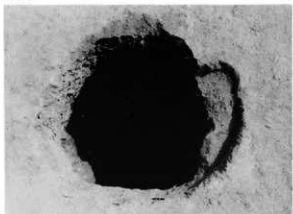
第29号土坑



第29号土坑出土遺物

PL 4

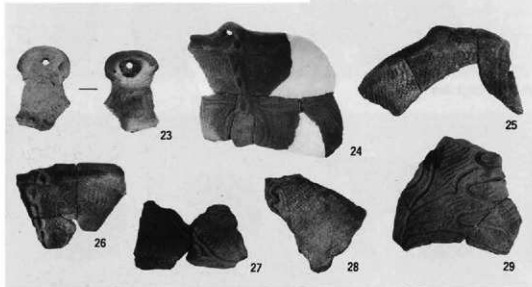
中ノ割遺跡



第38号土坑



22



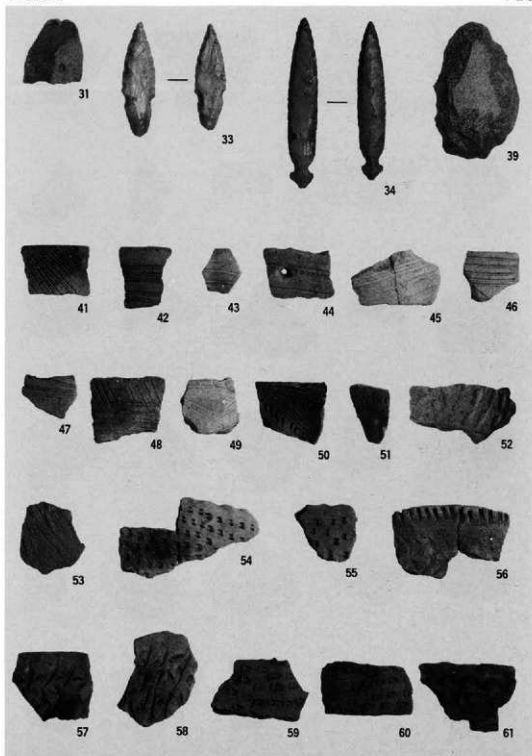
第38号土坑出土遺物

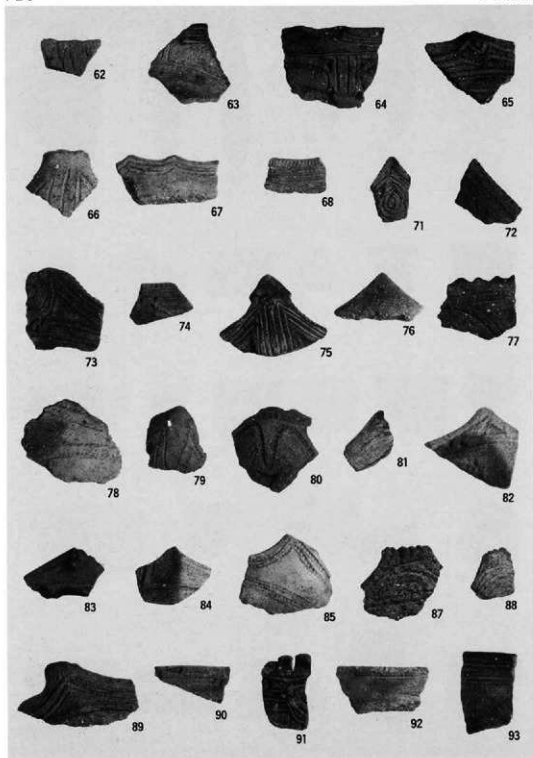


第39号土坑遺物出土状況

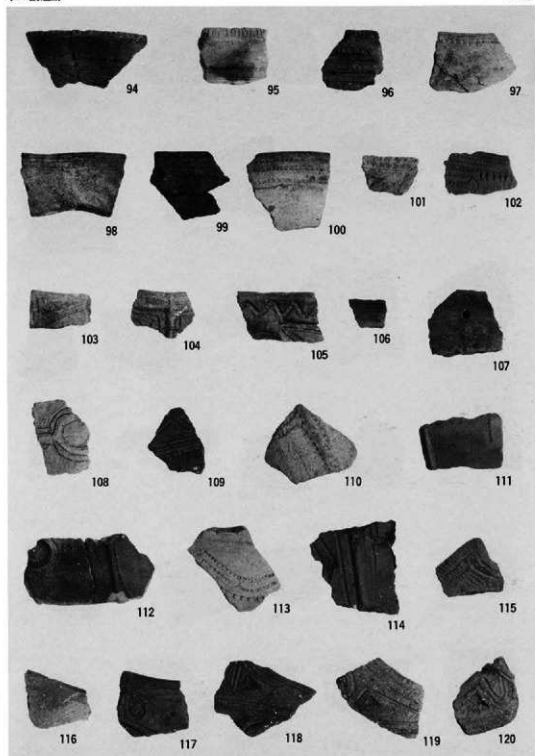


第39号土坑出土遺物

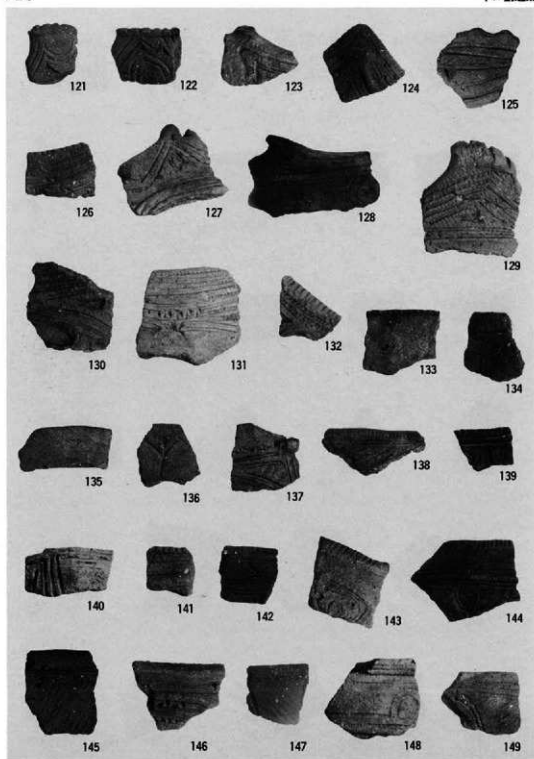




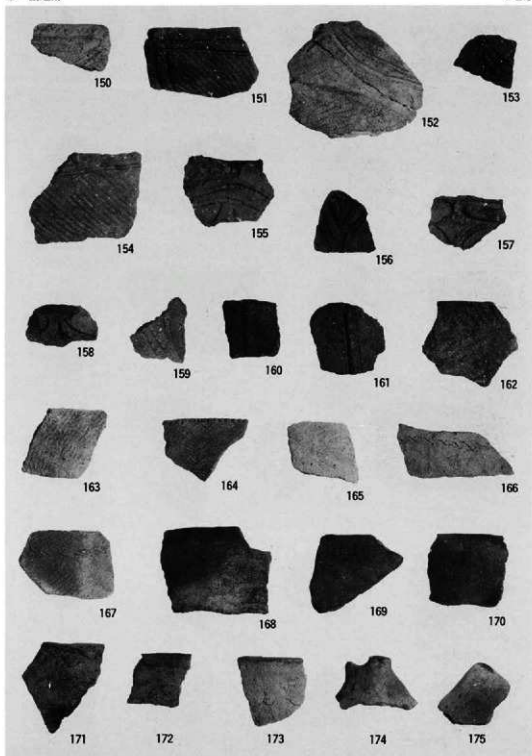
遺構外出土遺物



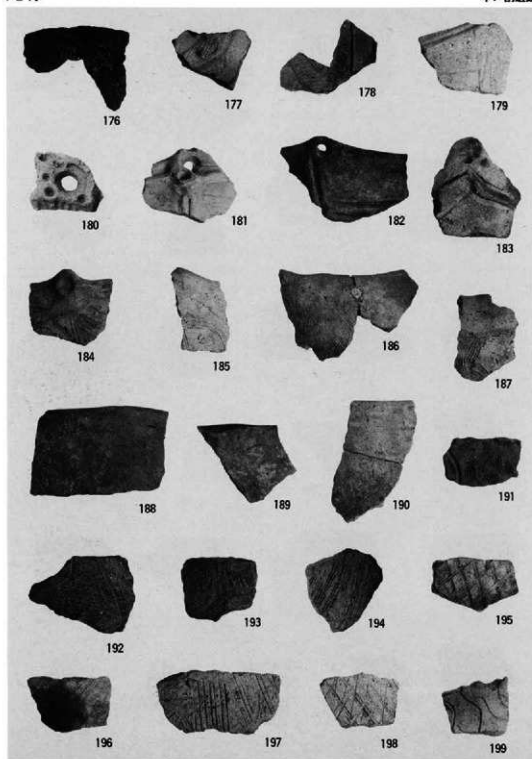
遺構外出土遺物



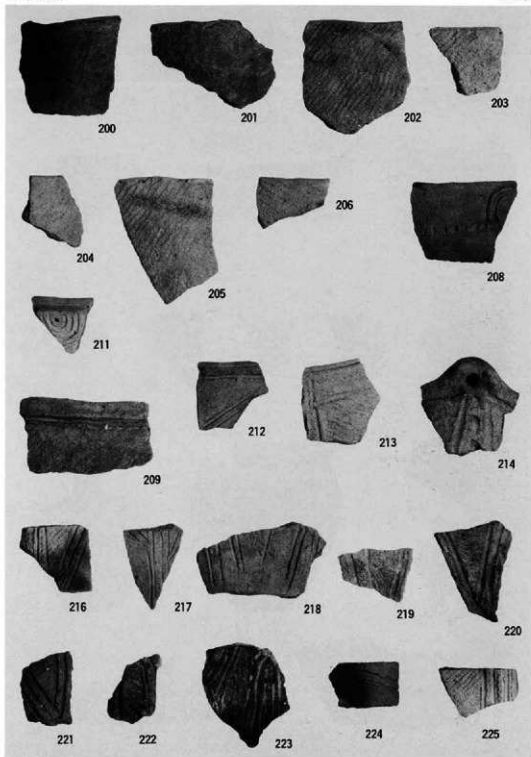
遺構外出土遺物

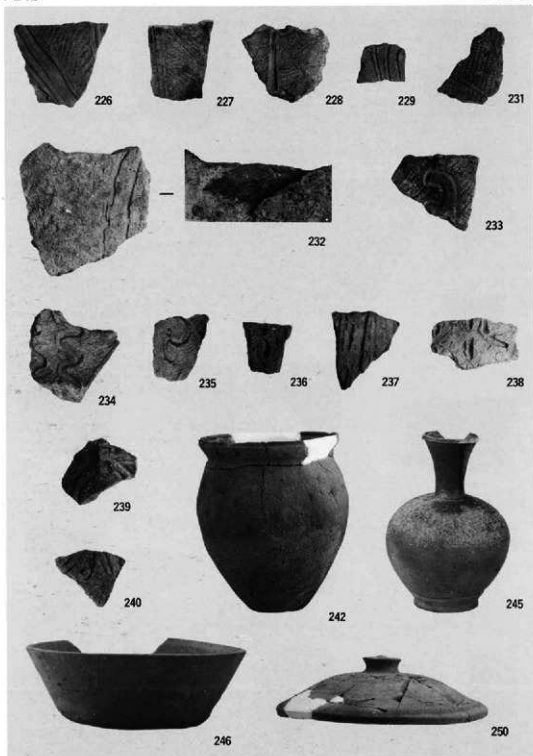


遺構外出土遺物



遺構外出土遺物





遺構外出土遺物



調査前全景



遺構確認状況



調査終了全景



第1号住居跡



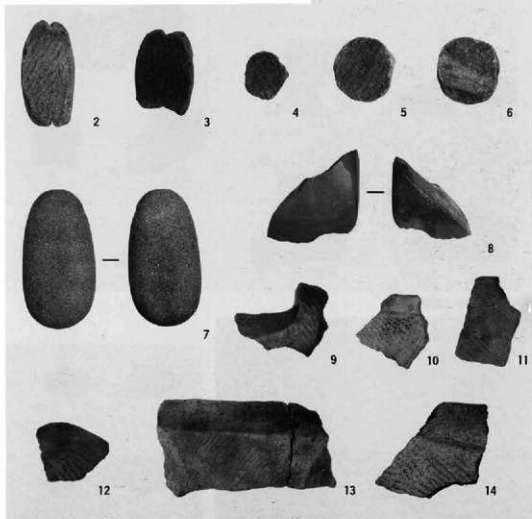
第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡炉



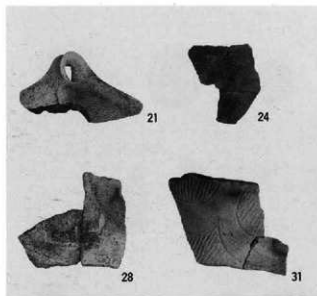
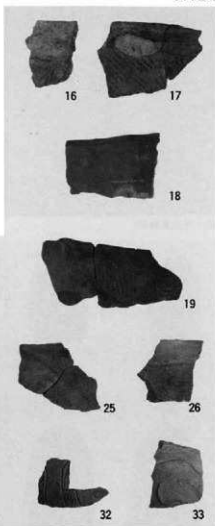
第1号住居跡炉



第1号住居跡出土遺物



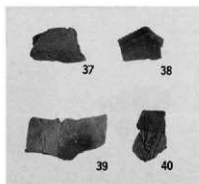
第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡出土遺物



第9号土坑



遺構外出土遺物



調査前全景



調査終了全景



遺構確認状況



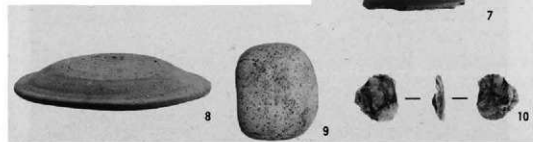
第1号住居跡



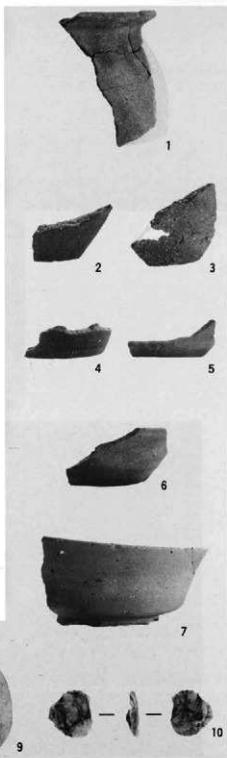
第1号住居跡竪



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡出土遺物

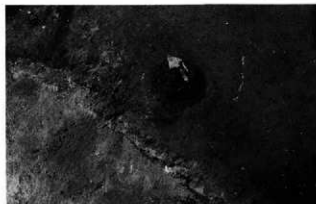




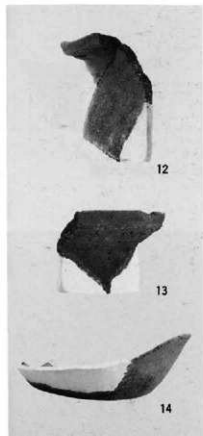
第2・3号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



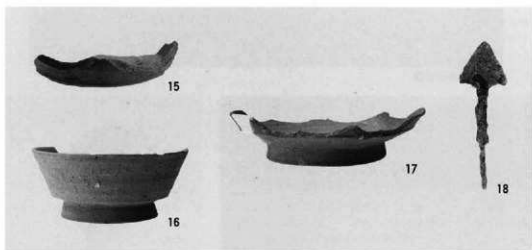
第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡出土遺物



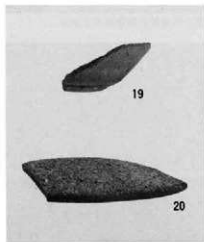
第2号住居跡



第2号住居跡出土遺物



第3号住居跡



第3号住居跡出土遺物

探訪前遺跡



第4号住居跡

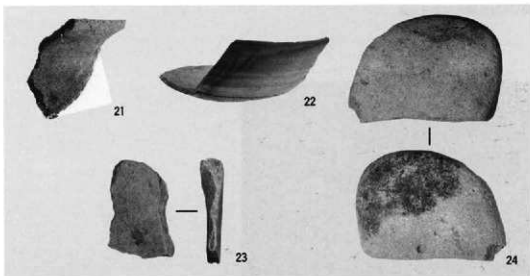
PL 21



第4号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡竈

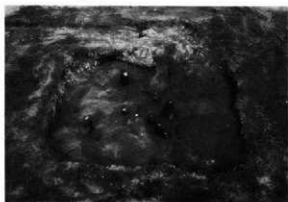


第4号住居跡出土遺物

PL 22



第5号住居跡

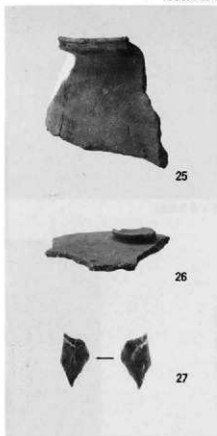


第5号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡竈

諏訪前遺跡



第5号住居跡出土遺物



第1号壑穴遺構



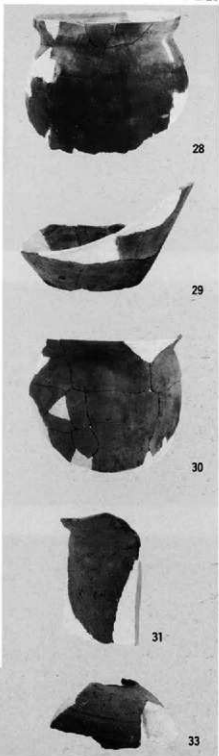
第1号壑穴遺構遺物出土状況



第2号壑穴遺構



第1号壑穴遺構出土遺物



28

29

30

31

33

32



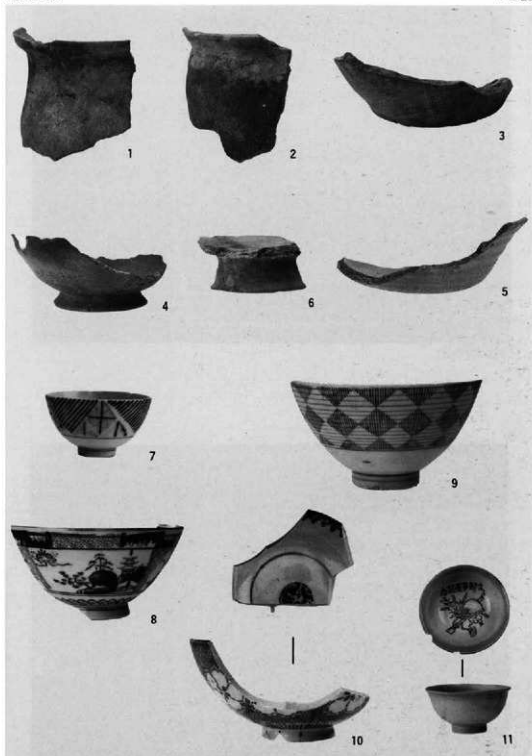
調査前全景



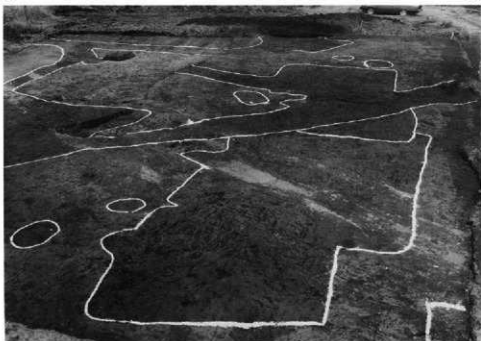
調査終了全景



防空壕跡



遺構外出土遺物



遺構確認状況



調査終了全景

沢庵遺跡



第1号住居跡

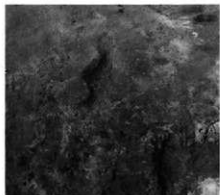
PL 27



第1号住居跡出土遺物



第2号住居跡



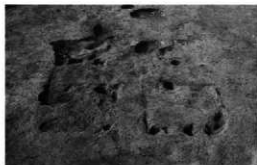
第2号住居跡



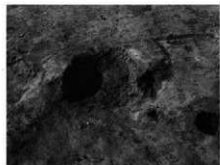
第2号住居跡出土遺物



第3号住居跡出土遺物



第3号住居跡



第3号住居跡



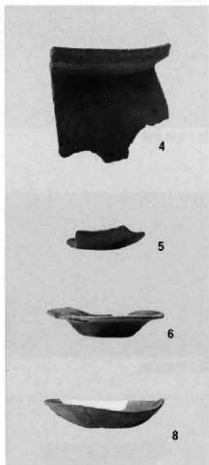
第4号住居跡遺物出土状況



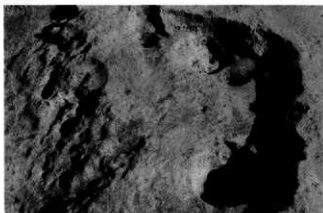
第4号住居跡



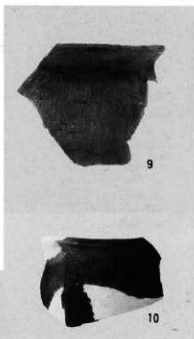
第4号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡出土遺物



第6号住居跡



第6号住居跡出土遺物



第7号住居跡



第7号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡竈



13



16



14



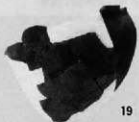
15



17



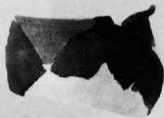
18



19



20



21



22



23



24

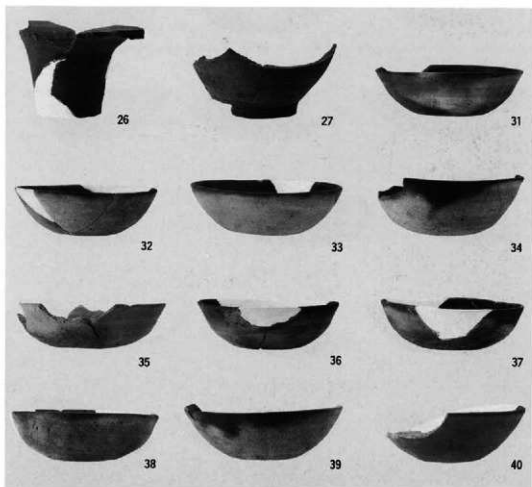


25

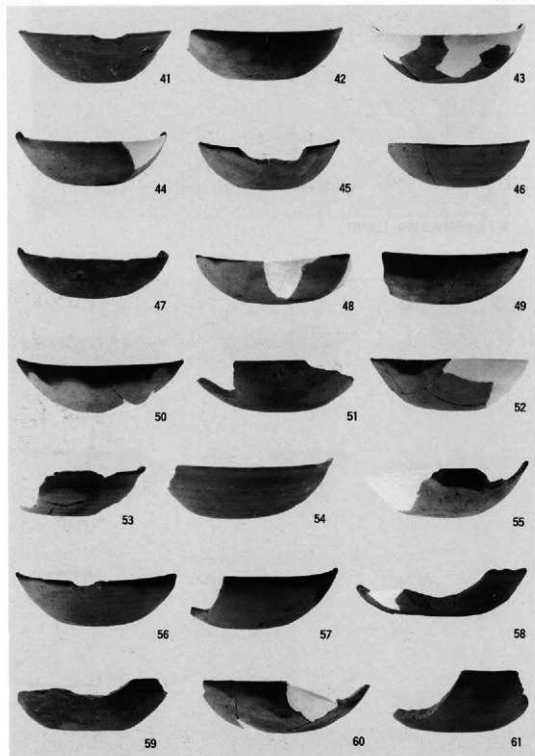
第7号住居跡出土遺物



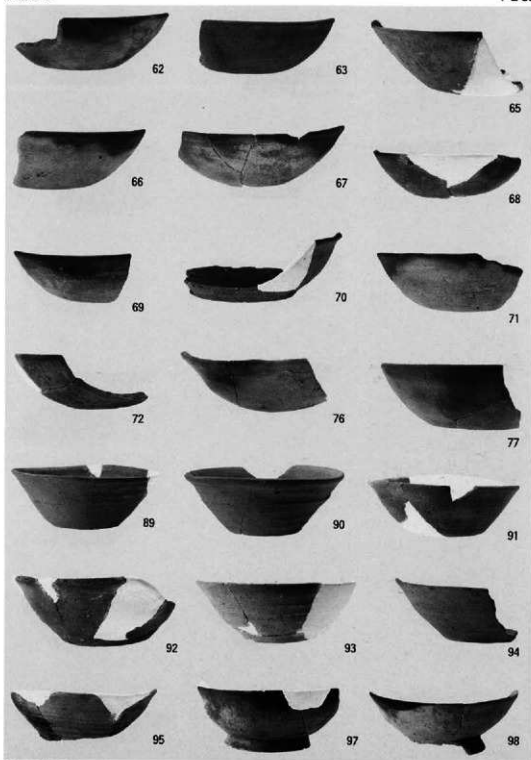
第7号住居跡出土遺物（土師器）



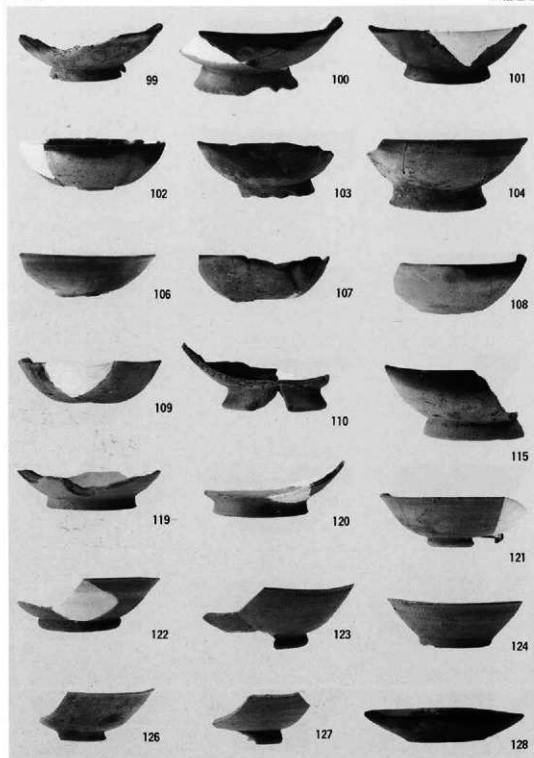
第7号住居跡出土遺物



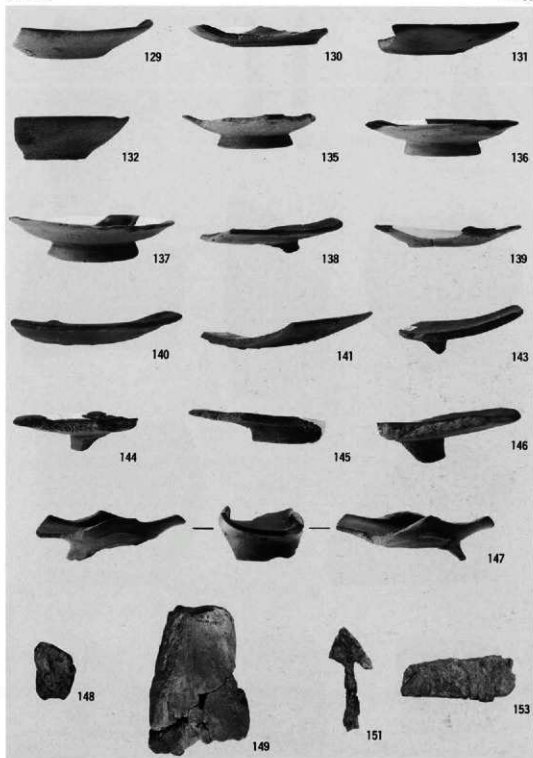
第7号住居跡出土遺物



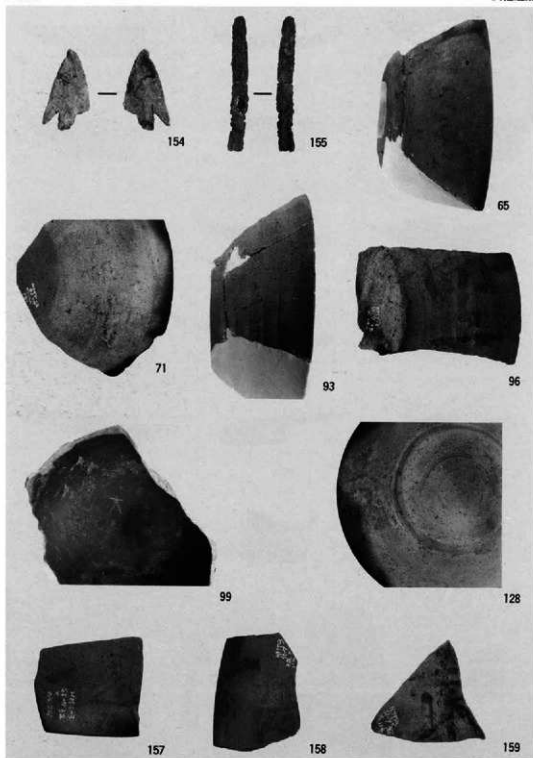
第7号住居跡出土遺物



第7号住居跡出土遺物



第7号住居跡出土遺物



第7号住居跡出土遺物



第8号住居跡



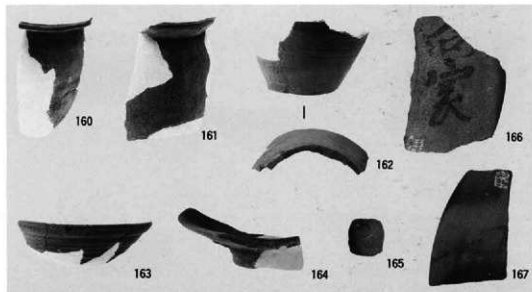
第8号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡電



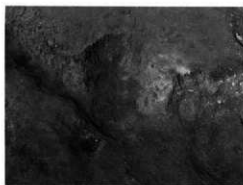
第8号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡出土遺物



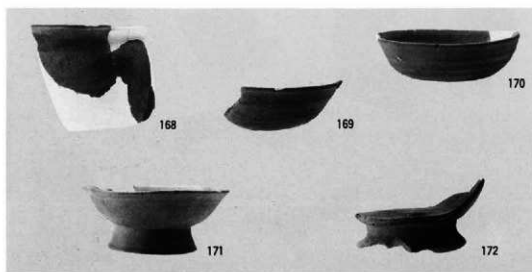
第9号住居跡



第9号住居跡竈



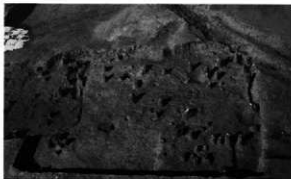
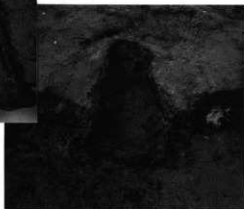
第9号住居跡竈遺物出土状況



第9号住居跡出土遺物

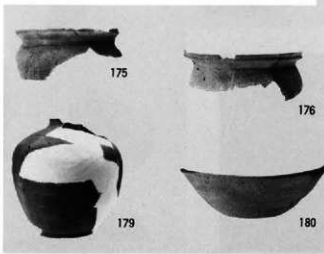
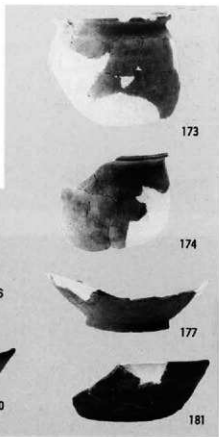


第10号住居跡

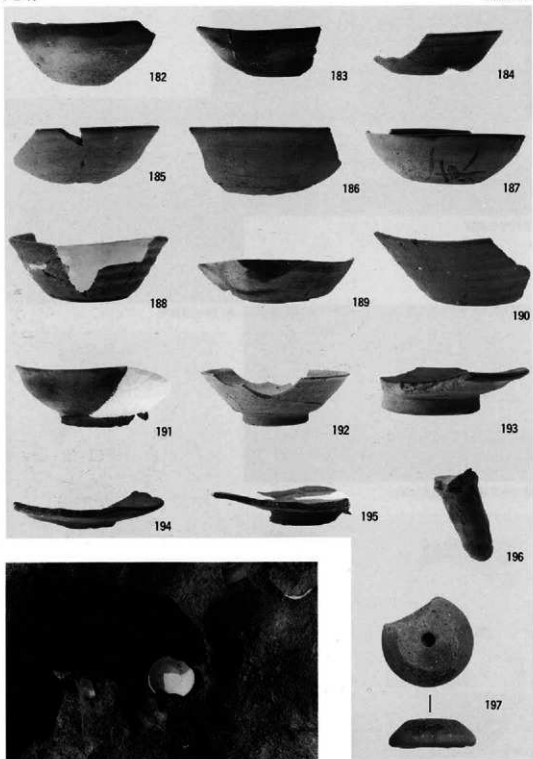


第10号住居跡遺物出土状況

第10号住居跡竈

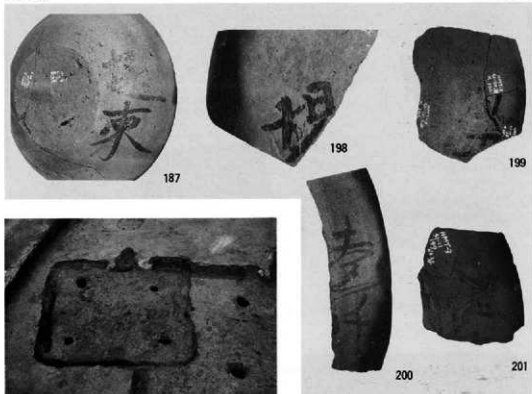


第10号住居跡出土遺物



第10号住居跡遺物出土状況

第10号住居跡出土遺物



第11号住居跡

第10号住居跡出土遺物

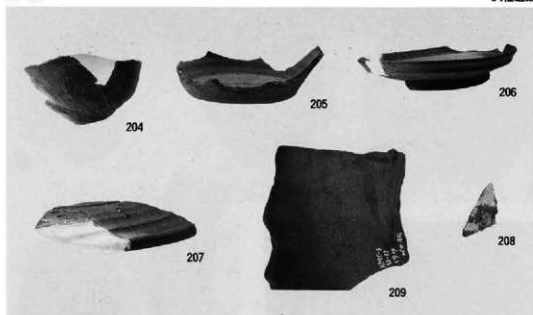


第11号住居跡竈

第11号住居跡竈
遺物出土状況



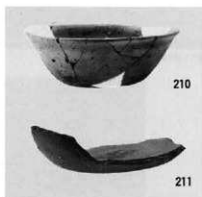
第11号住居跡出土遺物



第11号住居跡出土遺物



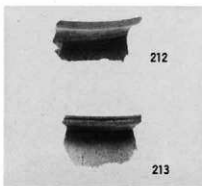
第12号住居跡



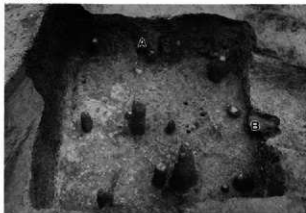
第12号住居跡出土遺物



第13号住居跡



第13号住居跡出土遺物



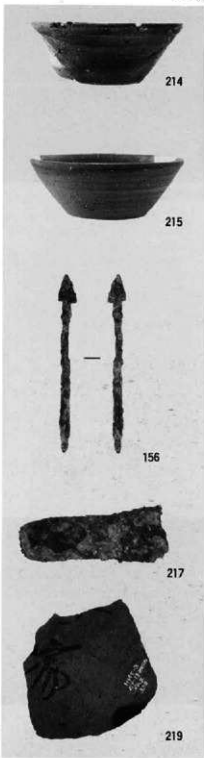
第13号住居跡遺物出土状況



第13号住居跡遺A



第13号住居跡遺B



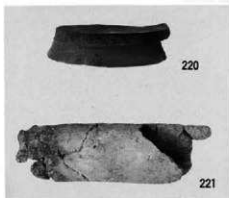
第13号住居跡出土遺物
(156は第7号住居跡出土)

PL 44

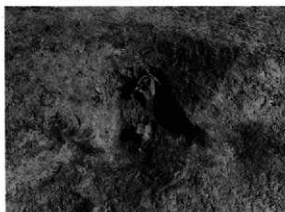


第14号住居跡竈

沢幡遺跡



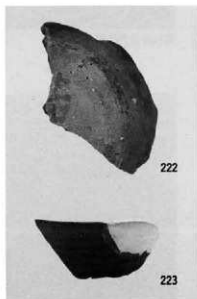
第14号住居跡出土遺物



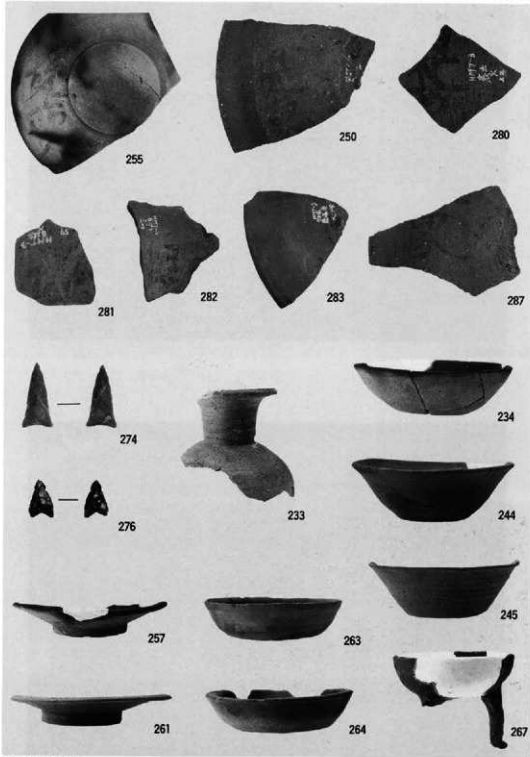
第14号住居跡竈遺物出土状況



第16号土坑



第16号土坑出土遺物



遺構外出土遺物



調査前全景



調査終了全景



第2号住居跡電



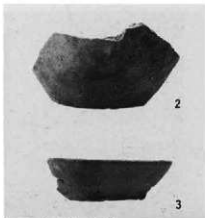
第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡出土遺物



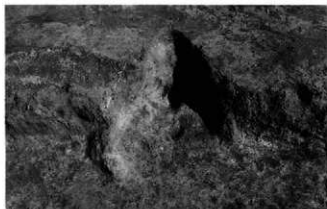
第3号住居跡



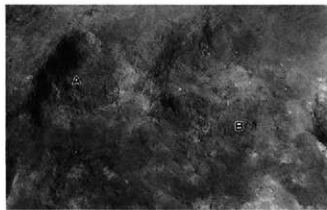
第3号住居跡出土遺物



第4号住居跡遺物出土状況



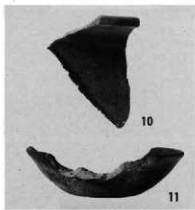
第4号住居跡電



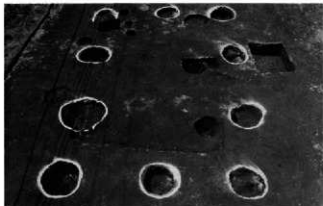
第5号住居跡電



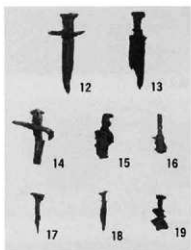
第4号住居跡出土遺物



第5号住居跡出土遺物



第1号掘立柱建物跡



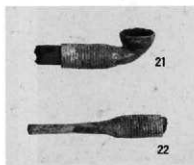
第1号土坑出土遺物



第1号土坑人骨出土状況



第9号土坑人骨出土状況



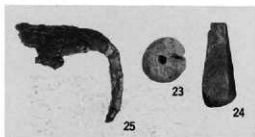
第9号土坑出土遺物



第1号溝



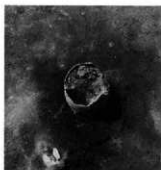
第2号溝



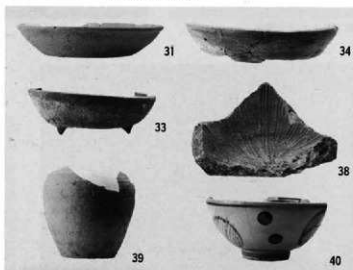
第1号溝出土遺物



第2号溝出土遺物



遺構外遺物出土状況



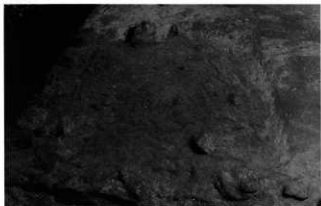
遺構外出土遺物



遺構確認状況



調査終了全景



第1号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況



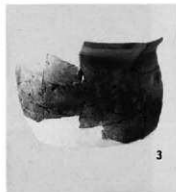
第1号住居跡壘



第1号住居跡出土遺物



第2号住居跡



第2号住居跡出土遺物



第2号住居跡電



第2号住居跡遺物出土状況



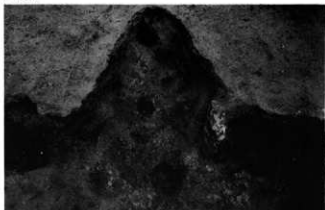
第2号住居跡出土遺物



第3号住居跡



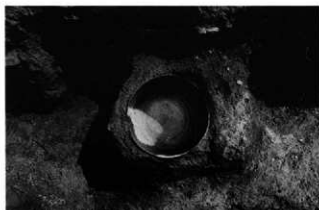
第3号住居跡出土遺物



第3号住居跡電



第3号住居跡電遺物出土状況



第3号住居跡遺物出土状況



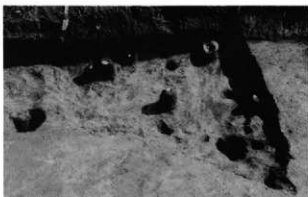
第3号住居跡出土遺物



第6号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡出土遺物



第8号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡出土遺物



第8号住居跡遺物出土状況



第9号住居跡遺物出土状況



第9号住居跡



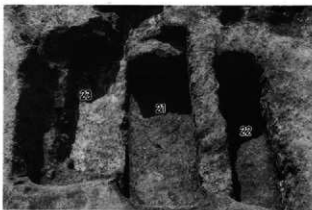
第9号住居跡出土遺物



第22号土坑出土遺物



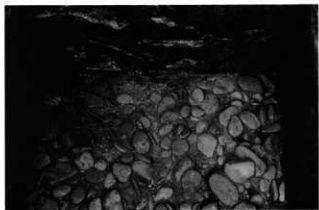
第22号土坑人骨・遺物出土状況



第21・22・23号土坑



第1号墳（東から）



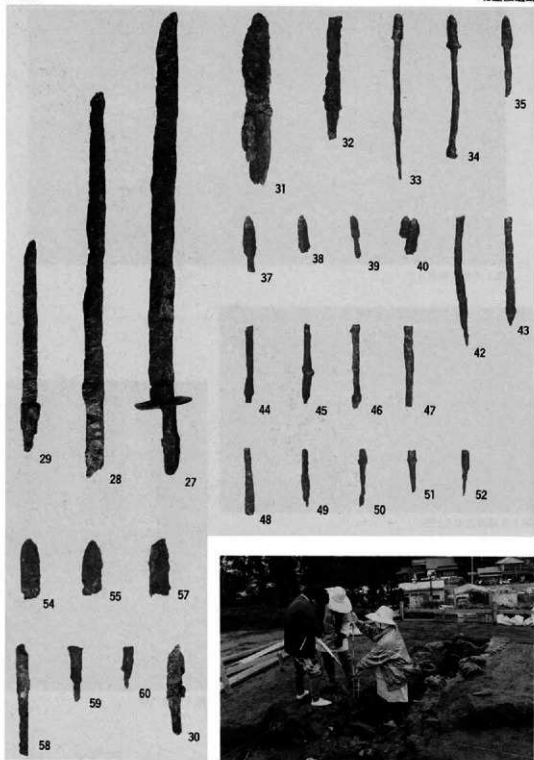
第1号墳遺物出土状況



第1号墳遺物出土状況



第1号墳（南から）

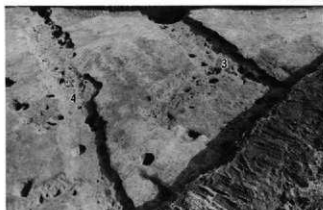
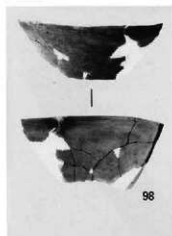


第1号墳出土遺物

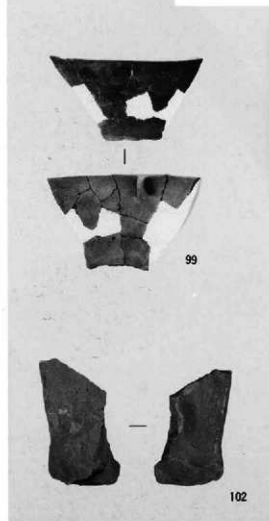
作業風景



第1号墳出土遺物X線



第3・4号溝



第3号溝遺物出土状況

第3号溝出土遺物

101

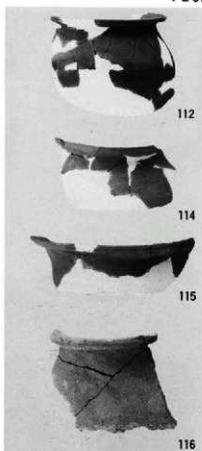
102



第11号溝 (東から)



第11号溝遺物出土状況 (東から)

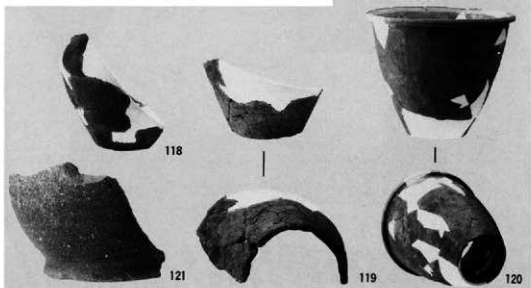


112

114

115

116



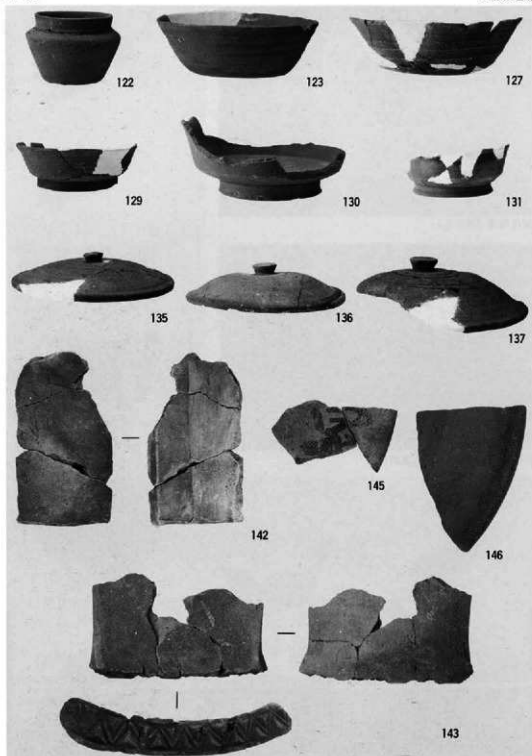
118

121

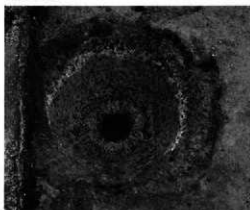
119

120

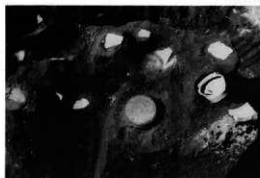
第11号溝出土遺物



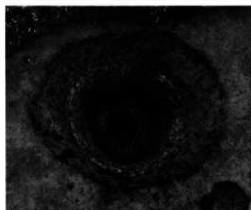
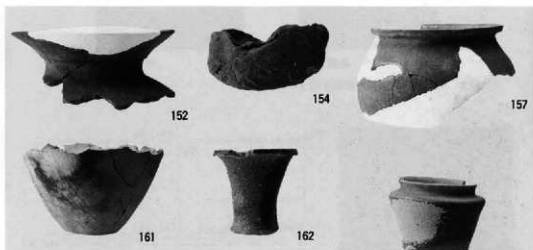
第11号溝出土遺物



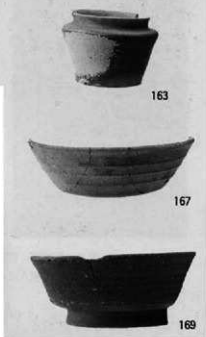
第1号井戸



第1号井戸遺物出土状況



第2号井戸



第1号井戸出土遺物

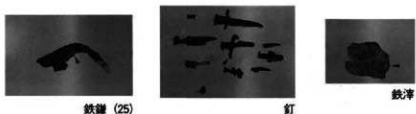


図1 分析資料の外観

矢印は試料採取位置を表す

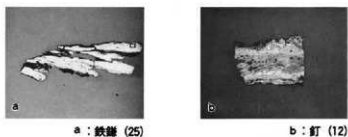


図2 鉄器から採取した試料片のマクロ組織

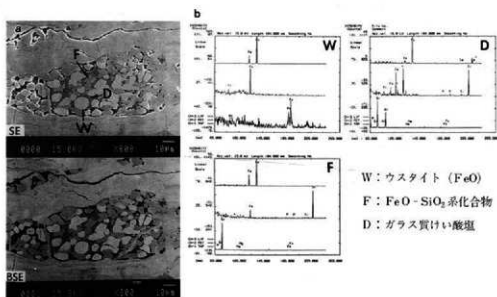
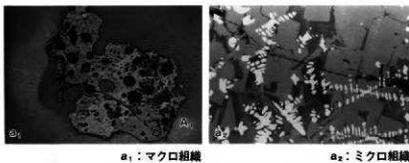


図3 鉄鏃25に観察される非金属介在物の2次電子像と反射電子像、EPMAによる定性分析



a₁: マクロ組織 a₂: ミクロ組織
 図4 鉄滓のマクロおよびミクロ組織

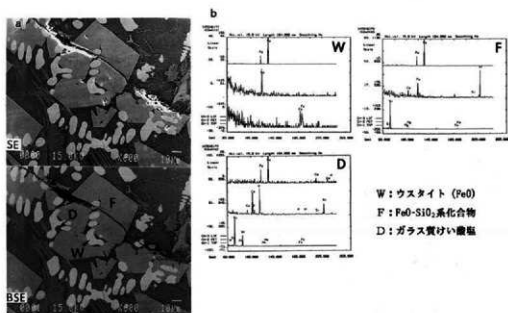


図5 鉄滓の2次電子像と反射電子像, EPMAによる定性分析



図6 推定される鋼製造法

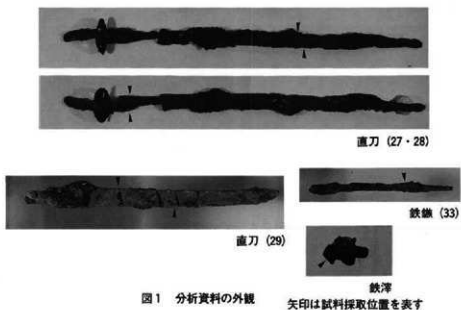
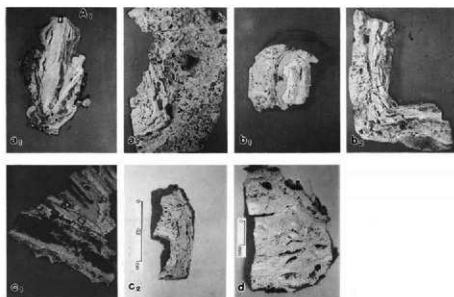
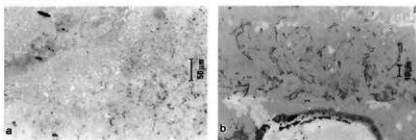


図1 分析資料の外観



a₁・a₂:直刀(27) 刃・棟部 b₁・b₂:直刀(28) 刃・棟部
 c₁・c₂:直刀(29) d:鉄鏃(33)

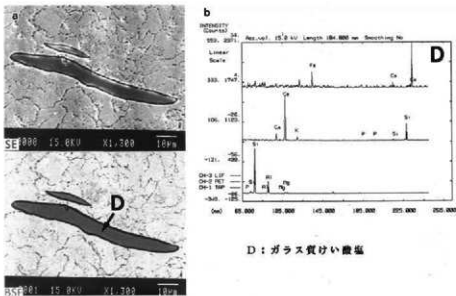
図2 鉄器から採取した試料片のマクロ組織



a : 直刀 (27) 刃部

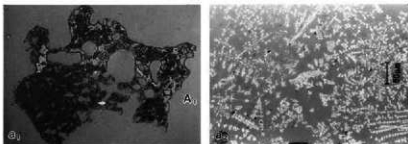
b : 直刀 (29) 刃部

図3 直刀 (27・29) 刃部から採取した試料片のマイクロ組織



D : ガラス質けい酸塩

図4 直刀 (27) 刃部に観察される非金属介在物の二次電子像と反射電子像、EPMAによる定性分析



a₁ : マクロ組織

a₂ : ミクロ組織

図5 鉄滓のマクロおよびミクロ組織

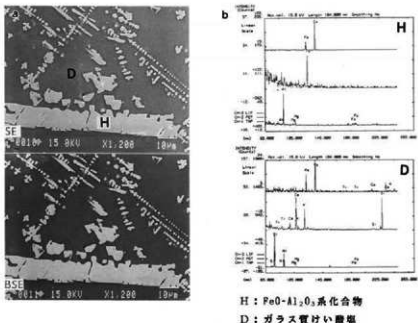


図6 鉄滓の2次電子像と反射電子像, EPMAによる定性分析

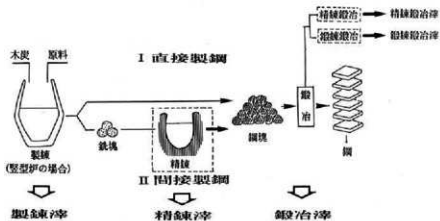


図7 推定される鋼製造法

茨城県教育財団文化財調査報告第79集

一般国道6号東水戸道路改良工事

地内埋蔵文化財調査報告書 I

中ノ割遺跡 小山遺跡
諏訪前遺跡 高原古墳群
沢幡遺跡 高原遺跡
北屋敷遺跡

平成5年3月25日 印刷

平成5年3月31日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

水戸市見和1丁目356番地2号

TEL 0292-25 6587

印刷 ワタヒキ印刷株式会社

TEL 0292-21-4381

